
《ザ・刀と壺の旅》 ~ The Tou and Ichi's travels ~

ログ核人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

《ザ・刀と壱の旅》 The Tou and Ichii's
travels

【Nコード】

N4092C

【作者名】

ログ核人

【あらすじ】

乗ったバスが事故を起こし——目が覚めたら見知らぬ土地でぶっ倒れていた。そこを盲目の旅人：壱に助けられる。が、助けの恩をきせられ、主人公はその場のノリと勢いで壱の旅に同行すること……【不定期更新】

起／第一話：その時、大型ダンプがやって来て……

これは、彼女のお話である。

* * *

不意に目が覚める。

ハッキリ言えば、望まぬ目覚めだ。
だから、

「あと五分……」

なぜに五分なのか——とか、そういう疑問も無くはないが、お決まりのセリフと共に、二度目の睡眠にはいるうと思う。

望まぬ目覚めであつたが、しかしこの二度目の睡眠にはいる瞬間に、いわれもない至福を感じるのは、なぜだろうか。

「はい、五分。終うー了あー。とつとと、起きやがれ」

ああ、わかつてない。わかつてないなあー。この至福をわかれな
いとは、人生九割損してるよ？

「あんたの二倍は生きてるけどね。そんなんでも損した憶えはないわ
よ」

「おふくろさんよあー、おふくろさん」
「なによ」

「そんなんだからあー、目尻にシワがあー——ごっふあっ！」
クソお袋めっ！ 寝ていて無防備な青少年の下腹部に、力カトを
ぶち込むとはっ！

「ほら、早くしないとバスに乗り遅れる」
「はいはい、起きますよ」
「ていうか、痛くて眠気跳んじゃったし」

そんなこんなでオレは起床し、本日が始まった。

下腹部に鈍痛を感じつつ部屋から出ると、そこには朝の匂いがあつた。

ようは朝飯の匂いである。

とくに味噌汁と焼いた魚の匂いが強い。二階まで届くのだから格別だろう。

アクビを噛み殺しつつ、階段を降りる。

お決まりのコースに沿って、まず便所へ向かう。そして朝一番の御仕事を済ませてから、洗面所へ向かい手を清潔キレイにして、次いで顔を洗う。

お手が過ちを犯し、鼻に水が入ってちよつと痛い思いをする破目になったが、タオルで二度三度と鼻をかんたらどうにか痛みは遠退いた。

「なんで、タオルで、鼻かんでるのよ」

鼻の痛みと戦いながら現れたオレに言うのは、テーブルに品を並べているお袋である。

「オレの鼻はデリケートでね」

そんな返答をしつつ、テーブルの席に着く。目の前には、朝食の定番がいらつしゃった。

ほっこりご飯に、アジの開き、ナメコの味噌汁、きゅうりの漬物

——最後に牛乳。

これが我家の定番メニューである。世間様では朝はパン派とか言つて、こじやれたトーストとか出るのかもしれないが、それは世間での話である。知ったことが。オレは生まれてこのかた、ごはん派だ。

朝食を喰らいつつ、朝のテレビニュースを観る。

どうにも、最近のテレビ局は個人の能力よりも容姿を重視するのか、原稿を読みながら噛む人が目立つ。まあ正直、ニュースの中身よりも、この番組の中で噛む人がどれだけいるかを数えるほうが面白い。

そんなこんなで朝食は食べ終わり、一息吐きつつ、ニュース番組の後半を観る。

が、最後まで観れないのが我が常。番組終了十五分前に家を出ないとバスに乗り遅れ、学校に遅刻してしまうのだ。

正直に言えば遅刻したっていいのだが、まあそこは、ほら、世間体とオレの意識は一致しないもの。遅刻して“いいこと”なんぞあるわけがない。

というわけで、歯を磨いてから自室に戻り、必要な物があらかじめ詰ったカバンを持ってから、番組終了十五分前というギリギリまで朝のニュースをしっかりと視聴して、家を出る。

我が高等学園には指定の制服とかがないので、本当にギリギリまで何もしなくて大丈夫なのが良いところだと思う。

ときたま道の状況で遅れたりもするが、始発のバス停にはいつも乗るバスが止まっていた。

方向的に乗る人が少ないのか、本数が多いことが幸いしてなのか、バスの中は混んでいるわけでもなく、かと言って空いているわけでもない。そんな状況で、オレはいつもと同じように、一番後ろの扉側の窓際に座る。

なんというか“小・中・高”と通学で長年乗り続けていると、特等席というのか、自分の尻がピッタリフィットしてやたらと落ち着く席ができたりする。この一番後ろの席が、つまりオレの座る席というわけだ。

眠気を引きずっている時はこのまま寝に落ちるのだが、いまはそうでもないので、カバンに手をつ込み、読みかけの文庫本を取り出し、読書することにする。

二ページ目を読み終えたとき、扉の閉まる音が聞こえた。それまで停止していたエンジンが駆動し、時には子守唄のごとき振動と音を発しながら、バスが走り出す。

これから約一時間、座りっぱなしだ。
心地好い揺れに身を任せつつ、読書に専念するとしよう。

どれほどの時が過ぎたのだろうか。

区切りのいいところで、いったん読書を休む。

目を休ませつつ、いまどの辺りを走行中なのだろうかと、窓の外に視線をやる。それにあわせるかのように、バスは赤信号で停車した。

現在位置は、通行量の激しい、よく渋滞する大街道の途中にある交差点だった。この交差点を右に折れて、そこにある急な坂道を登れば、目的地たる終点までは、あと十五分ほどである。

「まあ、道が混まなければけど」

長年のバス通学の経験上、渋滞する確率は八割強だ。

ハッキリ言つて、混まぬ方が珍しい。

というか、オレがバスの心地好い揺れに身をまかせて寝入ったときに限つて、終点到着時間的に道が空いていたと予測できる。つまり何の因果か、オレが寝てないときほど道が混んでいるのだ。正直、しょーじきな話——というか、誰だって逆のほうが好ましい。現状、非常に損した気分である。

が、世は無常にも事も無く、オレが損する方向に動くわけだ。

まあ、嘆いてもしょうがない。

貴重な時間を有効活用するために、読書を再開しよう。

そう思い、指が文庫本に触れ、右手人差し指が枝折に触れた——

——刹那。

低音なクラクションが間近から大音で聞こえ、

反射的に見たそこには、

大型ダンプが、

刹那の距離に、

次にあつたのは、息が詰るほどの衝撃——

ではなく、

わき腹をツンツンと探るように突かれる感覚だった。

が、とうとうにツンツン突きは止む。

数泊の間を置いて、今度はさわさわと、わき腹から背中にかけてをまさぐるような手の触感があり、それは次いでもみもみと微妙に力を加えて、触れた物体を確認するように動く。

なんだ？

もみもみされる感覚に耐えかねてガバツと目を開いたオレの視界に映ったのは、カサカサにジャリってる地べたであった。左のほっぺにジャリが食い込んで、中途半端に痛い。そのうえ、口呼吸するたびに砂の味がする……

そこでオレは、自身の不自然さに気がつく。

「なぜにジャリの上で寝てるんだ……？」

声を出して初めて判ったが、口のどこかを切っているらしく、じんわりとした痛みが鉄っぽい血の味と侵入した砂の味とまじり合って口内に広がった。

ああ、そうか——確か本読もうとしたらダンプが……、あの後どうなったんだろう？ よくわかんないけど、外に投げ出されたのかな……？ 口の中、痛いなあ……声を出すのは控えよう。

「もし、もし——」

声を出すのを控えようと決断したとたん、もみもみ触感と共に声がふってきた。

「もしもし、大丈夫ですか？」

「血と砂の味が口の中いっぱいに広がってますが、たぶん大丈夫です」

オレは答えつつ、首と眼球を最大限に動かして、声の聞こえたほうを見やる。

そこに居たのは、紫色が主色の民族衣装みたいな服を着て、オレをツンツン突いていたと思いき棒のような物を左手に握り、右手で

オレの右肩甲骨あたりを揺すりつつ、明後日の方向へ目線をやっている、少しバサついた黒髪を肩口でテキトウにぶった切った、女のような顔をした人物だった。

「そうですか。それはよかったです。てっきり、行き倒れかと思っ
てしまいました」

安堵したふうに言うその声は、透き通るように澄んだ——あるいは、儚げな色だった。聴いた感じだと女性の声のようだ。

うつ伏せ状態のままなうえ、右肩甲骨あたりに手を押し込むように置かれて身動きがとりにくいので、

「ははは、いまどきの日本で行き倒れはないですよ」

地べたに左ほっぺを食い込ませたまま、返答する。

「大変。やっぱり無理をしているのですね。おむすびしか持ってないですけど、いま出しますから、どうぞ食べてください」

我が返答のどこら辺を聴くと、そんな反応ができるんだろうか。

彼女の声色には、本気で「大変っ！」という雰囲気がかもつていた。

まあ、お腹は空いていないが、彼女がおむすびを取り出すために右肩甲骨の上から手をどけてくれたおかげで、オレは地べたと頬をすり合わせている現状から抜け出せる。

全身に力を込めてみても、とりたてて痛むところはなかったので、ガバツ！ と身を起こした。

目の前に広がるのは、東京砂漠の端っこ——ではなく、

「あつれええええええええええええ——」

遮る物の無い、ただっ広い、果てに見える山脈のすそ野まで広がる田園風景……。

「——ええッ？」

どーなってるんっ？ と全身で疑問符をアーティスティックに表現していたら、おむすびを取り出した彼女が少し探るようにさまよわせた手にガシツと肩をつかまれた。やはり視線を合わせないまま、彼女は「落ち着け」と言わんばかりに、ずいっとおむすびを差し出

してくる。

オレは無言のままにそれを受け取り――

きつと、コレを全部食って全身全霊で落ち着けば……

目を閉じ、神聖なモノをいただくように、オレは一口、また一口と、おむすびを噛みしめた。

ちよつと塩つけが強いなあ、口内の傷にチトしみるなあ、とか思いなながらも美味しくいただき、指先つちよに付いた米粒をも綺麗に喰らい――

鼻から大きく空気を吸い込み、「スウ」と口から息を吐く。

深呼吸をし、呼吸を整えてから、

ゆつくり、慎重に、両の眼を見開き……

……

……

……

「……。ココ、何所？」

しんぷるいずぎべすとな疑問系。

誰か、我がシンプルな脳にも理解できるように、この状況を説明しておくれ……。

「この辺りは、クレベル王国の外れですよ」

おお、お優しい彼女さん。我がシンプルな脳でもわかるよう端的に教えてくれてありがとう。

でも、

「いつ日本に王国ができたんですかあつ？ わたくし、ムツゴロウ王国しか存じませんでしたよ……最近は衰退しているらしいですけど……」

ダンプにぶつ飛ばされて、時を駆けてしまったのかなオレ。それとも時代の流動はオレが思うよりも早く速く激しいのかな。時代の流れに取り残されちゃったのかなオレ。

「あの……、さっきから貴方が言っている“ニホン”で、なんてい

う意味なんですか？ それとムツゴロウ王国という国名は初めて聞いたんですけど、ここからは遠いのですか？」

ああ、彼女さん。アナタは明後日の方向を見ながら、何を問うているのですか？

日本の意味って。そりゃあ、突き詰めた歴史背景云々付きの意味はオレも知らないけれどさ、その問いかけは愚問でしょう。

それにムツゴロウ王国は王国だけど国名じゃないってことくらい、知っているでしょう？ 動物とデュープに全身全霊で語り合うアノお人を知っていれば。

「本当に知らないんですか？」

「はい……？ 私は、いままで知りませんでしたけど」

「本当に？ ダンプにぶつ飛ばされて頭を強く打ったとかしてない？」

「“だんぷ”——ですか？ その言葉も初めて聞きました。やはり貴方は遠い国の人なのですか？ こっちの言葉が上手なので、てっきりこちらの地方の方かと」

あつれえ？ なんてだろう。全然、話がかみ合わない……。どうする。

どうすんの——オレっ！

「どうなってるんだああああああああああっ！」

とりあえず、叫んで現実逃避することにした。

起／第二話：旅は道連れ、世は三倍の見返りっ――

とりあえず、現状を受け入れることにした。

いや、というかね、受け入れたと言うか、諦めたって言ったほうが正しいか。

もうね、学力が胴体擦るところか時々墜落しちゃってる超低空飛行な我が頭脳の処理能力限界を突破してしまったのさ。

あれだね、もうどうにでもなりやがれコンチクショウめ。誰か酒もってこいつ！ って感じ。

注意っ！ いちおう、飲酒は二十歳になってから――でもまあ、修学旅行でチューハイとかグビグビ飲みまくっている人達いるけどね。ていうか、なんでこの年齢（現役の高校生）で酔っ払いは意味もなく絡んできてウザッタイっていう知識を得ているんだろ。オレと早寝の友人（A）以外の、同室の奴らが飲んだクレ野郎どもだったからっていうのと、教員諸君も焼肉をお供に出来上がっていたっていうのが、原因なのは間違いないけどね。てか、修学旅行で飲むなよ教師達……。

ていう、ちっさい現実逃避はダメですか？

……そうですか。

でもね、修学旅行云々は実話だよ？

……はい。

じゃあ、現実を見ますよ。

ええ、見ますよ、見ればようござんしょ？

じゃあ、ハイ始まりはじまりい――

――あまりの意味不明さに耐えかねたオレのシンプルな脳が、
「どうなってるんだああああああああああああつ！」
爆発した。

「ええっと、いまさっきまで行き倒れていて、私が起こして、私があげたおむすび食べて、絶叫したんですよ？」

ものすごく平静な声音で言ってくれるのは、紫色が主色の民族衣装みたいな服を着て、左手に棒のような物を握り、明後日の方向へ目線をやっている、少しバサついた黒髪を肩口の辺りでテキトウにぶった切った、女のような顔をした人物だった——ていうか、女の人だと思います。

「ええ、そうです。そうなんですけれどもっ！ アナタに起こされて、おむすび恵んでもらってるあたりからして、どうなってるんだあっ！ っていう心情なんです、いまの自分」

「アナタじゃありません。イチです」

「はいい？」

「だ・か・ら、私の名前です。私はアナタなんて名前じゃありません。イチです。イ・チ」

明後日の方向をムツと睨みつつ、眉間に小さなシワを寄せ、若干ほっぺをぷくつと膨らませるアナタさん——改め、“壱／いち”さん。

んん〜このお人は“我が道を往く”タイプのお人なのかな。まったく、オレの話を聞いていないように思えるんだ、ちよつと前から「わかりました。アナタさん改め、壱さんですね。わかりました。わかりましたから、オレの話を聞いていただけないでしょうか？」
「ダメです」

えええー、まさかの拒否ですかっ。

押したら『俺の話を聞けっ！』って代わりに叫んでくれるボタンが欲しい。とつても欲しい。ボタン連打して『俺の話を聞けっ！』ってリズムカルに我が心情を代弁して欲しい。いまこの瞬間に欲しい。どなたかプリーズッ！

——とか普通、ちよろつとでも、こう、ねえ、こんな状況のと——
「貴方の名前を聞いていません」

——き……………思考すらぶった切るのですか。

でも、なるほどそういえば名乗っていませんでしたね。

「オレは、オレの名前は佐刀です、磨磨佐刀」

「え？ あのもう一度いいですか」

ああ、口の中が血と砂でジャリジャリなもんで、発音悪くなつて聴き取りにくかったですか。

「磨磨佐刀です」

今度は舌で口内舐め回して洗浄したから発音バツチりだったでしょう。

「え？」

きさん若そうに見えて、じつはお年を召しているんでしょうかねえ？

「と・ぎ・ま——さ・と・う——で・すっ！」

今度は、今度は強調したよ。とっても強調して言った。力んだオカゲで口の中いっぱいに鉄っぽい血の味が充滿してるもん。

「……え？」

じつは訊ねておいて知る気ないでしょうオレの名前、と心の隅で思つた刹那——

「……ああ」

ときさん、やっと聴き取ってくださいました。

ああもう、ジラシプレイみたいなことはやめてくださよ。

「トウデスッ！」さんですか」

なあーんでソコをチョイスしちゃったんですか。

「トウデスッ！」って……」

ずいぶん斬新な聴き取り方しますねっ！

いや、世界は広いですから（現に意味不明な場所にオレ居るし）、探せばそんなネーミングの人も居るでしょう。あるいは、さっき言つていたクレベル王国でしたっけ？ には名前に小さい『つ』や『！』を標準装備している人も居るでしょうよ。

でも、

「最後の『ですっ！』は、どうがんばつても名前じゃないでしょう」「そうなのですか？ こう、終わりが『っ！』だと、元氣のない時でも名前を呼ぶときに『っ！』て空元氣振り絞った感じになって、

とってもイイと思いますけど」

空元氣じゃあ、とってもダメでしょう。というか名前呼ばれるたびに空元氣振り絞らせてるみたいでイヤですよ。元氣ない人を強制労働させるみたいな名前は。

「じゃなくて、『ですっ！』は名前じゃありませんから、呼ぶときはくっ付けないでくださいよ」

「はい、すみません——とうさん」

「父さんって、オレは壱さんの親父さんじゃありませんよ」

「なに言ってるんですか？ 当たり前じゃないですか。トウさんが、私の父さんなわけがありません……」

「だから、そう言っ——」

「……私の父さんはもうこの世に居ませんから」

えええ！　なんでこの場面でカミングアウトッ？

処理する難易度が超高い繊細な事柄を、なぜ唐突に言われるのでしょうかねっ。

「——あの、その、ええっと……」

我がボキャブラリーは残念なことに乏しく、二の句が継げずに言いよんどってしまう。

「なんですか？ トウさん」

一瞬前のカミングアウトなんぞ無かったかのような気さくさで、壱さんは小首を傾げる。

よし、話題を変えよう。このタイミングを逃すべからず。

というか、その呼び名は固定なのでしょうか。もう変更できないのでしょうか？

そして何より、

「“と・ぎ・ま——さ・”の部分、なぜ無かったことになってるんでしょう」

とても切実な疑問なのです。なんたって自分の名前ですからね。「だって、呼び難いじゃないですか」

おっ、おっ。壱さん、しれっとスゴイこと言った。いまスゴイこ

と言ったよ。なんですか呼び難いつてっ！

「普通、名前は“二音／二文字”ですよ。トウさんの名前が長すぎます。王族さんとかですか？ それともムツゴロウ王国ではそれが普通なのでしょうか？ すみません、遠い国の風習は知らないのです」

に、“二音／二文字”までの名前が普通って、ここ何所だよ——で、ああ……オレの知らぬ所だったっけか。我が現在位置は、どこでーすーかーなのでしたね。

てか、さっきの“トウデスッ！”っていう無茶な呼び方は“二音／二文字”以上だったと思うのですけれど……気にしたら負けですか？

……そうですか。

「すみません。オレがこっちの風習をしらなかっただけです。オレ、王族じゃないですし、ムツゴロウ王国もたぶん“二音／二文字”以上が普通でしょうけれど——強いてあの王国の風習をいえば、“全身全霊でディーブなまでに動物と語り合えっ！”ってのだと思います」

気持ちの切り替えて大事だよねっ！ 情け容赦なく色々と起こりやがる現実を生き残るためにはっ！

「スゴイ王国なのですって、ムツゴロウ王国という所は」

おおーと感心しきりな壱さん。確かにスゴイですけど、実際にスゴイのは動物が逃げ腰になるほどスキンシップがディーブな国王様だけだと思いますよ。

ともあれ、

「なにはどうしても、オレの名前は“二音／二文字”に縮小されるわけか。トウ、とう、刀、ねえ……」

どう頑張ってもオレに拒否権は無さそうだし……、なんだかなあ……。

ダンブにぶっ飛ばされて、状況がよくわからないままに改名させられて、

「我ながらエキサイティングな人生に足を突っ込んだじゃったなあ」

深い深い深淵より深い溜め息が、血の味でガビガビな口から漏れてしまっても、しかたないじゃないですか。

なんかノリと勢いで改名させられてますけど、こんな現実——どうやって受け止めると？ 勘弁してほしいですよ。心身不安定過ぎて、なんかずつと中途半端な丁寧語で喋ってるじゃないですか、オレ。いまさら気がつきましたよ。

「はあ……」

深い深い深淵より深い溜め息が、血の味でガビガビな口から漏れてしまつ——

「さて、そろそろ行きましようか刀さんっ！」

すくつと元気に姿勢良く起立すると、壱さんはほがらかな——しかし視線の合わない表情をこちらに向けて、「さあさあ！」と出発をうながしてくる。

壱さん、意外と強引なんですね。初対面では、おしとやかな大和撫子に見えたんだけどなあ……。どうやらオレの眼は節穴だったらしい。

「行くつて、どこへですか？」

正直、自分の現在位置が不明ないま、あまり動きたくないのですが。

「この先にある——ハズ——の宿場町ですよ」

言つて、壱さんは問答無用で歩みを開始する。

「なんですか、ハズつて、歯切れ悪いですね」

そんなオレの言葉に、彼女は立ち止まり、

「だって、しょうがないじゃないですか。教えてもらった道をちゃんと進んでいるかは、すれ違う人に聞かないとわかんないんですもん。それにその答えが正しいという保証もないですし……」

眉間にシワを寄せ、ほつぺをぶくつと膨らませる。不満がある時にほつぺをぶくつてさせるのは壱さんの癖なのだろうか？ ちよつとかわいい……て、そうじゃなくて——

「あの、壱さん」

「なんですか」

「あの、その、やっぱり、その、あの………」

「眼が？」

「タメが長いですよ。それに、わかっていて訊いているでしょう、刀さん」

壱さんは呆れたふうに眉尻を下げる。

「え、はい、すみません」

「いえいえ、謝ることじゃないですよ。むしろ好都合です」

「につこり、というよりニンマリって感じの笑みを、壱さんはその口元に浮かべた。

「なんですか、好都合って」

オレには好ましくない都合に思えて、気が気でないのですが。

「旅は道連れ、世は三倍の見返りっていうじゃないですか。米一粒の恩は一生の恩とっ！」

それはココでは常識なんでしょう。それとも壱さん限定で常識なのでしょうか。ていうか米一粒。〃オレの一生だと、オレはいったい何千回の一生を捧げなくちゃいけないんだろう。

「刀さんには、杖の代わりにでもなってもらいましょうか。あ、安心してください、ちゃんと食べ物支給しますから。刀さん行き倒れていたんですもの、お金とかはないでしょうし、刀さんにとっても損な話ではないでしょう？」

言うつと、壱さんは杖で足元を確認しながらゆっくり一歩ずつ歩んでいく。

そりゃあ、頼れるアテのない我が現状だもの、壱さんのご提案は魅力的ではあるけれど、

「壱さん、女性ですよね？」

「いちおう、訊いてみる。」

「当たり前じゃないですか。なんですか、私のことを男だと思つてのですか？ あ、それともイケナイことでも？」

そう、イケナイこと、それです——って言つても、べつにオレが

なにぞするぞというわけではなく、

「いちおう言っておきますけど、オレは男ですよ？　なにかするつもりなんてミジンコほどもないですけど、危ないかも、とか思わないんですか？」

壱さんはスツと立ち止まると、こちらを向いて、

「いやああああああ——」

自らの両腕で自身を護るように抱きしめた。

イマサラですか。

べつにもう、驚きとか、戸惑いとか、狼狽とか、無いですよ。疲れてきてますもの私——じゃなくて、オレ。ああ、一人称が変化し始めるとは……ちよつと危ないかなあ……。

「——なんてね。冗談ですよ、じょーだん」

テヘツと小憎たらしくも素敵な笑みを顔面に浮かべて壱さん言うけれど、もし今の一瞬を通行人さんに目撃されていたら、確実にオレは変態さん達のコミュニティーへ仲間入りでしたよ。無実の罪で我が心を殺す気ですか、アナタはっ！

「もしも刀さんが鬼畜変態畜生だったら、私は容赦なく奥の手を使いますからね」

なんですか、奥の手って。

というか、なぜに口の端を薄く吊り上げて言うんですかね。“今宵の琥鉄は血を欲しておる”ってセリフが似合いそうで怖気がしますよ。

じつは、じつは身が危ないのはオレだったりするんじゃないだろうか。

ああ、なんか背筋がゾクゾクしてきた。

「さあ、行きましようよ刀さん。陽が暮れてしまったら野宿ですよ？」

そう言つと壱さんは歩みだす。

が、これはどうなんだろう。

オレは一緒に行ったほうかいのだろうか？

てか、一緒に行って大丈夫なのだろうか？
どうする。

どうすんの。

どうすんだ——オレっ！

「あの、何はともあれ——、助けに来てありがとうございます」

いまさらながら、お礼を言うことにした。

起／第三話：サタデーナイトフィーバー

地道を進みゆく壱さんの足どりはゆっくりに見えてなかなか速く、気を抜くと置いて行かれそうになるので、オレは金魚のフンになったつもりで、ひたむきに彼女の後をつかず離れず追っかける。周りの景色を楽しむ余裕などはない。

小刻みな歩幅でずんずん歩む壱さんの背中を凝視していたら――ふと思う。

確かに、確かにぶつ倒れていたところを起こしてもらった。けれども、よくよく考えてみて、おむすび一つで旅の道連れにされてよかったのだろうか、オレは。右も左も上も下もマルツと理解不能な我が現状としては、むしろ助かったと言えるけれど……こんな状況だもの、疑心暗鬼にもなろうて。よくわからない事ばかりで、不安なのだ。

ここはどこーこーでーすーかあつ？ と心の内で叫んだりしてみるのが、体内で虚しく響くに終わる。

壱さんは歩きながら、頼んでもいないのに、自分の出身地はフォスエイジ天帝国だ（聞いた感じだと、どうやら日本に近いような印象を受ける国である）等々――オレを飽きさせない為か、ただ単純に自分が喋りたいだけなのか、話してくれたが、しかし根本的なところでオレがもっとも知りたいことは、まだ語られていない。

オレの知りたいこと。

それは単純。

ここは何所？

フォスエイジ天帝国って、地球のどの辺にあるんでしょうね？

日本語が余裕で通じる壱さんがご出身のその天帝国って。決して、決してオレは世界地図を丸暗記しているわけではないので断言したりは出来ないが、そんな国名、我が人生の築いた事典には記載されていない。

というか根本的なところからして、なぜに大型ダンプにぶつ飛ばされて、いま、オレは、この地道を、壱さんの背を追って歩いているのだ？

近代文明の痕跡すら見受けられない、この地道を。

「何をさっきからブツブツ言っているのですか？ あれですか、私の艶やかな後姿を見て“よくじょー”してしまっただんですか？ 奥の手、使っちゃいますよ？」

振り返りも立ち止まりもせず、壱さんは楽しそうにおっしゃる。「そんなバサついた髪した人の後姿を見ても、オレは艶やかだとは思いません。ゆえに欲情もしません。ですから、奥の手は使わないでください。オレがブツブツ言っているのは、ここは何所で、なんでオレはここにいいのか、ダンプは？ バスは？ 街は？ オレの見知った風景は何所に？ という現状に対する疑問です」

理解しがたい現状にイライラしているのか、オレは少々失礼な物言いをしてしまう。

なので当然、壱さんの気に触る。

彼女はツンツとして立ち止まると、こちらに半身を向けて、合わない視線の睨みをくれながら、

「ヒドイ物言いです。乙女の心はズタズタです。しょうがないじゃないですか、山道を歩きっぱなしで、野宿のしど通し、身体を洗う余裕なんてなかったんですもの」

ご立腹ってなくあいに、ぷくつとほっぺを膨らます。

出逢ってからまだ微々たる時間しか共有していないが、壱さんは気分を損ねるとほっぺをぷくつと膨らませる癖があるようだ。それがけっこう、かわいい。というかオレのツボ——というのは置いて。

「てか、お風呂はいつてないんですか？ ……なんか好い香りがした気がする——んですけど」

次瞬、壱さんは自らの身体をバツと抱きしめ、

「刀さんの頭の中は、いかがわしいことだらけなのですか？ エロ

エロ魔人さんですか？　香りつて、いつの間に私を香ったのです
っ

ズリズリとすり足で後ずさる。

ちなみに刀さんというのは現在進行形でオレの呼び名であるが、
決して我が本名ではない。“磨磨佐刀ノとぎまさとう”、これがオ
レの名である。

が、しかし壱さんが言うところの“この世の普通”では、名前は
“二音ノ二文字”までらしく、それゆえ勝手に名前の後“二音ノ二
文字”を取って“刀ノとう”と呼ばれることになってしまったのだ。
本心としては生まれ持ったの我が名前を使用してほしいが、それ
を主張し続けても徒労に終わる可能性極大なので、もう諦めた。

で、香ったどうのという話だが、

「べ、べつに、まじまじと香ったわけじゃないですからね。ぶつ倒
れてたところを起こしてもらったとき、ふわぁと花の香りみたい
なのがしたっただけで——」

——とかなんとか、しょーもないやりとりをしているうちに、目
的地たる宿場町に到着した。

宿場町の入り口と思しき丸太を突っ立てただけの簡素なゲートが
あり、その脇には一人が入室したら満員となるであろう大きさの簡
素な木造ほっ建て小屋があった。

壱さんとオレが簡素なゲートを通過しようとしたら、

「旅人さんかい？」

腹に響く重低音が呼び止めてきた。

壱さんはそれに反応し、

「はい、その通りです」

と答え、音源と思われる小屋のちっさい覗き窓へと歩み寄り、

「ここでは何か手続きが必要なのですか？」

慣れたふう to 訊ねる。

「おうよ。名前と滞在日数を記録帳に書いてくれ」

ちっさい窓がちっさく開かれ、ゴツイ手が使い古されてヨレヨレシワシワになった手帳のようなモノをツイと押し出す。

「あら、困りました。文字書けないですよ、私」

「じゃあ、そっちの、あんたの連れっばい兄ちゃんは？」

たぶんオレに話がふられたので、壱さんの肩越しに手帳っばいモノをのぞいてみる。が、やはりというかなんというか、そこに書かれている文字は、我が人生の中で書いたことはおるか見たことすらないモノだった。

「オレも無理です」

知らないモノは、書きようがない。

「あら……。刀さん、文字書けなかったのですか？」

「ええ、こんな文字見たことも書いたこともないです」

「それじゃあ、しょーがないですね。すみませんが、口答するので代筆していただけますか？」

「まあ、書けねえんじゃないかな。——で、お二人さんの名前は？」

「私は壱です。こちらは刀さん」

オレの呼び名まで答えてくれる壱さんであるが、オレの名前は磨磨佐刀……。なのだが、まあもついいや……。

「イチとトウ……。よし。で、滞在日数」

壱さんはアゴに人差し指を当て「んー」と逡巡してから、

「滞在日数……。絶対に守らなければいけませんか、ここで言ったものは？」

「いやあ、べつに絶対じゃねえよ。目安でいい」

という小屋の人の返答を聞いて、

「うーん……。では、滞在日数は三日で」

明らかにその場の思いつきっばい口調で告げた。そしてついではかりに、小屋の人からこの宿場町で“宿代が一番安い宿屋”と“安くて美味しい食事処”と“風呂屋”の場所を教えてもらい、

「では行きましょう、刀さん」

ほがらかな微笑みを浮かべて、彼女は歩みだす。

そのお姿に見とれていたら放置されそうになったので、オレは慌てて後を追う。

道案内という大役をおおせつかったので、オレは壱さんの手を引き、小屋の人から聞いた目印を頼りに、まずは“宿代が一番安い宿屋”を目指して宿場町を進んだ。

目印を探すついでに視界にはいる宿場町の建築物は、石造りだったり木造だったりと様々な様式だったが、なんとなくどこかで見たことあるような雰囲気なので、ここではおそらく異物なオレの目でも、違和感をかんじることはなかった。

そして、いまは木造建築の前である。

いかにも時代劇に登場しそうな雰囲気をかもしだす、ここが第一目的地たる——この宿場町で“宿代が一番安い宿屋”だ。

横引きの戸を開けて店内にはいる。すぐ正面には受付カウンターと思しきものがあり、そこにはひよろりと骨ばった男性がいた。

その男性は、オレと壱さんが入店したことに気づくと、

「いらつしやいませえー」

もみ手をしながら、完全に自動化されていると推察できる営業スマイルを向けてきた。こちらに対応つつも他の方々へ指示のようなものを飛ばしているところからして、支配人さんのようなポジションにいる人だろうか。

壱さんは握った杖の先つちよがカウンターの下部を軽く叩く位置まで近づき、

「部屋をとりたいのですけど、空いてますか？ 一番安いやつ」
単刀直入に訊く。

支配人っぽい男性は、カウンターの内側で、何か記録帳的な物をパラパラと確認するようにめくってから、

「はいいゝ、ございますよおゝ。一室のみでございますが」

壱さんとオレの顔を交互にうかがいつつ、「どういたしますか？」と手をもみもみ動かす。

「じゃあ、その部屋を」

じつにあっさり決めると、壱さんは早々に口答代筆で手続きを済ませてしまう。

「一室つてことは、オレはその辺でごろ寝ですか」

んんゝまあ、雨風しのげるだけマシという、ポジティブシンキングな考えかたをして耐えよう。そうさ、気にしなければ気にならな
いさ。

「え？ 刀さんがその辺で寝たいのなら、それでかまいませんけど……。なぜ、宿をとっているのにあえて？」

なぜって、オレは男で、壱さん女で。あえて訊くかい、部屋一つしかとれてなくて。

「気にしませんよ。それに私には、奥の手がありますから」

と言うや、空腹らしい壱さんは次なる目的地——“安くて美味しい食事処”へ向かおうと行動を開始する。

オレと同じ部屋で過ごすことは、壱さんのなかではどうでもいいことらしい。少なくとも、空腹には負ける重要度合だ。

男は才オカミなのよゝとか歌われていたりするが、オレは柴犬くらいにしか思われてないのだろうか。あるいは奥の手が、才オカミを狩る猟銃のようなモノなのだろうか。

ともあれ、またもオレは道案内の役目をになうわけだ。

壱さん的には、初めての場所でもどこぞに向かうとき、導いてくれる連れが居るだけで大助かりなのだとか。

言葉を選ばずに言うと、目の見えない人の気持ちはオレには解りえない。目を瞑るとか目隠しを何とかして、擬似的に見えなくすることはできるが、しかしそれはどこまで言っても擬似的である。

本当に案内されるだけで大助かりなのだろうか？ というか、オレはちゃんとサポートできているのだろうか？ まあ、誰かに助かつ

た的なことを言われるのは、悪い気分ではないが。

——と、そんなこんなで。“安くて美味しい食事処”に到着である。

どこか時代劇に登場するような御茶屋を連想させる、こじんまりしているが開けっ広げな木造建築だった。テーブルやイスが半分以上店内から道にせり出して置かれているので、なんかほとんど屋台みtaiであるが、まあ“安くて美味しい”のグレードにあった外見といえよう。

で、入店して困った。

壁にかけられたメニューっぽい札の文字が、オレは読めない。壱さんにはメニューっぽい札が見えていない。

さあ、どうして何を注文しようか。

と思索していたら、店の奥から質素で簡素な服装の上に薄汚れたエプロンをつけた小柄な人物が現れた。

「いらっしやいませ、ご注文は？」

ポニーテイルな髪型に、精悍そうな印象を受ける顔立ち。かと言って男っぽいわけではなく、身体には女性特有の曲線美を有している。ハキハキとした声質の娘さんだ。

「すみません。私たち文字が読めないもので、品を教えていただけませんか？」

こういう状況は慣れているのだろう、壱さんが安くて美味しい食事処の娘さんに言う。

「ん、お安い御用だよ。んじゃあ、言うよ——」

で、まあ娘さんは全十二品目を読んでくれ、壱さんは「じゃあ」と注文するが、オレにはその品書きがどんな料理を言っているのがマツタク想像できず……どうしたものか。

「……壱さんと同じものを」

無難な選択をするしか、オレには選択肢はなかるうて。

で、運ばれてきた品を見て思うのだ。

コレは食べても大丈夫なのだろうか？

オレは、なかなかどうして胃腸が弱いのだが……。

ああ、壱さん、そんな口の周りにベツトリ汁付けるほど焦って食わなくても……というか、そんなに急いで食べなくなるほど美味しいのだろうか……コレ。

テーブルの脇に置かれていた布巾で壱さんの口元をぬぐいつつ、オレは悩む。

食うべきか、食わざるべきか。答えの難しい難問にオレが思考を焼ききりそうになった――

と、その時。

店の前に数人の、いかにも男たちが現れた。

ポニーテイルな娘さんは、そんな店前で群れる者達へ、

「毎度毎度来たって無駄だって言ってるでしょ！ この土地を明け渡すつもりはないわっ！」

いまさつき接客してくれた人と同一人物であることを疑いたくなるほど、険しい憤怒混じりの形相と声で言い放った。

目前に置かれた食品を“食うか・食わないか”の二択で悩みつつ、オレは店の前で繰り広げられているやりとりの様子をチラリチラリとうかがい――これはまた、ベタなまでに関わらない方がよろしい状況だ、と判断をくだす。

食うべきか食わざるべきかを考えることは放棄して、いかにこの場から脱出するかを考えた方がいいだろう。どうしたものか、どうしようか、どうしよう――

と、我が脳があわあわ慌てふためく情態に陥っても、しかし壱さんは我関せずと平然な態度でお食事を継続する。

店の前で繰り広げられているやりとりに、気づいてないのだろうか？

「壱さん――」

早く店を出ましよう、と口に出そうとした瞬間――

「きゃっ！」

ポニーテイルな娘さんが、いかにもな男の一人にとつかれて背後へぶっ飛び、並べられている簡素なテーブルやイスの中へ打音と共に崩れゆく。

ああ、もう、一番望まない展開になってきたよ……。

バイオレンスは――

「ごちそうさまでした」

――イヤだなあ。と思おうとした思考にかぶせて、壱さんが口元をぬぐいながらおっしゃった。ちなみに完食である。

「どうしたのですか？ なにか少々騒がしいようですが」

マイペースなのか、あえてなのか、壱さんは不思議顔で訊いてくる。

「ええつと……、お店の娘さんが、いかにもーなガラの男の人に、ぶっ飛ばされました」

小声で、耳打ちするように答える。が、それを聴いた壱さんは、

「あら、それは好都合」

不敵な薄ら笑みを口元に浮かべた。

なんだろう、悪魔のような修羅の笑顔とでも言おうか。

いまの壱さん、ポニーテイルな娘さんをぶっ飛ばした男と同じような空気をまとっている気がする。

「好都合って、なにがですか」

店の中を見下して見回す男たちに勘ぐられぬよう細心の注意を払いながら、超小声で、なるべく目立たぬよう壱さんの耳元に口を近づけて、オレは問うた。

「え？ なにがって。それは当然――いまこのお店に恩を売っておけば、この食事代くらいはタダに出来るかなーって」

あんた何考えてるんっ！

「だから食事代を浮かそうと」

違うわいっ！ ていうか心読んだ、いま、心読んだっ。

「いえ、物凄く小声で口に出てますけど？　——まあ、なにはともあれ」

と壱さん、すくつと姿勢を正してご起立なさる。
なに、なにをするつもりっ？

立ち上がるなり、壱さんはちょっと高い音の舌打ちをした。

それも一度や二度ではなく、何度も何度も——首を動かして、まるで何かを探るように。

「ん……。この感じからして……、三人……」

壱さんは「うむ」と神妙な面持ちで、いかにもガラの悪い男たちの人数を言い当てた。

て、ええっ！　壱さん、眼、見えて？

「ええつと……、そこな倒れるお店の方」

またもグルグルと店内を探るように舌打ちした壱さんは、ぶっ飛ばされて横たわっているポニーテール娘さんに声をかける。娘さんは、痛みに表情を歪ませながらも、

「な、なに？」

と聞き返す。

「この方々を無力化したら、私達の食事代を無料にして、お持ち帰りに二品ほどいただけたりしますか？」

要求が増えてるし。

ていうか、

「無力化って、オレは荒事なんて無理ですよ。それに壱さんだって

……」

とそこで、壱さんはどうして位置が判るのか、オレの口に人差し指をピツと当て、語りを塞ぎ、

「ふふふ、大丈夫。荒事は私の領分です。——奥の手をご覧にいきますよ？」

楽しそうに、イタズラを思いついて実行しようとしている子どものような表情で言うのだ。

「それで、どうしますか？　そこな倒れるお店の方」

ポニーテイルな娘さんは数泊逡巡するが、

「い、いいわ。無料だろうが、二品だろうが三品だろうが」
壱さんの提案を受け入れる。

「あら、一品ふえましたね。ふふ、得しちゃったっ」

嬉しそくに言うや、壱さんは行動を開始する。

例のちよつと音の高い舌打ちが始まり、肩幅に両足を開き、道を
探る杖を握った右手を頭上へ掲げ、腰を左に突き出す……？

なんだこのポーシングは。

どこかで見たことあるような……あ、“サタデーナイトフィーバ
ー”。

かの俳優ジョン・トラボルタが白いスーツに黒のシャツを着て、
右手を上げて、腰を左に突き出すポーズが印象的な、フィーバーと
いう和製英語まで生み出したらしいヒット映画の“サタデーナイト
フィーバー”。

壱さんがしているポーシング、俳優ジョン・トラボルタのしてい
た印象的ポーズに酷似しているっ！

だが、なぜっ？

このデイスコダンシングのポーシングで、どうしてガラの悪い男
たちの相手をしおるのでしょうか。

あ、もしか、この我知らぬ世の場所で荒事というと、ダンシング
バトルを言うとか？

と思ってみても、男の方々は踊る気配なく……というか壱さんが
突然した奇怪なポーシングにドン引きしている。

——が、「はっ！」として我にかえり、それぞれ自らの得物を懐
から取り出す。

て、壱さんどうするつもりですかっ！

明らかに向こうさんは殺る気満々じゃないですか。リアル刃物構
えてますよっ！

どうすんの。

どうなんの。

どうしたいの——きさんっ！

例のちよつと音の高い舌打ちが、リズムを刻み始める。
きさんの表情に、小悪魔の笑みが浮かぶ。

起／第四話：敵に同情、味方は外道――

なんというか……。

あれだよ、こういうデンジャラスでバイオレンスな状況って、“マンガ・小説・ゲーム・ドラマ・映画”等々で描かれているのを観て、おもしろいと思ったり、若干の憧れ妄想（謎な組織に狙われている女の子を偶然に助けてしまつて事件に巻き込まれてしまう、とかね）したりするけれども……実際、当事者になると、あれだね、心臓に悪いだけだ。

で、オレの心臓を悪くしている原因。

それは――

いかにもワルです！　って面構えしてる男の人たち――と見せかけて、じつは、べつにある。

関わらなきゃ良いのに、食事代を浮かせてなおかつ無料でお土産をいただくというセコイ思考の下で、いかにもワルな男達にケンを吹っつけた人物。この人が現状、我が心の臓を悪いあんばいでドキドキさせてくれて……、もう勘弁してほしいです。

いまその人は――ちよつと音の高い舌打ちをしつつ、肩幅に両足を開き、道を探る杖を握った右手を頭上へ掲げ、腰を左に突き出すという奇怪なポーシングで、リアル刃物を構えているワルな男たちと対峙している。

どうがんばっても、頭がオカシイだろうとしか言いようがない。

「ヒ、ヒドイです、刀さん。私はオカシイ頭なんてしてませんっ！

言葉の暴食反対ですっ！　乙女の心は傷つきましたっ」

ほっぺをぶくつと膨らませて抗議してくる。が、奇怪ポーシングを維持したままなので、なんか滑稽だ。

ちなみに、刀さんというのはオレの呼び名であるが、決してオレの本名ではない。“磨磨佐刀ノときまさとう”、これがオレの名である。

で、口に出てしまっていたようであるが、本当の事しか言えなくて、すみません。ついでに発言の訂正はしませんよ、思考に余裕がないので。

しかし、そう思ってしまったも——いや言ってしまったも、仕方ないじゃないですか。

最初、本当に最初は、ワルな男たちも奇怪なボーシングにドン引きしてくれていたけれども、ファーストインパクトが強烈という以外に、このボーシングが現状、リアル刃物に対して有効な戦闘手段であるとは言えない。それは素人目で見ても明らか。

「壱さん、どうするつもりですか」

奇怪なボーシングで我が前方に立つ、紫色が主色の民族衣装みたいな服を着た、ばさついた髪的女性——壱さんに、オレは問う。

ある意味で、この現状は死活問題である。

とばつちりを喰らうというのも、そうであるが、もつとも問題なのは、現状でオレが頼れる人は壱さんしか居ないという事である。こんな、大型ダンプにぶっ飛ばされて、気づいたら見知らぬ土地にぶっ倒れていたとかいう、理解し難い状況。正直、不安な気持ちでいっぱいであるし、そんなオレを救ってくれた人が、セコさ満点の自業自得だったとしても、危ない目にあうのは見るに耐えない。

だからといって、自分がリアル刃物を構える人達の前に立ちはだかるとか、向かってゆくとか、そんな事できるほどの肝っ玉、持ち合わせていないので、加勢するとかもできない。というかちょっと足が震えてるわ——

「どうするって、チヨイって追い帰すだけですよ？」

——という、オレの心情は爪先のアカほどもくみ取らない、超が付くほど余裕な態度で壱さんは答えてくれる。

「言ってくれるじゃねえか、アマがあ！」

先頭で刃物を構える男が野太い音で吠えた。

「それに、さつきから舌打ちしやがってよお！　うるせえんだよつ！」

言い放つと同時に、腹の前に刃を構え、先頭の男が突進する。

それに続けとばかりに、残り二人の男も、刃を振りかざして壱さんへ向かう。

ああ、どうする、どうしよう、ああ、どうしたら……。

こんな瞬間に限って、思考は止まるものだ。

なにをどうしたらいいか思う以前に、脳内は真っ白。

オレはただ、目の前の光景を静観するしかできない――

音の高い舌打ちで刻んでいたリズムが、いつの間にか全身へと伝わっており、壱さんは全身で一定のリズムをとっていた――

そして、目前には腹部で刃を構えた男が迫る。

壱さんはリズムにノリながら、掲げていた逆手持ちの杖を振り下ろした。が、その一撃は一泊の差で男の目前を空振り、男の進攻を阻止するに至らない。

男の一撃が壱さんに到るっ！

オレは視線を逸らしたかったが、真っ白な脳は身体を動かしてはくれない。

見たくもないものを、見てしまう――と思われたが、そうはならなかった。

壱さんの振り下ろした一撃は、男の額にはヒットしなかったが、しかし振り下ろした先には、男の踏み込み足が。その足の膝を突くような位置に杖はあり、踏み込みを妨害していたのだ。

右足の踏み込みを邪魔された男は、乗った勢いを制御できずにバランスを崩しかけ、とっさに体勢を維持しようと不自然に大開な足構えと、腕の開きをしてしまう。

無理にバランスを保とうとして爪先立ちのようになってしまった右足、その膝へ壱さんは振り落ちてそこにある杖を叩き入れ、力を加えて膝を折る――膝カックン。と見せかけて、肉薄し、あらぬ位置にある刃を握った右手を自らの左手で掴み引き、自らの右足を男の右足後へ踏み込ませると、肉薄の勢いと掴み引く力を利用して、

ボディータックルをしたように男を押し倒す——と同時に引つ掴んでいた手を離す。

足の踏ん張りを邪魔されている男は、やられるままに若干ふっ飛び、ぶっ倒される。

それが一瞬の出来事。

そしてその勢いのまま、壱さんはタップを踏むような軽快な足さばきで、倒れている男を避けて、後から迫り来ていた男に向かう。

第二の男は、先頭の男がぶっ倒されたことに一瞬たじろぎ、動きが鈍っていた。

ある程度の距離に接近するや、壱さんは大きく右足を踏み込み、同時に杖を薙ぎ放った。杖は第二の男の右手甲に鈍く痛い音をたてながら命中し、手の中に在った刃物を叩き落とす。

踏み込んだ右足を追ってきた左足が追い越し、第二男の横に着地する。同時に身体を寄せさせた壱さんは、杖を握っている手の人差し指、中指を立て、杖は残りの指と掌で握り、刃物を落として所在無さげな第二男の右手服袖を二つ指と杖で挟み、捻って掴む。空いている左手は、男の捻り掴まれた腕の肘に当てがい、肘が曲がらないように固定する。同時に、引き戻る自らの右足を、男の右膝に叩きいれ、それを折り、倒れこむような勢いと、捻り掴んだ手を引き上げる力を利用して、第二男を引き倒す。

最後、トドメとばかりに第二男の横っ面へ杖の一撃をみまう。

第二男は横っ面を押さえて苦悶の声を漏らす。

この間、壱さんは音の高い舌打ちをしっぱなしである。

そして、ついにワル面の男は最後の一人になった。

最後の男は、第二男が引き倒されると同時に後方へ跳び退っていたので、壱さんとの距離は開いている。

「くそ……」

刃物をチラつかせつつ悪態吐く最後の男——と、しかし何故かその口元にはニタリと悪笑みが浮かぶ。

なんだ、なにか隠しているのか？

と思った瞬間、最後男が声を上げた。

「先生っ！　お願いしまスッ！」

誰、先生って。

というか、最後は他力本願なのかよ……。

「聞いて驚けっ！　そして戦慄けっ！　先生はかつて、クレベル王国近衛騎士団で武勲をあげた、とてもスゴイお人だっ！」

まるで自分の事のように鼻高々と語る最後男であるが……

「……あの、刀さん。センセイさんはもうご登場しているのでしょうか？　人が増えたようには思えないのですが……。気配をここまですべて完全に消せる方を相手にするのは、少々骨が折れそうで……」

見据えていない眼差しを最後男へ向け、音の高い舌打ちをし辺りを探るように頭部を動かしつつ、戸惑ったように訊いてくる壱さんであるが、

「えつと……、安心していいのかわかりませんが、誰もご登場してないですよ……。少なくとも、オレの眼には映ってません」

オレは事実を壱さんに告げる。が、それに驚いたような反応を示したのは、最後男だった。

「なっ？　せ、先生？　先生？　どこですかっ！　せんっせ——
——っ！」

すごい動揺っぷりである。

なんか親とはぐれた子供のようだ。

せんせー、せんせーと連呼しまくりながら、辺りをせわしなく探る最後の男。と、幾度目かの叫びのあとに、

「お、おう。ちょっとまってくれ……。い、いま行くから……」

どこかしらから、弱々しい返答があった。

「せっ！　先生っ！」

最後の男が慌てたように、声が聞こえた方角と思われる食事処の脇道へと駆けて行く。

「せ、先生っ。ど、どうしたんですか。大丈夫ですかっ？」

姿は見えないが、どうやら先生と呼ばれる人物は、大丈夫じゃない

い状況にいるようだ。

「あの、壱さん」

この隙に、提案してみる。

「なんですか？」

「いまのうちに逃げましようよ」

「ダ・メっ！ です」

壱さんはムツとしたように眉を寄せ、ぶくつとほっぺを膨らませる。

「どうしてですか？ いまが絶好の逃走場面なのに」

「まだ、お土産をもらってませんっ！」

それですかあー。

せめて、せめて食事処のポニーテイルな娘さんの為だと言って欲しかった。

無料でもらう予定のお土産の為に戦うって、どんな？ それって

どんな？ 自らの欲の為に武力行使していいの？

「なんですか？ 刀さんは欲しくないんですか？ お土産」

むうーと眉を逆八の字に、唇を尖らせ、理解できません的な表情でおっしやる壱さんであるが、オレにはお土産に対する壱さんの情熱が理解できません。

「どうしてそこまで——」

——お土産が欲しいんですか？ と尋ねようとしたオレの言葉にかぶせて、

「待たせたな」

ちよいと渋めな、しかしどこか力の抜けた声がした。そして、食事処の脇道から最後の男に肩を借り、鞘付きの剣を杖のように使って一人の人物が登場する。

「すまん。今朝方ちよつと寒かっただろ、アレで腹を冷やしてしまつたらしくてな。すまん。腹の調子が絶不調なんだ。ほんと、時間とらせてスマン」

ああ、きつとこの人、良い人だ。

物心付いた時から胃腸が弱いオレとしては、この朝冷えによる腹痛で登場が遅れた人物へ同情を禁じえない。

ああ、わかる。わかるよ。あの、腹の痛みで安眠を破壊される哀しみも、ぶつけようもない腹痛への憤りも、そして辛さも。わかるわかるよ先生と呼ばれし人。オレの腹巻きをわけてあげたいくらいだよ。朝冷えに対抗するには腹巻きが最強なんだ。

「腹痛……ですか。ふふ、腹痛に効く、いい丸薬がありますよ」

言つや、壱さんは懷に手をつ込み、水戸黄門が職権乱用する時にバンッ！と見せびらかす印籠のような、手の平サイズのケース（印籠のような外見ではない）を取り出す。

そして、それをポイツと腹痛人物の前へ放り投げた。

弱々しくソレを受け取った腹痛人物は、

「すまん。情けに感謝する」

礼を言い、隣に居るワル面の最後の男に「水を……」と告げる。

どこからか水を調達して舞い戻った最後の男から水を受け取り、ケースから黒い小粒な丸薬を取り出し、それを口に放り込むや、追うように水を流し込む。

「すぐには効いてこないのだろうが——感謝する、これで役割を果たせる」

ああ、同情しちゃったけど、この人、恩をあだで返す気満々だ。

杖代わりになっていた剣を抜き放ち、右手に剣、左手に鞘という構えをとっている。

いままで堪えるようにうつむき加減だったのでよく見えなかった顔が、剣を構えて初めてうかがえた。腹痛で弱ったり、恩をあだで返すようなマネをしなければ、若い年輪のようなシワを刻む表情が渋くもカッコイイ人物である。なんか現状、色々と損をしているようであるが。

「んんゝ失敗しちゃいました」

人差し指を唇にあてがいながら、悩ましげにおっしゃるのは壱さんであるが、この状況で失敗って、致命的なんじゃ……。

「な、なにを失敗してしまっ たんですか？」
問うオレ。

「ん？ いえ、丸薬をおゆずりする代わりに、手を引いてもらえばよかったなあと」

ああ、確かに。

「しかし、もう手遅れですね——」

諦めたようにつつ立つ壱さん。

「では、いざ参るうううううっ！」

威勢よく駆け出した腹痛人物は——しかし、二歩、三歩と、弱りきったおじいちゃんみたいな足どりをすると、その場に腹を抱えてうずくまってしまう。

「——やっぱり」

腹痛人物が崩れ落ちる音を聞くや、壱さんは悲しげな表情を浮かべた。

なんかまるで腹痛人物がうずくまってしまうのがわかっていたような物言いだだったので、オレは疑問に思い、

「やっぱりって？」

お尋ねしてみたら、壱さんは平然と、

「だって、おゆずりしたの下剤ですもの」

残酷なことを言いやがった。

ゲ・ザ・イっ！ 地獄の三文字っ！

壱さんっ！ それは、それだけは、それだけはやっちゃいけない非人道的なおこないでしょうよ、ねえ！ 腹痛の人に下剤って、そりや便秘に苦しむ人にはイイと思いますがね。しかし相手は朝冷えの腹痛ですよ。ねえ、これだけは譲れないよっ！ 胃腸が弱いオレとしてはっ！

「普通、敵対する人を助けられないでしょう？ 何かを守ろうと思うなら、卑怯であろうと、いかな手段を用いても敵は倒すモノですよ」
しれっと語る壱さん。

確かに、確かに間違っ たことは言っ てないように思えるよ。

でも、でもね、壱さんの守りたいものって、飲食費を無料にして、なおかつ無料でお土産をもらうっていう条件でしょう。

「あああああつ！ うっぐつ。ダメだ、もう今日はダメ……今日は……もう、許して……」

下剤を盛られた腹痛人物は、弱々しく剣を鞘に収めると、隣の最後な男へそう告げ、哀愁ただよう背を向けてどこぞへ去り往く。

「せ、先生っ！ ま、待ってくだせえっ！ せんっせーっ！」

取り残された最後の男は、ぶっ倒れのびている己が仲間をたたき起こして、手を貸し肩を貸しながら、去り往く先生を追いかける。

「ダメエら、おぼえてるよっ！」

最後に超三流な捨てゼリフを吐いて。

まあしかし、結果オーライというやつだろうか。

とりあえず、目先の危機は去ったわけだし。

「それじゃあ、今回の食事代を無料にすると、お土産をよつつお願いしますね」

食事処の席へ早々に戻り座るや、壱さんはいまだに呆氣にとられている感じのポニーテイルな娘さんへ告げた。なんか、お土産の数が増えているように思えるが、気のせいだろうか。

「壱さんて、いつもこんな事してるんですか？」

なんだか、旅の道連れにされたら、命がいくつあっても足りなさそうな気がしてきたのだけれども。

「まさか、そんなわけないじゃないですか。今日は偶然です。運が いい事に」

よくはないでしょう。と思いつつも、まあ常に壱さんが食事代等々を浮かせる為にケンカ吹っかけるわけではない事を知れただけよしでしょう。

もうね、起こる出来事全部を気にしすぎると精神が持たないように思えてきたし。

諦めの境地というヤツか。

どうにでもなれっという。

ある意味、オレ最強っ！ てな心構え……みたいな。
気にするから気になる。気にしなければ気にならないっ！

よし、現時点からこれを我が座右の銘にしよう。

で、目前に問題がある。

「壱さん、これは美味しいんですか？」

ポニーテイルな娘さんに聞こえない程度の小声で、訊いてみる。

先ほど壱さんが美味しそうに喰らっていたお品の事だ。オレはまだ食していないので。

「そんなの味覚なんて人それぞれですから……」というか食べればわかることじゃないですか。どうして食べないんです？ 食わず嫌いでお残しする人は、末代で飢え死にしますよ」

初めて聞いたよ、食わず嫌いは末代が呪われる的なお話。まあ、壱さんのな世の理では——の話だろうが。

べつにオレは、目の前の品が得体の知れないものだから、それがイヤで、食べるのをためらっているわけではない。

先に語ったように、オレの胃腸は基準よりデリケートにできている。

下手にモノを食べると、先の腹痛先生のようになってしまう。

目の前のお人が、あるいはお腹下した人に対して、常識的かつ人道的な対応がとれる人だったならば、恐る恐るにでも、オレは目の前の品を食えただろう。が、腹痛の人へ下剤を盛るのが壱さんである。生存本能的に、そんな人の前でお腹は壊したくない。

食うべきか、食わざるべきか。この選択肢は、ああ究極だわ。

「どうして刀さんは、食べる食べないで迷っているのですか？ 食べられる時に食べておかないと、後悔しますよ？ そもそも作ってくれた人に対して失礼じゃないですか。それに食べたくても食べられずに死に逝く人がゴロゴロいるのに、そんな貴族的で贅沢な悩みなんてしていたら、呪い殺されますよ」

「……すみません」

確かに、壱さんの言うとおりである。
謹んで目の前の品をいただくことにしよう。

食べてみたら、不味くはなかったが、いままでに味わったことのない舌への刺激があった。

なんだろうこの料理は。

例えようのない、味である。

だが食べるには問題ない味であったので、完食した。

そのタイミングを見計らったかのように——いや、見計らっていたのか。ポニーテイルな娘さんが、壱さんの要求したお土産の詰った包みをもって現れ、それを壱さんの前にコトリと音を発て、置く。置かれたお土産の包みを探るように手で触れ、

「さて、お土産もいただいたことですし、帰りましょう」

早々に帰還しようとする。

が、それをポニーテイル娘さんが引き止めた。

「あの、あなた達は旅人さんですか？」

「そうです、なんでしょう」

立ち上がるのを中断して壱さんは答える。

「どれくらい滞在するんですか？ もう、宿はとって？ なんなら家に」

急かすように追って尋ねる娘さん。だが、壱さんは平静に答えるだけ。

「滞在は三日を目安に。宿はもうとってあります。——さあ、刀さん。行きましょう」

すくつと立ち上がり、

「お土産ごちそうさまでした」

お土産の包みを手に、壱さんは店から出てゆく。

「ごちそうさまでした」

オレは慌てて後を追った。

壱さんは少し歩いたところで急に立ち止まる。

「どうしたんですか？」

本当に突然だったので思わず訊いた。そんなオレの声をたどるように、壱さんはこちらを振り向き、

「道案内してもらわないと、あと荷物持ちも」

お土産の包みを握っていた左手を差し出す。オレは包みを受け取り、空になってなおそのままの位置にある彼女の手をとり、進むことにする。が、

「どこに向かうんですか？」

まあ、オレが目印を知っていて案内できるのは、宿屋、食事処、風呂屋だけであるが。

「一度、宿に戻りましょう」

宿屋へ戻る道中、

「壱さん」

手を引き歩きつつ、オレは壱さんへ声をかける。

「なんですか？」

「危ない事は極力しないでくださいね」

まず、私利私欲の為に強制武力介入はしないでください。

次に、逃げられる時に、私利私欲の為に戦闘継続しないでください。

壱さんはなんだかんだで、強いお方のようなので、自分の身は自分で守れるのですが、オレには無理なので。

「……はい」

壱さん、なぜに頬を紅らめているのですか。

まあ、わかっていただけたなら、それでいいのですけど。

と、それはさて置いても、

「そういえば、奥の手ってなんだったんですか？ あの舌打ちですか？ というか最初のポージングはなんだったんですか？」

激しく疑問である。

そもそも、壱さんは眼が見えていないのではなかったか？

あの機敏な動きは、果たしてどうやって？

ファーストインパクトだけ強烈な、あの奇怪ポーシングは、なんの意味が？

「奥の手は、使う前に勝負ついちゃったので、結局使ってないんですよ。最初の構えからズバババンツ！ て発動する予定だったんですけど。というわけで、真の奥の手は……ふふ、ひ・み・つ、なのですよー。乞うご期待です」

乞うご期待って、さっき頬を紅らめて「……はい」って危ない事しないって約束したばかりじゃないですか。もう、どこかしらでバトルするつもりなのですか……。願わくば、秘密が永久にひ・み・つでありますように。

お星様にでも願っておこうか。いや、いつそのこと悪魔にでも頼もうか。オレを害すもの全てをその腕で退けてくれそうな、悪魔に。ともあれ、

「じゃあ、あの舌打ちはなんなんですか？」
という疑問は残る。

オレに手を引かれて半歩後を歩いていた壱さんは、そんな我が問いかけを聞くや、踏み出しの一步を大股にして、覗き込むようなかしこちらを捉えない眼差しで、

「知りたい？ 知りたいですか？」

と、なぜか御一人様テンションアップで、「知りたい？」としつこいくらいの連呼で言う。

「いえ、無理に聞くつもりはないです」

まあ、べつに知ってどうなるものではないだろうから、強要する気なんぞ元よりない。

「そこはあ、素直に知りたいですって言うてくださいよ」
ぶくつとほっぺを膨らませる壱さん。

どうやら、喋りたかったようだ。

「じゅあ、知りたいです」

「じゃああ？」

頭に「じゃあ」ってつけたらダメなのですか。よくわかんないところをこだわりますね。

「知りたいです、教えてください」

ちよつとへりくだっているように聞こえなくもない、我が言い回し。

「では、教えて差し上げましょう」

どうやら我が言い回しは正解だったようだ。

どこか自慢げに、誇らしげに、鼻高々といった感じに壱さんは語る。

「あれはですねえ、 “反響定位” なのですよ」

“はんきょうていい” ？」

なんだろう、初めて聞いた言葉だ。意味がわからない。

「その、 “はんきょうていい” は、具体的にどんなモノなんですか？」

「んん、私の感覚の話なので、わかり難いかもしれませんが——」

とそこで、壱さんは例の若干音の高い舌打ちを打ち鳴らし、

「——という音を持続的に発して、その反響音でモノの外形や距離をつかむのです。反響音の大小で距離とか、深みとか柔らかさで質感とか」

ものすごく得意げに語る壱さんであるが、その態度にも納得な凄い技であることは、なんとなくオレにもわかった。

ようは、イルカとかコウモリみたいに辺りを探っているということだろう。

しかし、これは語るに安しであるが、実際に扱うというのは、相当難儀なことのように思われる。

トレーニングで鍛えれば、ある程度までなら扱えるようになるだろうが、しかしあんな機敏に動く戦闘で耐えうるまでに使いこなせるというのは、相当な訓練と生まれ持ったセンスが必要だろう。

んんー、じつは壱さん、凄い人なのだろうか。

どこことなくセコイ方向性の思考をお持ちのようであるが、もう少し彼女に対する見かたを改めねば。

とかなんとかしているうちに、安宿の前に到達していた。

部屋に戻って持ち帰ったお土産を置くや、

「さあ、刀さん。お風呂屋さんへ行きましょう」

オレの返答は聞かず、壱さん既に退室している。
背を追いつつ、

「あの壱さん、なんで杖を置いてきたんですか？」

まさか忘れたわけではなからうに。

「だって、お風呂屋さんじゃあ邪魔になるだけですし。それに、刀さんが私の眼になってくれるんでしょう？」

そんな微笑みながら言われると、ちよいと照れるが……まあ、いいや。

——て、あつ！

「そういえばオレ、着替えとか持ってないんですけど」

風呂屋へ行くならば最低限持っていったほうがいい物を、自分は持っていないと告げる。

「大丈夫です、私もありません」

ダメじゃん。

「宿から借りればいいんですよ」

ああ、なるほど。

——と納得してみたものの、安宿はそんな貸し出しサービスしていなかった。

けれども、もみ手もみな支配人っぽい男性が、

「んん、うちのお店で使い古した制服でよかったですら差し上げますけど」

良い人だ。営業スマイルが鬱陶しい事このうえないが、この支配

人っぽい人は良い人だ。

そんなこんなで、安宿側の善意によって着替えをゲットし、いまは風呂屋へ向かい壱さんの手を引いて進行中である。

「あ……、身体拭くヤツが無い」

えらく中途半端なところで、オレ気がついた。

「それなら大丈夫ですよ。お風呂屋さんでもらえますから」

オレに右手を引かれながら、壱さんは空いている左手で「ご安心めされい」ってなぐあいにはグツと親指を立てる。

借りるではなく、もらうのは、なして？

「お金払う時にくれるんですよ。常識じゃないですか」

そんな常識しりませんでした。

で、目的地に到着。

なんか無駄に巨大な石造り建築である。古代ローマって感じの。

「おおー」

と見上げていると、クイツと手を引かれた。

壱さんが早くしろとうながしている——と、思う。

入り口と思われる開けっ放しの戸をくぐったそこには、受付カウンターと思しきものがあつた。とりあえず前まで移動する。

「いらつしやいませ」

人当たりの良さそうな微笑みを浮かべて、額にバンダナのようなモノを巻いた受付の人が応じた。

あとの手続きはオレにはわからないので、壱さんにおまかせする。と身体の前面くらいは覆い隠せそうな大きさの布が手渡された。

手触りはゴワゴワ。どうやら、これがバスタオルであるらしい。しかも本当にもらえるようで。オレはてつきり、壱さんが旅館やホテルに宿泊したオバちゃんのごとく、何でもサービスと称して悪意無くパクツてるんだと思っていたが——勝手な想像でセコさ誇張してゴメンナサイ。

で、案内役らしい風呂屋の店員さんが導くまま後にくっ付いて移

動ていくと、徐々に空気がむっと湿っぽくなってくる。

「それではごゆっくり」

ペコリと一礼して去り行く店員さん。だが……なんだろう。オレは銭湯のようなヤツを想像していたのだが、

「なにこの巨大な鍋は」

目の前には巨大な鍋のようなモノが一つドドンッ！ とあるだけで、

「どこがお風呂？」

んんーよくわからん。

木で出来た板の壁に囲われた所の中央に、中華鍋の持ち手を無くしたような巨大なそれがある以外には、服とかをいれて置くヤツと思われる力ゴがあるだけである。他にこれといってモノは無い。

「なにを言ってるんですか、刀さん。いまここがお風呂じゃないですか」

「ここが？ お湯も無いのに？」

そう、どこにもお湯が無い。外見がどうあれ、風呂という場所での共通点は、お湯だろう。が、それがこの場所には無いのだ。これのどこがお風呂だと？

「お湯は、もうすぐ来ると思いますよ」

「……は？」

なに、お湯が来るって。

——と、そのとき。

何かが上から落ちてきた。

それは巨大鍋の内へと、巨大な滝つぼがごとき壮絶な水しぶきと轟音をあげておさまる。

「な、なな、なんだ……？」

「だからお湯ですよ」

当たり前前で驚かないでください、と言わんばかりの態度で壱さんは言うが、

「なん、なんで、お湯が上から降って来るの……」

わけがわからない。

「なんでって言われても、当然の事を説明するのは意外と難しいです
ね……んん」

どうやら、オレの知らぬ事だらけなこちらの世では、お湯が上から降って来るのがお風呂屋さんの普通であるらしい。

「まあ、気にしなければ気になりませんよ——」

なんかちよつと前に、それを座右の銘にしたような気がするが、やっぱ無理だった。

「——さあ、早く入りましょうよ」

ツイと手を引かれ、

「へ？」

と、ちよいとふ抜けて振り返ると、

そこには——

なんで。

どうして。

どうしちゃった。

——壱さん、アナタ、真っ裸でなにしてるんっ！

いつの間にか風呂へ入る準備を万端整えた壱さんが、そこにいらっ
っしゃった。

起／第五話：そこに居たのは、どちら様デエスカ？

「あ、そこ、そこイイい…… あっああ気持ちいい」

「こ、ここですか？」

「そうです、そこですうう、んっああっ」

「すみません。初めてなもので、イマイチ感覚がわからなくて……」

「あっんん、ああ……、ふあんっ。……だ、大丈夫ですよ。刀さん、

お上手です。わ、私も、じつは初めてでええんっ—— ああんっ！

ソコおオおっ！」

「はあ…… まあ、気持ちイイならいいんですけどね」

なんというか、壱さんのテンションが間違った具合にシフトアップしているから、会話だけ聞いたら何をしているのか理解し難いが、とくに変なことはやっていない。

というか、オレは全然気持ちよくなり、ただ手が疲れるだけである。

「……はあ」

なんかもうダルイので、オレがなにをどうしてやっているのか、現実逃避で再確認してみよう……

では、プチ回想スタート——

—— 壱さん、アナタ、真っ裸でなにしてるんっ！

いつの間にか、風呂へ入る準備を万端整えた壱さんが、そこにいらっしまった。

「なにしてるんっ！ て、お風呂に来てるんですから、お風呂入ろうとしてるに決まってるじゃないですか」

愚問です、と眉を寄せて言う壱さんであるが、

「だからって、なんでイキナリ真っ裸になってるんですかつ。オカシイでしょっ！」

ていうか、もう、お風呂に入りた過ぎて我慢できなかったとして

もね、せめて、せめて前を隠せつ。

「オカシイのは刀さんですよ。それとも、刀さんの国では、服を着たままお風呂に入るんですか？」

超が付くほどの不思議顔で、壱さんは小首を傾げる。

「いえ、脱ぎますけど……」

まあ、一概には言えないのかもしれないけどね。オレの知るかぎりでは、脱ぐ。

「じゃあ、オカシクないじゃないですか。それともアレですか、私の美しすぎる裸体を見て、“よくじょ”してしまいましたか？
元氣イッパイになってしまいましたか？」

なんだよ、元氣イッパイって……

「オレは予想外のことに激しく動揺してるだけです。欲情してないですし、元氣イッパイにもなってません——だから、前を隠してください」

「そうですよね……」

と、うつむく壱さん。やっと前を隠す気になってくれましたか。

「……こんな傷だらけの身体じゃあ、キモチ悪いだけですよね」

ええっ、なんのお話ですかっ、唐突に。ていうか、なんでそんなにテンションダウンなの？

「わかってるんですけどね……、自意識過剰でしたよね……」

自らの身体を抱くように、胸を持ち上げるように腕を交差させる壱さん。

「おっ！ ふおっ！ じつはとってもタワワっ！」

じゃなくて——いや、目前の双丘がインパクト！　なのは事実ですけど、そうではなくて。なんだ自意識過剰って？　そんなインパクト！　を持っているなら、べつに過剰じゃない気がするけれど。それに、傷だらけの身体って？

見たらイカン場所を手の平ガードで隠しつつ、壱さんの身体をちよいとかがわせていただく。

なんというか、切り傷とかが深すぎると患部が完治しても傷部位

がちよつと盛り上がって痕が残ってしまうことがある——そんな傷跡が、壱さんの身体中に大小無数に刻み込まれていた。

いきなり真つ裸の女性が目前に現れ、超動揺して、オレの観察能力が低下していたのか、その刻まれた傷跡は、その絹のようにきめ細かな肌の上では、結構目立っている。

どうしたらこんなに傷だらけになるのだろう。

というかオレは、壱さんになんと言葉をかければいいのかだろうか……。

「んん、まあ、なにはともあれ——」

コロコロ色んな出来事呼び込んでくる感じで、一緒に居て飽きないから、

「——オレは、壱さんのこと好きですよ」

理解不能な自らの現状を忘却できるくらいに、グイグイ引っ張って行ってくれるし。

だから、とは言いませんが、まあ、気にしなければ気にならないうか、なんというのか。

んん、言葉って難しいなあ……。

「……ほ、ホントウですか？」

なぜ、顔をほんのり紅に染めているのでしょうか。

というか、両手を股に挟んでモジモジするんじゃないつ。インパクトッ！ な双丘が寄せて上げてになつてるじゃまいかつ！ なんだその破壊力はっ！

手の平でガードを作りつつ、

「オレがウソを言っても、なにを得するんですか。ウソ言うくらいなら、何も言わないことを選びますよ」

なんか、イマサラちよつと冷静になつて思つてみると、このシュチュエーションって、絶対オカシイだろう。どんな人生経験よコレ。「そ、うですか。そうですね。ウソ言つてたら、奥の手ですからね。——じゃあ、刀さん」

じゃあ、て何よ。じゃあ、って。

「髪を洗ってもらえますか？」

どこから話をつなげてくると、オレが壺さんの髪の毛洗うことになるんだよね。

「べつにいいですけど、なぜに？」

「べつにいいなら訊かないくださいよ——刀さん、私の髪がばさついてるって言ってたじゃないですか。ばさついた髪の水には興味が無いって」

なんでか、ビシッと指を突きつけてくる壺さんである。よくわからん。

それに、髪の毛がばさついていいるとは言ったような気がするけれど、後半は絶対に言っていないと思う。が、いちいち指摘するのも面倒なのでテキトウに流しておく。

「“洗い花”と“洗い草”は、服を入れておくカゴの下に置いてあるはずですよ」

「“洗い花”と“洗い草”……て、なんですか？」

「んん？ 刀さんの国には無いのですか……？」

——説明を聴くに、ようはシャンプーとセッケンということか。壺さんは名前を忘れたと言っているが、“洗い花”というのは水辺に咲く花らしく、それで髪を洗うとツルツルでサラサラになるらしい。“洗い草”は薬草を練り上げてドロドロのペースト状にしたモノのようで、傷の消毒とかにもそのまま使えるモノであるらしい。

壺さんが脱ぎ散らかした民族衣装っぽい服を回収してカゴに入れつつ、その下を見ている。そこには、小瓶が二つ入った桶があった。「これが、“洗い花”と“洗い草”か」

カルピスの原液に細かくバラバラにされた花っぽいヤツが浮かぶ小瓶と、青汁をものすごく濃くしたような液体の入った小瓶……んー、カルピスっぽいヤツは、まだイイとして、この濃い青汁っぽいヤツは、どうなんだろう……。

というわけで、プチ回想エンド。

まあ、つまり、オレは壺さんの髪を洗わされているわけだ。

てか、よく考えたら女の人と混浴してるんだよねあ……。なんか、ゲームとかマンガとかだと、嬉しくも恥ずかしいイベントに突入したりする場面だけれど、まあ現状そんなイベントが起こる気配は一切感じえない。というか、ひよつとして、いまがそのサービスシーンのなところなのだろうか？　なんかもう色々あり過ぎて感覚がマヒしてしまったのか、自分の状況がよくわからないぜ、ちくしょー。

「……はあ」

——ともあれ。

他人の髪を洗うなんて、そうそうあることではないので、洗いの感覚がイマイチわからないのだが、

「あ、そこ、そこイイい……。あつああ気持ちいい」

もっすごい久しぶりに頭を洗うらしい壺さんは、気持ち良さそうに恍惚とした表情をしている。それはもう、テンションが変な方向へシフトアップしてしまうほどに。

オレも風邪をひいてしばらく風呂に入らず、治ってから久しぶりに風呂入って頭洗った時は、やたらとそれを気持ちよく感じたりしたことがあるので、なんとなěk気持ち理解できるし、喜んでもらえているようなので、嫌な気分ではない。

あれだね、こういう時、床屋さんとかだと、

「どこか、かゆいところはありますか？」

とか訊いてくる。まあ、答えたタメシはないけれど。

「全体的につ」

自らの身体を“洗い草”で洗浄中なコチラのお方は答えてきた。

しかも、全体的って。

「はあ……」

まあ、べつにいいですが。

それにしても、この“洗い花”。オレの知るシャンプーのように泡が立つわけでもなく、果たしてコレはちゃんと洗えているのだろうか。髪が指にからまって、メチャメチャ洗い難いし。

やはり、蓄積した汚れを落とすには、一回の洗いだけではダメなのかなあ……。

「壱さん、一度流しますよ」

言ってから、オレはデカイ中華鍋のような湯船から桶で湯をすくおうとして、水面に映った自分とご対面――

「……………誰？」

――したハズなのに、そこに映っているオレはオレではなく。いや、オレはオレだけど、そこに映るオレはオレじゃなく……？　なんだ、どうなってる。オレがオカシイのか？

ちよつと待てよ。

水面から視線を外し、深呼吸一つ。

改めて、水面を覗き込む。

そして再度、ご対面……

……

……

……

……………

「……………おつ、オウ」

どちら様デエスカ？

それに、いままで目先の超展開に目を奪われて気づかなかったが、よくよく見れば、服装までもが今朝着ていたものではない。

なんだコレは、どうなってる。

意味がわからん……いや、大型ダンプに追突されたハズなのに、たいして怪我をしていなかった理由はコレか？　いや、なら本当のオレは今頃……いやいやまさか、そんなことは。ん、だとしたらこの身体の持ち主は？　それがオレの身体に？　なんだどうなってるんだ。わけわかんねえぞ……。

ああ、シンプルな脳に過重負荷がかかるような出来事ばかりだな。なんか頭痛くなってきた。

頭が痛い……。

あれか、あるいは頭を強く打って自分を認識できなくなってるのか？

じゃあ、服装が違うのは——目が覚める前に盗まれた、とか？
じゃあなんで、いまの服を着ているんだって話になるか。盗んだヤツがわざわざ代えの服を着させてくれるとは思えないし。

あれか、物語ではよくある、心というか魂が入れ替わってしまうとか、そういうヤツか。いや、しかしアレは、双方の頭部を互いに強打するとか、一緒に高所から落ちるとか——いや、どちらにしろ、入れ替わってしまう者は同じ場に居るのが必須だろう。その必須をクリアしていたら入れ替わってしまったあと同じ場に居るはずだから、オレが現状一人で居るというあたりで、魂入れ替わりは違うか。まさか、壱さんがこの身体を持ち主というわけではないだろうし。というか、それだとオレの身体が女性になってしまいうから、まず壱さんがこの身体を持ち主である可能性は無いだろう。

じゃあ——

じゃあ、なんだ？

大型ダンプにぶつ飛ばされて気を失ったオレが見てる夢かコレは。夢オチか。

でも、だとしたら何で別人になる必要がある？

というか、夢ってこんなに物事をハッキリ認識できるものなのか。わからん。

わからない事だらけだ。

「刀さん、刀さんっ」

ああ、もう、わからない事だらけで処理能力低下してるのに——

「な・ん・で・す・かっ！」

「な、なんですかっつて、刀さんが一度流すって言うから、身構えてたんじゃないですか。それなのに——なんでそんな、怒ったような言い方するんですか……私なにか気に触ることにしましたか？」

ああ、はあ……。またオレはイライラを壱さんにぶつけてしまった……か。

「すみません。なんとというか色々わけがわからない状況というか、頭が痛いというか混乱しているというのか……とりあえず、きさんは悪くないです。ごめんなさい」

「……大丈夫ですか？ 調子が悪いなら無理せずに休んだ方がいいですよ？」

理不尽なオレのイライラをぶつけられても、きさんは気づかった風な優しい声色でそう言ってくれた。

なんでだろう、その優しさが、妙にしみる。

「大丈夫です、たぶん」

そう言いながら、オレは桶に汲んだお湯をきさんの頭にぶっつけた。

「熱っ！ どど、どういう仕打ちですかコレは！ 熱くてハアハアしてる私を見て、自分もハアハアするつもりですかっ」

いや、それこそ何だよ。

「すみません。お湯が熱いか確かめませんでした」

頭部を押さえて身悶えしているきさんは、

「謝らなくいいですから、水、水をっ」

切実な要求をしてきた。

が、

「水はどこに？」

要求に早急に応えたいのだが、肝心の水が見あたらない。

「ぬ、ぬるめる用の水が、その辺にタルか何かにはいつてるはずですよっ！」

ヒントを得て探索してみたら、デカイ中華鍋のような湯船の死角にぬるめる用の水はあった。

そこから水を桶で汲んで、

「水いきますよ」

きさんの頭にぶっかける。

「冷たっ！ いま、心臓がキュッてなりましたよっ！ キュッて！」
今度はお湯を要求された。

で、またお湯をかけたら水を、水をかけたらお湯を、とそんな繰り返しがなされて、

「ぬるま湯にすればいいんだ」

という発想にたどり着くまでに少々時間を喰った。

そして、熱いんだか寒いんだか感覚がバカになっけてきているっぽい壺さんは、どうでもいいやと言うように立ち上がり、

「もういいです。湯船に浸かりたいので、手を貸してもらえますか

」

抱っこをねだる子どものように、手を差し出す。

これは、どういうふうにしるというのだ。

「——というより、入れてくれると嬉しいです」

思うに、壺さん一人で入れるだろう。絶対に。

とりあえずオレは、壺さんがスベツて転ばないように手を貸した。よくわからないが、壺さんはそんなオレのやり方に少々不満らしく、

「そうだ。ついでに服を洗っておいて下さい」

とか、言いつけてきた。

オレが知る限り、お風呂屋さんのお風呂で洗濯するのはマナー違反だと思う。

「なにを言ってるんですか？ 普通ですよ、身体を洗うついでに衣類を洗うのは」

どうやらココでは、許されるらしい。

桶にお湯を汲んで、そこで民族衣装っぽい壺さんの服を手洗する。

ゴシゴシ洗いながらに思う。

やっぱり、この状況って、オレがテンション上げるべき状況なんじゃないかろうかと。壺さん女で、オレ男で、一緒にお風呂なのだから——と思うのだが、なんというか、ここ数時間で非常に疲れたというのか、色んな意味でオレ、ボロボロな気がする。

まあ、いいや。

それは置いておいて——桶の水面に映りこむ自らの姿を改めて見る。

やっぱりコレはオレじゃあない。似てなくもない——というかつても似ているが、自分で自身に違和感を覚えるこの感覚は、常なら感じえないモノだ。

現状が夢であるという可能性は否定できないが、しかしこのお湯を熱いと感じるし、頬や手の甲を思いつきりつねってみたら痛いかった——どの感覚も、とても鮮明に感じえる。夢でこんなにハッキリした感覚を味わえるものなのだろうか……。

夢だったとしたら、どうしたらオレは目覚められる。

というか、いまが夢で現実に肉体があるとしたら、大型ダンプに追突されたあとのオレは、いったいどうなってる……。このまま目覚めても、果たして大丈夫なのだろうか。

あるいはコレが夢でない可能性は……

「壱さん」

「なんですか？」

湯船の縁にアゴを乗せて気持ち良さそうにまどろんでいる壱さんは、そのままな体勢で応えてくれる。

「別の時代とか、別の世界とか、そういうココではないドコカから誰かがやってきた、とか、そういう話を聞いたことないですか？」

一番ありえなさそうで、いまオレが体験している現状的に、これは夢ではなく、実際にオレがどこか異なる場所に飛ばされたという可能性——これだとオレが自らの身体と似て非なる肉体を動かしている理由がわからないが、可能性としては否定できない。

「別の時代……、別の世界……。まあ、旅をしていると、その土地にある伝承とか物語を耳にすることが多いので、そういう話も聞いたことはありますけど。でも、どうしたんですか急に？」

「オレが、その“ココではないドコカからやって来た誰か”、あるいは“この世界はオレの夢かもしれない”と言ったら、どうします

「？」

「どうしますって言われても……私にどうしてほしいのですか刀さんは？　というか、どうしたんですか？　本当に調子が悪いんですか？　寝言は寝て言えといいますよ？」

眉尻を下げて、怪訝そうに言う壱さん。

「でも、しいて言うならば——」

んむ、とアゴに指をあてて逡巡したあと、壱さんは言葉を無理矢理に出す。

「——いま、刀さんが居て、私が居るという、この瞬間が全てでいいじゃないですか。物事は総て、気にしなければ気になりませんよ」

そんなあっけらかんと言われても、オレ的には死活問題な事柄だと思っただけだなあ……。

「そんなことより、出たいので手を貸してください。お話していたら、ちよつとのぼせてしまいました」

そんなことって……。いやまあ、壱さんにとっては、そんなことっちゃそんなことだけださ……。

「はあ……」

壱さんに手を貸し、もらったタオルと着替えの入ったカゴの前まで誘導し、もらいものタオルを手渡す。

ササツと身体をふいた壱さんは、

「んっ」

と両手を開いて何かをうながしている。が、全然オレは意図を察することができないので、

「なんですか」

素直にお尋ねする。

「服、着せてください」

アンタ、子どもかよっ。

「自分で着てくださいよ。なんでオレがそんな事しなくちゃいけないんですか」

なんというか、ちょっとイラッとした。

「だって、いつも着ているやつじゃないと、表裏とか前後ろがわからないんです……だから」

そんなしよぼくねなくても、いいじゃないですか。

「はあ……」

なんかココに来てオレ、溜め息を吐きまくっている気がする。

ちゃちゃっと、安宿の厚意でゆずってもらった着替えを壱さんに着せ——てから、思った。オレは服の表裏とか前後を教えるだけでも、よかつたんじゃなかるうかと。

着替えた壱さんは、

「んー、安い生地ですねえ。なんかゴワゴワします」

安宿のご厚意を踏みにじるような、服のご感想をのべた。

そんな壱さんを見てふと思う、

「オレ、風呂入ってないなあ」と。

壱さんはすっかりサッパリしているけれども、オレは壱さんの髪を洗ったり服を洗ったりで、自分を洗えてない。

「入ってないなあって、入ればいいじゃないですか」

ひとつ風呂あびて、ポツポツとほんのり紅色な肌を冷ますように、服をパタパタさせながら、こともなげに壱さんは言う。

誰のせいで、風呂は入れてないとお思いか。

ともあれ、風呂には入りたいから、入るとしよう。だから、

「壱さん、出て行ってもらえますか」

「なんでですか？」

本当に、「どうして？」という風に小首を傾げるもんだから、困ったものだ。

「お風呂にはいるために、服を脱ぐからです」

「脱げばいいじゃないですか」

なにをそんな事。とでも言いたげな表情の壱さん。

んー、オレは人前で速やかに真っ裸になれるアナタほど、恥じら

いを捨てきれないのですよ。

「恥ずかしがらなくても、私は見えませんから、大丈夫ですよ」

見る、見ないの問題じゃあないんですがね。

でもまあ、もうどうでもいいか……。

ココに来て、オレが得たモノがあるとすれば、即決で諦める潔い思考だろうね。

というわけで、脱衣開始。

脱衣時の衣擦れ音を聴き取ったらしい壱さんが、不意にボソリと一言――

「見えていないとはいえ、乙女の前で本当に服を脱いで生まれたままの姿になるとは、刀さん……そっち系の変態さんですか？」

怒りたいような、もう本当にどうでもいいような。なんだろうね、この複雑な心境は。

でもね、

でもさ、

でも、本当に一つだけ思うのは――

――恥じらいもなく、即行で真っ裸になったアナタはなんなのよっ！

まあ、そんな事を思いつつ風呂に入った。

そして、一つ経験値を上昇させた。

風呂は心の洗濯とか言うが、洗濯中ずっと異性の存在を意識し続けているのソレは、心地好いものではない。

そんな超が付くほどにどうでもいい経験値を。

起／第六話：奇抜なドリンクングと微妙な手掛かり

風呂からでたら、壱さんは迷わずカウンターでビンに入った飲み物を二本購入した。

一つをコチラに差し出してくるが、

「なんですか、これは」

一瞬、色合い的に風呂から出たら飲むモノの定番たる牛乳系飲料かと思っただが、ビンを受け取ってよくよく見てみると、反対側が透けていた。牛乳系飲料にしては、薄すぎる。

「なにつて、風呂上りの定番じゃないですか。あれですね、刀さんところどころで世間知らずさんですね。じつは遠い国の貴族さんですか？ 金にモノ言わせてハアハアしてるんですか。あ、寄生的幸せをつかんじやいましたか、私」

貴族さんも、金にモノ言わせてハアハアはしないと思いますけどね。

それに、なんですかね寄生的幸せって……。

まあ置いといて、

「世間知らずというより、この世をマツタク知らないの、ある意味世間知らず以上だと思えますけど。でも、とりあえず壱さんよりは、人としての常識はわきまえてるつもりですよ——人としての常識はっ！」

そんなオレの言葉を、なかなか開かないビンの紙フタをツメで力リ力リかき、意識の九割をフタにそそぎながらも壱さんは聞いてくれたようで、

「あれですか、さっき刀さんが言ってた、“ココではないドコカからやって来た誰か”、あるいは“この世界はオレの夢かもしれない”てヤツですか、この世をマツタク知らないって？ そんな都合のいい言い訳じゃあ、世の荒波の中では生きていけませんよ？」

壱さんにだけは言われたくないなあと思うのは、なんでだろうね。

自分に都合のいいことしか聴き取らないそのお耳の能力を、いま目の当たりにしたからかな。

とか思いつつ、オレは自分の手にあるビンの紙フタを開けた。

なかなか開けないフタにイライラきたらしい壺さんは、指を無理矢理フタに押し込んで開こうとするが、オレはその手を止めて、オレが開封済みのビンと取り替える。

絶対にあのまま指をねじりこんだら、中身をぶちまけることになるだろうから。

受け取った壺さんは、肩幅に足を開き、左手を腰にあて、姿勢を正して、グビツと一気にビンの中身を飲み干す。

じつに豪気に、気持ちいいくらいの飲みっぷりであるが、途中から口を含みきれなかった薄い牛乳色ドリンクがあふれて、これまた豪快にこぼしてるのは、いかなものだろう。

「一息で飲むのが、決まりなのですっ」

力んで語る壺さんであるが、結局ちゃんと飲めてないと思うのだけれども。

ていうかお風呂に入った意味がなくなる気がする。

まあともあれ、自分の手にあるソレを飲んでみようと思う。

本能的にというのか、初めてのモノの二オイを一度確かめてしまふのは、どうしてだろうか。とりあえず、二オイは無い。というか、オレには認識できなかった。

恐る恐る口に含み、ころがしてみる。

んー、

「……味が無い」

マツタケ風味が無いわけではないのだが……。なんというのが適切なだろう……。強いて言うなれば、三倍薄めた牛乳って感じだ。思うに、これは一息で飲み干さないと美味しくない。というか、味わうようなモノではない。

「さ、帰りましょう」

早々にビンをカウンターに返した壺さんは、オレの手をとるや、

歩みだせとうながしてくる。

自分を中心に世界を回してる人だなあ、と改めて思う。
壺さんが早く早くと腕をぶん回してくるもんだから、

「ッ！ ボアッハッ」

ガツクンガツクン身体が揺れて、飲もうとした三倍薄い牛乳風味ドリンクを、

「鼻から飲むハメになってしまった……」

「なに奇抜な飲み方してるんですか」

ビツクリ！ というより、ちよつと引き気味におっしやる壺さんである。

が、誰のせいだと思ってるんでしょうね。

オレが奇抜なドリンクングをしてしまったのっ！

とりあえず、お風呂屋さんを出る。

カウンターに居た店員さんが、店内で飲み物こぼしまくるヤツらにイイ気持ちをするわけもなく、ものすごく威圧的な視線をくれていたというのも、急いで出た理由だったりしなくもない。

外は夕暮だった。

そよ風が、風呂上りの熱った肌を優しくなで、心地好い。

なんとなく、深呼吸してみたり。

いままで道筋の目標を探す事にイッパイイッパイだったのか、理解不能な現状にビビッて余裕が無かったのか、よくわからないが、風呂屋から出て初めて、そこに在る町並みをまともに見た気がする。子どもたちが、残り少ない今日という日を思いっきり遊んでいた、そんな子連れ帰りに来たと思いき大人がいたり、買い物帰りの親子や、店先で会話するご夫人方、客寄せの為に安さやサービスの叫ぶ店員さん、なんとも黄昏時の空色とあいまって、のどかな光景である――

「――て、なに和んでんだろう、オレ」

「和むって、なにがですか？」

一人和んで、一人でツツコミをいていたオレに、壱さんがちよ
いっと握った手を引いて問うてくる。

「え？ いや、のどかなあと。東京じゃあ、こんな光景も少なくな
ってきてるなあと」

そんなオレの返答を聞いた壱さんは、

「“とうきよう”がどんな所なのかは想像できないですけど、目の
前にのどかな光景が広がっていて、刀さんがそれに和んでしまう
という気持ちは、なんとなくなわかりますよ——」

と柔らかい表情になって言う、

「——町が奏でる音も、匂いも、肌で感じる雰囲気を楽しげで、優
しげですから」

ずっと突っ立って町並みに和んでいてもしょうがないので、来た
道を戻り、いまは宿屋の前である。

そして、開けっ放しの戸をくぐろうとしたとき、

「部屋は空いてるかね？」

と荷物を背負った初老風の人物に、真横から声をかけられた。い
つの間に近づいてきていたのか、気配にまったく気づかなかったが。
どうやら、宿屋の店員さんと見間違われたらしい。

まあ、宿屋のご厚意でたまわった店の制服を着替えとして風呂上
りに着たのだ、店先にそんな服装で居れば、間違われて当然といえ
ば、当然のことである。

にもかかわらず、そんな当然の出来事への対処法を間違える人が、
オレのお隣に居た。

「去れっ！」

よくわからないが、初老風人物の言動が、壱さんのカンに触った
らしい。

壱さんは、飼い犬が不審人物に唸り吠え掛かるように、ものすご
く険しい表情と口調で言い放った。

が、なぜに「去れっ！」なの？

ていうか、服を無料でくれた宿屋さんに対して、その恩を最大級のアダで返してるよね。

初老風人物はビビツタように縮こまり、サーっと足早にこの場から去り行ってしまう。

お客さんを一人逃がしたわけだ……客商売でこれは痛い。

そして訪れたお客さんに対して、いきなり「去れっ！」とか言う暴挙は、客商売的に痛いどころか、致命傷である。

オレの知る世では、来店したお客さんに冷たく当たって、帰るときにちよつとコビルようなしぐさをするという、ツンデレを売りにするお店が存在したりするが（なにがイイのかオレには理解できないけど）、ここはツンデレを売りにする宿屋ではないだろうし、そもそもこのオレ知らぬ世でその価値観が通用するのかわからない。

ともあれ、ツンデレなお店でも、さすがに来た客に「去れっ！」とは言わないだろうと思う。それはもはやツンではなく、ただの拒絶だ。あれか壺さん新ジャンル開拓か。店員さんが皆、お客さんに対して拒絶的っていう。

いや、まあ、ともあれ、

「あんた達、なんてことしてくれちゃってるんっ！」

開けっ放しの戸の前で——つまりは、カウンターから支配人っぽい男性が見ている目の前で、訪れたお客さんをお店の意向とは関係無しに追い返したら、怒られて当然だ。

というわけで、罪償いの皿洗いを現在遂行中である。

いったん部屋に戻って、洗った壺さんの民族衣装っぽい服を乾かす為に広げて吊るし、案内された厨房っぽい所の隅で、水道が無いので井戸から汲んできた水をタライに注いでから、オレが皿を洗って、壺さんが皿を拭くという役割分担で。

あれだね、宿から出て行けって言われなかったただけマシというやつか。

「はあ……。壺さん、どうしてイキナリあんな事を言ったんですか

「？」

せめて、あの暴挙に理由があつてほしい。

「どうして？　んーまあ、あとでわかると思いますよ。そしてその時にはもれなく宿代が無料になっているはずです」

意味がわかりません。

なに、お店にとつて大事なお客さんを追い返すことが、壱さんの崇高な頭の中では、宿代を無料にするためのプロセスとして必須だと？　まったくもって、成績超低空飛行の我が思考形態には理解できない。普通に考えれば、営業妨害で倍の宿代を請求されそうだが。

そんなこんなで、皿洗いから解放されるころには、夜になっていた。

部屋に戻るや、壱さんは待つてましたと嬉しそうに食事処でゲットしたお土産の包みを開いてと、オレに言う。

お土産は、晩御飯に姿を変えた。

晩飯の料金も浮かすこんたんだとは、そのセコさには恐れる。

例の如く——壱さんはもっすごい勢いで、それはもう見てて気持ちいいくらい、とても美味しそうに即行完食。いまは満足したように喜色満面のほくほく顔で、部屋にひとつのベッドに落ち着いている。

ちなみに、オレはまだ食事中。

「そういえば——」

と、唐突に壱さんが口を開く。

「——別の時代とか、別の世界とか、ココではないドカから誰かがやってきた」という話をひとつ思い出したんですけど、聞きますか？」

テキトウに聞き流していようと思っていたが、どうやら身をいれて聴く必要がある、ありがたいお話をしてくれるようだ。

「是非、聞かせてください」

ちゃんと壱さんのご機嫌を損ねないように、へりくだり気味にお願いする。

「では——」

と壱さんは語りだす。どうやらご機嫌を損ねずにすんだようだ。

「——といっても、これは立ち寄った村の語り部さんから聞いたお話ですから、なにか問われても、私は詳しく返答できません。というのをご理解くださいね」

「わかりましたから、先をどうぞ」

「まず——」

というわけで、壱さんは長々と語ってくれた。

オレ的に噛み砕いて解釈すると、オレ以外にもどこか見知らぬ場所に飛ばされた物体や人が、過去にもあったということ。しかしオレと異なるのは、物体そのモノが登場しているということか。

例えば、突如として出現した鋼鉄の大鳥の話。この鋼鉄の大鳥は突然上空に現れて、落ち、炎上し、その腹から複数の人を吐き出したらしい。人は死亡していたらしいが。たぶん、飛行機が墜落したのだろう。突如として行方不明になる飛行機は現にあるし。その大半は事故や事件だろうが、説明が出来ないモノも確かにある、だろうと思う。

もうひとつは、よくない事つづきだった村に、祈り続けていたら、突如として救世主が現れ、未知の知識で厄災から村を救ったとか。

まあ、そんな話を多々聞かされ、

「というか、なんで訊いたとき、すぐに話してくれなかったんですか」

少し不満に思うこともあったりするわけだ。オレはいち早く、自分の現状を把握する手掛かりが欲しかったのに。

「そんな尖った言いかたしないでくださいよ。話がとつぴ過ぎて、とっさに出てこなかったんですもの……。それにこういう系統の話は、ほとんど土地にある信仰の為に作られたモノばかりですから。そんな話を聞いても私は面白いと思わないので、語り部さんがコレ

系の事を喋っているとき、身を入れて聞いてなかったんです。武勇伝とかの方が、現実味があって面白いですから」

壱さんが言わんとする事もわからないではないが、

「現に、オレがとつぴな話を体験しているんですけど。案外、本当の事も語られていたかもしれませんよ」

語り部さんの話が全部土地信仰の為の作り話だとしたら、オレが体験している“いまノ現状”はなんなのさ、という事になる。たぶん、作り話でないモノや、現実を起こったことを大げさに語っているモノもあるだろう。

「そうだったとしても、現にココに存在する刀さんが“別のドコカ”から来た、なんて信じろと言われても、ちよつと疑ってしまいますよ」

いや、まあ、立場が逆ならオレもそう思うだろうけど。

「あ、でも本当だったとしたら、私つてずいぶん面白い出来事の真ただ中に居ることになりますね」

パチンツと拍手を打って、ドキドキワクワク感が満載の素敵に楽しそうな表情で、壱さんは言う。あれだね、他人の不幸は蜜の味ってヤツかね。

「そちらから来れる、ということは、こちらからも行ける可能性がある、ということですよ。というか、そうじゃなかったら不公平です。あぁ、だったら私が刀さんの時代か世界に行くということも可能ということですよ。時か世界を越える旅。きっと誰もしたことないでしょうし——」

なんだか壱さんのテンションが勝手に上昇を始めた。

「——そうとなれば、情報収集。語り部さんから詳しい話を。遺跡の調査とかも……」

すごい、オレを置いて予定が組みあがっていく。

「となれば、明日に備えて、もう寝ます」

「ご就寝らしい。

でも、

「なんでまた、服を脱いでるんですか？」

健康法と称して、そうやって寝る人もいるけどね。

「健康の為ですよ」

そうやる人がココに居た。

壱さんは早々に掛け布団に包まって就寝体勢に移行しようとしている。

なんというか、安い掛け布団だからだろうか、布団が薄くて、壱さんのボディーラインをクッキリなぞり浮かび上がらせていて、なんか真っ裸よりエロイ。

という自覚があるのか、ないのか、知らないが、

「では、おやすみなさい、刀さん」

本当に寝るつもりらしい。

「変な気を起こしたら、奥の手ですからね」

「そんなつもり、ホコリほどもないですよ」

「そう言われると、なにか悔しいのですが——。変な気、ちょっとだけなた起こしてもいいですよ？」

そんな悩ましげな視線くれてもね、

「つつしんで、遠慮します」

聞くや、壱さんはぶくつとほっぺを膨らませて、ベッドサイドの卓上にあるランプを手探りで発見するや、フツと吹き消してしまう。

部屋は薄闇に支配される。

ねえ、壱さん、

なして、

なぜに、

どうして、

——ランプの灯りを消してしまうんでしょうね。オレ、まだご飯食べてる途中なのにつ！

起／第七話：厄介事と手掛かりはウサ耳と共に現る

不意に目が覚める。

ハッキリ言えば、望まぬ目覚めだ。

だから、

「あと五分……」

なぜに五分なのか——とか、そういう疑問も無くはないが、お決まりのセリフと共に、二度目の睡眠にはいると思う。

望まぬ目覚めであつたが、しかしこの二度目の睡眠にはいる瞬間に、言われもない至福を感じるのは、なぜだろうか。

「はい、終うー了おーです。とつとと、起きてください」

ああ、わかつてない。わかつてないなあー。この至福をわかれな
いとは、人生九割損してるよ？

「そんなことで損した憶えはないですよ」

「おふくろさんよー、おふくろさん」

「なんですか？」

「そんなんだからあー、目尻にシワがあー——ごつふおっ！」

クソお袋めっ！ 寝ていて無防備な青少年の下腹部に、力カトをぶち込むとは！

「刀さん、私をお母さんだと思ふなんて。じつは母親大好き人間さんですか？ でも、まあお母さんにはなつてあげられませんが、頭をなでなでしてあげます」

下腹部に鈍痛を感じつつ、なにぞ頭をなでなでされている触感に、不可思議を覚え、薄く目を開く……

「……誰？」

そこに居たのは、毎朝オレを文字通りたたき起こすお袋の姿ではなく、肩口でテキトウに黒髪をぶった切った、まだ若いっぽい女だつた。

「そしてオレは母親大好き人間^{マザコン}じゃない」

右手はオレの頭をなでなでするように動いているが、その眼差しはコチラではなく明後日の方向を見ている。

ギリリッ！

と、下腹部にさらなる——メリコムのような痛みを感じたので、反射的に首をもちあげそちらを見やる。

頭をなでなでしてくる黒髪をテキトウにぶった切ったこの女のヒザが、イイ具合にオレの下腹部に刺さっていた。

なにこれは、どんなアメとムチ（SMプレイ）ですか。

「ヒドイですよ、刀さんっ。私のイヤんなトコロや、***っなどところとか、もう舐めまわすように、無理矢理ワタシを知りつくしたくせにっ！」

にっ！ の小っさい『っ』のあたりで、恐喝するようにヒザがメキヨリと食い込む。

「ウツ！ 又グウツ！」

——なんの話をしているの、ねえっ！ 壱さん！

「ていうかなにさ、舐めまわすように無理矢理知り尽くしたって！ 知りませによそんなこと。免罪ですよ」

という我が訴えを聞いた壱さんは、

「ほんとうに？ 本当に私のことも、昨日のパッション溢るる夜のこと、憶えていないと？」

なんか、いまにも泣きそうに表情を歪める。

「なんですか、パッション溢るるって。オレがご飯食べてる途中に壱さんがランプの灯り消しちゃって、オレがもう一回ランプに火を灯そうとしたのを、壱さんが暴力的に阻止してきて——で、そうですよ、オレ、壱さんにヘッドロックかけられた辺りから記憶が無いんだすよ。ねえ、冗談でも人のこと落とさないでくださいよ。ていうかオレ、ヘッドロックされたあげく落とされるようなことしてませんよ？ パッション溢るるどころか、口から泡と一緒に魂が溢るるところでしたよっ」

改めて思えば、視覚に頼っていない壱さんにとって、ランプの灯

りはあつてないようなもので、寝る前に灯りを消す必要があつたのか疑問であり、彼女が初めから何がしかオレに仕掛けるつもりであつたと、予想しておくべきだつた。

後悔先に立たず。

思つたところで、後の祭りであるが。

「あら、ちゃんと私のこと憶えてるじゃないですか。もお、オチャメさんなことをしないでくださいよっ」

いやだもおと、乙女チックなしぐさでツンと我が肩を、指で突いてくる壱さんであるが、「もお」のあたりでしつかりとオレの下腹部にそのヒザは全体重ごと襲い掛かつてきて、なおかつツンと乙女チックに突いてきた指は、文字通り突いてきており、肩の間接を外さんばかりに見事、食い込んでいる。ざ・地獄突き。

「オチャメもなにも、寝惚けてただけじゃないですか……はあ。そもそも寝起きからそんな拷問じみた痛みを与えられたら、誰でも嫌でも思い出す、というか知ってるふりとかしますよ」

「またまたあー」

と壱さんは微笑み、えぐりこむように色々とグリグリっ！

「痛い痛い痛い、イ・タ・イツ！」

我が心からの叫びを綺麗にスルーして、

「ささ、そんなことより、目覚めたなら、朝ごはん食べに行きましょうよ。もう、お腹ペコペコで、背中とくっついてしまいそうです」
駄々っ子のように胸ぐらを掴んで、ガクンガクン揺さぶってくる。

「わ、わかりました、から、いい加減、指でグリグリ突くの止めて、ヒザをどけてくださいよ」

そんなこんなで、よくわからない現状の二日目は、暴力的に始まつた。

脇にどいた壱さんは、どこぞのヴィーナスのように薄布一枚を胸

の前で押さえているだけという、なに考えてんだろうというお姿で、
「よくそんな恥ずかしい恰好してお腹壊しませんね」

オレだったら寝冷えしてお腹壊して、半日は便所から出られなくなるわ。

ああ、恐ろしや。

「だって、服を着ようにも、刀さんが着替えをどこに置いたのかわからないんですもん」

ぷつとほっぺを膨らませて抗議してくる壱さん。

「ああ、確かにそうですね……。でも、“はんきょうていい”とかいう、あのスゴ技で探せば見つけれたんじゃないですか？」

「そんな面倒なことするくらいなら、刀さんを起こしたほうが早いです」

はあ、そういうもんですか。

そんなこんなで、ヴィーナス気取りなポーシングの壱さんはそのままに、昨日吊るしておいた壱さん本来の着衣たる民族衣装っぽい服に触れてみる。

「あ、まだ乾いてないです」

まあなんとなく予想していたが、室内干しでは余程空気が乾燥してない限り、そうそう衣類は乾かない。

「えーどうして湿ってるんですかあ」

壱さんは不満そうに唇を尖らすが、

「どうしてって、昨日風呂場で服洗えって言ったの壱さんでしょう」

物忘れ激しいにも程がある。

「ええーじゃあ、こんな露出“強”なイデタチで私に町へ出ると？
野獣な男性陣の眼の肥やしになれと？ 刀さんはそれでいいんですか？」

知りませよそんなこと。

ていうか、寝る前に露出“強”なイデタチになったのはご自分でしよう。

しかしまあ、いちおう、

「宿屋さんのご厚意による服があるじゃないですか。それを着ればいいでしょう」

アナタは宿屋さんの恩をアダで返すような言動してましたけどね。

例の如く、壱さんに宿屋さんより頂いた使い古しの店員服を着せていると――

トントント、と扉をノックする音が控えめに鳴った。

「開いてますよから、どうぞ」

壱さんがノックの音に応える。

が、ちよつと待つてよ壱さん！

肌色多めなアナタに、オレが服を着せている――なんて、こんな場面を見られたら、いらぬ誤解されそうじゃなですか！

て、思っのは一瞬だけれど、口に出すまでには時が足りず、

「し、しつれいしますう……っ！」

ノック音の主が入室するのを防ぐことはできず、

「し、しつれいしましたあ……」

ドン引きされて退室されてしまうのは、なんかもうしかたない事だつたと諦めるしかない。

思いつき真ん丸くした目と目があつたなあとか、表情が引きつってたなあとか、どうしてか冷静に思考している自分が居た。

「待った！ 待つて、ドン引いたまま行かないでっ！」

頭の中にあるどこか冷静な部分を押し切つて、焦ったオレが、退室した影を呼び止める。

閉まりかけた扉が止まり、

「い、いえ。おとりこみちゅうをジャマするつもりは。で、でもなるべく早くしていただけると」

なにを要らん気を使っているのさ、訪ね人よ。

「なにもお取り込んでないですから。服を着せているだけですから。このお人が服を一人で着られないだけですから」

超が付く早ワザで壱さんに安宿服を着せ、まだ閉まりきっていない扉を開き、誤解を解くために訪ね人へ語ろうと、

「……あれ？」

するが、オレの目線には人影はなく……？

と思ったら、

「あ、あの」

下の方から声がした。

音源の方へ視線をやると、そこには長い棒のようなモノを大事そうに抱く、怯えたウサギのような人物が、クリつとした眼を潤ませ、そこに居た。

「お姉ちゃんを、お姉ちゃんをたすけてくださいっ！」

うさぎチックな人物は、懇願するように声を振り絞る。

が、左右で縛ったツインテイルな黒髪がウサギの垂れ耳を連想させ、その身から発する雰囲気もどことなくウサギ風な来訪者の言うことが、

「お姉ちゃんを助ける……？　って、どういう？」

オレにはイマイチ飲み込めなかった。

突然現れ、「助けて」と言われても正直、困る。オレはどこぞのスーパーヒーローじゃない。自分の身に起こっていることに対処するだけでイッパイイッパイというか、処理能力の限界を突破してどうでもいい感じになってしまっているくらいだ。

「立ち話もなんですから、こっちへいらっしやいな」

いつの間にかベッドに腰掛けていた壱さんが、ポンポンと自分の隣へ座るようにうながす。

ウサギ風な来訪者は、それに誘われるように長い棒のようなモノを大事そうに抱きながら、どこかビクつきつつ入室し、壱さんの隣へ腰掛けた。身長が足りないせいか、ウサギ風な人物はベッドに腰掛けると足が爪先立ちのようになる。

雰囲気でウサギ風人物が座ったのを感知した壱さんは、

「それで——」

とウサギ風な人物に訊ねた。

誰ですか？ と。

なんでも、昨日のお食事処のポニーテイルな娘さんが、このウサギ風な人物のお姉さんらしく――

と言っのを聞くと、

「あらちょうどいい、いまから朝ごはん食べに行くところだったんですよ。お話の続きは、朝ごはんを食べながらにしましょう」

壱さんは話を強制終了させて、

「さあ行きましょう」

とってもイイ笑顔で言うのだった。

ちよいと狼狽気味なウサギの垂れ耳風ツインテイル人物であるが、しょうがないと諦める事をオススメしよう。

なんでか？

どうしてか？

それはね、

――頼った人物が、スーパーヒーローじゃなく、ただの腹ペコ星人だからさ。

起／第八話：罪と罰と旅の果て

現在それなりに晴天な空の下、オレ達は例のお食事処を目指していた。

左右で縛った髪がどことなくウサギの垂れ耳に見え、どこか怯えているようなふるふるとした雰囲気、またウサギを連想させる線の細い小柄な身体にエプロンを装着した人物が、ときおりこちらを気にしながら、長い棒のようなモノを大事そうに――幼児がぬいぐるみを手放さんとするがごとく、ぎゅっと抱き、いまにもズツコケそうな頼りない足取りで、我が前方を歩いている。

名前は“バツ”というらしい。

いったいどんな文字が当てはまるだろう。イチさんは、壱という字を勝手に脳内で当てはめているが。

まあそれはどうでもいいか。

問題なのは、我が隣を歩行中な壱さんを、どこぞのスーパーヒーローと勘違いしているということだ。

詳しい話は、お食事処でご飯を食べながら。という条件を壱さんが強行したので、まだ詳しい事情は聞いていないが、ご対面時の「お姉ちゃんをたすけてくださいっ！」という切羽詰った感じなセリフと、昨日のガラの悪いヒト達から推測するに、どうしようもなくこれから荒事が起こるのではなからうかと想像してしまう。

「どうしたんですか？　これから朝ごはんを食べるというのに、意気消沈して」

雰囲気というのか、空気というのか、で我が心情を察してくれたらしい壱さんが、杖の代わりに繫いだオレの手をチョイチョイと引っ張る。

「これからの事を思うと、元気もなくなりますよ……」

荒事は嫌いだ。小説とかマンガとかアニメとかゲームとか映画とかでヴァイオレンスな表現がされているのは気にしないけど、とい

うかむしろ好物だけれども、それは非現実の——そういう“表現方法／演出”であって、リアルな痛みや危険や悪意はともなわない。だが、リアルな痛みや危険や悪意をとまなう“それ”は好まない。オレは痛みに興奮するマゾヒストではないし、危機な状況にロマンを想う妄想家でもない。ましてや悪意に立ち向かえるほどの勇者でもない。だから、昨日のようなになってしまうのではなからうかと、心配であり不安で、テンションダウンしてしまうのも、自然なことだ。

それに寝起きだし。

「なんでですか？ あれですか、刀さんは朝ごはんを食べない派なのですか？ 健康によくないですよ？」

ものすごくズレた御意見の壱さんである。

「どこの世に、朝ごはん食うことで意気消沈するヒトが居るんですか」

いやまあ、探せば居るかもしれせんけどね。

「じゃあどうして？」

壱さんは不思議そうに眉を寄せて小首を傾げる。

どうしてって、それはだから——

「わふうっワッ！」

オレが「わふうっワッ！」って叫んだ訳じゃないですからね。

タイミングが狙ったように絶妙だったけれども。

「大丈夫？」

オレは目の前で豪快にずっこけたバツに、手を貸しながらいう。

「イテテ……だ、だいじょうぶですう……。なにかに、足をとられて」

バツは恨めしそうに、自らの足元を見やる。

オレもそれに吊られて視線をやる。そこには、

「なんだろう……本？」

革張りの、本の形をしたモノがそこにあった。

なんと気なしに、手にとってみる。

結構、分厚くて重い。

ゆえに、いまにもズッコケそうな頼りない足取りのバツが、足を取られても、まあ、いたしかたないかなあと思う。

パラパラと中身を見てるが、しかしそこには文字らしきものは無く、

「白紙……てことは、これは手帳かな？」

ご丁寧に最後のページには、羽ペンのようなモノがはさまっているし。

「手帳？ そんなモノどうでもいいじゃないですか。早く朝ごはん食べましょうよっ！」

空腹でイライラし始めたらしい壺さんが、オレの肩を外すかのように、繋いだ手をブンブンと景気良くぶん回す。

わかりました、と壺さんをなだめつつ、涙目なバツに手を貸し立ち上がらせ、じつはもう目の前まで来ていた例のお食事処へ入店する。

ちなみに、拾った手帳は、そのまま道端に戻すのもなんだか気が引け、どうしたものかと迷っているうちに、壺さんがイライラし始めてしまったので、仕方なくオレはフトコロにしまう事にした。

「そつえば、昨日は居なかったよね？」

オレはお食事を運んできたバツに問うた。

着席したのは昨日と同じ席であり、注文したメニューも同じであり、違うのはバツという存在のみ。

「き、きのうは、お台所で仕込みの手伝いをしていたのです」

オボンをぎゅっと抱いて、なんでかオレの言葉に怯えたようにビクツとしつつ、バツは答える。昨日の今日だし、お姉さんが何か大変な事になっているらしいしで、まあ怯えられるのもしかたないかなあ、と思うのだけれど。しかしちょっと傷つくというか、なんというか。

「い——……………」

壱さんに話をふろうかと思ったのだが、例の如く、彼女はもつすごい他の追隨を許さない勢いで、運ばれてきたご飯を喰らっていらっしやるので、なんというか思わず出かけた言葉を飲み込んでしまふ。

触らぬ神にタタリ無し。

なんでだろう、不意にそんな文字列が脳裏をよぎったのは。

まあともあれ、

「空気を讀むと、本当はこんなところで朝ごはん食べてる場合じゃないような気がするけれど——」

べつに壱さんが空気読めない人だとは言っていない。決して、断じて言っていない。

「——『お姉ちゃんをたすけてください』っていうのは、どういう？」

昨日このお店を訪れたときのオレと壱さんに関する極少な情報から、宿泊している宿屋を探し出してまで、オレ達——というか壱さんを尋ねてきたのだから、よっぽどな事態なのだろう。

「そ、それはですねっ！」

と、バツは破裂したように一気に語る。

まあなんというか、どこの世でもヒトのやることに大差ないということだろうか。

バツの姉、ポニーテイル娘さんを連れ去った理由——地上げ。

この屋台みたいなお食事処の土地に、どれほどの価値があるのかオレには理解できないが、バツの姉を連れ去った連中、つまりは昨日のいかにもワルな連中と腹痛先生——その親玉は、この土地を手に入れるために強引な手段に出たということだ。

朝ごはんを食べている場合ではない気がするが、しかし根本的なところからして、

「そうというのは、警察のお仕事じゃない？」

壱さんが暴れてどうなる問題じゃないと思う。

「ケ、ケイサツウ……て、な、なんですか？」

バツは困ったように形のいい眉を『ハ』の字に、眼に潤みを増幅させ、抱いたオボンをいつそうギュツとして、訊いてくる。

ケイサツは世界共通語ではないらしい。

まあ、当然か。

しかしなんと言えはいんだろう……。

んん、

「こう……なんて言うんだろう。兵士？ 憲兵？ んんーいやまあ、国の役人というのかな。そういう、権力のある——」

オレの言ったことを、自分なりに解釈したバツが、

「領主さまですか？」

領主と警察がイコールかどうかは知らんが、まあそんな感じの偉い人に頼むべきではなかるうか。というニュアンスは伝わったようだ。

が、

「お姉ちゃんが何度も何度も、領主さまにはお願いしにいつていますけど……」

しょんぼりするバツ。

領主に頼んでも、事態は現状に到っていると、そういうわけか。

——「越後屋、おぬしもワルよのお」

——「いえいえ、お代官様ほどでは」

——「あはははははっ！」「」

的な、そんな裏があつたりするのかなあ。

役人と悪人は紙一重というか。

ともあれ、領主が悪かどうかは置いておいて、いまこの時には役に立たないヤツであることには違いなく。

に、してもだ。昨日の今日な素性が不透明な壱さんを頼るよりか、こういう時のご近所さんじゃないのか？

「そ、それは……その……」

それ以上の言葉はなく、バツは視線を泳がせ、曇った表情でうつむいた。

あれか、ご近所さんもトバツチリはごめんこうむるというやつか。
「美味しくありませんね」

不意に、今のいままでご飯を喰らっていた壺さんが、口元を布切れで拭いつつ言った。もちろん、自らの前に出ているご飯は完食済み。オレはまだ三分の一も食べてないのに、なんたるハヤワザか。
で、美味しくないって、どういうこと？

「昨日のご飯が気に入ったから、今日の朝ごはんはコレと決めていたのに。なんですかコレは、昨日とは比べ物にならないほど——」
すうっと壺さんは大量の空気を吸い込み、

「——マズイっ！」

鬼瓦みたいな憤怒の形相で、吸い込んだ大量の空気を使用し、言い放った。

「……は？」

完食しておいて、なにゆえにそんな事を言うのか。

「なんですか、コレは詐欺ですか。ふざけてはいけませんよ。食の恨みは永久の恨み。他の事なら多少は無かった事にしておけないこともなくもないですけどね。コレは、コレばかりは、無かった事にはできませんよ。責任者を出さないっ！　そして昨日と同じご飯を食べさせなさいっ！」

んんー、駄々っ子？

ファミレスとかで親をちよいと困らせるお子様の光景がだぶついた。

「ご、ごめんなさいですう。ぼ、ぼく、まだちゃんと料理作れないのです。せ、せきにんしゃ——お姉ちゃんは……」

たぶん年下のバツを困らせている壺さんで、どうなんだろう。

「お姉ちゃんがどうしたんですか」

眉間にシワを刻みながら、険しい表情で壺さんは言葉を吐き出す。どうしたんですかって、そのことでバツはアナタを訊ねてきたのにね。全然、ヒトの話を聞いていないのですね。

なにがどうしてどうなったのかを、バツは語り――
それを聴いた壱さんは、

「案内なさい――」

スクツと席を立ち、杖を握り締めて、連れ去られたバツの姉の居場所を求めた。

「――私の朝ごはんを、奪還しますっ！」

なにか間違っているような気がしなくてもないが。

いまにも駆け出さんばかりの壱さんは、苛立たしげに「まだですかっ」と吐き捨てた。

思い立つたが吉日と言うように、即行動に移行した壱さんを、しかしもつとも駆け出したい衝動を心に抱えているであろうバツが、
「ちょ、ちよつと待つてほしいのですう」

と呼び止め、そしてそのまま、お店の奥へ消えてしまったのだ。
どうしたんだろう？

と、思ったやさき、バツは戻ってきた。手の内に、宿屋で会ったとき大事そうにしていた棒のようなモノを抱いて。

この棒のようなモノを取りに行ったのだろうか。

「それって？」

どう見てもそんなに大切なモノには見えないというか、ぬいぐるみを抱きかかえている方が似合っているというか、自然というか。

「こ、これは――」

バツは言いながら、棒の上部を握り、引いた。

すると、棒の上部――握りこぶし二つ分下の位置から、棒は上下に割れ、バツが上部を引くのに合わせて、下部からギラリと輝く――刃が現れる。あれだ、ヤグザさん達が使うような、ツバの付いていない、日本刀みたいな。というか――

「——日本刀？」

どうみても、オレにはバツの持つそれが日本刀にしか見えないのだが。

「ニホントウ……？　ち、ちがいますよお。こ、これはお肉解体包丁です。お、お料理するときには欠かせない、か、家宝なのです」

だから置いては行けない、と説明してくれるバツであるが。

ある意味で刀は、お肉を解体する包丁だと思っけれども。あれか、マグロを解体する刃渡りの長い包丁が、どうしても刀に見えてしまうオレの眼には、やっぱりバツの手にある刃物は日本刀に見えてしまうというだけか。

「ん？」

なんとなくギラつく刃に魅入られていたオレは、刃に文字が刻まれている事に気が付いた。

「……そはりゆうどうするときのなかであるがままに？」

其は流動する刻のなかで、あるがままに。

どういう意味だろう？

「なにしてるんですかつ！　早く行きますよっ！」

だがしかし、オレの思考は怒れる壱さんに妨害されてしまう。

「わ、わかりましたから、杖をぶん回さないでくださいよっ」

バツに案内された場所は、宿場町から少し離れた所で、

「……デカ」

目の前には、いかにもお屋敷ですと主張する巨大な門が立ちはだかっていた。

ここが柄の悪い連中の本拠地らしい。

「でもこの門は、どうしよう。ノックしただけじゃ、開けてくれないだろうし……」

裏口とかを探すべきなのだろうか。

ていうか、なんか流れに身を任せてココまで来ちゃったけれども、これからつまりはケン力を売りに——いや、売られたケン力を買い

に行くんだろっ。

なんかなあ……、正直に言うと、引き返したいのだから。
隣に居るバツを見やる。

潤んだ瞳で、堅く閉ざされた巨大な門を睨み、唇を噛みしめている。

そんな姿を真横で見えて、自分だけ引き返すというのは、チキンハートなオレでも、さすがに出来ない。

「裏口を探さないとだめですね」

ペタペタと巨大な門を触って探っている壱さんに言う。

どう頑張っても、この門は開きそうにないし、その左右から伸びるこれまた巨大な壁の高さは、到底、乗り越えられるモノではないし。

「裏口？　なんでそんな回りくどい事をしなければいけないんですか。朝ごはんがかかっているんですよっ？　正面突破で最短ルートで、朝ごはんを奪還しますっ！」

グツとこぶしを握り、宣言する壱さんであるが、

「でも、どうやってこの門を開けるんですか？」

それがまず目前の最大の問題だ。

が、

「ふふっ、この程度は問題の内に入りませんよ刀さん」

不敵な微笑みをたたえて、壱さんはグツとサムズアップする。

なに、なにをするおつもりなのですかね。

で、壱さんのとった行動はというと。

手足を、全身を使い、身体を叩いてコイキナリズムを刻み――

たしかストンプとかいう名称のダンスに類似している気がする行動をし、

全身が奏でるリズムが絶頂に達した瞬間、

「来たれ――イワさんっ！」

手にしている杖を、地面にぶっ刺した。

半ば地中に埋まった杖。

ていうか、それだけ。

「あの壱さん。確かにそんなに深く杖をぶっ刺せる筋力はスゴイと思いますけど、それにどんな意味があるんですか？」

素朴なオレの疑問に、しかし壱さんはピツと人差し指を立てて向け——お静かについて意味かな？

そして、その右手人差し指を、頭上に掲げる。同時に、肩幅に両足を開き、腰を左に突き出す。

壱さん、なにをしているんでございましょう……。

バツも状況をあまり理解できていないのか、呆氣にとられてしまっている。

シンツと静まり返る周囲の空気……。

その静寂を待ってましたを言わんばかりのタイミングで、壱さんは掲げた右手でパチンッと指を打つ。

するとどうだろう、地面にぶっ刺さった杖の周囲の土が、まるでアイスを溶かしたかのように流動的なモノへ変化した。そしてそこから刺さった杖が、せり上がってくる。

いや、せり上がってきたのは、杖だけではなかった。

握った杖に引き上げられるように現れたのは——

杖を握った右手を頭上へ掲げ、肩幅に両足を開き、腰を左に突き出すというポーシングの……

小っさいオッサンだった。

オレの腹部くらいまでの身長で、我が隣で呆氣にとられているバツとタメくらいだ。だが、その肉体はバツとは比べ物にならないくらいに、オレとも比較できないくらいに、筋骨隆々。どっかの美術館にありそうな、英雄の筋肉美を愛でる石膏像のような、重厚で鎧のような印象の筋肉体だ。

ただ残念なことがあるとすれば、身長が低いことではなく、己が肉体を見せつきたい願望のあらわれとも言うべき、一糸まとわぬ赤裸々な破廉恥極まりないイデタチであるということか。

オレは無意識に、バツの視界を手でおおい隠してしまった。

「壺さんなんなんですか、この破廉恥漢はっ！」

「イワさんです」

誰がネーミングを訊いたよ。

「そうじゃなくて、なにがしたいんですか。こんな露出狂を出現させてっ」

どうしてどうやってこの変態が出現したのかという疑問すら忘却してしまう、本当に理解しがたい出来事である。

「なにがしたいって、それは当然、正面突破の為ですよ？」

なにを当たり前のことを。とても言いたげな表情でおっしゃる壺さんだが、しかしどうなのコレは。

アレか、私は一糸まとわぬ、どこにも武器は隠し持っていない、無抵抗な存在だ、さあ話し合おうではないか、的——こちら葛飾区亀有公園前派出所（通称、こち亀）に登場した海パン刑事的な発想か？

どう頑張っても、裸で迫っていったら、永久にココの門は開かないと思うんですけどね。普通に考えて。

「せめてもうちょっとマトモな手段はなかったんですか」

どうしてこんな破廉恥漢なんですか。

どうしても割り切れない気持ちを壺さんにぶつけていたら、いままで無言でいた露出狂が、

「ヘイ、メーン」

口を開いた。

「な、なんですか」

「私は“イワンジェネビニッテ・フォルステナ・ソコロフ・シェリングルス・ノーム・ノーマン・ゴーレ・ム”という。初めまして」

破廉恥漢は初対面の挨拶と共にハンドシェイクを求めてきた。

なんだこの、外観からは想像できない紳士な中身は。

ていうか、壺さんはイワさんと呼んでいなかったっけか？ めちゃめっちゃ長い名乗りだったと思うのだが。

「は、初めまして」

いちおう礼儀として（露出狂に礼儀を通す意味があるのか疑問は尽きないが）、挨拶をし、握手をした。

イワンジェネビニツテ・フォルステナ・ソコロフ・シエリングルス・ノーム・ノーマン・ゴレ・ム（名前が無駄に長いので以下、イワさん）は、オレにしたのと同じように、バツにも挨拶をする。どん引いているバツは、しかし恐々といった感じであるが、それに応じた。

胸筋を無意味にピクピクさせながら満足そうに頷いたイワさんは、「で、マイ・マスター。私はなにをしたらいいのですか」
壱さんにかしずいて問う。

「私の朝ごはんを連れ去った、万死に値する方々に、天誅を下し、速やかに私の朝ごはんを奪還する——そのお手伝いをイワさんにはお願いしたいのですが」

「イエス、マイ・マスター」

イワさんは、変態を屋敷に近づけまいと頑強に立ちはだかる巨大な門へと向かう――

運動会が開催できそうなほど、無駄にだだっ広い庭の向こう側に、やっとこさ屋敷の入り口が見えてくる。

無論、そこに到るまでには障害が――親玉を護らんとする柄の悪い連中が襲い掛かってきたが、そんな連中を、赤子の手をヒネルようにポイポイとブツ飛ばし捨て、道の安全を確保し先行するイワさんの後姿を追いつつ、オレは背後に視線をやった。

そこには、変態の侵入を阻止できず、無残に破壊された門が、悔しそうに在る。

イワさん……、ただの露出狂ではなかった。

なんだこのデタラメ過ぎる物理的破壊力は。

「イワさんが、壱さんの言う奥の手ですか？」

オレは繋いだ手の先にいる壱さんに問うた。

見た目にせよ物理的にせよ、イワさんの破壊力は、奥の手といつても過言ではない。

が、返ってきたのは、

「違いますよ。イワさんは、イワさんです」

ちよつと意味はわからんが、奥の手ではないという答えだった。

つまりは、壺さんの秘める奥の手と言うヤツは、イワさんをも越える何かということか？

なんかちよつと怖くも思えてきた……

というところで、屋敷の入り口に到着した。

高級そうな木製の扉を強引に開き、屋敷内部へ侵入する。

ダンスパーティーができそうな、奥行きも高さも無駄にある玄関ホールはしかし、妙な静けさに包まれていた。

が、数瞬後には、異変を察知した眼つきの悪い連中が群れ、血走った殺気溢るる居心地最悪な空間へと成り果ててしまう。

ダンボール箱があつたら、かぶりたい。そんな我が心情。

これは冗談じゃなく、ヤバイ。

ヤバ過ぎる状況だ。

が、怖くて過呼吸なオレの気持ちなんぞ察するつもりなんかそもそも無いだろう壺さんは、余裕げな態度で、

「私の朝ごはんを、返しなさいっ！」

堂々と言い放つ。

けれど向こうサイドには、まったく意味が通じず、ゆえに返答はない。

「そうですか、そちらがそのつもりならば、いたしかたありません。イワさん、行きますよっ！」

「イエス、マイ・マスター」

ものすごく一方的な武力行使が始まった。

壺さんは例の舌打ち——反響定位を駆使しながら、舞うように、群れるワルな連中をなぎ倒してゆく。

イワさんは――R指定なヴァイオレンスで、破廉恥漢にドン引きしているワルな連中を駆逐する。

瞬く間に、玄関ホールの静寂は取り戻された。

と思ったのも束の間、

「せ、先生っ！　こちらですっ！」

切羽詰った感溢れる、そんなセリフがホールに響く。

が、すぐには何も現れず。少しの間を置いてから、

「待たせたな」

腹に響く、渋い音声と共に、一人の剣士が登場。そして、

「これは……」

ゴミのようにそこらじゅうでノタレているワルな連中を見て、言葉を失う。

そして現状を作り出した元凶を視界に捉えるや、

「なっ。またもお前たちか」

剣を引き抜きながら言う。

「ん？　その声は、どこかで聞いた覚えがありますね……」

そりゃ聞き覚えもあるでしょうよ。昨日、アナタが下剤をもった相手ですもの。

「あ、そうそう。お腹の調子はいかがですか？」

ポンと拍手を打って、世間話でもするかのような口調でいうきさ
ん。

「よくも悪くも、全部出たわっ！　て、そんな事はどうでもいい。
なんのつもりでココへ来た」

腹痛先生は剣先をコチラへ突きつけながら、問う。

「私の朝ごはんを返してもらいに」

当然のように返答するきさんだが、その答えは根本的なところからして間違っている。

「朝ごはん？　なんのことだ」

まあ、意味がわからなくて当然だから、腹痛先生の反応はいたって普通だ。

とココで、バツが意を決したように口を開く。

「お、お姉ちゃんを、か、かえしてっ！」

そう、それが本来の理由だ。

「ん？ お前は……ああ、あの店の者か。しかしなんだ？ お前の姉など、私はココへ連れてきた憶えは無いぞ」

どういうことだ？ と側らに控えるザコ（A）に腹痛先生は訊く。
コソコソと耳打ちがなされ、

「なるほど。私の知らぬところで、そういうことがあったのか。しかし人さらいとは、強引な。ともあれ、合い解った。ゆえに全力をもってそれを阻止する」

腹痛先生は構え、斬りこんで来る――

「待て」

――ところで、べつの声にそれは妨害された。

声の主は、いつの間にか現れた、チャラけた感じの頭が悪そうな人物。

待てと言われて腹痛先生はその言葉に従っている。ということは、この頭が悪そうなヤツはそこそくに偉いのか？

と、そんな事はどうでもいい。問題なのは、頭が悪そうなヤツが従えて現れたザコが、ポニーテイル娘さんを拘束してご登場しているということだ。

「お、お姉ちゃん！」

駆け出そうとするバツ。だがそれを、

「来ちゃだめっ！」

ポニーテイル娘さんが、止めた。

「この声――、を見つけましたよ。私の朝ごはん」

壱さん……。一人だけ別次元にいらしゃるわ……。

「まさか、ここまでの用心棒を連れてくとは思ってなかったけれど。まあそんなのはどうでもいい。なに争うつもりはないんだから――」

頭悪そうなヤツは、なんか意味のわからない事を、演説するよう

にオーバーな身振り手振りで語る。

争うものにも、先に暴力に出たのは、そちらじゃないのか？

「――解決策は簡単。いま、キミが大事に抱えているその“異界人が鍛えし剣”をボクにくれれば、それでいいんだから。そうすれば、キミの大好きなお姉ちゃんは無事に解放されるハズだよ？」

頭悪そうなヤツは、イヤラシイ笑みを顔面に貼り付けながら、どうだい簡単だろう？ とバツの抱くお肉解体包丁を指差しながら言うてくる。

なんだろう、なんかムカつくのは。

ていうか、なんだ“異界人が鍛えし剣”って。

というか、

「お食事処の土地が欲しくて、バツのお姉さんをさらったんじゃないのか？」

「店の土地？ ああ、たしかに剣を手に入れるついでに、ただこうとは思っていたがね。あんなシヨボー土地なんて、得たところでのんの特にもならないさ。そもそもあんな土地より、価値のあるその剣があればそれでいい。ボクが欲しいのはその剣なんだから」

新しいオモチャを目の前にしてテンションアップしている子どもみたいだなと、コイツを見て思う。

「バツ、こんなバカにお父さんとお母さんの形見をわたしちゃダメよっ！」

キリリとこんなバカを睨みながら、ポニーテイル娘さんは言い放つ。

「で、でも……」

戸惑うバツ。当然である。自らの姉と剣。本来なら同じ天秤に乗るモノではない。が、同じ天秤にポニーテイル娘さんは自ら乗ってしまったがゆえ、バツは迷う。

「なんだか、のけ者にされている気がして、面白くないですね」

「イエス、マイ・マスター」

そりやまあ当然じゃなかるうかと思う。

「お腹も空き過ぎて背中とくっ付いてしまいそうですし——お話の腰を折ってしまい申し訳ないとは思いますが、そろそろ終わりにします。というわけで刀さん」

いきなり話をふられても困るのだが。

「な、なんですか？」

「朝ごはん奪還を妨害しそうな人数を教えてもらえますか？」

つまりは、ポニーテイル娘さんを奪い返すのを邪魔しそうな人数ということか。

「ええっと——」

腹痛先生とその脇に控えるザコ（A）。

頭悪そうなヤツと、その隣でポニーテイル娘さんを拘束しているザコ（B）。

合計は、

「——四人ほですけど」

人数を聞いた壱さんの口元に浮かぶのは、余裕たっぷりな小悪魔の微笑み——

お食事処へ帰り着くなり、壱さんは朝ごはんを作れとポニーテイル娘さんに強要した。

そういえばいつの間にか、イワさんの姿がないが、まあ露出狂は居ないほうが精神衛生的に好ましいから、気にしないでおこう。

壱さんの朝ごはん奪還の決着は、割とすぐについた。

腹痛先生とイワさんとの死闘は凄まじいモノであったが、拮抗していた勝負をしていたのはこの二人だけであり、ザコ（A）と（B）はあっさり倒され、頭の悪そうなヤツも、壱さんの地獄突きを股間に喰らい、同じ男としては同情してしまいそうな最後を迎えサヨウナラ。

でもしかし、事ここに至って死人が出ていないのは、奇跡というか、壱さんの技量の格が違うということだろうか。

そう、あれほどに凄まじい戦闘を繰り広げているにもかかわらず、だれも死んでいないのだ。

「半殺しならぬ、七割殺しですけどね」

帰り道、壱さんはそんな怖いセリフをサラリと言つてのけていた。いま目の前で、口元をギトギト汚しながら美味しそうにご飯をかっ喰らっている子どもみたいなお人が、同じ口でそんな事を言つたというのは、少々想像し難い。

ともあれ、頭の悪そうなヤツが言つていた、お肉解体包丁が“異界人が鍛えし剣”であるという言葉が、どうにも脳裏に張り付いてはなれず、ご飯を作り終えたポニーテール娘さん（名前はツミというらしい）に、その事について訊ねることにした。

いったん台所に入り件の包丁を取つて戻ってきてから、ツミさんが語るに、

「コレは私たちの両親が首都エタレアに住んでいた頃に知り合った鍛冶師が、この宿場町で料理屋をやると言う両親に作ってくれたものなんです。私たちはその鍛冶師に会つた事はないんですけど」

と言いつつ、ツミは眠っていた刃を起こす。

「でも、なんでそれが“異界人が鍛えし剣”ってことになるんでしょう？」

べつに普通に作られた刀みたいな包丁だろうと思うのだが。

「それは、その鍛冶師さんが、必ず鍛えた作品に刻む印に由来するらしいです」

これです、とツミさんは刃に刻まれている文字を指差す。

「其は流動する刻のなかで、あるがままに。……どうしてこれで異界人？」

理由がよくわからず、問い返して見たらば、なんでか目を見開いているツミさんの表情があつた。

「こ、この印が読めるんですかつ？」

オレだつてそれなりに学校で学習しているわけだし、超がつくほど難しい漢字でもないのだから読めて当然だろう。

と思いつつ、ツミさんの表情ごしに見えた壁にかかるお店のメニューをみて、ハッとして気づく。

オレは、このお店のメニューが読めない。というかまったく知らぬこの世の文字が理解できるはずもなく。しかし、包丁に刻まれた文字は読めて？

「どうしてコレを作った鍛冶師は日本語が使える……」

つまりそれは――

手掛かり発見ということか？

当たり前のように無料で昼飯に変わった朝飯を食べたあとの、宿屋への帰り道にて。

「壱さん、訊いてもいいですか？」

手を繋いだ先にいる壱さんに、オレはひとつの問いかけをした。

「なにをですか？」

「首都エタレアって、どこに在るんでしょう」

つまりは、例の鍛冶師が居るらしい場所である。

「エタレアですか……。んー改めてどこって言われても口答するのは難しいですね。そもそも私、地図が見れませんし。でもまあ大雑把に言うと、クレベル王国の中心に近い――正確な中央よりやや南よりにある中央首都です。整備の行き届いた道路の終着点にして出発点。にしても、エタレアの事を訊くなんて、急にどうしたんですか？」

小首を傾げる壱さん。

「その、エタレアにオレと似たような境遇の人がいるかもしれないんです。だから、なにか知れるかなあと思ひまして」

「ああ、なるほど」

納得というように壱さんは頷く。

「あの壱さん」

「はい？」

「壱さんの旅のついで、気がむいたらでいいんですけど、一度エタ

レアに寄り道するって可能ですか？」

「そんなオレの問いかけに、しかし壱さんはしばらく沈黙して、可能ですかって言われれば、可能ですけどね。刀さん、回りくどい言い方しないで、単刀直入に意見をいったらどうですか？ もみ手をして相手の顔色うかがいながら相手の察する能力にオンブに抱っこで、自分の意見を伝えようなんて——いうじゃないですか、同じ釜の飯を食らわば、腹割って喜怒哀楽も共食いだって。それとも私は腹割って意思疎通するにあたいしませんか？」

ぶくつとほっぺを膨らませ、しかし落ち着いた声音で言う。

つまりは——対等な立ち位置で語り合おうじゃないかこの野郎っ！　ということか。

「そうですね……。壱さん、一度エタレアに行かせてください」

「もちろん、かまいませんよ。そもそも私、目的あつて旅しているわけじゃないですし。それになにより、面白そうなることになりそうですしね」

思い立ったが吉日というノリと勢いで、エタレアに向かうことが即決された。明日の朝一で出発だそう。

「でも——ひとつだけ、残念なお知らせがあります」

ホントに残念そうな口調で壱さんは言う。

「私、この宿場町がクレベル王国のどの辺りにあるのか、知らないんですよ。行き当たりばつたりの流浪の旅をし続けていたもので」それは致命的に思えたがしかし、明日の朝一までに誰かに訊けば、その問題は解決である。

宿屋に着くや、支配人っぽいお人がもみ手モミミで接してきた。なんでも、昨日、壱さんが去れと言い放ち、この宿屋のお客ではなくした例の者が、べつの宿屋で他のお客の荷を盗んでいたところを、捕まったのだそうだ。

壱さんが追い払わなかったら、この宿屋で盗難騒ぎになっていた。ありがとう。そして雑用させて申し訳ない。だ、そう。

そういえば、宿代が無料に云々と壱さんは言っていたが、つまりはこの事か？ 恩着せがましい気もするけど。

ともあれ、

「どうして、泥棒だつてわかったんですか？」

部屋にもどつてから、素朴な疑問をぶつけてみた。

「足音を不自然に殺していましたし、なにより、フトコロを探られてましたからね刀さんが」

ベッドにちよこんと腰掛けた壱さんがいうには、どうやらオレはスリに遭いそう——というか遭っていたのか——だったらしい。

「他人のフトコロを探るヒトが、マトモなヒトのわけがないですしと、そんなところです」

いやいや、スリに遭っていたらしいオレ自身が、すられていた自覚が無いのに、なにゆえに壱さんにはわかったのか？

「音ですよ、音」

ことさら平然と壱さんはそういつて、

「お昼寝しますので、夕食時になったら起こしてください——それでは、おやすみなさい」

気持ち良さそうな寝息と寝顔を残して、夢の世界へ船をこぎ出した。

いったい壱さんには、この世界はどんなふうに見えて（知覚されて）いるのだろうか？

そんな事を思いつつも、オレもする事がないので、昼寝する事にした。

気づいたら、外から燃えているような黄昏の光が差し込んでいた。だいぶ本気で寝ていたらしい。

「おはようございます、刀さん」

声のしたほうを見ると、先に目覚めていたらしい壱さんが居た。

「さあ、夕食を食べに行きましょうっ！」

元氣良く、壱さんのテンションは高い。
べつに何が悪いというわけではないのだが、なんかご飯を食いま
くりな気がする。

当たり前のように、例のお食事処へ足を運ぶ。

「あ、いらつしゃーい」

ツミさんがほがらかな笑顔で迎えてくれる。その影に隠れるよう
にバツの姿も、見え隠れ。

他にお客さんの姿は無い。

例の如く、お品を注文してから、

「これって、そもそも何系統の食べ物なんだろう」

運ばれてきた品を見て、思っわけだ。

あえて形容しようにも、オレはコレに類似する食い物を知らない
し。

んんー。

「食べられれば、ご飯はそれでいいじゃないですか。語るに舌を使
わず、全力で料理を味わえっ——て、どこかの偉い人も、きつと言
うと思いますし。くっちゃべってないで、美味しく食べましょうよ
っ」

全力で味わい中な壱さんが、口から噛み砕きすり潰した食物を「
ポオファッ！」と豪快に撒き散らしながら、そんな事を言う。

わかりましたから、二度と口にモノ入れて喋らないでくださいね。
「そこまで豪快に食べてもらえると、料理人みょうりにつきるわ」
あつはつはつ、と笑いながら、布巾を片手にツミさんが登場した。
ちようどいい、彼女に訊ねたいことがあったのだ。

それは、

「鍛冶師の名前と住まい？」

なんでまた、と小首を傾げるツミさん。

なんでかどうしてかを、オレはザッパリ語る。

「エタレアに行くんですか。なるほど」

頷き、

「住まいはわかりませんが、名前は――」

という情報を得て、まあとりあえずの目標は立ったわけだ。

それで全てが万事解決するとは、思っただけでもない。

何もしないよりは、何かしているほうが、気がらく。

それだけ。

翌日、早朝。

宿場町に訪れた時と同じ服装で、入ってきたところから出て行くために、掘っ建て小屋のある宿場町入り口を目指して歩いていった。

この宿場町がどこのかは、掘っ建て小屋のオッサンに訊けばいい。

というわけで、安っぽい入り口が見えてきた。

「ん？ なんだろう」

「どうしたんですか、刀さん」

「え、ええ、なんか入り口の所に、誰かが待ち構えているので」

あれか、七割殺しにされたワルな連中が報復しにやってきたのか？

と、思ったのも一瞬の事で、入り口の所に停められたリアカーに腰掛けているツインテイルと、その脇に立っているポニーテイルは知っている姿だった。

理由は、報復の可能性がありそれから逃れる為というのと、単純に両親が育った土地を見たいというものだった。

オレはいま、リアカーを引いて地道を進んでいる。

ともあれ、重い。

人間二人と、荷物多数と、食料品。

ちなみに人間というのは壱さんとバツである。

我がお隣には、ほがらかな表情のツミさんの姿もある。

なんだかなあーと思いつつ、ちょっと前の時間を回想してみたり。

「私と弟を、旅の道ずれにしてもらえないでしょうか」

待ち構えていたツミとバツは、開口一番そんなことを言った。
理由は先の通り。

だがそんなことより、

「弟って？ …… まさか、バツ？」

オレにはそっちのほうが、衝撃だったりした。

眼球が落っこちそうなほど目を見開いているオレとは対照的に、
ツミさんは「何を当たり前の事を」という態度である。

なんというか、オレの目も節穴になったというのか、腐ったとい
うのか、

「どう頑張っ見てても女の子だろう」

ていうか、そもそもツインテイルと男が等しい場所にカテゴライ
ズされていない我が知識なので、

「どうして、ツインテイルなんだー」

回想終わり。

陽も暮れてきて、川べりで野宿ということになった。

壱さんが二人の道ずれを拒否しなかったのは、まあオレを旅の道
ずれにしているあたりからして、大した理由があるわけでもないだ
ろうけど、予想するに、好んだ料理を常に食えるからではなかつ
かと思う。

ともあれ、夕食を食べ終わり、たき火にあたりながら何をするで
もなくしていたら、ふと思いつくことがあった。

フトコロに手をつ込んで、それを引っ張り出す。

白紙の手帳である。

「これが文庫本だったら、暇つぶしになるんだけども」
なんせ白紙なので、読むところがない。

ご丁寧に、羽ペンが付属しているけれども、

「インクがないから、使い物にならないよなあ」

昔、飼っていたインコのぬけた羽を、羽ペン代わりにして遊んで

いたのを思い出したり……

「イ、インクなら、あ、ありますよあ」

不意に真横から声が降ってきたのでちょっと驚いたが、そこには手に小ビンを持ったバツの姿があった。

かゆいところに手が届くというやつか。

でもなあ、

「これといって、書くことがない」

小ビンを受け取って、手の内でころがしてみても、とくに思いつくことはない。

というか最近、手で文字を書くことが少ない。パソコンとか、ケイタイとか、書くというより打ち込むことのほうが多い。

学校では、まあ黒板に書かれていることをノートにうつしたりしていたけれども、正直にいうと、黒板に書かれていることそれ自体が、教科書の写しだったりするので、あまり積極的にノートはとらない。

たぶんオレ、漢字とかそんなに書けないだろうなあ。読めるけれど。

「日記とか書いたら？ 旅日記」

食べられる草を狩りにいていたツミさんが、薄闇から登場して言う。

「日記ですか……」

三日どころか、二日ともたなかった記憶があるのだが。

でもまあ、メモしておけば役に立つこともあるかもしれないし、なによりヒマだし、

「書いてみよう」

と、いうわけで。

薄闇が濃闇になり、たき火の灯りを頼りにしながら、ココに来てから体験したことを前文のごとく、壱さんと出会ったちょっと前から記入してみたわけだが……

なんか後半、ちよいと面倒になって大雑把になった気も、しないこともない。

まあいいか……

旅は、まだまだ始まったばかりだし。

これから書き込むことのほうが多いだろう。

この手帳に書き込むところが無くなる頃には、旅が終了していることを願うばかりだが……

「刀さん、なにさっきから黙り込んでいるんですか？」

夜飯を喰らうことに集中していた壺さんが、完食してコチラに気を向ける。

「秘密です——ガツはツア！」

「私に隠しことなんて、ヒドイですよっ！」

平然とボディータックルをかましてくるこの人と一緒に居たら、旅が終わる前にオレが終わってしまいそうで……

前途多難である——

壺さんに耐え切れるかなあ……

オレの肉体……

《ザ・刀と壺の旅》 The Tou and Ichii's
travels

第一部【起】——終わり。

と不意に、

『なにしてるの？ おじいちゃん』

懐かしさを読み返すことに夢中だった私は、
突然、横からかけられた愛らしい声によって――
――現実を引き戻された。

小休止：ティータイム

年老いて思うのは、言葉尻に「くじゃ」とか「くだのう」とか、いかにもな老人語は絶対に使わないというところだろうか。

では、なにゆえ老人は言葉尻に「くじゃ」とか「くだのう」をつけて話す、と思い込んでいるのだろう。

作り話の洗脳はトテツモナイということだろうかね。

まあ、掃除中に発掘した“コレ”を書いていた頃の私は、そんな些細なこと気にかけているヒマなんてコレッぽっちもなかったが。

あえて読み返さなくても、自分の身に起きたことは根深く脳裏に焼きついているので、いまだ鮮明に思い起こせるのだが、

「あれかね、掃除中にアルバムとか発見すると、普段まったく見もしないのに、やたら無性に見たくなってしまう感覚ってやつかね」

というわけで、本棚の整理中に発見した懐かしき手帳を再読しているうちに、時を忘れていた私を、

「なにしてるの？ おじいちゃん」

横からかけられた愛らしい声が現実引き戻した。

「それは？」

長い黒髪にクリツとした眼を持つ、白のワンピースに身を包んだ幼い娘っ子——我が孫は、小首を傾げて、私の持つボロけた手帳を指差す。

「ん？ これはね、私が若かった頃につけていた日記のようなものだよ」

「ふーん」

と生返事をしつつ、いまだ興味深げに私の手元をガン見な我が孫は、

「どんなこと書いてあるの？」

ペタンとその場に尻をつき、聞き入る体勢で問ってくる。

「そうさね——」

改めて問われると、一概には言いがたいほどにトンデモナイ体験談が書かれているのだが、

「——ばあさんと出逢った頃の話、かな」

まあザックリ語るならば、つまりそういうことだ。

「おじいちゃんとおばあちゃんとの、なれそめ？」

無垢な瞳をこちらに向けてくる我が孫は、それはもう目に入れても痛くないが、

「間違つてないけどな。“なれそめ”なんて言葉、どこで覚えたの？」

べつに“言つてはダメ”という言葉ではないけれど、我が孫にはまだ早いと思うのだ。

「おばあちゃんが言つてた」

あのアクティブばあさん……純粋な孫の前で、何をくつちやべつていやがるんだろう。

「ねえねえ、おじいちゃん」

「なんだいね？」

「どんなこと書いてあるの？」

「えっ……。ん、ん——」

語つて聞かせたい内容かと問われれば、正直あまり語りたくない内容なのだが——

「あ、そういえば、塩まんじゅう買つてあつたんだよ。どうだいね？　そろそろお茶の時間にしないかい、ね？」

「するー！　塩まんじゅう大好きー！」

ダダツと台所の方へ駆けて行く我が孫……。

「食に関して尋常ならざる執着をみせるのは、どこの誰の血を受け継いじやつたんだろう……」

まあ、いまはその食に対する執着のおかげで話をそらせたのだが。

ということ、我が孫が昼の寝に入ってから、アクティブなばあ

さんに語ってみた。

「だから、私の塩まんじゅうが無かったのですか……まったく、ヒドイですよ」

昔は黒かった今は銀髪をキュツとうなじの辺りで束ねた、いったいアンタは何歳なんだという疑問を投げかけたくなるほどあまり老けていない容姿の我が相方は、不満そうに形のいい眉を寄せる。

「いいじゃないですか、それくらい孫にゆずっても」

「よくないですよっ！ この世は弱肉強食っ、喰える時に喰わぬは愚か者っ！ 喰えるモノがあつてそれを残す者は、もはや生きる価値なしっ！ですよ？」

「ですよ？ って、だからなんなんですか。言葉の使いどころを間違えてますよ。力んで語っておいて、恥ずかしいですよ」

我が言葉を聞いた隣に座るお人は、いきなりヒジ鉄の制裁を放つてきおる。

「うっ！ ……も、もう私も若くないんですから、そういうのは御勘弁願いたい」

肋骨にヒビが入ってそんな感じに、痛みを引きずるんですけれど……。

「それくらい当然の報いです。なんですか、恥ずかしくて語りたくないからって、私の塩まんじゅうをスケープゴートに使ったってっ！ 許せませんよ」

コブシを握って、憤怒する我が相方さん。

「明日、買いなおしてきますから、二発目を放つのは御勘弁願いたいです。素で、素で昇天してしまいそうなので」

「べつに私は、塩まんじゅうの事で怒っているわけではないのです」「じゃ、じゃあ何に？」

「恥ずかしいと思ったその心に、私は怒っているのですっ。私たちの物語ですよ？ 私たちの生きた証ですよ？ それが恥ずかしいって、なんですか。私は聞かれて恥じるような生き方はしてませんよっ！」

我が相方さんは、どこかの独裁者みないに力説する。

「……そ、そうですね。すみません」

つつい気圧されて謝ってしまったが、べつに私とて歩んだ道のりを恥じているわけではないのだ。でもね、改めて語ろうとすると、顔面が熱くなるというのか、なんというのか。

「自分の人生を語る相手が居て、たとえ自分が死してもそれを語り継いでくれる者が居る——それはとても恵まれた幸福なことなのです。だから、自信を持って私たちの生き様を、後世に語り継ごうじゃないですか、ね？」

その勢いでアナタが自らの子らに、寝物語として自分の生き様を語りすぎたせいか、モノの考え方がものすごくアナタそっくりになってしまった息子と娘を思うと、若干の抵抗がなくもないのがね。

「まま、昼寝から目覚めたら、語ってみましようかね」

食に対して異常な執着がある事と、セコイというところを除けば、人としてよき例になるでしょうし。

「じゃあ、それまでに塩まんじゅうを買って来てくださいよ」

「さっき買いなおさなくてもイイって言ってたじゃないですか」

「そんなこと言ってますよ。怒っていない、と言っただけです」

「……さいですか」

そんなこんなで、塩まんじゅうを再購入しに行くハメになってしまったが、

「まあ、いいか」

こき使われているおかげか、足腰はいまだに弱りきっていないし。ま、悪いことばかりではない。

自らの“経験／人生”を物語る相手がある、

それを聞いてくれる相手がある、

それだけで人生、捨てたものじゃない。

という言葉を、どこかの映画で見たか聞いたかしたのを、いまふ
と思い出したのだが、私は孫に自らの物語を語り終えたら、コレに
もう少し言葉を付け加えて、それを物語のシメの言葉に使おうと思
う。

物語を共につづるヒトが隣にいたというだけで、
その物語は、よりいっそう面白くなる――

《ザ・刀と壱の旅》 〈The Tou and Ichii's
travels〉

第一部【起】終幕。

第二部【承】開幕――

承／第九話：夜明け

「残念なお知らせです。塩まんじゅうは、ご好評につき完売いたしましたッ」

縁側に腰を下ろし、庭を流るる風を感じながらお茶をたしなむその御方に、私は深々と、それはもう脳挫傷で死ぬんじゃないかというくらい深く勢いよく頭を下げて詫びた。

だが、なかなかリアクションがない。

苦痛というべき沈黙が私を襲う。

自らの罪によって強いられる死へのカウントダウンを噛みしめながら、十三階段を一步、また一步と踏みしめ進む死刑囚のごとく。

コチコチと時を刻む柱時計の音が、いままで経験したことがないくらいに強調されて耳へと流れ込んでくる。

コチコチ、コチコチ――

ゴクリっと思わず生唾を飲み込んでしまう。

床にめり込みそうなほど深く密着させている額に、嫌な汗が、脂汗がジワリをにじみ出ているのがわかる。

呼吸もなんだか不規則で、胸がなんだか苦しい――

ふいに、気配が動くのを感じた。

視覚は怖くてギョツとマブタを閉じてしまっているので機能してないが、嫌でも音を拾うことをやめない頑固な聴覚が、衣擦れの音を微かに聴く。

気配が、畏怖すべき気配が、超近距離前方で動きを止めたのがわかる。わかってしまう。

奥歯がガタガタと鳴りそう。

というか、もう、お股の間から何か漏らしそう。

こんな怖さ、怖がられる事をなりわいに行っているであろうスーツ姿の方たちが搭乗している高級車に、自転車ですすってしまったとき以来だ。

「——です」

なにか、前方にいらつしやる御方が言いなさったが——不覚にも、うまく聞き取れなかった。聞き返すのは恐ろしすぎて、できようはずがない。

「もういいですよ」

はい？

「もういいですよ。無いものを求めたって、仕方ないじゃないですか。そのうち買い直しておいてくれれば、いいですよ」

前方のお方の声色は、それはもう平静で。

むしろ逆にそれが怖いのだが。

「お、怒って、ないでございますか？」

長いこと油をさしてもらっていないブリキ人形のごとく、ギギギと軋む音が聞こえそうな硬い動きで、面を上げ、前方のお方の表情をうかがってみる。

お茶が飲み干された湯のみを両手で包むように持っていていらつしやる、昔は黒かった今は銀髪をキュツとうなじの辺りで束ねた、いたいアンタは何歳なんだという疑問を投げかけなくなるほどあまり老けていない容姿のそのお方は、呆れたように眉尻をさげている。

「言葉遣いがオカシイことになってますよ。それに呼吸と脈拍が乱れすぎてます、それだと長くない寿命が更に縮んでしまいますよ？」
寿命を縮めているのはアナタなのですがね。

ともあれ、キレてなくてよかったです。即死の危機からは脱した、ということだと思えますので。

私は正座の姿勢で、

「……ほっ」

と一息ついた。

強張っていた全身の筋肉が、一気に弛緩する。

「なにを『ほっ』としているんですか」

年齢不詳の銀髪さんは、呆れた表情のままに、お茶のおかわりを淹れに台所へ向かおうと一步を踏み出した——

「——あらっ？」

と思つたら、和服じみた民族衣装の裾を踏んで、こちらに倒れこんできた。

私は正座しているので、とっさに避けようがなく。

——まったく、いくつになっても……このドジっ娘め。

とても言つてやろうと、受け止めようかと思つたのだけれども、残念な事に年齢不詳の銀髪さんは身体の前に両手で湯のみを持っており、その湯のみはずっこける勢いにつて、まるでハンマーを振り下ろすような勢いでこちらへ向かつてきており、私の視線の先には湯のみの底がスローモーションで迫つてきて——

「——ガツはツァ！」

額を湯のみの底でぶん殴られ、なおかつそれに続くように年齢不詳の銀髪さんが全身で突っ込んできおる。正座という姿勢のため、前方からかかる力にたいして抗うこと難しく、心もとない腹筋を駆使してみても、（自分の重み）＋（銀髪さんの重み）＋（ずっこけの勢い）にかなうはずもなく、

「ぬおツはツァ！」

前の次は後と、後頭部を床に強打し、正座の後倒しという無理な姿勢と年齢不詳の銀髪さんの体重の苦しさを感じ——急激に、なんだかとても眠くなつてしまい、しかし眠気に抗う気力は湧かず、なるがままにすべてをゆだね……

薄ぼんやりとした意識が、なにかをとらえた。

それは心地いいと思えるもので。

その心地好さにすべてをゆだねていたら、それが詩であることに気がついた。

どこかで聞いたことがあるような、とても耳触りのよい詩であると。

不意に、なにか温いものがそつと自分の手に触れてきたことに気

がつき、それを起として意識が鮮明に近づいて、詩が、歌声が至近から聞こえていることを知り――

ふうっと歌声は途切れ、手からも温もりが消える。

歌に聴き入っていたオレの意識はもうすでに覚醒しており、歌声の主がなかなかの歌唱力をもっているという驚きよりも、なぜこの歌を歌声の主が知っているのかという事のほう不思議で、

「どうしてこの歌を？」

疑問を口に出していた。

「あら、起きていたのですか刀さん。もう、急に動かなくなってしまうから心配してしまいましたよ。と、それはともかく、うわごとのように“塩まんじゅう”と連呼していたのですけど、塩まんじゅうって何ですか？」

オレの疑問に答えることなく、自らの疑問をかぶせてくる、黒髪を肩口でテキトウにぶった切った、紫が主色の民族衣装に身を包んだ人物は、なんでかオレを横から覗き込むような体勢――バストアップな絵図で我が視界に映りこんできた。その背後には星々が煌く夜空が広がっている。

若干の思考の間を置いて、自分がその人物に膝枕されているという事に気がついて、急にこっ恥ずかしくなり慌てて身体を起こした。

とたん、視界がぐわんと揺れ、なんだか頭が重い――というか、

後頭部がズキンズキンとうずく。

なんだ、なんでこんなに後頭部が痛むんだ？

オレはズキズキする部位を優しくさすりつつ、思い当たる節を探してみる……。

んんー？

そういえば、オレは日記を書いていたような。

いや、書き終って――

本棚の整理中に発見した懐かしき手帳を再読しているうちに、時

を忘れて……。眼に入れても痛くない孫に、一概には言いがたいほどにトンデモナイ体験談が書かれた手帳の中身を訊かれて、誤魔化す為に塩まんじゅうを生け贄に捧げて話をそらし、でも「私の塩まんじゅうをスケープゴートに使ったってっ！」と相方さんを激怒させたあげくに塩まんじゅうを再購入しに行くハメになって、しかし何だか嫌な気分じゃなかったから恥ずかしくもよさげなセリフをぬかして、だけれども残念で悲しいことに塩まんじゅうは売り切れゴメンで――

「……あれ？　なんか、んー？　色々とごちゃ混ぜになっているよ
うな？」

夢と現の区別が曖昧で。

いやしかし、どちらにせよ後頭部が痛いことには違いなく。

夢にせよ現にせよ、痛みの原因は、明後日の方向に視線をやりつつもこちらを見ている人物――壺さんであると確信が持てる。

ノリでボディータックルされるか、湯のみで殴られたのちボディープレスされるか、の違いでしかなく、地に後頭部を打ち付けた原因は他にあるうハズがない。

いやいや、後頭部の痛みの原因なんかイマサラどうしようもないのだから、どうでもいい。

そんなことより――

「塩まんじゅうってなんですか？」

壺さんが素敵な疑問顔で繰り返す。

アンタはそればっかですか。夢でも現でも塩まんじゅうなんですかッ。

と若干の苛立ちを覚えたところで、なにが好転するわけでもない
ので、

「それはそれは美味しゅう、ほっぺたが落ちるにとどまらず、他人を湯のみでぶん殴ったあげくにボディープレスしたくなるほどの味わいな――おまんじゅう、ですっ」

「それは“しお”という名の危ないお菓が混入した、いろんな意味

でオイシイおまんじゅうなのでしょいか」

眉間に小じわを刻んで、真剣な表情でおっしゃる壺さん。だが、なんでそんなどうでもいいところで、真面目な反応を返してくださいのかしら、ねッ？

「いやもう、危ない意味の“オイシイ”おまんじゅうでいいですから、オレの問いかけに答えてくださいよ」

「問い？」

んな、可愛く小首を傾げたって何も出ませんよ。ていうかむしろオレが出て欲しいのですよ、返答を。

「さつき口ずさんでいた歌についてです」

「見上げてごらん〜ですか？」

「そうです」

と力んで言ってみたものの、なんでか壺さん黙りこくり――
沈黙……。

なにコレは。どんなジラシのプレイですか。

「いえ、べつにジラシ楽しんでるわけではなくて、あの歌について何を問われているのかわからなくて」

壺さんは眉尻を下げて困ったような表情をする。

ああ、なるほど、急ぎすぎましたかオレ。

「どうしてあの歌を知っているのですか？」

そう、どうして壺さんが、“見上げてごらん夜の星を”を知っているのか。

オレもリアルタイムで知っているわけではないが、テレビを観ていると昭和を代表する名曲であるとかで不意に流れていたりするし、最近でも有名なアーティストがカバーして歌っていたりする。たしか“坂本九”氏の歌であったと思う。

つまり、オレの世界での有名曲である。

それを、なぜ壺さんが口ずさむ？

「どうしてって――」

なんだそんなこと、とでも言いたげなキョトンとした顔つきで、

「——覚えたからに決まってるじゃないですか」

あたりまえじゃん、と壱さんの表情が語っている。

もっつ！

抱きしめちゃうぞっ！

形容し難い、指先をワナワナと動かしまくってしまう、煮え切らない、全身を駆けずり回るこの感覚が、もはや憤りとかそういうモノを超越して、いつそ抱きしめてしまいたくなる。という奇妙な感覚が、お頭の九割を占領したが、しかし優秀な理性というか自制心が、それらの奇妙な感覚を駆逐して、オレに冷静さを取り戻してくれる。

「いやもっつもっともなんですけれど、そうではなくて……、えーと、どうやって覚えた——いや、そう、誰かに教わったんですか？」

「ええ、そうですよ」

オレはやつと最適な問いを言えたようだ。

そして壱さんが語るに、

「ほら、まえに鉄の大鳥のお話をしたことがあったじゃないですか、じつはですね、そのお話を私に聞かせてくれた人が、先ほどの歌も教えてくれたのですよ」

アバウトすぎてオレが得たかった回答とはちよいと違うが、

「ちなみにどんな感じのお人でしたか？」

兎にも角にも、いまのオレは、自分の世界とのつながりが髪の毛ほどの細さでも得られれば喜ぶべき事態なので、些細な情報でも欲しい。

「そうですね……」

深いところにある記憶を呼び起こそうとしているのか、壱さんは曲げた右手人差し指をアゴにあてて、思案顔で「んんー」とうなり、「ひとつの約束を果たせずに来てしまった、せめて歌よ響けよ世界を越えて——」と言っていたのが印象的な方でしたね」

うん、と一人思い出し納得したように壱さんはうなずく。

来てしまった、世界を越えて、か。やっぱりオレと同じような人

が居る可能性は大きいと考えて間違いない、のかな。

いや、でもしかし、壱さんに歌を教えたその人物は、ここが何所だか検討がついているのか？ “来てしまった”って、来たくなかったけど、来てしまったていうことなのか？ んんー考えても、よくわからない。

オレが思考の迷路に迷い込み始めたらば、

「ふあゝ」

壱さんが大きなアクビをかました。

そしてスクツと立ち上がるや、

「それでは刀さん、たき火のばんと見張り、交代です」

と言いつ残し、いつの間にか握っていた杖をたくみに使い、少し離れたところに在るリアカーの近くまで移動し、杖でなんだろう毛皮のカタマリのようなモノをつつくと、姿勢を低くして手で直接その感触を確かめ、その中へもぐりこむ。よくよく目を凝らしてみると、その毛皮のカタマリの下には、ツミさんとバツが安らかな表情で寝息をたてている。

なんだ、どうということったい？

疑問と共に意識を広げると、どうやらオレはたき火の前で壱さんに膝枕してもらって寝ていたらしいということを知る。

「で、オレにどうしろと？」

あまりにも周辺警戒とたき火ばんがヒマを極めるものだったので、どうやら壱さんにボディータックルされてそのまま寝ていたらしいオレが見ていた夢を含めた、いまに到るまでの出来事を日記帳に書き書きしたわけだが、

「さすがに、眠い」

星々が煌く夜空は、いまや薄明るい。

いやまあ、つまるところ、気持ち良さそうに寝ているお人を叩き起こすということができなかったマイチキンハートなわけで。

夜の次には朝が来るわけで。

オレは眠いわけで。

早くどなたか自然起床してくれないかなあ……。

そんな事を願いつつ、起きているのか寝ているのか曖昧な思考の中をただよっていたオレの耳に、

「どなたかアーツ！ 助けてくださいましーッ！」

そんな騒音が飛び込んできたのは、果たして夢か現か――

承ノ第十話：ワイルドに朝食を

——なんだか遠くが騒々しかった。

テレビをつけたまま寝入ってしまったときの感覚、とても言うか。

夢と現の境目が、つまりはうるさくて。

テレビの電源を切るために——騒音を排除して安眠を獲得する為に、少し意識を覚醒に近づけ、薄目を開けた——

瞬間、若干の砂埃をまとして登場したソレと、オレは寝起きで「コンニチワ」したくなかったけど、してしまった。

ソレとはなんぞや？

当然、気になってあたりまえなのだか、オレは数泊の間、ソレをまじまじと見つめても、初めはソレが何なのか理解できなかった。

というか理解しなくなかったというのか、拒絶というのか、現実逃避というのか。

ソレは、獣の頭部だった。

それもやたらとデカイ。

巨大なイノシシとでも言おうか。かの有名な宮崎駿監督作品“もののけ姫”に登場した、あの巨大イノシシを思わせる。

あぐらをかいて、たき火の番をしつつ居眠りをこいていたオレの目前で、頭を地べたに這いつくばらせている巨大イノシシ。だがひとつ、奇妙な点がその巨大イノシシにはあった。

頭のテッペンから、棒のようなモノが生えているのである。

長いとは言いがたい我が人生だが、頭から棒を生やした生物など見たことも聞いたこともない。

棒状のモノを見つめていたら、その延長線上、巨大イノシシの背中の方から、朝日をバックに、人影が現れた。

逆光になっていて誰なのかよく見えないのだが、

「朝ごはん、朝ごはん、美味しい朝ごはん」

とてつもなく上機嫌な感じに「朝ごはん」を連呼している声には聞き覚えがあり、

「……壱さん？」

試しに名前を呼んでみたらば、

「あら、刀さん。おはようございます。早速、朝ごはんにしましょうっ！」

彼女は楽しそうに言い、そこから流れる動作で、巨大イノシシの頭部に刺さってその息の根を止めたと思しき棒——壱さんの杖——をねばっこい音をさせながら引っこ抜いた。

なんか、あまり心臓によろしくない目覚めだ……。

頭の中身がコンニチワしちゃっている巨大イノシシから目をそむけて、気分転換にと、朝の空を見上げてみる。

あ、小鳥さんがお歌を歌いながら飛んでいるよ——

「さ、刀くん。まどろんでないで、解体するの手伝ってちょうだい」
いつの間にか背後に居たツミさんが、ポンっとオレの肩をたたく。
件の日本刀風お肉解体包丁を肩にかつぎ、朝日をあびながら、そよ風にポニーテイルをゆらし、爽やかに。

生きていたモノを食べるために解体する。

そんな人生初の経験をした本日——といっても実際には、巨大イノシシを肉にしてゆくツミさんの手際を眺めるばかりだったが、オレはイマサラながら、「いただきます」と“ごちそうさま”の重要性についてのか、意味というのか、を理解した気がする。

巨大イノシシのお肉は、それはそれは獣で肉々しいモノであったが、

「ごちそうさまでした」

気持ちはずっと美味しくいただきました。

「それはそうと——」

オレは、猛獣のごとく骨付きお肉に喰らいついている壱さん以外の方々に、ずっと気になっていたことを訊ねてみる。

「——当然のように一緒に朝食を楽しんでいる、そのお人は、誰さんなのでしょう？」

謎なお人は、我が正面、はふはふ言いながら焼きたてお肉を食べているバツの隣で、お上品に巨大イノシシ汁をすすっている。金色で装飾された白主色の法衣——のような服を身にまとった、長い金髪が印象的な人物。女の人かな、たぶん。

「いま食べてる、お肉を連れてきた——」

ツミさんが食べるのを止めて、我が問いに答えてくれようとするが、

「……そういえば結局のところ、どちら様なのかな？」

巨大イノシシを連れてきたということ以外、知らないらしい。そういえば、夢と現の狭間で「どなたかアーツ！ 助けてくださいませーッ！」って誰かが叫んでいたのを聞いた気がするのだが、叫びの主は、この長い金髪のお人なのかな。

そんな感じで疑問の眼差しを向けると、長い金髪のお人は、これまた上品に口元を拭ってから、

「助けていただいたお礼も、あげく名乗りもせず、失礼いたしましたこと許してくださいまし」

頭を下げ、

「わたくし、メスム屋十二代目次期当主——ロエと申します」

朝日の下で、長い金髪に天使の輪を出現させお上品に微笑み名乗るロエさんは、なんだか本物の天使のように美しく、思わず見惚れてしま——

「——ぐおっぼっ！」

不意に腹部へひじ鉄の一撃を喰らい、いまさっき食べたものが喉の辺りまでリバーズしてくるのを——そこから先へ臨界突破しないよう堪えつつ、一通り悶絶してから、

「いきなりなにするんですかつ！ 壱さんっ！」

オレは隣にいらっしやる、理不尽な暴力の発生源へ抗議の声を上げる。

我が心からの訴えに、しかし壱さんはお肉をもぐもぐと喰らい、ハムスターのごとくほっぺを膨らませながら、

「いえなにか、刀さんからとってもイヤラシイ気配を感じたものでこのまま刀さんがエロエロ変態魔人さんに堕ちてしまつては、私としては少し哀しいものがありますから——つまり、愛のムチというやつですよ」

メシを喰いながら愛のムチって言われてもね。というか、一糸まとわぬ赤裸々な破廉恥極まりないイデタチの破廉恥漢——イワさんを地面から呼び出して共闘していたアナタに言われても、なんか説得力に欠けますよ。

ていうかね、

「壱さん、口のまわりが油でギトギトになってますよ——」

もってもらしく何かを語るなら、せめてお口のまわりをテカテカのギトギトにしないでくださいよ。

オレは布切れで壱さんの口元を拭いつつ、

「——誰も横取りなんてしないんですから、落ち着いて食べてください」

そんな進言を試してみた。幼子のような食い方をしますよね壱さん。

「私は全力で味わっているだけですっ」

壱さんはぶくつとほっぺを膨らませる。

なんだかなあ……。

腹に一撃喰らつて一瞬でもイラッとした自分が、

「なんだかなあ……」

オレはとりあえず、腹への一撃のお返しに、壱さんのぶくつと膨らんだほっぺを、全力で突つつくことにした。

「仲がよろしいんですね」

オレと壱さんとのやりとりを、なんでか目を細め見ていた口エさんは、不意にそんなことを言う。

「そうですか？」

不意にひじ鉄くれてくる人と、不意にひじ鉄くらった人とを、どうして口エさんはそんな優しい眼差しで見れるのか。オレとしてはちよいと複雑な気分なのだが。

「ええそれはもう、私と刀さんはお互いの趣向から毛穴の数まで熟知している仲ですから」

趣向は、まあいいとして。

毛穴って、壱さん——オレとアナタはどれだけディープな仲なのよ。

常識的に居ないでしょ。どこの世の中を探してもさ。毛穴の数を熟知し合っているフレンドリーなんて。

ていうかむしろ教えて欲しいよ、我が毛穴の数を。すると、壱さんはズイとこちらに身を近づけて、

「じゃあ深夜、二人っきりのとき語り合いましょ」

吐息が耳を舐めるほどの近距離で、そんな事を言うもんだから、一瞬でもドキツとしてしまった自分が非常に残念です。

普通に考えて、お互いの毛穴の数について夜中に二人っきりで語り合っている光景って、それはもう狂氣的でしょう。

「ていうかもう毛穴の話はどうでもいい、というか置いておきましょ」

毛穴の話が続けたところで、得るものなんて何もなさそうですからね。

「そうですか？ それは残念です」

どうしてそんな心底から残念無念みたいな表情できるんですか壱さん。

まあそれも置いておいて。

「よく考えてみれば、オレが壱さんと出会ってから、まだ一週間も経っていないんですよね」

なんかやたらと濃密な時間を過ごしたような気がいたが。

「あら、そうなんですか？ それにしてはずいぶんと仲がよろしいように見えましたけれど」

ロエさんは口元に手をあてがい、お上品に驚きを表す。

「べつに、一緒に過ごした時間が親密さと同義であるなんて決まりはないでしょう？ 長くお互いを知っていても犬猿の仲ということだってありますし。それとは逆に、出会ったその瞬間から意気投合して十数年来の親友のごとくなったりだってします。ようは相性の問題なのです。その点、私と刀さんの相性は、それはもうビックリするぐらいバツチリだったと、そういうわけです」

コブシを握って口を動かす壺さんの力説を、ロエさんは慈母のような眼差しで聴いて、最後にひとつ「なるほど納得」と肯く。

「いったいロエさんは何に納得しちゃったんだろ。ていうかバツチリな相性って、何さ。」

「それは、朝昼晩と——えっと、その……」

なぜそこで言いよどむの壺さん。てか、朝昼晩ってなに。あれですか、食生活の相性ですか、朝メシ昼メシ晩メシって感じに。

「そんな人前で言うなんて……恥ずかしい」

ええっ！

なにその、いままでにないくらいの恥らった表情はっ！

で、結局なにが相性バツチリなのか、オレが知りえるまえに、出発の準備——おかたづけとあいなった。

おかたづけを行いつつ、次にどこへ向かうのかという話になり、「助けていただいたお礼をさせていたきたいので、是非に我家へいらしてください」

ならばとロエさんが提案してきた。なんでも本日中に訪れることになるう村は、ロエさんが生まれ育ち、現在も暮らしている所なのだそう。

オレの知らぬ間に人助けをしていたらしい壺さんは、出された提案に対し、

「では、そうさせていただきますしう」

当然のように即承諾した。

遠慮っていうか、謙虚さっていうか、ザ・日本人なオレからすれば、承諾するにしたって、もうちょっとまわりくどいデコレーションされたキレイな言い方があるんじゃないかなろうか、と思ってしまうのだが。

「どうして好意を受けるのに、まわりくどい態度をとらなければいけないんですか？　むしろ私には、失礼に思えますけど。なんでも素直が一番ですよ——」

言うや、我が右側にいらっしゃる壱さんは、探るように左手を空にさまよわせ、その手がオレの肩に到達すると、そこからたどって首から頬の方へ、そして左手を我がアゴとほっぺの境目にピトツと置き、

「——ですから私、自分の心情に素直になろうと思います」

モノを捉えぬ潤みの増した瞳でこちらを見上げ、なんだかとも悩ましげな表情をする。

なんだかともロマンティックな、このまま我が頬と壱さんの唇が衝突事故を起こしちゃいそうな図じゃないか。

そんな状況がゆえに、ひとつだけ疑問を訊ねさせていただきたい。「どうして壱さんは素直になると杖の石突を——あのイノシシさんの脳天ぶち抜いちやった杖の石突を、我が頭部に突きつけることになるんでしょうかねっ」

艶っぽい表情の壱さんは現在、左手でガッチリと固定したオレの頭部に、右手で握った杖の石突を突きつけているのです、なぜか。

「さっき私のほっぺを『ぶうっ』てしたじゃないですか刀さん。ですからその報復ですっ」

そんな素敵な笑顔でおっしゃられると恐怖倍增なんです。

ていうか、報復って、ぶくつと膨れたほっぺを軽くつついただけじゃないですか。

「生まれて初めてです、あんなハズカシメを受けたのはっ」
なにその敏感過ぎる羞恥心はっ！

というかそれ以前に、アナタ、百倍は恥ずかしいことしてるでしょう。絶対に。

て、思ってるそばから、鋭利な何がかか我が頬に食い込んできちよるぜおっ！

お口の穴が二つになろうかという、そのとき、

「——はい」

と仕切りの拍手をひとつ打って、ツミさんがご登場した。

「かたづけ終わったから、そろそろ出発しましょう」

目の前の暴拳が見えていないのか、ツミさんはいたって平静な態度だ。

「あ、あのツミさん」

「ん？ なにかな」

「目の前で繰り広げられている事について、なにか思うところはないのでしょいか？」

できれば、いますぐ迅速に壱さんを止めていただきたいのですが、なんて我が心情は察してはいただけないようで、ツミさんはオレと壱さんへ交互に視線をやってから、

「あれだ、過激な愛情表現ってやつだね。見せつけてくれるなあご両人——」

どうやらツミさんは平和過ぎる思考の持ち主のようだ。土鍋で寝るネコを愛でるような、ほほえましい光景を眺める眼差しをしちゃっているもの。

「——でもさ、ほっぺから血がにじみ出てきちゃってるから、ほどほどにね」

ほどほどとか言う前に止めていただきたい。ていうか、背を向けてリアカーのほうへ歩みださないで——

カアームバアック！

という心からの叫びを眼差しで全力表現していたら、不意に食い込んだ鋭利なヤツから我が頬は解放された。

ほっとしつつ、手で頬に触れてみると、その指先には流血の痕跡

が付着してた。

「ヒドイですよ壱さん。ホントに出血しちゃってるじゃないですか」

てか、下手したら穴が開いちゃうところだったんですよ。冗談にしても過激すぎます。

我が抗議を耳にした壱さんは、確かめるように左手で我が頬に触れ、指先が液体の感触を知るや、

「あら、ほんとうに。でもコレくらいなら、ツバつけておけば治りますよ」

悪びれた様子がミジンコ程もない態度で言ってきた。

なんか怒るのもバカらしいと思えてくる。

「はあ……」

溜め息を吐いたそのとき、我が頬を生温かくて湿った軟質の何かが撫でた。背筋にゾクゾクと変な感覚が走る。

数瞬の間、なにが起きたのかわからなかったが、

「な、ななにしてるんですか壱さんっ」

超近距離にある壱さんのお顔を拝見して理解した。

「なにつて、だからツバつけたんですよ」

言って壱さんはチロリと舌を出す。

ていうか、つまるところ、壱さん、アナタ……オレのほっぺを舐めやがりましたね。

「さあ、さ、そろそろ出発しましょ」

だか壱さんは何事もなかったかのように、我が手を引いて、眼になれといってくる。

なんだかなあ、

どうなんだろ、

なんて思考するヒマもなく、

オレは壱さんの眼を兼ねたりアカーを引っ張る人動力となり、

我ら御一行は、ロエさんが生まれ育ち暮らす村を目指し出発した。

川べりから出発して、川沿いの踏み固められた道を、えんやえんやとリアカー引いて歩いたわけだが、なかなかどうして村までは距離があり、さすがにリアカー引きっぱなしでは、我が体力のキャパシティーを軽く越えてしまう。そんなわけで。

「あの、そろそろ休憩にしませんか？」

いっぱいいいっぱいな雰囲気の声に乗っかってしまっているのが、自分からして恥ずかしいというか情けないのだが、身体はプライドよりも休息を求めているので、言葉はかなり素直に出てきた。

「なんですか、もう息があがってしまったのですか？」

言葉だけだとなんか気にかけてくれているような壺さんの物言いだが、表情は露骨に「情けない」と語っている。

事実、自分でもそう思う。

女性三人と子ども一人が、まったく疲れの色を見せていないのに、そんな中であってチキンハートでも男である自分が、ヒイヒイ言っちゃって休ませてくれとは。しかし残念ながら、意地を張って無理をする余裕もない。

——と、事ここに至るまでの出来事を、オレは倒木に腰掛け休息しつつ、件の手帳に書きとめた。

ちなみに、べつに疲れていないけど休んでくれている方々は——女性三人は、ツミさんの淹れたお茶をたしなみつつ、なにぞ楽しそうにお喋りをしている。女三人揃えばカシマシイ、というのだったっけか、こういうの。

「と、トウお兄ちゃん。こ、これはなんてよむの？」

で、もう一人オレの休息に付き合ってくれている人物——バツは、日記を書く我が隣に腰掛けて、ときおり手帳に書かれている文字を指差しては読み方を問うてくる。どうやらオレの書く異文化な文字に興味があるようだ。

「カシマシイだよ」

漢字で書くと“姦しい”。まさに読んで字の如く。

ともあれ、国語を教えてあげられるほど、オレは学を極めていないので、あまり問われても困るのだが。

「ど、どういうイミなの？」

知的好奇心に目を輝かせながら問われては、むげにはできず。ああ、なんで異世界に来てから学校の勉強をもうちよつと真面目に受けておけばよかったと思うんだろぅなあ……。

無いものねだり、と言えばそうなのだろうが、思ったところで後悔は先に立ってくれない。

「目の前でおこなわれている光景の事だよ」

女性陣を示して、とりあえず答えてみるが、言った途端に、正しいのか正しくないのか自信がなくなってきた。

ともあれ、ここに来てわかったことがある。

この世界の方々には、おおそ日本語——喋りが通じるけれども、ここに存在しないモノの名称だったり、存在するけれど名称が違うものだったり、そもそも概念が違うものだったり、があつて通用しないモノもあるということ。

そして文字はまったく共通していないということ。とりあえず、日記を盗み読みされる心配はまったくないということが知れた。正直、わかつとわかるまいと何かが変化するようなことはないが。

まあいいや。いまはとりあえず、

「あの、ロエさん。あとどれくらいで村に到着するのでしょうか？」
自分の体力が村に到着するまで持つかを心配しておこつ。

承／第十巻話：喰い過ぎ、注意！

「では、刀さん。私と夫婦になりましたよ」

壱さんは真剣そうな声色で、そんな突拍子もない事を言い切った。
「はっ？」

オレは聞き間違いであると確信しているが、

「いま、なんと？」

確信をさらに確たるものとするため、聞き返した。

「何度も言わせないでくださいっ」

壱さんは苛立たしげにオレの手首をとり、

「私と刀さんは、夫婦——メ・オ・トっ！ なんですっ」

そしてその美味そうな匂いを手繰るようにして、ガツガツと杖で足元を確認しつつ舞台上へ歩みを進めてゆく。

べつにオレは行きたくないのだが、壱さんにへし折らんばかりの力で手首を拘束されてしまっているの、抗っても強制的に引きずられ、その背を追う。

美味しい匂いただよう舞台上へ、壱さんとオレが上がると、お祭り特有の高揚感に支配された人々が声を飛ばしてくる。

みんな楽しそうだ。

でも残念ながら、オレはお祭りとかの異様な盛り上がりがちよつと苦手だったりする。決して嫌いなわけではない。ただ、積極的に参加するよりも少し距離を置いて見物する事を好む人種というだけだ。

が、オレ強制参加決定なようで。

「なんだかなあ……」

現実逃避を兼ねて、回想することにもしよう。

なんで唐突に、壱さんが夫婦になりましたよなんて言い出したのか。

あるいは彼女の性質をもう少し知っていれば、予想することも可

能だったのかもしれない――

――とりあえず、体力の限界を突破する前に、口エさんの村へ辿り着けた。

家へと道案内をしてくれる口エさんの背を追いつつ、オレは辺りを見回す。

レンガ造りの家と木造の家が密集するように立ち並んでいる。口エさんが言うには、一日あればこの村の全域を巡れるらしい。

異国情緒に八割、口エさんの話に二割の意識をさきつつ、歩みを進めていると、不意に開けた場所に出た。

共同の水くみ広場なのだそう。言われて見れば、広場の中心には井戸がある。井戸を見ると、髪の毛の長い女性が奇怪に喉を鳴らしながら這い上がってくる光景を思い出してしまうのは、某ホラー映画が有名すぎるからなのか、あるいはアノ映画を見てちょっとチビツてしまい、色んな意味で心についた傷のせいなのか。

ともあれ、言われなければオレはその井戸の存在に気がつかなかっただろう。

なぜか？

井戸の向こう側に、地味な井戸より目立つものが存在するからだ。学園祭のようそうを思い起こさせる、手作りかん溢るる舞台と看板。そこに群がる楽しそうな雰囲気の人々。遠目から眺めているだけで、なにか本能に近い部位にある感情を刺激する。どこかで感じたことがあるであろう感覚――太鼓の音色が腹に響いてくれたら、なんかシックリくる。焼きそばの出店があつたらなおのこといい。雰囲気だけで推測すると、そこにはお祭りの気配が広がっていた。看板に書かれている文字が読めたら、なにがおこなわれているのか推測するまでもないのだろうが。

「明日から収穫祭なのですよ」

楽しげに誇らしげに口エさんが教えてくれた。

祭りにも様々なモノがあるんだなあと思う。収穫祭か、話に聞い

たことはあるが、学園祭と花火をぶつ放す夏祭りしか実験のない
オレからすると、なんか新鮮な感じがする。

「そんな事より、先ほどから美味しそうな匂いがするんですけど――
これはいったい？」

溢るる唾液を「じゅるり」とすすりつつ、鼻をひくつかせる壱さ
んは、危ないお薬でもキメてしまったかのごとく嬉々としてテンシ
ョン高く浮き足立っている。

美味しそうな匂いだけでここまでイケるのは、ある意味で幸せだ
ろうなあ。と思いつつ、

「確かに、イイ匂いしてますよね」

壱さんほどテンション急上昇はしないが、疲れて空いたお腹を抱
えるオレとしても、この匂いは魅惑的だ。口内がやたらと潤って、
気を抜くと口の端からからツ〜と汁が垂れてしまいそうになる。

「明日の本番へ向けて、今日は予選大会なのですよ。夫婦大食い祝
事が、収穫祭の目玉ですので」

舞台のほうを示しながら教えてくれる口エさんの話を聞いている
のかいないのか、

「なにを食べるのですかつ」

祭りよりも大食いの品目が壱さんには重要なようだ。

「おまんじゅうです」

口エさんは気分を害すこともなく答えてくれた。

「おまんじゅうですか――なんとも、いまの私にとって喜ばしい品
目です」

壱さんのテンションここに極まれり。言葉だけなら落ち着いてい
るように思えるが、体はジリジリと匂いただよう舞台のほうへにじ
り寄っている。

「そんなに、おまんじゅうを食べたかったんですか？ 壱さん」

「ええ。今朝、刀さんが“塩まんじゅう”と連呼していたのを聞い
てからずっと」

さいですか。単純ですけど、見聞きしたモノが不意に食べたくな

る感覚は、わからなくないですよ。宮崎駿監督作品“千と千尋の神隠し”を視聴して、冒頭のお父さんとお母さんが“神様が食べる料理”を喰っているシーンに登場する食べ物がとっても喰いたくなつた経験がございますから。

「ああっ、もう我慢なりませんっ！ 私は予選大会に出ますっ」

痛い。痛いですよ壱さん。手に力を込めすぎっ。オレの手を握り潰すおつもりですかっ！

「でも、夫婦大食い祝事っていうくらいなんですから、夫婦じゃないとダメなんじゃないですか？ ね、ロエさん？」

握られた手の血色がどんどん悪くなつてゆく。が、悲しいかな力ワザでは壱さんに敵わないので、力んだところで出れぬものは出れぬという現実をお教えするほか、我が手の血色を正常に戻す術はない。

「夫婦大食い祝事は、“新婚夫婦がこれから食べるに困らぬように”という願いと、“長年共に過ごしてきた夫婦がこれからも食べるに困りませんように”という願いを込めた祭り事なので、出場権があるのは夫婦のみということになっています。でも夫婦なら村の者であつても外の者であつても、それを問わず出場できますよ」

ロエさんの親切丁寧なご説明を聞いて、飢えたる強者な壱さんも心を静めてくださるかと期待した自分が浅はかでしたっ。

痛い。痛いです。よりいっそう手に力がこもっておりますよっ！

ねえ、壱さんっ！

ここはもう、声を荒げて抗議せねば、と思い、壱さんのほうを見てみると、

「……………」

手にこめる力は右肩上がり黙り込み、眉間にシワを刻んで、なにやら真剣に考え込んでいるご様子……。なんでか“声をかけるべからず”というオーラが壱さんの全身からみなぎっているように見えるのは、強迫観念によるオレの幻覚かな。それとも生存本能による幻覚に見せかけた警告かな。

つまるところ、よくわからない気迫にオレは負けるわけで。声なんかかけられるわけもなく、ただ呆然と壱さんが静まることをお祈りするわけで――

と不意に、壱さんから形容し難い気迫が消え去り、万力のごとき手から力が抜けた。

そして壱さんはイタズラを思いついた子どもを思わせる素敵な表情で、

「では、刀さん。私と夫婦になりましょう」

――というところでプチ回想を兼ねた些細な現実逃避は終了いたしましたして、イヤでも現実と向き合うわけです。

舞台の上には長テーブルと六人分の簡素なイスが設置されており、壱さんを含めた六人のお人がイスに座りスタンバっている。ちなみに壱さん以外は男の人だ。

オレは長テーブルを挟んだ壱さんの正面につつ立っている。立っている人数はオレを含めて六人で、オレ以外は女の人――どうやら長テーブルを挟んで居る男女のペアが出場する一組“夫婦”であるらしい。

座った人はひたすら喰う係り。立っている人はまんじゅうを運んで補充し、なおかつ座っている人の口へまんじゅうをぶっ込む役目になっっているらしい。つまり、大口を開けて鎮座する壱さんに、オレがまんじゅうを喰わせると、そういうわけか。オレ的には自分で食べてよと思うが、“食べる人”のペースや限界を“食べさせる人”が理解しているか否かということで、相方との親密度／理解度を推し量る目的がこのルールにはあるらしい。こんな事で親密度がわかるとはオレには思えないけれど。

というか、シレっと“夫婦大食い祝事（予選）”に出場してるけど、オレと壱さんは夫婦ではない。なので、この“夫婦大食い祝事

（予選）”に出場する資格はない。けどなんか出ちゃっている。ダメじゃん。

「壱さん、お腹空いてるのはわかりますけど、ウソはやっぱりダメですよ。よりにもよって祝い事でウソって、なんか輪をかけて悪いことしている感じで居心地がわるいです」

祭りの喧騒にまぎれ、虫の羽音ほどの音量で壱さんに耳打ちしてみるのが、

「いまさら言っても後の祭りですよ、刀さん。ここはいさぎよく、お腹を満たしましょう」

まったく悪びれた様子のない答えが返ってきた。

「それに、食べ物で遊べる方々の祝いなんて、ただの遊興です。真面目に考える必要なんてありませんよ」

悪びれていないが、ふざけている訳でもない声色で、

「食べ物で遊べるのがどれだけ贅沢か気にも留めない幸せを満喫している方々からしたら、私たちの吐いたウソなんて些細な事——お祭りの余興くらいでしかないでしょうから」

どこか冷めた印象の言葉が吐かれ終わるのを見計らったように、ふたつの一口サイズ蒸しマンをのせたお皿が壱さんの前に置かれ、それ等を満載した手押し車がオレの横にやって来た。

いいわけしようがしまいが、“夫婦大食い祝事（予選）”は始まってしまったようだ。

鳥のヒナが、エサを親鳥に求める光景を思い出した。

大口を開けて、エサが放り込まれるのを鳴きながら待つヒナ鳥。壱さんを含めた喰う係りの方々は、さしずめ鳴かないヒナ鳥か。

そんなことを思いつつ、壱さんの大口に一口サイズ蒸しマンを放り込んでいたら、ひとつ疑問が生じた。口を開けているだけの人に蒸しマンを放り込み続ける、という図が六組分。それを見て、どうして会場の方々は盛り上がるんだろう。おもしろいか？ この図はオモシロいのか？ 蒸しマンを喰わされている人と喰わしている

人を見てオモシロいのか？ 端的に言つて、メシを喰っているだけの人を見て楽しいの？

なんて思考をしながら機械的に放り込み作業をしていたら、いつの間にか“夫婦大食い祝事（予選）”は終了していた。というか終わっていたことにオレが気づかず、勝手に記録更新し続けていたらしい。

壱さんはだいぶ余計に蒸しマンを喰ったようで、着ている紫主色の民族衣装みたいな服ごしに見てもわかるくらい、マンガの過剰表現のごとお腹が膨れている。まるで妊婦さんだ。

「初めて二人でがんばった共同作業でしたね、刀さん」

膨れたお腹を愛おしそうに撫でながらそんなセリフを言われると、べつの意味に聞こえてしまうのはオレが妄想族だからですかね。

ともあれどうしよう、予選を突破してしまった。

無駄に圧倒的大差で……。

「てか、なんで無理して食べ続けちゃったんですか。満腹でもう食べれないって言うてくればいいものを」

ちよつと壱さんのせいにしている気はするけれど、お腹があんなオモシロいことになるまで喰う必要はなかったでしょう。

「刀さんはおかしな事を言いますね。私は決して無理なんてしてませうツプすツんよ？」

態度は平静ですけど、「くせ」の後で口からなんか産まれちゃいそうになつてゐるあたりが、無理をしている証拠です。

お祭り特有の高揚感に支配された人々が飛ばしてくる称賛の声を聞き流しつつ、ロエさん、ツミさんとバツが居る所まで戻ると、

「すごいです。これなら本戦でも優勝間違いなしですよ」

ウソぶつこいて出場したあげくに予選突破してしまった事がとてもない大罪に思えてしまうほど、素敵過ぎる微笑と拍手で迎えてくれたのは、天使と見まごうロエさんである。

ツミさんとバツも称賛をもって迎えてくれた。

無駄にがんばったのは、主に壱さんであって、オレは特になんにもしていない。ゆえに称賛されてもさしてうれしくもなく、ウソぶっこいたという罪悪感ばかりが降りかかる言葉によって肥大化してゆく。

というわけで、素直に事を話してみた。

「あら……では未来の新婚さんが前倒しで出場したということですね。こんなにいい結果がだせるのですから、きっと先は明るいことでしょう」

まったく気分を害した風もなく、ロエさんはニコニコと微笑みながら「うんうん」と何度もうなずいた。とつてもフトコロが広いようだ。そして些細な幸福があったかのようなほんわかった雰囲気をもつとて、オレ達を自らの家へ案内することを再開する。

「だから言っただけでしょう？」

杖の代わりにオレの手を取りながら、さして得意げでもなく壱さんが言う。

「お祭りなんてオメデタイ事をしているのですから、起こったことは余程じゃないかぎり、良いほう好いほうに解釈するものです。それに——」

ズイと壱さんはこちらに身を寄せ、オレの耳を吐息がくすぐるほどに顔を接近させてくる。

「——まだ知れぬ未来では、あながちウソであるとは限りませうッブスッんよ？」

そうですか……。でもね、未来を思うよりもね——

人の耳元で吐きそうになるくらいなら、喋らないでいただきたいっ！

大惨事にするおつもりですか。オレの耳から肩にかけてをっ！

——と、村に到着して早々忙しい感じがであった出来事を、オレは窓際にある安楽イスに腰掛けゆったりしっつ、件の手帳に書きとめた。

壱さんの手とリアカーを引きながら辿り着いた口エさんの家は、威厳さえ感じる重厚な木造建築だった。メスム屋という銘の、おまんじゅう屋らしい。“夫婦大食い祝事（予選）”の蒸しマンもこちらの商品だとか。

案内されるがままに奥行きのある廊下を歩いてゆくと、客間らしき部屋に通された。すると壱さんはチョイとオレの手を引いて、「ベッドまで運んでください」

とお申し付けてきた。言われたとおりに寝心地良さそうなベッドまで行くと、壱さんは即行で大の字になり、ベッドに沈んだ。満腹でイッパイイッパイだったらしい。

でまあ、オレはしばしの間、満足したような可愛い寝顔を見せる壱さんを観察し——そして、手帳に事を書いておこうと思い、窓際にある安楽イスに腰掛けて、「意外と書いてるなオレ」と自賛しつつ書き書きした。

ツミさんはメスム屋のおまんじゅう作りに興味があるらしく、口エさんに頼んで調理場の見学に行った。バツは床にお尻を着いて座り、お茶の御供にと出された蒸しマンにパクついている。壱さんは大の字で休憩中。と、手帳に書き終わってしまうと、手持ち無沙汰でどうしたものか……。

意味もなく手帳をパラパラめくって——なんとなーく、ホントに思いつきで、手帳の最後の方のページを丁寧にチギリ取って、長方形の紙を入手した。

なにをするのか。まあ、べつに大した事ではなく、紙飛行機でも作って飛ばそうと、そんな思いつきである。

あっという間に、手の平サイズの紙飛行機は完成した。

窓の外にでも、景気良く飛ばそうかと思ったが、しかし他人の家の窓から良く飛ぶポイ捨てる的行為するのは気が引けるので、室内で飛ばすことにする。というわけで、テキトウに投擲した。すると紙飛行機は、オレの折り方がヘボかったせいか、予想だにしないアクロバティックな軌跡を描いて——いままさにバツが喰わんとして

いる蒸しマンに刺さった。

バツは食べようとした蒸しマンに刺さった紙飛行機に目を点にして硬直している。

「ゴメン、ゴメン。オレの予想を超えるアクロバット飛行しちゃた」
オレは謝りつつ、蒸しマンに刺さった紙飛行機を引っこ抜く。すると、バツの点になった目は、紙飛行機を引っこ抜いた手の動きを追う。

バツは蒸しマンを食う体勢のまま、半口を開けて、エサを前にした小動物のごとく、紙飛行機を凝視している。

ヒョイっと手を動かすと、それにあわせてバツも動く――
「ど、うしちゃったの？」

蒸しマンに紙飛行機が刺さったのがそんなにショックだったのだろうか。オレは現状のバツに不安を覚えた。

どうしよう、オレのせいでバツがどうにかなってしまったら――
「と、トウお兄ちゃん。そ、それはなあに？」

眼をキラキラ好奇心に輝かせて、バツはしかし紙飛行機を見つめたまま問うてきた。

「それって……コレのこと？」

と紙飛行機をもう片方の手で指差すと、バツはウサギの垂れ耳を思わせるツインテイルが天を突くほどの勢いで首肯する。

「紙飛行機っていうんだけど……ていうか、知らないの？」

「カ、カミヒコウキっていうんだー。ぼ、ボクはじめて見るよ。と、トウお兄ちゃん」

紙飛行機でこんなに眼を輝かせてくれる子に、オレは今まで出会ったことがなかった。だから、バツの反応が新鮮で、

「じゃあ、バツも作ってみる？」

そんな、オレの知りえる子どもならばシラケテ居なくなりそうな提案に、

「つ、つくるーっ！ つ、つくりたいっ！」

折れちゃいそうなほどに首をブンブン振って応えてくれるバツは、

もう天然記念物っていうのかなんていうか国をあげて保護すべき純粋な子だようっとオレは思うわけだ。

こないもう——じゃなかった、弟がいたらなあ。オレはもうちょっとマシな人格者になっていた気がしてならないよ。

なんで我が父と母は、もうちつと頑張ってくれなかったかなあ……。

なんてね、ことを思いつつ、

この年齢になって初めて、嬉々として折り紙をやる気がする。

こんなに楽しい気持ちになれるモノだったっけかなあ、折り紙って——

承／第十式話：まんじゅう怖い（前）

「なにをしているんですか？」

折り紙に興じていたら、不意に背後から声をかけられた。

「折り紙ですよ」

オレは応え、いつの間にか目を覚まして明後日の方角を見ながら訊ねてきた壱さんの手に、雑だがなかなか悪くないデキの“折り鶴”を乗つける。

彼女は探るように慎重に指先の触覚を駆使して“折り鶴”の形状を読み取り、

「小鳥——のような形状が紙で再現されているようですが……、これが折り紙というモノなのですか？」

「そうです。それが折り紙というものです」

というか、それ以外の答えをオレはしらない。

「知的な遊びのようですね。完成形へ到る形状を逆算しつつ四方形の紙を折っていくとは」

壱さんは言いながら、オレの折った“折り鶴”を分解してゆく。

「なかなかどうして、私の知的好奇心という欲求をくすぐりますね。これは」

分解しきられ折り目のついた四方形の紙と成り果てた“折り鶴”を、再び折り、元の姿へ復元しながら、壱さんは楽しんでいるような笑みを浮かべる。

というわけで、どうしてか、オレ、バツ、壱さん、の三人で折り紙をするという図がうまれた。

「バツうゝ、ちょっと手伝ってもらえる？」

しばらくすると、教わった蒸しまんじゅうを試作中のツミさんが調理助手を呼びに現れた。

「あ、う、うん。わかったよ、お姉ちゃん」

バツは急いで作り途中な“折り鶴”を完成させると、ツミさんの背を追った。名残惜しそうな眼差しがだいぶ尾を引いていたけれど、結局、壱さんと二人つきりになってしまった。だからどいしたというわけではないのだが、なんとなく、黙々と紙を折る壱さんの手元を視線をやる。

「壱さんは、なにを折ってるんですか？」

ものすごく真剣そうなので、興味がわく。

「んー」

手元は機敏に動くも、言葉は口の中で怠惰なようだ。けっこんなタイムラグの後に、壱さんは口を動かす。

「あきました」

残念なことに、やっと出た言葉は、オレの問いかけに対するフォーアンサー（for Answer）ではなかった。

がしかし、

「あきるの早過ぎませんか」

黙々と折り紙しているから楽しんでいただけているものと思っていたのに。

「だって——」

壱さんは面白くなさそうに口を尖らせ、あるいはすねているようにも思える態度で、

「——っやっぱりいいです」

何か言葉をグビツと飲み込んだ。

「それよりもっ」

楽しいこと思いついちゃったっ、というようにパチンと拍手を打って、

「男と女が部屋に二人きりになってしまいましたけど……刀さん、私にいったい何をするおつもりですか？」

壱さんは訊いてくるが、

「オレが何かする前提で言われても困るんですけど」

正直、まったく、なにも、オレは壱さんになにぞするなんてこと考えてない。

「またまたあー。魅惑のわがままボディーを前にして、抑えきれない溢る欲望がワナワナと湧き上がってきているのでしょうか？」

壱さんは自分の身体を魅せつけるように撫でながら小首を傾げる。ここでオレは考えるわけだ。

いままでの壱さんから推測するに、ここで正直に欲望なんぞ溢れてきていないと言ったら、問答無用で鉄拳制裁が執行されることだろう。（オレ欲望溢れない）」（壱さんは魅惑のわがままボディーではない）、ということに彼女の中ではなってしまうのだろうか。しかし待て。

ここで、オレ欲望溢れてきてます、と言ったらどうなるか？

たぶん、恐らく、絶対に、「なんてイヤラシイっ！ エロエロ魔人さんに成り果てる前に私が成敗してくれませう」みたいな意味のわからないこと言っ、武力を執行してくるに違いない。

どちらを選択しても、オレは何がしかの痛みを負わなければならないのか……。

この危機を回避する為に、オレはいったいどうしたらいい。

どうする。

どうすんの。

どうすんだ——オレっ！

「散歩にでも行きませんか？」

無理矢理にでも話題を変えるしか、危機回避する方法は考えつかなかった。どうせ真正面から問答しても、オレは確実に大なり小なりの痛い思いをするだろうし。

「お散歩……ですか？」

幸いにして、壱さんは話題変更に乗っかってきてくれた。

ちなみに、散歩それ自体に特段の意味はない。苦し紛れに口から出てきた単語がそれだったというだけだ。

「そうです、お散歩です。夕食の前に適度な運動をしておけば、さらに美味しくご飯を食べられるでしょうし——ね、だから行きましようよ散歩」

自分でもなんか必死だなあと思うが、

「しかたありませんね。刀さんがそんなに私とお散歩をしたいというのなら、行つてあげてもいいですよ」

駄々っ子に渋々付き合つてあげる、みたいな態度で壱さんは承諾してくれる。必死感がイイ方向に解釈されてよかった。がしかし、釈然としない何かが胸の内でモヤモヤとするのだが、この気持ちはなんだろう。

……気にしたら負けなのかな。

なんだかなあと思いつつ、これから行く窓の外へと視線を転じてみる。

そこには、黄昏色の光が満ちていた。

村に到着したときの空色からして昼は過ぎているだろうと思つていたが、折り紙に意志を注いで結構な時間を喰つていたらしい。

「さあ早く行きましようよ。誘つておきながらモタつくなんて、人としてダメダメさんですよ」

外に意識をやっていた我が手首をグイッと掴み、壱さんは急かしてくる。

「壱さん……」

「なんですか？」

「これからは迅速に動くことを誓いますから、急かすフリして手首を握り潰そうとしないでいただきたい」

結局、オレは何を選択しても痛い思いをするという宿命の下にいるらしい。

辺りに広がる稲穂を、ときおり波打たせるそよ風を感じつつ、
「なんだかなあ……」

と見上げた夕刻の空に、オレは一番星を発見した。

今現在、オレは壱さんのお手を引きつつ、村へと至るまでに通った畦道を歩いている。

オレとしては村の中を一周する程度でよかったのだが、祭りの熱気が冷めぬ喧騒の空気を感じた途端、「もう少し静かなお散歩がしたいです」と壱さんがほつぺをぶくつと膨らませてご機嫌斜めなご様子だったので、いたしかたなく畦道へと歩みを進めたのだ。

「騒がし過ぎる所は好きじゃないんです」

何を喋るでもなく、畦道の間ほどまで歩んだところで、ぼつりと壱さんが言った。

「音が聴こえ過ぎて、怖いのです」

怖い、とはずいぶんとまた似合わない言葉を口にしますね。

「刀さんは私をなんだと思っているんですか？ 怖いものくらいありますよ」

ぷつと頬を膨らませて、すねたように口を尖らせたのち、

「それに魅力的な女性には、か弱い一面も必要でしょう？」

壱さんはおどけて言う。

そりゃあまあ、ひとつくらいは怖いものがあって当然だと思いませんけど、

「壱さんが怖いって言うのと、なぜか“まんじゅう怖い”を思い出しちゃうから不思議です」

というのを聞くと、壱さんはピタリと歩みを止めてグイッと我が手を引っ張り、

「おまんじゅうは怖くありませんっ！ むしろ大好きですっ！」

ものすごく真剣に宣言した。

畦道の中心で、まんじゅうが好きと叫ぶ。

某感動ストーリーのように涙は誘わないけれども、まんじゅう屋さんは泣かない程度に喜ぶだろうから、

「オレじゃあなくて、ロエさんに言っておけば喜ぶと思いますよ」
まあ、あのお人ならば大抵のことに天使のごとき微笑をもって応えてくれるのだろうけれど。

「ちなみに“まんじゅう怖い”は、読んで字の如くな意味じゃないですよ」

「じゃあどんな意味があるのですか？」

「意味というか……、有名な落語のひとつなんですけど」

「ら、くご……？ なんですか、“らくご”って」

ポカンと口を開けて、しかしどこか興味津々というように、壱さんはオレからの返答を「な・ん・で・す・かっ」とリズムカルに腕をぶん回しながら問うてくる。

しまった。またも問われて回答に困ることを口走ってしまった。

オレも正確に説明できるほど落語をしっているわけではない。が、なにか答えないと、壱さんにオレの腕がぶん回し千切られてしまうピンチなわけで。

「えっと、落語っていうのは……」

とりあえず知っていることを聞かせておこう。

「オレの世界にある話芸のひとつでして。筋のある滑稽なお話を身振り手振りを加えて語って、最後にオチをつけて聞く人に楽しんでもらう芸——だったハズです、たしか」

ものすごくザックリしているが、間違っではないと思う。正しいという自信はないけれども。

「話芸、ですか……」

口の中で言葉を飴玉のようにながしたのち、「ふーん」となにかとりあえずわかってくれたようだ。

「まんじゅう怖い”っていうのは、“らくご”のお話のひとつである、と？」

壱さんセコイけど理解力があってくれてよかった。

「どんなお話なんですか？」

やっぱり興味持ちますか。

しかし残念なことに、スラスラ語れるほど熟知していないのです。けれど、返答しないという選択肢が、オレに用意されているわけもなく――

「えーつとですね」

一番星を見上げながら、埋没した“まんじゅう怖い”の記憶を掘ることにいたしましたよう。

閑話：《まんじゅうこわい——の説明っぽい妄想》

「ヒマだねえ」

お茶を淹れなおしながら、艶やかに着物を着崩す、頼れるツミ姐さんが言った。

「ボ、ボクはこういう静かなの、好きだよ」

淹れなおされたお茶をお盆に乗つけて集まった面々の前へ配りながら、前掛けが妙に似合う女の子と勘違いしてしまう、健気なバツ坊が微笑む。

「まあ悪くはないけど、たしかにヒマといえはヒマですよ」

オレは礼を言いつつ出された薄っいお茶を努めて美味そうにする。ツミ姐さんは頼もしいし憧れるけれども、どうして茶の淹れ方がなっていないのが、玉にキズだなあと思う。ま、完璧過ぎるのもよくないから、ちょうどいいのかもしれないけれど。

「じゃあ、嫌いなモノや怖いモノを言いあいませんか」

拳がスッポリと入ってしまいそうな大アクビをかましていた遊び人の壱さんが、怠惰に思いつきを口にする。

「嫌いなモノ、怖いモノ、ねえ……」

あまりにもヒマなのか、煙管をくゆらせながらツミ姐さんが遊び人な壱さんの話に乗った。

「あたしゃあ、カミナリが怖いねえ。理由なんてわかりやあしないんだよ。ただ、アレが轟くと背筋がゾクツとしてねえ」

とツミ姐さんは自らを抱くように身震いする。

「こ、このまえ台所に居た、ゴ、ゴ、ゴキブリがボクは、怖いよう。か、顔に向かって飛んできた時は、い、息が止まりそうだったもの」ギョツとお盆を抱いてバツ坊は顔をしかめた。

「オレもゴキブリが顔に向かってきたらイヤだなあ」

「なんでか、なんてわからない。ただ理由なんて知らずとも全身全霊が拒絶するのだから、好ましからざるモノであることに違いない。なんですか皆さん、情けない」

「言いだしつぺな壱さんが、ずいぶんとふんぞり返ったことを言う。カミナリなんて大音量の太鼓だと思えば、お祭り気分で楽しいじゃないですか。それになんです、男の子がそろってゴキブリが怖いだなんて。あんなモノ、たた脂ぎってるだけの羽虫じゃないですか。恐れているヒマがあつたら握り潰してしまいなさい」

「せめて叩き潰すにしてくださいませんか。どうやらオレにはゴキブリを握り潰すなんて高等なマネは、一生かかってもできそうにありませんし。」

「というか偉そうに言いますけど、壱さんにだってひとつくらいあるでしょ、怖いモノ」

「私にあるわけないでしょう。物事を恐れていたなら賭け事なんてやってられません」

「遊び人らしい言い回しではあるが、

「本当ですか？」

「はぐらかされているようにしか思えない。

「当然です」

「壱さんは、胸を張って鼻を鳴らすが、

「本当に本当に本当ですか？」

「信じられない。というか、むしろ疑わしい。

「ないものはないのです」

「しかたがないでしょう？ とシレッとした表情で言っただけなら、こっちとしては面白くない。だから、日が暮れるんじゃないかというくらいにひつこく問い詰めた。

すると、

「……じつは、あります」

「やっと折れた壱さんは、「ココだけの話しにしてくださいね」と

念を押す。

「わかりました。それで、なんなんですか？」

オレはやっと掴みかけた尻尾を放すまいと、慎重に答えをうながした。

それでも壱さんは言うか言うまいかささん口を開閉させ、そしてやっと、神妙な顔つきで告白する。

「おまんじゅう、です」

「……はい？」

「ですから、おまんじゅうです」

言つと、壱さんは両の手で顔をおおいかくし、

「おまんじゅうの話をしたら、気分が悪くなつてしまいました……」
這いずるように隣の部屋へ移動すると、

「気分が悪いので、寝させてもらいますよ」

頭までスッポリと布団にもぐつてしまった。

「ど、どうしよう」

お茶請けを用意していたバツ坊が、あわあわと動揺する。

「お、お茶菓子、おまんじゅうだよ」

バツ坊は素直な優良お子様だから、その反応は間違っていない。
だが、オレは壱さんの弱点たりうるものを知って、

「日ごろの恨み晴らしに、まんじゅう攻め」

思わずニタリとしてしまうわけだ。

願わくばバツ坊がオレみたくありませんように。

オレは人数分のまんじゅうが乗ったお盆から二つを取ると、それを壱さんがもぐった布団の中へと放り込んだ。

すると、

「怖い、怖い——怖いから食べてしましましょう」

もそもそと布団の中身はうごめき、

「ああ、美味し過ぎて、怖い怖い」

なっ！ 喰いおったっ！

ていうか、騙されたっ！

自分のまんじゅうまで喰われて冷静ではいられなくなったオレは、力いっぱい布団を剥ぎ取り、

「ふざけないでくださいよっ！」

美味そうに口のまわりをペロリと舐める、してやったり顔な壱さんに、オレはありったけの憤怒をぶん投げた。

「本当に怖いものはなんなんですかっ！」

我が全力投球を受け止めた壱さんは、しかし悪びれた風もなく、

「そうですね……」

ちよつと考えたのち、シレッと神妙な表情で言いおった。

「今度は、濃いお茶が怖いです」

閑話休題――

「――という話です」

自分解釈な“まんじゅう怖い”を聞かせてみたが、しかしコレが正しいのか、あいかわらず自信はない。

「へえ、高度な頭脳戦術ですね。尊敬に値しますよ」

この話に感心するヒトが居るとは、激しく予想外でした。

なんかもう、溜め息すらでない。

語る事からよくも悪くも気が散って、辺りを気にする余裕ができた。

「日が落ちるまで、もう秒読みですねえ」

話して聞かせることに集中していたから気に留めていなかったが、辺りはもう夜の一手手前である。

「帰りませんか？」

オレは壱さんに帰還することを提案してみた。

すると、どうしてだろう――

「――ガウアッ！」

いきなり振り上げた左拳でアゴを殴り上げられ、そのままの勢いで地べたに倒された。

そして息の根を止めるかのごとく、倒れたオレの上に壱さんはのしかかってくる。

「い、いきなり何をするんですかっ！ アナタはっ！」

近距離にある壱さんの顔面へ、ツバが飛ぶのも知ったこっちゃな
いと、オレは抗議の声を荒げた。

「シっ！ 静かにしてください」

なぜオレが怒られるっ？

納得いかないの、再度、抗議の声をあげようとしたら、それにかぶせて、周囲を気にしている風な真顔の壱さんが言ってきた。

「殺気を感じました」

オレは殺意を感じましたよ、アナタからっ！

ああ、怖い怖い。

「あら、それはつまり、話の流れから察するに、私のことが大好き
ってことですか？」

小声で嬉しげに言ってくれるが、なんですかそのポジティブとい
うより自分中心の思考は。

ていうかそんなのはどうでもいい。オレは三度目の抗議の声をあ
げようと、大きく口を開いた――

「いまはちよつと黙っててくださいね」

――ら、握り拳を口に突っ込まれた。

アゴが外れそうなくらい無理がある。

息が詰って苦しい。

あまりの辛さに、意図せず無言の涙が出てきおった。

承／第十参話：まんじゅう怖い（後）

しばし静寂のみが場を支配し――

不意に、我が正面、壱さんの背後で、なにかが煌いた。一瞬、自分の涙かと思つたが、しかしすぐにそれが鋭利な刃物の光沢であることに気づく。

壱さん！ 後ろ、うしろっ！

オレは迫りくる正体不明の危機を知らせようと最善を尽くすが、
「なんですか刀さん。私の拳をレロレロ舐めたりして……。なにかが覚醒してしまったのですか？」

なぜかとっても残念そうな表情をするアナタが残念でなりませんよ壱さん。そもそもヒトの口に拳を突っ込んでるアナタはいつたい

――
と言いたいことは天を貫くほどにあつたが、いまはそんな場合ではない。

オレはアゴが外れることを覚悟しつつ、すつとぼけな壱さんを抱きしめ、

「と、刀さん。なにを突然、だいたんな――っ！」

渾身の力を込め、壱さんをぶん投げる要領で二人の身体を横転させ、どうにか不意打ちの一閃を回避する。

狙いの外れた刃が地面をえぐる音と共に、横転の勢いでオレの口から壱さんの拳が抜ける鈍い音が聞こえた。

本気でアゴが外れてしまったかと心配になつたが、それは杞憂に終わり、

「壱さん！ ピンチですっ！」

自由になつた口で、どうにか危機を知らせることに成功する。

「い、いきなりのしかかつてくるなんて、覚醒した刀さんの以外な行動力には驚きましたよう。そその初めてが野外だなんて私――」

なんのピンチを感じているのアナタはっ！　いりませんよ恥らった表情とか。

「そうじゃなくって！」

もどかしく思いながらも、オレは警戒と再確認の為に背後へ視線をやる。とそこで、我が首を刈る為に薙がれたと思しき剣が迫っていることを知る。

「ひいっ」

反射的に全力で身体ごと頭を下げた。後頭部から首筋にかけて、なにか不吉なモノがいつそ清々しい勢いで通過するのを感じ、次いで顔面が温かで柔らかでタフンタフンと弾力のある素晴らしき感触を心地好く味わう。

もう少して首が落とされるという心臓が止まりそうな出来事に、意図せず呼吸は乱れ、

「っはっあはあはあ……」

過呼吸気味になってしまい苦しくて動けず、しばし心地好き温かで柔らかな弾力に顔をしずめる。すると、どうしてだろう気持ちが悪く落ち着いた。

て、落ち着いている状況ではない。

「壱さん、絶対絶命ですよ！」

名残惜しみつつ柔らかなソレから顔を上げ、オレは再度、現状を端的に言う。

「確かに、乙女の絶体絶命です……。まさか覚醒した刀さんがこれほどとは——」

さっきからアナタは何と戦っているのですかっ。

「——しかし刀さんが露骨な変態さんになりさがってしまったのは私のわがままボディーの罪なのです。ですから刀さん安心して下さい。私が全力で——肅正してさしあげますっ」

なんの話をしているんですか。という疑問を口にする間もなく、壱さんが放った掌撃をもろに喰らったオレは吹っ飛ばされ、ワイヤーアクションのような人生では経験しえないだろう浮遊感を体感し

たのち、地面に叩きつけられた。そこで初めて、剣技を揮っていた人物を視界に捉える。土色をした丈の長いフード付きコートを目深にかぶっているのが表情はうかがえなかったが、オレが吹っ飛ばされてきた事に、若干の戸惑いを覚えているように思えた。

それも当然だろう、オレだっていきなり掌撃を放たれた理由がわからないのだから。

「さてさて……」

壱さんはのっそりとホコリをはたきながら立ち上がり、

「どこからでも襲ってくるといいですよ。貴方の変態さんハートが砕け散るまで、あしらい続けてさしあげますから」

半身に構え、音の高い舌打ちでリズムを刻み始める。

けれど、根本的に間違っていますよ壱さん。というか殺気を感じ取ったときのアナタはどこにいったんですか……。

オレは思考のズレを壱さんに指摘しようとしたが、それよりも早く謎な襲撃者が動いた。思うに、彼女の態度を挑発と受け取ったのだろう。

襲撃者は右下段に剣を構え、壱さんの隙をうかがいつつ、摺り足で間合いをつめる。

「……あら？」

隙なく身構えつつも壱さんはなにか疑問に顔をしかめる。

「刀さんいつの間に道具を装備したのですか？ ズルイですよ、私は素手だというのに」

音の高い舌打ち——反響定位のなせる技なのか、壱さんはオレと襲撃者との決定的な違いに気がついたようだ。

「オレは何も装備してませんからっ！ いいかげんに気づいてくださいよっ！」

ミゾオチにクリーンヒットした掌撃のせい、ちょっと苦しかったがどうにか声を張って言うことができた。

「あら？ あらあらあら？ 身体的位置より遠くから声が聴こえてきますけれど……刀さん、どのような技を使っているんですか？」

たとえ使えたとしても利点がまったくないそんな奇抜な技を体得した憶えはありません。

「壱さん、すつとぼけるのもタイガイにしてくださいよ。最初に殺気を感じ取ったのアナタでしょうっ！ さっきから殺気の発生源に襲われてるっていうのにつ！」

「えっ……殺気の発生源は刀さんの煩惱では？」

なにその「まさかそんなっ！」て言いたげな表情は。どうして煩惱から殺気を感じるのさ。

「オレは殺気立つほど飢えちゃあいませんよ」

「えー、私を前にして？」

と意味のわからない疑問符を壱さんは頭の上に浮かべる。

その瞬間に「隙あり！」と判断したのか襲撃者が動いた。

大きく右脚を踏み込み、同時に右下段にあった剣が重みを付加し一閃、おまんじゅうの詰った壱さんの腹部を斬りにいく。

オレはとつさに視線を逃がした。

次瞬、鈍い音が聞こえ――

「ちよつと何するのですか。ものすごくジンジンするじゃないですかっ！」

ずいぶんと不機嫌そうな壱さんのお声が飛んできた。

オレはゆっくりと、恐怖心を説得して黙らせながら逃がした視線を呼び戻して様子をうかがう。

そこには、お腹の前に構えられた左腕のヒジで刃を受け止め、その剣の柄を襲撃者の手ごと右手で押さえ込み固定し、なおかつ踏み込んだきた相手の右足を自分の左脚で踏みとめている、という壱さんのお姿があった。

「いま、刀さんと大事なお話をしているのです、邪魔しないでください」

襲撃者のことなど、服に羽虫がとまった程度のことごとく。抗議を口にしながら、壱さんは腰を落として全身で剣ごと相手を引いた。と体勢を崩しかけた襲撃者はバランスを保とうと左脚を出す。

そこへすかさず壱さんは自分の右脚を引つ掛け、流れる動作で自らの全体重を相手に押し当てた。すると後に踏ん張れない襲撃者は、「ガッハア！」

渋い声質のあえぎを漏らし、じつにあっ気なく押し倒される。そのとき襲撃者は反射的に身をかはおうとして剣を持つ手から力を抜いてしまったようで、壱さんは相手を押し倒すと同時に剣を奪い取っていた。

「まったくもう」

ほつぺをぶくつと膨らませてご機嫌斜めなお顔はなかなかにしてちよつと可愛いが、苛立ち紛れに奪い取った剣をぶん回すのはご遠慮願いたい。そんな現状の壱さんに、

「あ、あのう、なにがあつたのう？」

戦々恐々と声をかけるのは、いつからそこにいたのか、なにかを大事そうに胸元で抱えるウサ耳ツインテイルなバツであつた。

「あら——」

と壱さんは背後からの声に、ぶん回していた剣を不意に手放し——自由になった剣は嬉々としてぐるぐると風を斬りながら数回転したのち、押し倒されて後頭部でも強打したのか地べたにひんのびている自らの持ち主たる襲撃者の頭部数ミリ横に帰り突き立つ。

「——なにか美味しそうな匂いがしますね」

いま物凄い事故が起きそうになつた事や、せつかく剣を奪い取つたのにまったく意味がなくなっている事など知る気もなく、壱さんはパチンと拍手を打って嬉しそうに微笑む。

「お、お姉ちゃんが作つたおまんじゅうを、いイチお姉ちゃんに試食してもらつて」

バツは胸元に抱えていた布袋から、湯気のぼる蒸したてのおまんじゅうを取り出すと、「ふうーふうー」とちよいと冷ましてから壱さんの手に乗せる。

「私に食べ物の味見を頼むとは、素晴らしい思考の持ち主です」

ツミさんを称賛しつつ壱さんはまんじゅうを二つに割ると、それはそれは美味しそうに「はふはふ」しながら喰い始めた。

食べ物をやたらと美味そうに食べる人を見ると、なぜだか不意として表情がほころんだりする。そんな優しい表情でまんじゅうに喰らいつく壱さんを見上げていたバツは、ハタとしてこちらに気がつき、

「と、トウお兄ちゃん、道に寝転んだりして、どうしたのっ？」

戸惑いながらもこちらへ駆け寄ってきて、地べたに両膝をつき、

「だ、だいじょうぶ？」

気遣わしげな眼差しでのぞきこんできてくれる。

なんだろう理由はわからないけど、こういうのを幸せと呼んだりするんじゃないだろうか。

なんて弱り気味なことを思ってしまったのは、たぶん壱さんの一撃が予想以上に重たかったせいだろう。

「大丈夫。肋骨は折れてない」

胸部に残留する痛みをメンタルパワーによって払拭することを試みつつ、オレは上半身を起こす。

「クツ——ソツ！」

時を同じくして、なにやらダンディズム溢るる悪態を我が耳は察知した。音源の方へ視線をやると、そこには苦悶と憤りに顔を歪めた——どこかで見たことのある気のする、一人でハードボイルドな雰囲気をかもしだす渋いオッサンが、地面に突き刺さっている自分の剣を引き抜きながら居た。

渋いオッサンは迅速に身を起こすと、こちらになど眼もくれず、無防備にも背を向けながら蒸したてのおまんじゅうを試食している壱さんを斬りに行く。

「壱っ！」

とつさに口から出た叫びゆえか、オレは腹から出せるだけの声で壱さん呼び捨てる。

「なんですか、そんなに焦らなくても分けてあげますよ？ 刀さん」

腹の底から叫んでまで蒸したてのおまんじゅうを食べたがるなんて発想はアナタしか持ち得ないという現実の後々お教えするとして、渋いオッサンが斬りかかるより数瞬早く、壱さんは訝しげに眉をひそめて、まんじゅうをほおばりながら振り向いた。

——刹那。

「ヒイツ！」

猛々しく剣を振るおうとしていた渋いオッサンは情けなく口から空気を漏らすと、その場に尻を着く。

突然のこと過ぎて状況がまったく読めず、言葉も出ない。

果たして渋いオッサンには、まんじゅうを喰っている壱さんの姿がどういう風に見えているのだろうか？

「や、やめてくれっ」

「ん？ 急に渋いお声になったりして、意外と隠し技をもってますね刀さん。軽蔑しますよ」

せめて尊敬してほしかったなあ。

「て、そんな技をオレが持つてるわけないでしょう」

「冗談ですよ、じょーだん。そんなムキにならなくてもいいじゃないですか」

なんで、冗談で軽蔑されねばなんのだ。

「それで、どなたかは存じませんが」

と壱さんが一歩足を動かすと、

「こっちにソレを——ひっいいい、お恐ろしい」

なぜか腹部に手をあてがいながら渋いオッサンはジリジリと後退り、壱さんから離れようと必死である。

「なんですか失礼ですね。こんなにもタオヤカな乙女に向かって恐ろしいだなんて」

まんじゅうを咀嚼しつつ、ほっぺをぷくつと膨らませ、壱さんは「不愉快です」と態度で示し、ズイと一歩踏み込む。

「うつ、ひっいいい、そそソレを、こっちに近づけるなっ」

どうやら本気でなにかを恐れている様子の渋いオッサンは、額に

脂汗をにじませ顔面蒼白である。

「……ソレ？ 近づけるな？」

これといって持ち物の無い壱さんは、

「いったい何をです」

意味がわからないと疑問に顔をしかめた。

しかし渋いオッサンはソレの名詞を口にするのもイヤなようで、

「ソレをだっ！」

と過呼吸気味に、壱さんのある一点を親の仇でもねめつけるように凝視する。

「だから何を」

相手の視線を読めない壱さんは、面白くなさそうに本気で困っているふうに聞き返す。

しかし渋いオッサンは壱さんの態度を攻撃手段のひとつと思ったようで、憎々しげに睨み返しつつ苦痛に耐える。が、長くは持たなかったようで、結局は折れて、

「……まんじゅう、だ。頼むから、ソレをこっちに近づけないでくれ」

懇願するように白状した。

「……はあ？」

何を言っているのか理解できない、というように数泊のあいだ壱さんは呆け――

「ああ――」

と、ひとつの答えを導き出し、

「――まんじゅう怖い、ですか」

愉快そうな笑みを浮かべた。

「そんな“まんじゅう攻め”に期待するような回りくどい事しなくても、普通に言ってくれば分けてあげますよ」

言って、壱さんは「はい」と手の内にまだあった半分のおまんじゅうを差し出す。

「だから近づけるなっ」

顔面に飛翔してきたゴキブリを払い除けるがごとく、渋いオッサンは差し出されたまんじゅうを壱さんのお手ごと全力で払う。

「なんですか、半分では満足できないと？ 図々しくも欲張りですね」

あきれた、と言いたげに肩をすくめてから、壱さんは「好きなだけ取らせてあげなさい」と、まんじゅう入り布袋を抱くバツをうながした。

いままで事をあつ氣にとられながら傍観していたバツは、「うん」と戸惑い気味にうなずくと、渋いオッサンに駆け寄り、布袋の中身を提示――

――された瞬間、

「ヒイヒイヒイヒイっ！」

サァーつと血の氣を顔面から引かせ、まんじゅう入り布袋から全身全霊で後退ると、

「おおおぼえてるよ！」

渋いオッサンは捨てゼリフを置いて、村とは反対の方角へ猛ダッシュで消えていった。

しばし時を忘れて、去りゆくオッサンの背中を眺めていたが、ふと思うことがあったので、

「そういえば壱さん」

いまだに、おまんじゅうを喰らっているお人に話をふってみた。「はふへうか？」

即行で返答してくれるのは嬉しいけれど、

「口にモノを入れて喋らないでくださいよ」

おまんじゅうだったモノが言葉と仲良く飛び散ってますから。なんか似たような事を近しく言った氣がするのは、確信をもって気のせいではないと断言してもいい――というのは置いといて。

「てっ！ 壱さん、せっかく口の中にあったモノ飲み込んで喋りやすくなったのに、なに次のおまんじゅうに喰らいつこうとしてるん

ですかっ」

指摘された壱さんは、

「……………っ」

もっすごく逡巡してから、意を決したよに食べようとしていたおまんじゅうを布袋へと押し戻す。

「そ、それでえ、刀さん」

なんかお声が、とっても涙声に聞こえたのは、オレの幻聴か空耳かな？

「ごようけんはあっ、なんですか？」

強がりな子どもが泣くまいと感情を押し殺して声を震えさせちゃってる——みたいな喋り方をして、アナタはそんなにおまんじゅうが食べたいのですかっ？

「べ、べつにいい」

壱さんは下唇を噛みしめ、

「そんなことないですよっ」

ぶいっとなつぽを向く。

「……………う……………うっ」

そ、そんな、ぶるぶる震えながら堪えなくても……。

「もう食べてイイっ！ 食べてイイですよ、壱さんっ！ 喋る前に飲み込んでくれれば、それでいいから。もう思う存分、食べてください」

壱さんは「いいのですか？」と似合いもしない遠慮がちな態度で訊いてから、「ではっ」と、また喰らいつきを再開させる。嬉しそうに、幸せそうに、美味しそうに——まったくもって、惚れ惚れするぐらいナイスな表情でお食事しますね。

というのは切りがないので気にしない事にして、話を先に進めよう。

「で、ですね壱さん。ずっと気になっていたのですけれど」

なんですか？ と壱さんは「ぱくぱくもぐもぐ」喰いながら小首を傾げる。

「さつき剣をヒジで受けてましたけど、大丈夫なんですか？」

たとえアレが剣のような刃物でなかったとしても、金属質なモノをまともに喰らったらヒジの骨はヒビ折れるなり砕けるなりしてしまふ。どうってことなさげにしているけれど、衣服の下ではとんでもない事になっちゃてるんじゃないかと心配なのだ。

「んんー」

壱さんは左手をグーやパーと二ギ二ギ動かしてから、左腕を屈伸させ、

「問題なく動きますけど……どうにかなってますか？」

見てみるとヒジをこちらに突き出す。

紫が主色の民族衣装みたいな壱さんの着物。そのヒジ部分は、やはり剣という刃物によってパツクリと裂かれてしまっているが、しかし血がついているとかそういうことはない。着物の裂け目から突き出たヒジには、縦に一文字の短いミミズ腫れがあるだけで、素人目ではこれといって問題があるようには見えなかった。

「どうにかなっているようには見えませんが……本当に平気なんですか？」

念押しを込めて訊いてみる。

「ダメだったら、そう言ってますよ。それに、この程度でどうにかなってしまうようでは、一人旅はできませんよ」

いまは独りじゃないですけどね、とこともなげに言うと、

「さあ、そろそろお散歩を再開させましょうよ」

杖の代わりになれと手を差し伸べてくる。オレがその手を取ると、我がもう片方の手をバツが取り――

しばらくテキトウに三人でぶらついてから、帰路へとついた。

「……結局、なんだったんだ？」

という疑問を生んだ出来事を、ロエさん宅へと帰還したオレは件の手帳に書きとめた。

「お腹が空いて魔が差してしまったんじゃないですか」

お茶をすすりながら壱さんはあっけらかんと言う。けれども、襲われたのは、バツがまんじゅうを持って現れる前ですよ？」

ていうか殺気を察知したのはアナタだったでしょうに。

「そういえば、そうですね。まあ、なにか目的あつてのことなら、また出現するでしょう。その時にでも、お訊ねすればいいじゃないですか」

簡単に言うけれども、少し違えば自分の首が斬り落とされていたかもしれないのだ。オレは壱さんみたいに余裕ではられない。

「そんな事より、夕食はまだですかあ？」

我が生死に関わる問題は“そんなこと”呼ばわりですか。

ていうか、今のいままで蒸しまんじゅうをたらふく喰らっていたのに、

「まだ喰う気いですかアナタはっ！」

承ノ第十四話：ムシムシ尽くし（其の壱）

額から全身からにじみでた汗の滴が、荒い吐息と共に零れ落ち、
「ぼボク、もう、がまん、できないよう、で出るう」

苦しげ悩ましげに表情を歪めて、ウサ耳ツインテイルをいまは二つのお団子に結び上げているバツは、最後にそう言うといッてしまった。

かくいうオレも、

「壱さん……オレ、そろそろ死線を越えちやいそつ、で、す」
限界は既に突破していた。

「なにを言っているのですかぁ？」

グロテスクに沸騰する釜を引つかきまわす魔女がごとく、壱さんは口の端を薄く吊り上げて、妖艶で怖気すら覚える微笑を浮かべ、
「まだまだあ！ これからですよおっ！」

ほとんどやけくそな投げっぱなしの言葉と共に、桶から焼け石に水をぶっかける。生肉に火が通せるほど熱せられた焼け石は、瞬時に水を蒸気へと変化させ、息を詰らせてしまいそんなモンモンとした熱さをつくりだす。

壱さんの暴挙により、三畳ほどの広さしかない密室空間はアツという間に熱い水蒸気で満たされ、体感温度が急上昇してゆく。

ああ、なんだか呼吸するのが辛くなってきた……。

オレはぼやけた意識の片隅で、

「エヘヘエヘ——」

と焼け石に水をかけてジョワジョワ蒸発する音を面白がりながらノンストップで熱さを生み出す、水も滴るところか滝のごとく汗を噴く壱さんを見やった。このお人は熱さで頭がオカシクなっちゃったんじゃないだろうか、と思おうとしたやさき、

「——はふうん」

「ちよっ！ 壱さん！」

鼻からツーと赤い線を垂れ流して、彼女はぶっ倒れた。

まだどうにかオレは自分を保てていたので、白い湯浴み着に点々と血痕を染み付けてしまった壱さんを早急に風呂場の外へと運び出す。

先に退場し、庭にある井戸から水をくんでほてった身体を冷まして洗っていたバツが、ぐったりした壱さんを見るや目を丸くして動転し、ツミさんとロエさん呼びに慌て駆けて行く。

オレは風呂場の外壁に壱さんの背をあずけてから、彼女の茹で上がった身体を冷却するために井戸から水をくんで、それを頭頂からぶっかけてさしあげた。そして止血の為に、小鼻の柔らかい部分を親指と人差し指で両側から「これでもかっ！」というくらい強く圧迫する。

ゆでダコのように真っ赤っかな壱さんのお顔を拝見しつつ、

「なんだかなあ……」

ステテコのような白い湯浴み着姿で、お人の鼻をつまんでいる自分の姿を思い、

「なんだろうこの状況は……」

壱さんの鼻血が止まるまで、状況整理という名の過去回想現実逃避をする事にしよう。

といっても、いまさっきの出来事なのだが――

承／第十五話：ムシムシ尽くし（其の貳）

「まだ喰う気いですかアナタはっ！」

ヒトの生死に関わる問題を“そんなこと”呼ばわりして、夕食を所望するそのお方は、

「食事だつてヒトの生死に関わる立派な命題——命に直接影響を及ぼす重要な事柄ですよ？ 食べられるときに食べておかないと、次にいつ食事をいただけるともわからないのに。食べたいときに食べられる幸せを満喫しようとしてなにが悪いと言いますか？ 常々思うことがありました、刀さんは食に対する考えが少々甘いところがありますよね。現在に至るまでは、幸運なことに水にも食にも困ることなく来ていますけれど、旅をしていれば飲まず喰わずで数日過ぐすなんていうことは常であり、恵まれなければ死に至ることすら珍しくありません。おわかりですか？ いまの私たちは罪深いほど幸福なのですよ？」

ものすごく真面目な表情で真剣におっしゃった。

うん。まあ、確かにその通りなのでしょう。うから否定はできないですけれど……

でも壺さんがなにを言いたいって、食わなきゃ損々ってことでしょうか？

「自然の恵みと畜産農家と料理してくれる人に感謝しつつ、です」
飲み干したお茶のおかわりを注げ、と見せつけるように空の湯のみをズーズーすすりながら壺さんは付け加える。

つまりは“いただきます”と“ごちそうさま”が大切である、と言いたいのかなこのお人は。

なんてことを思いながら、壺さんの要求通りに空の湯のみへ茶を注いでいると、

「お風呂の準備が整いましたので、お夕食の前にいかがでございましょう？」

風呂桶のようなモノを胸の前で抱えた口エさんがご登場した。

がしかし彼女は、

「お着替えはこの中にありますから」

抱えてきた風呂桶を示し、それを条件反射で受け取りに動いたバツへ手渡すと、

「ツミさんは料理を手伝ってくださいるので、バツさんは皆様とお風呂をすませてくださいます、とのことですよ」

ツミさんからバツへの言伝を伝え、

「では夕食の準備がありますので」

と言い残して、早々にご退場してしまう。

承／第十六話：ムシムシ尽くし（其の参）

「まだ夕食が食べられないなんて……しょんぼりです」

ためらいもなく衣服を脱ぎながら、壱さんは深々と溜め息を吐き捨てて、ガツクリ肩を落とす。

「どんだけ夕食が楽しみなんですか……」

あきれつつも、オレは目のやりばに困った。

あまりにも堂々と素っ裸になりおる壱さんを前にすると、むしろこっちが恥ずかしくなってくるのはなんでだろう。

「ていうか、なんで脱いでるんですかつ！」

残念なことに色々と感覚がマヒしてきているのか、指摘するのが遅れてしまった。

「なんでつて、お風呂に入るからですよ」

当然、と壱さんは隠す物の無いネイキッドな胸をツンと突き出す。お風呂に入るから、というのはわかりましたけれども、どうしてアナタはただでさえ自己主張の強い二つのお山を、いまこの場でさらけだしてくれるんでしょうかねっ？

「脱ぐならお風呂場で脱いでくださいよ」

まったく、困ったお人だよね——常識という心の逃げ場になりつつあるバツへ、苦笑の同意を求めて視線をやると、

「……なっ」

そこには、エプロンを外して上着を脱ぎつつある“彼”の姿があった。

我が心のよりどころ、最後のヘイブン（Haven／避難所）が、衣擦れの音と共に崩壊し露出してゆく……。

そんな嘆きとも似た我が眼差しに気がついたバツは、

「あ、うう……」

ギョツと身を縮めて、肌の露出面積を最小限にしようと最善を尽くし、

「そ、そんなに、み見ないでよう」

羞恥で真っ赤に染まった顔をうつむきかげんに、小動物のごとき潤んだ瞳で抗議してくる。

「え？ あ、ご、ゴメンツ！」

とつさに、そっぽを向く。なんだろう、この強烈にマイ・ハートを責め立てる“してはならぬ事をやらかしてしまった”ような罪悪感——

——って！ 男同士でなにやってるんだろう。

と気づけども、だからといってバツの生着替えをまじまじと眺める意図も意味もない。

「というか、なぜにバツまで」

脱いでるんだ……。

あれか、悪い例が間近に居るから無垢がゆえに影響を受けてしまったのか。

なんてことをしてくれたんだ、と全裸な壱さんに抗議の睨みをやる。

がっ！ 不覚にも、改めて見るそのボディの造形美に生唾をゴックンしてしまう。

鴉の濡れ羽のごとき黒髪が自由奔放に跳ね踊る、華奢な肩口。鎖骨から絶妙なラインを描いて、奇跡的とも言える素晴らしい形状にぷるんぷるんと張り出たお胸。思わず指を滑らせたくなる優雅な曲線美の、腰のくびれ。ぷりぷりだがキュツと引き締まったお尻。ヒヨウやチーターを連想させる躍動的でしなやかな肢体。上質な絹のごときすべやかな肌に、刻まれた無数の傷痕すら美しさをひきたてる演出のようである。

もしもこの場に芸術家が居たら、発狂の勢いで彼女をモチーフにしたがるだろう。

黙っていれば——つつましかにしていれば、壱さんはとても……

……はっ！ なにを魅了されてるんだ自分っ！

不甲斐なさに形容しがたく身悶える。そんなオレに、

「お、お風呂に入るときは、ゆ“ゆあみぎ”をき着ないとダメなんだよう」

バツは脱衣の理由を教えてくれる。

「ゆあみぎって……湯浴み着？」

見れば、バツは滝にうたれる修行僧みtainな着物姿に衣装チェンジしていた。

なぜ入浴するのに衣類を着るのかよくわからない、というか先だって宿場町のお風呂屋さんではこんなの着なかったハズだが？

疑問はぬぐいきれないけれど、“郷に入らば郷に従え”と言うし、なにより真っ裸で突っ立てる壺さんをこのまま放置するわけにいかないので、面倒だが彼女に“湯浴み着”を着せて、自分も着替えることにする。

オレに用意されていた“湯浴み着”は、我が祖父がご愛用しているステテコみたいなモノだった。お祭りで御神輿を担ぐ人が、股引の代わりに着用していたりするやつだ。

これが男性用の“湯浴み着”なのだろう。

じゃあどうして長い黒髪をお団子結びにしているバツは、壺さんと同じ形状の女性用“湯浴み着”を着ているのか——というのは、気にしてはいけない。

これでいいのだ。

色んな意味で。

承／第十七話：ムシムシ尽くし（其の四）

着替えを受け取るときに口エさんから場所を聞いた、というバツの案内でお風呂へ向かうことになった。

けれども、

「庭にお風呂が？」

バツは黒い板張りの廊下に出ると、すぐ目の前にある縁側から庭へ降りて、トコトコと転びそうな危うい足取りで先に行ってしまう。
「家にお風呂がある場合は、普通そうですよ」

風呂は庭に在るものだ、とお教えくださる壺さんの声には「あたりまえ」という響きがあった。

「まあ普通と言っても、いい御家柄に限った話ですけどね」

彼女が補足するには、水を注いだ大きめの桶に浸かって体を拭き洗うのが庶民の普通なのとか。住んでいる所に、先だつての宿場町のようにお風呂屋さん（公衆浴場）が在ったなら、そこを利用するらしいが、それは少々娯楽的要素を含む贅沢であるらしい。健康ランドとかスーパー銭湯のような感覚なのだろうか。

ともあれ、

「じゃあ口エさんは、いい御家柄の次期当主さんだったんですか……」

じつはすごい人なのでは、と意識したとたん、失礼はなかっただろうか、と心配になってきた。というか、無遠慮にまんじゅう喰いまくっているヒトを約一名ご存知なので気がきではない。まあ口エさんならば、あの天使のごとき微笑で無かった事にしてくれそうだけれども。

「“メスム屋”という店名を聞いた時点でわかることだと思いますけれど。刀さんは、ご存知なかったのですか？」

この世界の事柄に関しては、大抵どころかまったくご存知でないですよ。

ええもうなんだか、すねてもいいですか？

「それはそれで、拗ねちゃった刀さんを、たつぷりと愛でて慰めて差し上げる、心と体の受け入れ準備はバツリですけれどっ？」

よっしゃこーいっ！ てなぐあいに両手を広げて身構えないでくださいよきさん。オレの心と体はバツチりもなんも準備できておりませんから。まったくもって図々しくも、すねたりして申し訳ございませんでした。

「あら……そうですか？」

それは残念です、ときさんは蠱惑的に尾を引く微笑みを浮かべてから、

「というのは置いて——」

架空の“何か”を両手で挟んで脇に退かし、

「——メスム屋さんはですね、クレベル王室が頼んで“おまんじゅう”を献上してもらってる、それはそれは厳格な、老舗中の老舗なのですよ」

とご解説してくださる。

つまりは、王室御用達のお饅頭屋さんであるということだろうか。あまり実感がわかないけれども、とつてもスゴイ事であろうとは、なんとなくわかった。

ツミさんがここへ到着してからずっとおまんじゅう作りを教わっているのも、それが理由なのだろうか？ 王室御用達の味を盗む、みたいな感じで料理人魂に火がついてしまったとか。

きつとそうなのだろう。さすがは料理人。

うん。

そして——もうひとつ、とてもとても得心をした事がある。

口エさんがお礼を申し出たとき、きさんが有無を言わせぬ勢いでそれを即承諾したことについてだ。

きつと、あのときのきさんは「やったあ！ 王室御用達の美味しいおまんじゅうが食べられるうっ！」みたいなノリで居たに違いない。

「なにかそれだと、私がとてもイヤシイみたいじゃないですか」

我が心の声を盗聴していたらしい壺さんは、ムツとしたように眉をひそめ、不満を示すように下唇を突き出して頬をぷくつと膨らませる。

壺さんはイヤシイというより、ただの食いしん坊だと思いますけれど。

それはさておき。

とくに脈絡もなく、無性に、登山家が“そこに山があるからさ”と頂を目指して登山するがごとく、オレは素晴らしく見事にぷくつと膨らんだ壺さんのほっぺを両側からプッシュしたい衝動に駆られた。

数秒間の葛藤の後、オレは自分に素直であることを心に誓う。

勘付かれぬよう密やかに自らの右と左の手を彼女の頬の左右にセッティングし、優しく丁寧に、しかし素早く圧力を加え――

「ぶうっブウウ」

壺さんの口の中に溜まっていた空気は、最初だけ破裂的に吹き出で、あとは彼女の唇を小刻みに振動させ唾液を飛散させつつ終息してゆき、

「ウウぷっ」

最後の最後は、か細く鳴って散った。なんでもか哀愁を感じるよいんが尾を引く。

間髪いれず、

「なにするんですか」

ブーブークッションみたいに愉快的音を発していたのと同じお口が、今度は唇を尖らせて抗議してくる。ともすれば可愛らしいそんな表情の影に隠れて、

「グウツ又オツ！　ありがとうございますっ！」

ガッチリ握り固められた拳が、神速の勢いで我が腹部にえぐりこみ、

「な・に・す・る・ん・で・す・か」

一音一音を強調するがごとく、内蔵を引つ搔き回すようにグリグリと動く。

壱さん、穏やか過ぎる微笑がとても末恐ろしいです。

「い、いや、なんと申しますか……そこに膨れたほっぺがあったもので、つい」

危険で過酷な状況に陥るとわかっていても止められない。ああ、なんでだか登山家さんの心情がわかった気がする。あくまで、気がするだけ、だけれども。

承ノ第十八話：ムシムシ尽くし（其の五）

そんな感じに歩みを止め、縁側で少々くつ喋っていたらば、

「ちちゃんと、つついて来てよう」

ちよつと涙目になったバツが駆け戻ってきた。

「え、ああ、ごめん」

オレは詫びてから、自らの腹部にめり込んだ壱さんの手をとって、
「段差あるから気をつけてください」

縁側を降り、案内役たるバツの頭にある二つのお団子を目印に、
改めてお風呂へ向かうことにする。と言っても、見わたす限りに広
大な庭というわけではないので、バツが案内し向かう目的地はさつ
きから認知できていた。

丸太をログハウス風に組み上げて作られた、しかしお風呂場とい
うよりは、少し大きめの物置という印象の建物だ。入り口と思われ
る木製扉の正面延長線上には、村の広場にあつたモノよりは小規模
な井戸がある。ここから水を汲んで湯船に注ぐとは、ひとつ風呂浴
びるのも肉体労働だなあ……蛇口をひねるだけで事足りる現代文明
のありがたさが、身から遠退いて改めて身に染みってくる。なんてこ
とをしみじみ思いながら、物置風お風呂場へ一歩足を踏み入れ、
「ん？」

想像していたモノとは違う光景がそこにあり、一瞬だけ思考が停
止する。疑問で眉間にシワを刻む間の後に、再起動した我が脳ミ
ソは速やかに目前と類似する情報を記憶から検索して探し出す。

「これはお風呂というより、サウナ？」

ムツと暑い部屋の中には、大小の黒い石がぎっしり詰まった
金属質な円筒形の入れ物と水の注がれた桶が設置されており、それ
を囲むように壁を背もたれ代わりにした木製の長椅子が置かれてい
た。身体を湯に浸からせることができるようなモノはない。五右衛
門風呂のようなモノがあると勝手に予想していたのだが、見当違い

だったようだ。

「なんですか？ “さうな”って」

我が手をちよいちよいと引っぱり、壱さんが問うてきた。

「えーと、こういう“お風呂”のことを、オレの生まれた所では“サウナ”って言うんですよ。“ミストサウナ”とか“スチームバス／蒸し風呂”っていうのもあったりしますけど」

「刀さん御出生の地では、お風呂にも様々な呼び名があるのですねえ……面倒臭いですね、こと細かくて」

興味を懷いたふうを装って、ずいぶんとバツサリな物言いをしつつ、壱さんはズイズイと室内へ歩みを進める。

そして手探りで長椅子の位置を確かめてから、

「お風呂はお風呂でしょうに」

と呟きつつ腰を下した。

「まあ、否定はしませんけど」

オレが言葉や名称を決めているわけではないので、めんどいと言われましても、どうにもできません。

壱さんは腰を落ち着けると、「ふう〜」と一息吐いてから、左手で自身の左隣をポンポンポン叩き始めた。それはなかなかどうして終わりを見ないので、

「この形式の“お風呂”に入ったら、ひたすら左手でイスを打ち鳴らす、のが“しきたり”だったり“あたりまえ”だったりするんですか？」

知らぬ世の疑問を自問自答してもどうしたって答えは出てこない
ので、単刀直入にお訊ねする。

「……………」

だがしかし、壱さんは答えてくれるどころか、ポカンと口を半開きにして、手の動きと一緒に全身の動きを止めてしまう。

なんだこの無言の間は……。

訊いちゃいけないことを訊いちゃったのかな？

無言の圧力にオレが不安を感じ始めたたん、

[illegible]

いままでお地蔵さんのごとく固まっていた壱さんは、土石流みたいに豪快な勢いで腹抱えて笑いだした。それに誘われるように、我が背後で慎まじやかにしていたバツまでもが「くつくふふふ」と忍び笑いしてくれている。

なんだか、目の前でバスが発しちゃって、ぼつねんと独りバス停に取り残されたときのような物悲しさを感じて、まったく二人のようには笑えないのだが。

「——ははははつくつふう……はあはあ……つくくつ……い、いやはあスミマセン」

どうにかこうにか“笑い虫”を抑えこんだらしい壺さんは、それでも頬をピクピク震わせつつ、

「刀さん、突然、あまりにも真面目に奇抜な事を言っんですもの、ツボに入ってしまったて」

惚れ惚れするぐらいのとってもイイ笑みを顔面いっぱいに浮かべて、イスを打ち鳴らしていた理由を教えてくれる。

「私の隣にお座りなさいな、
ってそれを刀さん、くっふふふ」

なんてことはない。それだけの事を、オレは深読みして、不覚にも“笑いの種”を提供してしまったのか。

冷静になると、もっすぐく恥ずいっ！

顔を真っ赤にするどころか、全身が熱っちゃって汗がダラダラ滴っているのは、ここがサウナだからというだけではないだろう。

そんなわけで、オレだけ三倍速で発汗していたら、

「あまり温かくないですね、もっとアツアツにしましょうよ」

壺さんは額にじわりと水分をにじませて、何かを探すように手をさまよわせる。

「そうですか？　オレは十分にアツアツだと思えますけど。で、なにをお求めですか」

室温と羞恥心をあわせて超ホットな我が身体的には、もう満ち足りているんですね。

「焼け石に水を注ぎたいので、“ひしゃく”を」

水蒸気を発生させて体感温度を上昇させる、という壱さんのご要望にお応えして、オレは彼女に“ひしゃく”を握らせて、水の注がれた桶の位置と、焼け石が詰まった円筒形の入れ物の位置を教えた——のだが、後悔は先に立たないというか、未来は知れないというか。

桶から“ひしゃく”で水をすくい、焼け石にぶっかけ、その蒸発する音を聞いたとたん、壱さんは何か面白いモンをめっけちゃった幼子みたいな雰囲気を満面に浮かべた。そのお顔を拝見した瞬間に、オレは「ああ、なにぞいらん事を思いつきやがったな」と悟ったのだが、時すでに遅し。

「根競べしましょうよ」

オモシロ樂しそうにニタニタしながら、壱さんは“ひしゃく”を握りしめて言った。

壱さん主催“その場の思いつき根競べ”には拒否権なんて最初から用意されておらず、彼女は右手に“ひしゃく”を握り、左手で逃げられないようにオレの腕を固定し、どう頑張ったって身体の毒にしかないような競技を強行し——

承／第十九話：ムシムシ尽くし（其の六）

——状況整理という名の過去回想現実逃避は終わる。

結局、“その場の思いつき根競べ”は主催者が鼻血を噴いて強制終了とあいなり、自業自得な壱さんはあてがわれた部屋へと送還された。ちなみに運んだ者の感想として、くったり脱力したヒトを背負って運ぶというのは、なかなかの重労働であつたと、あえて言うておこう。

部屋に到着しても、壱さんはへばつたまま微動だにしないでの、ツミさんと口エさんが連係プレーで汗と鼻血を噴いた彼女の身体を拭き、寝間着に着替えさせた。当人は無抵抗主義なお人形さんのごとくされるがままを貫いて、いまはベッドの上でのびている。

オレはと言えば、さっきまで壱さんのことを“うちわ”のような物で扇いでいたのだが、途中から聞こえてきた彼女の安らかなる寝息を聞いたとたん、ヤル気が失せたので、件の手帳に事ここに至るまでを書いてヒマを潰すことにした。

バツは最後の最後まで壱さんの事を心配してオロオロしていたが、ツミさんに料理の助太刀を頼まれて、

「い、イチお姉ちゃんが、がガッツをつけてくるれるような、おいしいモノが作れるように、がガンバツテくるよっ！」

と勇んで炊事場へ。なんとまあ、健気な子だろう。すやすやと寝息をたてている、愛くるしくもアホな御方とは大違いだ。

夕暮れの終わった空が夜色に染まり、炊事場からただよう美味しそうな香りが鼻孔をくすぐるころ。

「はっ！　夕食っ！」

ガバツと唐突に半身を起こして、壱さんは起床しなさつた。お化け屋敷の仕掛けみたいで、こっちの心臓に悪いので、以後はご遠慮願いたい起き方である。

「まさかつ！ 私としたことが夕食を食べ損ねた？ いや、まさかそんなこと——」

その執着心は、もはや尊敬に値するが、

「——刀さん、刀さんっ！ とうーさんっ！」

死にもの狂い過ぎる形相で名前を連呼されると、チト怖い。

「はい、はい、はい、“とうーさん”はここに居りますよ」

と答えつつ近づいたら、伸びてきた手に胸ぐらを力強くつかまれ、恐喝するがごとき迫力をもってグイと般若にみたいなお顔に引き寄せられ、

「夕食は、夕食はっ、夕食はっ！」

壮絶なまでにツバをぶっかけられながら、単語の発音に強弱をつけただけで「まさか、もう食べ終わってしまった、なんてことはないですよ？」という意味を相手にわからせる、壱さんのどうでもいい技を弩近距離でご拝聴するハメになった。

なんというか彼女の必死過ぎるその姿勢に、死に際の武士が君主の安否を気にかけているような、ある種の“忠”を感じてしまって、「ヤベエ、超力ツケー」と一瞬でも思ってしまったオレは、いよいよ壱さんに毒されてしまったのかな……。

あ……なんか自分自心がとつても心配になってきた。

なんていう惑いは、顔面にかかった壱さんのツバと一緒にぬぐいさることにして。

「夕食はですね——」

と言ったところで、イタズラ心というのかイジワル心というのか、がオレの脳内にふと顔をのぞかせた。わざとではないにしても、顔を唾液まみれにされたのだ、プチ報復したくもなるだろう。だってオレは、人間だもの。

「——美味しく残さず、の・こ・さ・ずッ！ いただきましたよ。いやぁ美味しかったなあ——」

現状、もっとも壱さんが聞きたくないであろう言葉を、あえて強調して言ってみた。むろんデマカセであるが。

「——どっ！」

壱さんは、かの名画“ムンクの『叫び』”になって「聞いてない聞いてない聞いてない」と耳をふさぐ。が、しかし逆にその行動が、しつかり聞いてしまったと物語っている。

「……………ど、どうして、起こしてくれなかったのですか」

いまだ耳をふさぎながら、壱さんはうつむきかげんに、精も魂も燃え尽きてしまったような細い声をもらした。

「気持ちよさそうに寝ていたので、起こしちゃ悪いかなあーと」

これはまあデマカセではない。

「そ、そうですか……………」

彼女は何かも失ってしまった人のような哀しすぎる微笑を、ふつと浮かべた。

やっておいてイマサラだが、予想以上に衰弱してしまった壱さんは見るに忍びなく……………しかしそれゆえに「じょーだんでした」とネタばらしをしたら何されるか想像できず恐ろしい。

が、しかし弱った姿よりは、ぷりぷり怒っているお姿のほうが壱さんらしいと言いか、しつくりくると言いか——

まあそんなわけで。

もう何をされてもいいと覚悟を決め、ネタばらしをしよう——としたら、

「……………ううっ」

壱さんは耳をふさいでいた両の手で顔を覆い隠し、

「……………うう」

その場にペタンと尻をついて、

「ううっぐっ……………うううう」

肩を震わせて嗚咽を——

ま、ままままさが壱さん泣いちよるっ！

「あ、あの壱さ——」

「ううぐっうううう」

なんかもう、オレなんかが生まれてきてゴメンナサアアアイツ！

ほんの冗談のつもりだったんです。アナタを悲しませるつもりなんてミジンコほどもなかったんです。もうほんとに申し訳ないっ！
いまここに人類史上最上級の土下座でもってお詫びを――

「じじゅ準備ができ……た………よ？」

――しようとしたら、なんとバッドなタイミングでバツが登場した。

承／第二十話：ムシムシ尽くし（其の七）

目の状況が把握できないのか、“彼”は数瞬その場で呆け……
そして、壱さんが「おいおい」と肩を震わせて泣いているのを認知すると、

「どっどっ、どうしたのうっ？ い、イチお姉ちゃんっ！ どど
うどうどうして、な泣いているのう？」

動揺しすぎて瞳をうるうる潤ませる。

「ううぐっ、刀さんがあ、うううっ刀さんがあ」

夕食を食べ終わったって言うんです——と最後まで言い切ってくれないものだから、オレが何かして泣かせたみたく聞こえ、しかし実際その通りなので、激しくいたたまれない。

「と、トウお兄ちゃん？」

やめてえバツう、無垢な瞳でこっちを見ないでえっ！

心が、心が苦しいっ！

そんなヘビの生殺しみたいな痛い立ち位置に、心の臓をかきむし
つてもだえていたら、

「刀さん、とーさん」

聞き覚えのある——しかし、いまはありえないであろう声が、ま
るで悪魔のささやきがごとく密やかな音量で呼びかけてきた。

まさかそんな、と思いつつ声の聞こえたほうを見やってみる。

「……っ！ ……………っ！」

思わず、二度見してしまった。

自分の眼球がとらえた視覚情報を、これほどまでに疑ったことは、
いまだかつてない。

そこにあつたのは、してやったりって感じの薄ら笑みを浮かべて
いる壱さんのお顔であつた。さっきまで泣き顔を覆い隠していた両
の手は、観音開きのようにパカッと開かれている。

なんかもう色々と理解が追いつかず、言葉もなく立ち尽くしてい

たら、

「どうです？ このいたたまれない状況から抜け出すために、私からとても素晴らしい提案があるのですけれど、聞きたいとは思いませんか？」

ニタリとした表情はそのままに、彼女はヒソヒソと言の葉を投げてきおった。

もう、わけがわからない。

——が、「とりあえず聞いとけ」と我が危機感知生存本能が警告してくるので、

「て、提案とは？」

お訊ねすることにした。意図せずヒソヒソ声になってしまったのは、なんでだろう。

「これから食べることになる夕食、刀さんの分を全部——とは言いません、半分でいいです、半分、刀さんが私にわけてくれるなら、事態は万事解決ですよ」

なんか引つかかるが——それで、さっきからずうーっと我が心の“やわらかい場所”に刺さりっぱなしな潤んだ瞳の無垢な眼差しを抜くことができると言つのならば、

「壱さんのご満足ゆくまで差し上げますから、万事ご解決願いたいっ！」

それを聞くと、壱さんは満足げに口の両端をニイと吊り上げ、
「では——」

と乱れた寝間着の裾を正しながら立ち上がり、

「——そろそろ“亭主関白ごっこ”はやめにしましょうか、ね？
刀さん」

しれっとそんな事を言うのだ。

まるで何事も無かったかのようにな。
いたって平静な態度で。

……恐ええ。ちょー恐ええ。なんか寒気を覚えるわっ、その平静さっ。

ていうか、なんですかねっ
“亭主閑白ていしゅ かんぱく”って！

承／第二十一話：ムシムシ尽くし（其の八）

「あらあら、おかしいことをおっしゃいますね、刀さん」

そこで壱さんは可愛らしく——いまのオレにとつてしてみれば、おぞましいくらいに可愛らしさで小首を傾げて、

「せっかく夫婦になったのに、あまりにも仲良し過ぎて変化に乏しいから、試しに“亭主関白”やってみたって——そう提案してきたのは刀さんですね」

どこら辺でっ？　どこら辺でそんな血迷ったこと言いましたっ？

オレにはそんなゆるい関白宣言をした記憶はございませんよっ！
「もお恥ずかしがっちゃってっ」

このこのゝってなぐあいには、彼女は指一本で見事な地獄突きを我が胸部に放つてきおる。そりゃあもう、このヒトは人差し指でオレの肺に穴を開けるおつもりだな、と察せるくらいの見事さだ。世界地獄突き選手権があつたら、きっと伝説になれるだろう。

しかし残念ながら、我が肉体はちゃめつけたつぷりにご乱心おる彼女を受け止めきれほど強靱ではなく、なにより人差し指で人を刺すとか、おもしろくないうえに、やられる側はたまつたもんじやないので、オレは順調に掘削作業中な彼女のお指をつかみとつて強制終了願うことにしゅりゅ。

が、お指は望まれない使命感を発揮して掘削作業を続行しようとしおるので、「もう勘弁してください」との念を込め、その指をにぎにぎ握つて説得していたら、

「と、トウおお兄ちゃんと、い、イチお姉ちゃん、けケン力して、いイチお姉ちゃん泣いてたんじじゃないのう？」

いままで不安げに所在無く立ち尽くしていたバツが、どこかほつとしたような声色で訊ねてきた。どうやら“彼”は、ケン力のすえに壱さんが涙々したと思つていたようだ。

「まさか、私と刀さんがケン力するなんてありえませんよ。さっき

のは“ごっこ遊び”ですから。それに、もしケンカをしたとて、刀さんは女性を泣かせるような人ではないハズですよ？」

そう答える壱さんのお顔には、“彼”を安心させるような、「ね、そう思うでしょう？」と同意を求めるような微笑みが浮かんでいた。その答えにバツは、しばし潤んだ瞳でオレを見つめ、

「そ、そう、そうだよね」

につこり、と純朴な笑みをくれる。それは不条理な世に咲く一輪の花のごとく、見ただけで胸の内に現在進行形で蓄積されてゆくアレやコレやを一瞬で消し去ってくれる特効薬であった。もう食べちゃいたいくらいである。……あれだね、ご老体が自分の孫は眼に入れても痛くないっていう心境と、ムツゴロウ王国の王様が「よおしよおしよおし」といゝんな意味でものすごいコミュニケーション能力を発揮して動物に接する心境が、とてもよく理解できた気がする。彼の方々はこの境地に居たのか、と。それは非常に形容し難い、しかしすこぶる単純明快で純粹な――

「ところで」

と壱さんは問答無用でオレの思考をぶった切り、

「準備がどうか、なにか言いかけてましたけど？」

わざとらしいぐらいの疑問顔で、おおよそ見当がつきそうなことを、あえて訊く。

「え、あ、う、うん。じゅ準備ができたから、ゆゆ夕食た食べようよつて、とトウお兄ちゃんと、いイチお姉ちゃんを、よ、呼びに来たんだよ」

というバツの返答に、

「あら、ついに待ちに待った夕食のお時間ですねっ」

壱さんは、それだけでごはん三杯食べられそうな素晴らしき喜色満面を浮かべて、

「このまま待ち続けていたら、お腹が空き過ぎて背中とくっついてしまつところでしたよっ」

ぼんぼこタヌキのごとく軽快な腹太鼓をひとつ打ち鳴らす。

……。

……どうしてだろう、みよーに和むのは。

空腹のヒトが腹を叩いただけなのに、なんでハッピーエンドを迎えそうな、ぬくい雰囲気が室内に満ちるのだろう。

……摩訶不思議だわっ！

いや、だからと言って、べつにこの雰囲気否定するつもりはない。壱さんが本当は泣いていなかったということには安堵を覚えているし、やっぱり泣き顔より顔面の筋肉緩ませているほうが彼女らしいと思うから、この室内に満ちているぬくい雰囲気を否定するつもりはない——のだが、しかしそれを差し引いても、個人的には色々とお訊ねしたいことがあるわけで、

「あの……壱さん」

このまま雰囲気にもまれて強引に流れを持つていかれたら訊くタイミングを逃がしてしまいそうなので、そうなる前に先手を打つことにする。

「なんですか？ ……あ、夕食やっぱり半分はイヤだとか、そういう交渉には応じませんかね」

そんなキツパリと、全力で的外れなことを先回りでご回答されても困るのですが。

「じゃあ、なんだっていうんですかあ？」

そんな不満たらたらに、ほっぺをぶくつて膨らまされても困るのですが。

ていうか、他に思い当たらないんですね……。いや、まあ、いいんですけどね。

……気を取り直して、オレはもっすごく疑問極まる事柄をお訊ねさせていただく。

壱さんがご起床なさってから、事ここに至るまでに起こった、トリッキーな出来事について。

「んー、“まんじゅう怖いの応用編”ですけど、それがなにか？」

ずいぶんアツサリと意味不明なことをいいますね。

「なんですかね、“まんじゅう怖いの応用編”って？」

「ほら、刀さんが話してくれた、心理戦の極意を指南する落語“まんじゅう怖い”ってあったじゃないですか。相手の“イタズラ心／＼イジワル心”に火をつけて、結果的にこちらが得をするっていう」

……はい？　いつから落語はそんなタクティカルなお話になったんですかねっ。

「刀さんが、しょーもないウソを吐いたとき、これはいい機会だと思ひまして、試しにおこなってみました」

応用編なのは状況が微妙に違うからです——とご親切におっしゃっていただいても、全体的に何を言っているのかよくわからないのですが、

「オレがウソ言ってるって——」

「バレバレでしたよ」

なんでも、ウソを吐いたときの我が声には、普段とは違う“形容し難い感覚的な違和感”があったそう。そして、オレが喋るときその吐息に食後特有のニオイがなかったこと、炊事場からは美味しそうなのニオイがしていたし調理中な音が聞こえ続けていたこと、バツと思しき足音がこちらに近づいて来ていたこと——などなどを総合的にかんがみて、壱さんはオレがウソをこいていと直感したらしい。

改めて、壱さんの空間把握能力というか状況認識力のすごさを感じ知るわけだが、

「ということ——」

精も魂も燃え尽きてしまったような細い声とか、何もかも失ってしまった人のような哀しすぎる微笑とか、我が精神ライフポイントをゴリゴリ削ったお涙とか——は、やっぱり、

「演技ですよ」

どうです、なかなかの演技力でしょう——と、壱さんは胸を張る。オレは思わず目を見開き、

「ま、まさか……そんなっ」

足元をよるめかせ、

「壱さん……恐ろしい子っ！」

と白い目で呟きたかったのだが、「そんなことより、早く行きましようよー」と壱さんが三度ご乱心の勢いで急かしてきおるので、

「わかりましたっ、わかりましたからっ！ 隙あらば地獄突きかまそうとするのやめていただきたいっ！」

なんだか消化不良な感じだが――

そんなこんなで夕食のお時間とあいなつた。

承／第二十二話：ムシムシ尽くし（其の九）

ある意味で「ガガーンツ！」という効果音がバツチりくる絵図らだったかもしれない——とか思いつつ、オレは件の手帳に事ここに至るまでを書き記した。

なんだかんだで小まめに日記を書いているのが、自分でも意外だ。——というか、まあ、それ以外に夕食後のよいんタイムを潰す術が、オレにないだけなのだが。

「ん~~~~つぐ」

書き記す行為でコリ固まった背筋を伸ばす。首を右に左に傾けたらバキボキと小さい音が鳴った。

ちよいとスツキリしたところで、室内へと視線を転じてみる。

最初に我が視覚がとらえたのは、ウサギのたれ耳を思わせるツインテイルな黒髪であった。

なにやらバツは床にペタンと尻をついて座り、自らの手元に真剣な眼差しを注いでいる。

なにしているのかなあと素朴な疑問に駆られて注意深く見やつてみると、なんと“彼”はお裁縫道具らしきモノを駆使して“まんじゅうを見て逃げ出した襲撃者”によって切り裂かれてしまった壱さんの着物の袖をチクチクと慣れた手つきで縫っていた。

頼まれてもいないのにっ！

なんと健気でよくできた子だろう。

もっすつごく頭をなでなでしてあげたい衝動に駆られるが、作業の邪魔をしてはいけけないので——頑張れ、我が自制心っ！

衝動に負けて身を任せてしまうまえに、気合で眼球を動かす。

次に我が視覚がとらえたのは、ベッドの上で大の字に伸びているおヒトの上に“もりもり”と、しかし“とろける”ようにそびえていらっしやる、ふたつのお山であった。だらしなく着こなされた寝間着の襟ぐりは大胆にはだけてしまっていて——ちきょうっ！ 頑

張れ、我が自制心っ！

「壱さん、寝間着がダメなくらいはだけちゃってますから、ちゃんと着直してくださいっ」

視線のやり場が一点集中しちゃって困りますから。オレが。

「ええー、だつてえ」

と、壱さんは寝そべったまま口を尖らせて反論してきおった。

「満腹なんですよ、わ・た・しっ」

だからどうしたっ！　と言いたいところであるが、それは脇に置いて。

なんだか、いまの壱さんには“あるセリフ”がものすごく似合いそうな気がしてならない。

「壱さん、ちょっと“ごつつぁんですっ！”って言ってもらえませんか？」

そんな脈絡のない提案に、

「……………」

壱さんは思考を巡らせるように眉根を寄せて——しかし、すぐにどーでもよくなったらしく、

「ごつつぁんですっ！」

……すばらしく、相撲取りのようであつた。ちょっと息苦しそうなのが絶妙である。

けれども、この行為に深い意味はまったくない。もれなく浅い意味もまったくない。

ただオレが聞きたかつただけである。

——というのも、まあ置いといて。

そもそも壱さんの言わんとすることは、「ええー、だつてえ」
と彼女の口から発せられた時点であつてた。最近、我が察し能力は無駄に鍛えられているので、こんなの朝飯前もとい夕食後である。

満腹で苦しいからお腹周りにゆとりが欲しい——というのが、壱さんを大胆にはだけさせちゃってる理由だろう。

「わかってきているのに、どうして刀さんは“寝間着を着直して満腹のお腹を圧迫しろ”だなんてヒドイこと言うんですか……あれですか、苦しくてもだえる私の姿にハアハアしたいんですか？」
ハアハアしないために、寝間着を着直していただきたいと申しているんですがねえっ。

察してっ、我が心情をっ！ 自制心が頑張っているうちにっ！

……いや、まあ、満腹のお腹を圧迫したくないという気持ちは、オレにだって当然のように経験があるのでよくわかるんですがね。

——でも、だからこそ、

「胸元にゆとりはいらないでしょ」

と言いたい。

「私も、そう思いますよ」

壱さんは同意を示してくれつつも、

「……でも」

と、なにやら深刻そうな口調でおっしゃる。

「どうしてでしょう、胸が苦しいんです」

「胸焼けじゃないですかね」

さっき夕食をガッツリどころかオレの分までゴツソリ喰ってましたものね。

「そういう苦しさとは違うのですっ」

壱さんは抗議をするように、ぷくっとおっぱいを膨らませる。

んんー、間違っているようにには思えないけれども……他に考えられる事はいえ——胸元に実ってる果実がとってもタワワだから物理的に苦しいとか、もしくは、

「食道に食べた物が詰まっちゃってる、とか？」

壱さんはおっぱいを膨らませたまま、

「……………」

無言という不満の念でお返事くださった。

べつに壱さんが納得したから正解とか、そういう事柄ではないと思うけれど、

「じゃあ、どういう苦しさなんですか？」

オレとしては寝間着を着直してもらえれば、それでいいので、壱さんがご納得してくれそうな妥協点を探すことにする。

「圧迫されるような、締め付けられるような、なにかつつかえているような——」

壱さんは少々苦しげに表情を歪めて言い、

「——それでいて、なぜだかちよっぴり切ないのです」

と自らの胸元に片手をあてがう。

もう絶対——胸焼けでしょ。

サツマイモ食べ過ぎたとき似たような症状になりましたよ。

まあ、あのときオレが感じたのは「ちよっぴり切ない」じゃなくて「ちよっぴり酸っぱい」でしたけど。

「だ、だ誰かを、す好きになると、む胸がくっ苦しくなるって、ぼボク聞いたことがあるよ」

不意打つように、お裁縫する手を休めてバツが言った。

それを聞くや、

「ま、まさかっ！」

壱さんは一気に上体を起こし、まるで驚愕の真実に気づいてしまったがごとき勢いで、

「これが、恋の胸キュンっ！」

——違うと思います。

いや、恋の胸キュンがどういうモノか知らないので断言はできませんがね。

でも現状のそれは、限りなく胸焼けに近い恋の胸キュンだと思いますよ。

というのは、まあそれはそれとして。

壱さん、起きたついでに胸の辺りでこぼれちやいそうになってるモノを収納してくださいっ。

「もー、わかりましたよう」

しょーがないなあ、というふうに壱さんは寝間着を着直してくだ

さる。

……いまさらながらに、どうしてオレがお願いする側なのだろう。
……ま、いつか。

気にしたら負けだ。

うん。

——と、そんな感じで開き直って、身も心も柔軟する気分で再び背筋を伸ばし、首を右に左に傾けてバキボキ鳴らす。

「あんまりバキボキやると——」

すつと寝間着の襟元を正して、

「——痛めてしまいますよ？」

壱さんはとがめる口調で言う。

「いや、まあ、それはわかってるんですけどね」

わかつちやいるけど、やめられない。

というか、一連の動作がクセになつてて無意識にやってしまつのだ。

「こっっているのなら、私がモミモミして揉み解してあげますよ」

と言って、壱さんは準備運動するがごとく両の手をにぎにぎする。

お気持ちはとっても嬉しい。

——けど、どうしてだろう。壱さんの「揉み解してあげますよ」

という言葉が「握り潰してあげますよ」と聞こえてしまうのは……。

よし、ここは丁重にお断りさせていただこう。

「あー、刀さん、私の腕前を疑っていますね？」

望まれぬ勘違いというか深読みを、どうもありがとうございます。

てか壱さん、なしてご立腹と見せかけて、ちょっと嬉しそうなんですかねっ。

いやもうオレは、その嬉しそうな顔を拝見できただけで満腹ですよ。身も心もゆるゆるに弛緩しまくり、コリ解れまくりっ。壱さんは存在自体が極上のマッサージです。ごちそうさまでした。

なので断じて、揉み解しの腕前を疑っているとか——

「そういうわけでは」

——なくてですね。

テンション上がると加減が利かなそうな、たくまし過ぎる腕っ節の強さをお持ちの壱さんですから、できれば痛いことになる前に、オレとしてはご遠慮申し上げたいところなのですよ。

「ほら、ヘンに揉むと“揉み返し”がきて、むしろ痛めてしまうことが——」

聞くや、壱さんは眉根を寄せて、

「やっぱり疑ってるじゃないですか」

ぶくつとほっぺを膨らませる。

アカーンツ！ 言葉のチョイス間違えたわつ。

「私、これで旅の資金を調達したりするんですよ」

と嬉々と誇らしげに、壱さんは訴えてきおる。

なんでも、壱さんはフトコロ事情が寂しくなってきたら、そのとき宿泊している宿屋の亭主をお願いして旅人や旅商人が泊まっている客室を回らせてもらい、長旅で疲れている彼らを“整体/マッサージ”的な技術で癒やし、その対価として報酬をいただくのだそう。旅館とかではマッサージ師さんと呼ぶサービスがあつたりするから、それと似たようなモノだろう。この場合は、マッサージ師さんが自ら売り込み営業しているが。

「ちゃんと報酬が頂ける腕前なのですよ」

壱さんはふんぞり返るように胸を張って言い、

「それとも……刀さんは、私になんかモミモミされたくない……ですか？」

一転、いじけたふうに訊いてくる。

そう言われちゃったら、もうオレに残された選択肢はひとつしかない。

「まっさかーっ！ そんなわけないじゃないですかっ！ オレもう全身バッキバキにコリ固まっちゃって、是非とも報酬が頂けるほどの腕前をお持ちの壱さんに揉み解していただきたいですよっ！」

我ながら残念なほどに三文芝居であるが、

「そ、そうですか？」

壱さんはにへらと顔面筋を緩ませて、

「刀さんがそこまで言うなら、私の超絶技で身も心も揉み解して昇天させてあげますよっ」

オレのわがままにしょーがなく付き合っただげる的な態度で言い、こっちに来いとベッドの上をポンポン叩いて示す。

壱さんの言う昇天が、そうなっちゃうほど心地好いという意味である事と、万が一にも片道切符ではなく往復切符であることを切望しつつ、オレはベッドに歩み寄ってその縁に腰を下ろした。

「うつ伏せになってください」

という壱さんのご指示に従って、オレはベッドに上がり、うつ伏せになる。

いままで壱さんが大の字になって寝ていたそこには、彼女の匂いと体温が残っていて……どうしてだろう、妙に生々しく温かった。

壱さんはベッドの上をはわすように手探りし、それがオレの身体に接触すると、そこから全体を確認するように手を動かす。背中とか首筋とかをソフトタッチで触られるのは、非常にくすぐったい。

「では、始めますよ」

壱さんはそう言う——しかし何も始めなかった。というか、オレの身体はモミモミされている触感を感じなかった。

どうしたんだろうか、と思い首と眼球を駆使して壱さんのいらしやるほうを見やってみる。

「——っ！」

ふとももっ！　と思わず口から出そうになるのをどうにか堪えるも、やった視線はブラックホールの超重力に捕らわれてしまったがごとく脱出困難な釘付け状態に陥ってしまう。

視線をやった先にあったのは、なぜか膝立ちしている壱さんの寝間着の裾からチラリとのぞく——しなやかでありながらも、どこかムチツとムニツとしていらっしやる、色っぽいと言うよりエロっぱいふとももであった。正確に言うと、うちももであった。

もっすつごく惹き付けられてしまうのは、男として産まれたがゆえの“宿命／必然”だ。いたしかたない。

——が、それに真つ向から勝負を挑んでフル稼働しちゃってる優秀で強靱な自制心がオーバーヒートを起こすまえに、首と眼球に全力でムチ打って視点をずらす。

「……………」

壱さんは、なにやら真剣にオーケストラの指揮者がごとく両の手と腕を動かしていた。

……意味がわからない。

——ので、ここは素直にお訊ねさせていただく。

「あの、壱さん……お取り込み中に申し訳ないんですが、いったい何をなさっているのですかね？」

しばしの間を置いて、一連の動作を終えてから壱さんはご回答くださる。

「手を温くしていたんですよ」

それをオレは準備運動的な意味合いだと受け取った——のとはば同時に、壱さんの手がオレの腰辺りに置かれる。

「——っ！」

ちよつとビツクリするぐらい、壱さんの手は熱を帯びていた。温かいというよりは熱いという感じの、最高温度に達した使い捨てカイロを押し当てられているような感覚である。

てつきり比喩的な意味での“手を温く”だと思っていたが、どうやら事実としての“手を温く”だったらしい。

気功のような技術だろうか——とか、そんな些細な疑問なぞどうでもいいと思えるくらい、壱さんの温い手はじんわりとしみわたるように我が筋肉の緊張を解してゆく。

告白しよう。

とっても眠い。

例えるなら——冬場に、ほどよく温もった布団で寝るときのよう
な、なんとも形容し難い至福に満ち溢れた眠気とでも言おうか……。

もう……正直、思考するのも面倒臭いような……。

なんだか……とっても……マブタが……重たくなって……

……き

……

……

……

承／第二十三話：ムシムシ尽くし（其の十）

「——はっ！」

いかん、いかん、寝落ちるところだった。

危ういところで覚醒した我が意識は本能的に自身の置かれている現状を把握しようとし、目ん玉だけをギョロリギョロリと動かして辺りを見回し確認する。

どうやらオレは、ベッドの上で顔を左に向けてうつ伏せになっているらしい。

……まあつまり、一瞬意識が途切れるまえと同じ状態なわけだ。

うん、なんら問題ない——と安堵しようとして、しかし重大な問題に気がつく。

さつきまで見える範囲にいらっしゃった壺さんのお姿がないっ！
なぜにっ？

と冷静に慌てつつ、腕立て伏せの要領で我が身を起こし——ていたら、

「おはようございます、刀さん」

まるで朝の挨拶でもするかのように、聞き覚えのあるお声が呼びかけてきた。

ベッドの上でよつんばいという姿勢のまま、オレは首だけ動かし
て音源の方を見やる。

窓際のイスに座り、そのおヒトはお茶をすすっていた。

ただそれだけなのに、どうしてだろう……窓から差し込む日光の中にあって淡い光に縁取られたそのお姿は儚く麗しく、その消えてしまいうような哀しい美しさに我が目ん玉は完全に魅了され——オレは思わず息をのんだ。

「……あれ？ 刀さん？」

著名な画家が全身全霊を込めて描いた絵画に登場する人物がごときそのおヒトは、

「二度寝……ですか？」

いぶかるように小首を傾げて、

「もう、しょーがないですねっ」

ぷくつとほっぺを膨らませてから、

「とうーさーんっ！ 朝ですよー！」

騒音としか言いようのない大声を容赦無くぶつ放してきおる。悠然たる巨匠の力作が、一瞬で無邪気な子どももの絵になってしまった……。

「とうーさーんっ！」

黙っていると近寄りがたいほど美麗なのに、口を開くと好い意味で残念なくらいフランクなおヒトである。

「とうーさあ——」

その過剰に元気ハツラツな呼びかけは、

「——起きてますっ！」

いよいよもって我がお耳が潰れそうなので、

「オレは起きてますよっ！ 壱さんっ！」

そろそろ止めていただきたい。

「起きているのなら返事してくださいよ、もうっ」

壱さんは眉根を寄せて、ぷりぷりと怒ったふうに抗議を述べてから、

「おはようございます、刀さん」

なんか今日も頑張れそうな気持ちにさせる、とても素敵な柔らかい微笑みを与える。

「おはようございま——」

と口から出したところで、薄々とは気づいていた疑念が、

「——す？」

ちよいと顔をのぞかせる。

朝昼晩の感覚が不定期になりちな御仕事をしているヒトまたは生活を送っているヒトからしたら、対面時の挨拶はすべからく「おはようございます」になるらしいが、一般的に「おはようございます」

と言えば朝の挨拶だ。

——が、しかしそうなる今現在が朝であるということになってしまふ。

まさかそんなこと、と思うのだが、

「初めて聞きましたよ、疑問系の“おはようございます”なんて」
そう言つて薄っすら苦笑する壱さん——の背後にある窓の外には、
朝日が照らす清々しい朝の光景が広がっていた。

どうやらオレは、完全に寝落ちていたらしい。

「なんか寝た感覚がない……と言いますか、気づいたら朝になって
た感じで、いまが朝だつていう実感が薄くて……」

いいかげん、よつんばいでいるのもアレなので、オレはベッドから降りて背伸びをしつつ、朝の挨拶が疑問系である理由を説明した。
「それはきつと眠りが深かつたからですよ」

と壱さんは思い出したようにほくほく顔になって、

「とっても気持ち良さそうに寝息を立てていましたもの、刀さん」
ムフツと自らのほっぺに両の手を包み込むようにあてがっておつ
しやる。

「もう食べちゃいたいくらいでしたよっ」

それはどういう意味ですかねっ？

食欲旺盛な壱さんに言われると、どうしてもだか比喻表現に聞こえ
なくて末恐ろしいんですが。

「刀さんたら、やばったいこと訊きますね——」

いじらしく恥らうように唇を尖らせて、壱さんは言う。

「——言葉通りの意味ですよっ」

ゾワゾワツと背筋に悪寒がはしるのは、何がしかを死守せんとす
る防衛本能からの忠告か、はたまた生存本能からの警告か。

というか正直、壱さんがおっしゃるところの“言葉通りの意味”
の意を正しく理解できていないのだが、

「そんなことより——」

と壱さんは、空腹の才オカミを前にしたか弱き子羊がごとくプル

ブルしちゃってるオレのことなど知らぬ存ぜぬといったふうに、

「——お散歩に行きましょうよ。お散歩。ね、刀さん」

なんぞ遊園地の入場口でテンションが最高潮に達した子どもがごとく、「早く、速く、は・や・くっ！」と急かしてきおる。

「べつに行くのはかまわないんですけど……なぜに散歩を？」

そんなオレの素朴な疑問に、壱さんはオモシロくなさそうにぶくつとほつぺを膨らませて、

「……理由がないとダメなんですか？」

むうーつと不満ありげな仏頂面で訴えてくる。まるでどこぞの超戦士がみなぎらせる闘気がごとく、その顔面からは威圧的なオーラがヒシヒシと発せられていた。

あんまり強くない我がハートであるからして、そのプレッシャーに耐えられるわけもなく。

「思い立ったが吉日って言いますものねっ、理由なんていりませんよねっ」

……どうしてだろう。親父の背中が、お袋の尻に敷かれて加齢臭と一緒に哀愁かもし出しちゃってる親父の背中が、走馬灯のごとく脳裏にチラつくのは……。

承ノ第二十四話：ムシムシ尽くし（其の十一）

オレ以外の面々は、すでに朝食を済ませたらしい。

なして起こしてくれなかったのか、というあたりまえな我が問いに、

「だって――」

と壱さんは困ったふうな微笑み顔でお答えくださる。

「呼びかけても、刀さん無反応を貰いて起きなかったんですものと。」

そんなの、まったく記憶にない。

――のは、まあ、オレが爆睡していた証拠か。

ちなみにオレの分の朝食は、

「私が美味しくいただきましたよ。残したら作ってくれたヒトに申し訳ないですから」

という壱さんの善意によつて、キレイさっぱり美味しく食されたそうな。ありがた過ぎて泣けてくるぜ、チキショー！

というか、なぜにオレが起きてくるまでとっておくという発想がないのだろう……。

ツミさんとバツは、“夫婦大食い祝事（決勝）”に提供するための蒸しまんじゅうを作る口エさん率いるメムス屋の方々を手伝うために、いまは戦場と化している炊事場へ出陣しているらしい。

一宿一飯どころか四、五、六飯ぐらいの恩があるのだから、オレや壱さんも手伝ったほうがいいんじゃないかなと思うのだが、

「私もそう思いましたけど」

壱さんいわく、

「“夫婦大食い祝事（決勝）”に出場する新婚夫婦さんに手伝わせるなんて、そんなバチあたりなまねはできません」

と口エさんに強くお断りされたとのこと。

バチあたりなのは、夫婦だとウソぶつこいて“夫婦大食い祝事”

に出場しちゃってる、こっちのほうなのだけれども……。しかしその事実を述べても、祝い事をやっているがゆえか、好いほう好いほうへ物事を解釈されてしまい——結果、いまさら後には引けないところまで来てしまつて……とりあえず、いまは心の中で全力土下座の謝罪をしておこう。

というか、忘れていたが——いや、無意識のうちにあえて忘れようとしていたのかもしてないが、そういえば本日は、壱さんの望まれぬご活躍によって出場することが決定した“夫婦大食い祝事”の決勝戦がおこなわれる日であつた。

だからなのか、朝っぱらから村の方々のテンションは熱を帯びて高い。こちらの姿に気がつくと思つて「がんばれよ」とか「応援してるぞー」とか「お幸せにー」という力強いご声援を飛ばしてくれる。

やましい事実があるので、とっても心苦しく申し訳ない。

ご声援に応じると同時に、心の中では土下座の連続である。なので、あまり強くない我が精神ライフポイントは、どこぞの毒沼を移動するがごとくゴリゴリ減少してゆく。

あまりにもいたたまれないので、挙動不審と警戒されるぐらいチヤキチヤキ歩いて、いまは壱さんご希望の散歩コース——昨日の夕時に歩いた畦道である。

いたたまれない状況と村の人々の熱気から遠ざかつて、あらためて感じる早朝特有の爽やかで清々しく冷たい空気は非常に心地よく呼吸するたびに吸い込む空気には都会のそれと違って混じりつけないの新鮮さがあり——我が人生において初めて、ただの空気をとても美味しいと思つた。

眠気がぶつとぶ爽やかさ。

脳ミソがシャキツとスツキリする清々しさ。

——とも言おうか。

せつかくなので、喰いっぱくれた朝食の代わりにたらふく味わうことにする。

……ちくしょうっ！　なかなか満腹にならないぜっ！

——と、全力で空気を味わっていたら、

「……あの………刀さん」

そよ風に遊ばれて流れる、肩口でテキトウにぶつた切った漆黒の髪が口に入らないよう片手で押さえながら、壱さんは遠慮がちに——というか、ちよつと引き気味に訊いてきた。

「なにを、そのう………さっきから、すうはあすうはあしているのですか？」

シャキッとスツキリ覚醒した脳ミソがですね、働くのに必要不可欠なエネルギーをですね、欲しておるわけですよ。ブドウ糖をね。それを摂取するための朝食をねっ！

でもそれは、アナタ様に喰われてしまつて叶わぬ願いなので、「この美味しい空気をいっぱい吸い込めば、少しくらいはお腹膨れるかなあ、と思ひまして」

「空気を吸い込んで膨れるのは、どーがんばつても肺だと思いますけど………」

いりませんよ、そんな当然のご指摘とか。

「………もしかして刀さん、お腹空いたんですか？」

なにぞ確認するように問うてくる壱さんが、ちよいと恨めしい。

「もしかしくなくても空腹ですっ」

オレは少なからず憤怒の念を込めて返した。

——のだが、

「じゃあっ」

と壱さんは嬉々としたご様子でパチンとひとつ拍手を打つ。

こっちが仰天するほどの空間把握認識力をお持ちなのに、どうして場の空気は読めないんだろっ——と思つたのは一瞬のこと。

「この辺で、ちよつと遅めの朝ごはんにしましょうか。ね、刀さん」

おっしゃっている言葉はわかるけれども、

「それは、えつと………どーという意味ですか？」

そんな我が問いかけに、

「なっ！ なんとということでしょうっ！ あまりにもお腹が空き過ぎて、刀さんの頭がとっても残念なことにつ！」

ガガンッ！ という効果音が聞こえてきそうなほど、壱さんは大げさに芝居がかって驚きわななく。

まったく失礼極まりない。

ちよつとカチンときたので、物理的制裁措置を発動することにする。

右掌を壱さんの顔前に向け、左手で右手中指を後方へ反らし——
ぶっ放す。

「アタッ！」

ベチンッという地味な音を発して、我が右手中指の腹は壱さんの額に打撃を加えた。

「もっつ！ そんなことする悪い子には——」

いたわるようにおでこをさすりつつ、

「——朝ごはんあげませんよっ？」

とつてもご立腹と語るがごとく、壱さんはぶくつとほっぺを膨らませる。

「あげませんよ——って言う以前に、壱さん手ぶらじゃないですか
そう、壱さん「朝ごはんにしましょうか」と言っておいて手ぶら
なのである。だからこそ、さっきオレは「どーいう意味ですか？」
とお訊ねしたのだ。ともすれば「これから新鮮な朝食を狩りに——」
とか言い出しても不思議ではないのが壱さんというおヒトである。
万が一にも朝っぱらから野性味溢るる現地調達へ「いざ、出陣っ！」
するのは、せつにご遠慮願いたい。せめて、せめて昼過ぎからにしてっ。

「手ぶらですけど、朝ごはんは——」

ちゃんとここに、と壱さんは胸元のちよつと下なフトコロから、
なにか笹の葉っぱい植物の葉で包まれたモノを取り出し、

「——ありますよっ」

と、その葉をとじているヒモの結びをほどいて中身をあらわにす

る。

なんとも不恰好なおむすびが、三つあった。

解放させるこの瞬間まできさんのフトコロでギユウギユウと圧迫されていたがゆえか、とつても窮屈そうに身を寄せ合っちゃっている。

——というぐあいとその存在を認識したとたん、「ぐうぐう」と切なげにお腹が鳴った。どうやら腹の虫は、どんなにがんばっても自分の気持ちにウソがつけない真っ正直なヤツのようだ。

「くっぷっふふ——」

我が腹の虫の鳴き声に、デコピンがまされて少々ムスツとしていたきさんは顔面筋を緩ませ、

「——刀さんたら、そんなにお腹空いてたんですか？」

おもしろ楽しそうに堪えきれぬ忍び笑いを漏らしつつ、愚問と言ふべきことを訊いてくる。

それに対して、真っ正直な腹の虫が、

「ぐうぐう」

と大声で、オレの代わりに返答してくれた。

承／第二十五話：ムシムシ尽くし（其の十二）

——そんなわけで。

畦道の脇——雑草の生ゆる斜面に腰を下して、ちょっと遅めの朝食タイムである。

「その……」

なにやら心配事でもあるかのような表情で、

「お味のほうは、どう……ですか？」

壱さんが訊いてきた。

——が、しかし。

まだオレは一口も喰っていない。

というか、おむすびはいまだもって壱さんの手中である。それなのに座った次の瞬間に味の感想を訊いてくるなんて……。

まったく、江戸っ子もビックリのセツカチさんだ。

——なんてことを頭の片隅で思いつつ、葉の包みごと壱さんからおむすびを受け取り、ピッタリと身を寄せ合っちゃっている不恰好なおむすびのひとつを引っぺがして手に取る。

そして、

「いただきます」

唾液を分泌しまくって受け入れ準備万端な飢えたるお口へと運ぶ。

——が、堪えきれずに口の方から喰らいつきにいき、喰らいつくじつくりと咀嚼して、しっかりと味わい、ゴックンと嚥下する。

それはそれは——シンプル・イズ・ザ・ベストな“塩むすび”であつた。

なのでお味は可もなく不可もなく——

「——とっても美味しい」

腹が減っているときほど、シンプルな食べ物の“真の美味さ”が

よくわかるものだ。

空腹という究極の調味料——その美味さ倍増効果、絶大なりっ！

「そ、そうですか？」

我が味の感想を聞いた壺さんは、「えへへっ」と嬉しそうに表情をほころばせる。

その瞬間、パツと世界が明るく華やいだ——ように思えた。そして同時に、我が心の栄養補給が急速チャージで完了した。

「これは、壺さんが握ってくれたんですか？」

お味の感想を訊いてきて、その後に素敵な笑顔を見せてくれたことから察するに。

「だって、私が食べてしまいましたから——」

壺さんは少々きまりが悪そうに、

「——刀さんの朝食」

はにかんで言い、

「あ、ちゃんとお茶も淹れてきたんですよ」

と思い出したように、フトコロから竹のような樹木を利用して作られた水筒を取り出す。

ちようどお口が水分を欲していたので、

「いただきます」

ありがたく飲まさせてもらう。

そんな感じで、ちよつと渋めのお茶を味わっていたら。

なにやら壺さんが、またもフトコロから笹の葉っぱい葉の包みを取り出していたので、

「……それは？」

率直にお訊ねしてみた。

「これは——」

言いつつ、壺さんは葉の包みを広げ、

「——私の分です」

と不恰好なおむすびのひとつを手に取り、「いただきます」と流れる動作でそれをほおばる。

……まあ、すっかり自分の分を用意しているあたり、じつに忝
んらしいと思う。

一心不乱に喰らい過ぎて、米粒どころか米塊をほっぺにへっつけ
ちゃってるところもね。

慌てて喰わずとも、誰も取って喰やしない——と進言したところ
で、「全力で味わってるだけすっ」と口から喰ったモノを撒き散ら
して言い返される絵図らが容易に想像できるので、もはや多くを語
るつもりはないが、

「ついてますよ」

気になってしょうがないので、米塊だけは取らせていただく。

取った米塊は捨てたらずもったいないので、いたしかたなくオレが
喰う。米一粒には八十八の神様が宿っていると聞かしね。それを塊
で捨てられるほど、オレの心臓は幸い強くないのだ。

——とか、そんなぐあいに。

滞りなく、ちょっと遅めの朝食タイムは終了した。

食後は、とくに動き回ることもなく。

オレも忝さんも雑草の生ゆる斜面に腰を下したまま、ぼーっと
していた。

ときおり、やさしくなでるようにそよ風が流れ、その風になでら
れた地べたの雑草たちが、くすぐったがるように葉擦れの音をささ
やかに発する。

——と、不意に。

そよ風と雑草の奏でる大自然のヒーリング音と調和するように、
聞き覚えのあるメロディ・ラインが耳に流れ込んできた。

なんとも聴き心地の好い、鼻歌バージョンの『見上げてごらん夜
の星を』である。

お耳が吸い寄せられるように意図せずして特定した音の発生源は、
我がお隣にいらっしやる——おむすび食べて元気百倍上機嫌な忝さ

んであった。

これもオレと同じような境遇のヒトに教えてもらったのだろうか——なんて疑問は頭の隅に追いやって。いまは穏やかな表情で鼻歌を歌う壱さんの横顔に見惚れ、その鼻歌に聴き惚れるとしよう。

「ねえ、刀さん」

歌い終わった鼻歌の尾を引く残響のよいんから続くなめらかな流れで、しかし壱さんは不意打ちのように、

「世界から空腹がなくなったら——」

まるで世間話をするがとき平常な態度で、

「——世界から争いごとが半分くらいなくなると思いませんか？」

そんなことを言うてくる。

あまりにもいきなりだったので、オレはとっさに返答を考えつけず、

「え、ええ、まあ……たぶん」

申し訳なくも言いよどんでしまう。

そんな我が惑いを鋭敏に察してくれたと思しき壱さんは、

「言うのが突然過ぎましたね、すみません」

眉尻を下げて困ったふうな微笑みを浮かべる。謝るのは間違いだろうに。

「ただ、なんとなく思っただけなんですよ」

と壱さんは、しかし真剣な表情でおっしゃる。

どこか、ここではない遠い場所に想いをはせるがごとく。

「“夫婦大食い祝事”を楽しめるこの村くらい、世界が食に恵まれていたら、世界が空腹じゃなくて満腹だったら、きっと世界から争いごとの半分くらいはなくなるだろうなあって」

それは旅人として少なからず世界の様々な表情を肌で感じたことのある壱さんだからこそ、身から出てくる言葉なのだろうと思う。うまく言い表せないけれど、壱さんの言葉からは“生々しい説得力”が感ぜられるのだ。世界が空腹だなんて、いままで実感したこと

もなければ考えるどころか想像したことすらない、とくに食べることで深刻なまでに困った経験のないオレからじゃ、どんなにがんばっても出てこない——“生々しい説得力”が。

「……………」

「……………」なんて、ガラにもなくちよつと真面目なこと言ってしまうしたね」

オレの無言をどう受け取ったのか、とたん壺さんはおどけたふうに「あはっ」と笑って、

「どうです？ 刀さん？」

有無を言わせぬ超高圧的な笑顔で、

「私の真面目で知性的な一面を知って、胸がキュンキュンうずいたりしちゃったりしましたか？」

強引に、いまの話を冗談めかして終わらせる。

承／第二十六話：ムシムシ尽くし（其の十三）

「も、ももうそろそろ、ふ“夫婦大食い祝事（決勝）”が、が、は始まるから、もも戻ってきてって」

とバツが呼びに来てくれたので、昨日と同じように三人で来た道を戻る。

村の中を歩くと、またもご声援が飛んできた。それらの声は諸々の事情から矢のごとくトランスフォームして、我が心身にズブリズブリと生っばい音をたてて突き刺さってくる。

——ので、逃れるように急ぎ足で進むことしばし。

メムス屋さんの前で、なにやら行ったり来たりを繰り返している拳動不審な人物と遭遇した。表情を隠すように目深にかぶられた丈の長い土色のフード付きコートが、その行動とあいまって怪しさを倍増させている。

本来なら無視してしかるべきだったが、しかしどうしてかオレはその不審人物に引っかかりを感じ、

「——あっ」

ふと昨日のことを思い出す。

昨日、なんの前触れもなく畦道で襲撃してきた人物の姿を。

丈の長い土色のフード付きコートを着ていたのだ。

あの“まんじゅうを見て逃げ出した襲撃者”も。

いま目前に居る不審人物と同じく——

「——むっ？」

いいかげんオレの熱い凝視に気づいたと思われる不審人物は、いぶかるように行ったり来たりを繰り返す足どりを止めて、

「……………」

しばし状況を飲み込むための間を置いてから、

「……………なっ！」

頭の上に『！』が出現しそうなほど驚き戸惑い、

「どうして、ここにっ」

ちよつと感度の鈍い警戒心を全開にして、隙の無い体構えをとる。なんか不審人物であることが残念に思えるくらい、とっても洪くてカツコイイ声であつた。

「……どうかしたんですか、刀さん？」

つないだ手をちよいと引っぱり、急に立ち止まった理由を壱さんが訊いてきたので、「かくかくしかじか」と簡単に現状をご説明した。

すると壱さんは「なるほど」と真剣な表情でうなずき、

「昨日は強がってもらうのを拒んだけれど、鼻腔に残留する蒸しまんじゅうの匂いが忘れられなくて、時が経つにつれて食べたいという思いが強くなり、本日いざ購入しに来た——と」

グツと力強く拳を握って、

「そういうわけですかっ」

まったく的外れと思われる理解を示す。

……一瞬でいいから、食欲を切り離して思考していただきたいものだ。

「刀さんは、私に“わたしノ自己ノヒトであること”を捨てると——」

不覚にも、我が脳内ばやきは外に漏れてしまっていたらしい。

「——そんな残酷なことをおっしゃるのですかっ！」

そこにありつただけの不満を詰め込んだがごとくほっぺをぷくつと膨らませた壱さんは、純情な乙女が感情を昂らせたときに放つ渾身のビンタがごとく、あらかじめ力強く握って準備万端スタンバっていた拳で強烈なアッパーカットを言葉と一緒に放ってきおる。

ズンッ！ とアゴに重たい衝撃を喰らい、口からではなく鼻から「ブモオッ！」と勢いよく空気が漏れた。危うく昏倒するかと思つたが、しかし我が脳ミソは強い衝撃で不具合を起こすほど緻密で繊細なハイスペックモデルではないらしい。残念なことに、意識はバツチリ保たれている。

「なっ！ お、おい、大丈夫か？」

不審人物に気をつかわれてしまった。

「らいじょうぶれす」

それにしても（食欲を切り離す）〃（わたしノ自己ノヒトであること”を捨てる）だなんて、さすがは壺さん、こちらの想像が及ばない超斜め上をナチュラルにゆくおヒトである。その食に対する執着、なんかもう尊敬に値するようなしないうな——もはや一般凡人なオレの価値観では推し測れない領域だわっ。

「ところで、ほんとうのところ、こほでなにしたてんすですか？」

オレは不審人物に問うた。昨日の今日であるからして、やはりここに居る理由は知っておきたい。まさか本当に蒸しまんじゅうを購入しに来たなんてことはないだろうし。

「まったく“ろれつ”が回ってないぞっ！ 本当に大丈夫なのかっ？」

ずいぶんと心配性な不審人物だ。

「らいじょうぶれすって」

「……………」

不審人物はなにか物申したそうな間を置いてから、

「なんだ、その、私は——」

と律儀に返答してくれる。

——が、その発言をさえぎって、

「なにごとですかっ！」

ご登場したのは、なにやら一升瓶のような物を手にした口エさんであった。側らにはバツの姿もある。

どうやらバツはいち早く不穏な空気を察して、いつの間にやら救援を呼びに行っていたらしい。かゆいところに手が届く、とっても気のまわる、じつによくできた子だ。

「ぬっ！ あっ、口、口、口、口エ……………」

口エさんの姿を見るや、不審人物は不審さに拍車をかけておおきようにたじろぎ、なにかとっても居心地が悪そうにソワソワしだす。

「え？ …… あ！ あなたっ！」

口エさんも口エさんで、不審人物の姿を見るや、目を見開いて驚きの声を上げる。不審人物とは対照的に、どこか嬉しそうだ。

——というか、なんというか、

「あふお……、つぬかことをおふかがいしましゅが、おふひやりはしえりはいかなにかすでか？」

口エさんと不審人物の態度を見るにつけ、どうにも初対面には思えなかったので、もしかしてお知り合いですか？ と素朴な疑問をお訊ねさせていただいた。

すると口エさんは、

「え、ええ」

なぜかオレに対して当惑の表情を向けつつ、ご返答くださる。

「——彼、ジンは、私の夫です」

……

……

……

「…………… ええっ！」

口エさん、人妻だったのおっ！

壱さんのアッパーカットよりも予想外な不意打ちに、思わずビツクリ、お口あんぐり。まさか現実でマスオさんみたいな驚きかたをしちゃった自分にも、それはそれでビツクリ——していたら、

「と、とトウお兄ちゃん」

いつの間にやら隣に移動していたバツが、なにかヒソヒソ話でもするように声をひそめて呼びかけてきたので、

「ん？」

オレは腰をかがめて、話を聴く体勢を整える。

「あ、あの、あのね——」

と自らの口元に左手をそえ、ちよつと背伸びをして我がお耳にコソコソとくすぐったい吐息を吹きかけてくるバツの話に、

「…………… ええっ！」

またもマスオさんみたいな驚きかたをしてしまった——けれども同時に、不審人物こと口エさんの夫であるジンさんに感じていた“引っかかりのようなモノ”の正体が知れた。

　　それは全体的に残念な空気をとまなうから、果たしてオレは、あえてハツキリと気づかないようにしていたのかもしれない。あるいは彼に対する、共感にも似た同情の念が無意識にそうさせたのか……。

　　ツミさんとバツと出会った宿場町にて壱さんは、朝冷えによる腹痛でただでさえ辛い状態の腹に下剤をもるという、まさかの外道を極めたようなおこないをなさった。その外道の直撃を喰らったヒトが、誰あるう、腹痛先生にして不審人物こと口エさんの夫であるジンさんだったのだ。

　　——とは言うものの、人物としての印象よりも、残念な状態ばかりが色濃く脳裏に焼きついていて、オレは、すぐに同一人物だと見抜けなかった。ゆえに、ずっと“引っかかりのようなモノ”を感じていたわけだが、どうやらそれは、畦道にて“まんじゅうを見て逃げ出した襲撃者”と接近遭遇していたバツも同じだったようで、いまさつき“彼”も同一人物だと気づき、そして“そうだ”という確信を得たらしい。

　　その確信というのは——挙動不審の雰囲気と同じだったから、というもの。

　　ツミさんとバツにとってはご両親の形見でもある“家宝の包丁”と“お食事処”。それらを奪わんと毎度イヤガラセに来ていたガラの悪い連中。そいつらの用心棒みたいな立ち位置に居たらしいジンさんは、しかし実際はイヤガラセに加担するわけでもなく、お食事処の前で行ったり来たりを繰り返して、ただただ挙動不審なだけだったようだ。そのときのかんじと、さきほどのメムス屋さんの前でのかんじが、バツいわくピタリ一致したのだそう。

　　なにかノドに引っかかっていた魚の小骨が取れたときのような、地味だけれど心地好いスツキリ感である。

「おや？ みんなそろって、いったいなにを——」

村の広場がある方向からツミさんが、額の汗を日光で爽やかにキラめかせつつ、ポニーテイルを揺らしながら小走りやってきた。どうやら“夫婦大食い祝事（決勝）”の会場セッティングを手伝っていたらしい。お疲れ様です。

「——て、えっ！」

ツミさんは驚くと同時に、守るようにバツを自身の背後に隠して、
「どうして、あなたがここにっ！」

威嚇するネコのような鋭い眼光を、ジンさんに向ける。

そんなツミさんの反応を見て、

「……あら？」

しかし口エさんは少々ズレのある感性で、

「面識がおりでしたか？」

自分の夫を知っているようなそぶりのツミさんに、心の底から意外を感じているふうな表情で訊ねた。

「おありもなにも——」

口エさんとジンさんが夫婦であることを知らないツミさんは、語りをオブラートに包むなんてことはせず、「かくかくしかじか」と面識がある理由を述べた。

——なにか、引き千切れたような音が聞こえた。

普段めつたに怒ったりしないであろう温厚な性格のヒトが、希に本気でキレると、それはそれは恐ろしい、ということを改めて実感した。

まさか、あの天使のごとき微笑みをくれる口エさんが、手に持っていた一升瓶のような物でジンさんの脳天ぶっ叩いたうえに、強制土下座の連打でジンさんの額を地面にドッカンドッカン打ち付けるなんて。タマゴが割れるみたいに頭の中身がポロリしちやいそうな、誰も望まぬポロリが発生しちやいそうな、そんな肝を冷やす、まさ

かの光景を、この惨劇を、いったい誰が想像できただろう。

怒髪天を突く勢いで怒れる、鬼の形相の口エさん。ウソぶっこいて祝事に出てしまったという負い目がオレにあるからか、彼女が全身から放つ憤怒の気迫に、思わず身が縮み上がる。べつに自分が怒りの対象になっっているわけではないのに、気配を殺して、自分がこの場に居ないようよそおってしまう。

そんな、危うく股間にある“マイ・蛇口”が水のトラブルを起こしてしまいそうな、居心地が心臓に悪すぎる状況から、自然な流れで逃るる公然たる理由をくれたのは、誰あろう、壺さんであった。

「なにやら深刻にお取り込み中のようですけれど……刀さん、私たちこそそろそろ“夫婦大食い祝事（決勝）”に――」

修羅場から逃れる理由として、“夫婦大食い祝事（決勝）”に出場するという既成事実、じつに最適なモノだった。まさか壺さんの望まれぬ功績に感謝する事態に陥ろうとは……。これぞまさしく不幸中の幸いだ……。いや、一寸先は闇――かな？

承ノ第二十七話：ムシムシ尽くし（其の十四）

——ともあれ。

そんなわけで今現在、オレと壱さんは“夫婦大食い祝事（決勝）”に出場すべく、会場になっている村の広場へと歩行進行中である。

「しよれにしへほ、しゅごはったれすね」

黙々と歩くのもアレなので、お隣にいらっしゃる壱さんへ時事ネタをふつてみた。

「すごかったですね——って、なにがですか？」

よもや、いまのさっきで訊き返されるとは思わなかったが、

「しやつきの——」

修羅場がです、とお伝えすると、

「ああ……」

壱さんは少し困ったふうな表情をしてから、

「すごく痛そうな音してましたね」

と苦笑する。

なにもあそこまでボコボコにしくたったいいですよ、と意を述べたら、

「私は、むしろ当然だと思いますよ」

真面目な顔で言い返されてしまった。

「家族が、夫が、他人様に迷惑をかけてしまったのですから、家族として、妻として、きちんと叱るのは当然のことでしょう？」

言っていることは間違っていないと思うけれども、果たして、さっきの撲殺未遂的なアレを叱る行為と考えていいのだろうか？

「“愛のムチ”というヤツですよ」

実際はムチじゃなくて鈍器と打撲でしたけどねっ。

“愛のムチ”の打撃力は、相手を思う気持ちの大きさに比例する

ものです」

ゆえに口エさんは、それだけジンさんのことを思っている——と
壱さんは言いたいらしい。

「だって“怒る／叱る”って、相手に対して関心があるからこそ、
偽りのない“感情／気持ち”じゃないですか」

静かに力強く断言する響きのある、けれどもそれゆえに気さくな
口調で、壱さんは自らの意を述べる。

「子どもが悪さしたら、たとえ他人様の子であろうと大人は“怒る
／叱る”でしょう？ ダメなことはダメって教えるために。それは
誰にとっても子どもは等しく宝で、大切な存在だから、よりよく成
長してほしいと願っているからこそ。つまり相手が大切だからこそ
“怒る／叱る”わけですよ」

相手をおもいやる気持ちがあれば“怒る／叱る”は成り立たな
い。それが壱さんの“怒る／叱る”に対する考えであるらしい。

カミナリおやじが稀有な存在になってしまったオレの育ちし現代
は、つまるところ、他人様の子どもに関心がない、誰にとっても等
しく子は宝ではない、おもいやりに欠ける、そういう世の中という
ことになるのだろうか？

あるいは、“怒って／叱って”くれるヒトに対する信頼が希薄に
なってしまったのか。

「——ですから、その……」

壱さんは一転して、どこか親とはぐれてしまった迷子を思わせる、
不安と切なさの混在した顔になって言う。

「……自覚があるのに“怒られ／叱られ”ないと、……ちよっぴり
寂しい、じゃないですか。本当は自分に関心ないのかなって、そう
思えてしまっただけ」

その心情は、経験があるからよくわかる。

まだ小学一年生だった頃、オレは親にかまってほしくてシヨボイ
悪さをした。トイレの便座とフタを瞬間接着剤で接着して使用不能
にするという、よくよく考えれば自分も非常に困るお粗末極まりな

い悪行である。

当然のように即刻その悪行は親の知るところになるわけだが、
「欲しがってたゲーム機、ソフトも一緒に買ってやるぞっ！」

そう言って我が両親は、じつにあっさりと事を流した。そのときの、ふたりの酔っ払ったふうなニヤニヤ顔は、いまでも鮮明に憶えている。

お咎めなしどころか、気持ち悪くすらある寛容で寛大な対応に、しかしオレはまったく嬉しさを感じず。目の前に親父とお袋は居るのに、どうしてだか“気がつけば公園でひとりぼっち”な感覚が胸の内にシクシク湧いてきて——耐え切れず、オレは泣き喚いた。

そんなに当選した“ロトくじの券”がいいのかよつ、と。

寛大と無関心は、やっかいなことに、とても似ているのだ。それを受ける側がどう取るかによって、どちらにもなりえてしまう。

……まあ、いまにして思えば、親父とお袋が酔っ払いみたくニヤニヤして理由も、気持ち悪いくらい寛容寛大になれた心情も、理解できなくはない。

当選金額——五十七万四千六百円。

クソガキのショボイ悪さなんぞアウトオブ眼中だよねっ！

「……………」

金に目がくらんでニヤニヤしている父親と母親の姿という、若干トラウマな光景を思い出して、ほんのちよっぴりホームシック混じりの残念な気持ちになっていたら、

「……刀さん」

意を決したふうに、けれど、もじもじしながら、壱さんが訊いてきた。

「刀さんは、“怒らない／叱らない”んですか？」

……………なにを？

「頭が、おバカになってしまったことを」

予備動作なしで、バツサリ斬り込んできますねっ！

まあ、自分の脳ミソが低スペックであることは否定できない。と

いうか否定するための材料が悲しくも残念ながら存在しないので認めるしか選択肢がないわけです……がっ！ なしてこのタイミングでオレは、勉強に勤しまなかった過去の自分を“怒らねば／叱らねば”なんのですかねっ？

「……ですから、その、さっきから刀さんの“ろれつ”がまわっていないのは、私の一撃で頭がやられてしまったのが原因と思われるわけ……、私は“怒られて／叱られて”当然なわけで……ごめんなさい」

どうやら、さすがの壱さんも気にしていたらしい。

まあ事実として、さっきの強烈なアッパーカットが原因なわけだが。しかしオレの頭はどうにもなっていない。低スペックでも正常に稼働中である。喋りがちょっとヘンなのは、ガツンと喰らったときに噛んでしまった舌をかばいながら発音して喋っているからだ。

「そう、なんですか？ 私はてつきりやってしまったかと……」

どこか「ほっ」としたふうにおっしやる壱さん。

舌を噛んでしまったので、まったく痛くなかったというわけではないけれど、いままで喰らったダメージと比較したら、こんなのツバつけときゃ治る程度の超軽傷だ。やつちまったと言うならば、そしてやったことを気にするのならば、いきなり我が口に拳を突っ込んできたときとか、軽いノリで地獄突きかましてきたときとか、泣かせてしまったのではなからうかと本気でうるたえてしまった超絶演技な泣き芝居のときに、少々でいいから、していただきたかったわっ。

「でも、刀さんが舌を噛んでうまく発音できなくなってしまったのは、やはり私のせいですから……ここは、きつちり責任を――」

なして壱さん、いまに限って妙に律儀なのっ？

「だって、“律儀者は子たくさん”と言うでしょう？」

……まあ、律儀なヒトは遊び歩いたりせず家庭を大事にするから自然と夫婦の営みがバッチコイッ！ となつて子宝に恵まれる、とかって言いますけど……。

「だからですっ」

なにがっ？

そんなキツパリ言われましても、まったく答えになっておりませんよっ！

——てか壱さん、なんであたりまえのようにオレの頭部を両の手でガッチリ挟んで固定していらっしやるんですかねっ？ ビックリするぐらいピクリとも自分の意志で頭が動かせないんですけどっ！

「ですから——」

壱さんはオレの頭部をグイと引き寄せ、吐息のかかる距離で言う。
「責任を取るために」

いったいどんなふうにつ？ 具体的に詳細をお聴かせ願いたいっ。
「刀さん、心の内でおっしゃっていたじゃないですか、“こんなのツバつけときゃ治る程度の超軽傷だ”って」

なにその限定的過ぎる超高感度な以心伝心っ！

……って、いや、まあ、“ろれっ”がまわっていないオレと難なく意思疎通できちゃう壱さんですから、いまさら驚くことでもないですがね。うん。てか、そこを気にしてもしょうがない。

「ですから、せめてそれくらいは私が“やるべき”かと思ひましてこれっぽっちも具体的じゃないけれど、いたって真摯にお答えくださる壱さん。

そんな壱さんの真面目な表情が近くて、不覚にも、なんだか妙にドキリとしてしまった。

——のは、一瞬の気の迷い。

迅速に覚める。

そして改めて、いまここにある状況を認識した脳ミソが、常識にとらわれない壱さんだからこそやりかねない“まさか”な可能性を脳裏によぎらせる。

……いや、さすがにそれはないだろう。

とは思うものの、その可能性を完全に否定することはできず。なのでここは完全否定するためにも、あえてお訊ねさせていただこう。

壱さんっ、“やるべき”って、なにをですかっ？

「そんなの、決まってるじゃないですか」

あたりまえのことを話す口ぶりで壱さんは、

「ツバをつければ治る患部に、ぺろっとツバをつけるんですよ」

そんなことを言っつて、イタズラっぽく微笑み、チロリと艶な舌をのぞかせる。

アナタはもつと常識にとらわれてえーっ！

その限りを知らない“まさか”の発想力には、ビックリ脱帽ですけどっ！

そんな“まさか”を事前に予想しちゃった自分には、なんかガツカリですけど……。

——ともあれ。

壱さん、ご自分がなに言っちゃってるか正しく理解しておりますか？

「……？」

怪訝そうに眉根を寄せて壱さんは、小首を傾げる。

「そのつもりですけど。……どうしてそんなこと訊くんですか？」

どうしてっ？

どうしてっつてアナタやっぱり自分の言ってることわかってないようですねっ。

オレが負傷したのは舌なわけですよ？そこにツバつけるって、

それってつまり“イントウ／into”するってことじゃないですかっ！さすがにダメでしょ、いろんな意味でっ！

「それは……」

壱さんは一気にトーンダウンして、しゅんとなる。

「私のがばっちいから生理的にダメと……」

なぜにアナタはあえて厄介な解釈をなさるのっ。言っつてませんよ、そんなこと。

「じゃあ、なにがダメなんです？」

そこは訊かずに察していただきたかったっ。

というか、どうしてそこを察してくださらないっ。

いまここは村の道の真ん中なわけですよ？ さっきから村に住まう方々の好奇に満ちた眼差しが全身に突き刺さり続けてる、とっても公衆の面前なわけですよっ？

「なんですかそんなこと。べつに恥じるようなことしてないんですから、堂々としたらいいんです」

壺さんが鉄のハートをお持ちなのは、重々承知しております。けれどもそれを基準に物事を考えないでいただきたい。これ以上こんな状況でなにか（主に“イントウ／into”なこと）やらかして注目を集めてしまったら、こっ恥ずかしさに耐え切れなくなつた脆弱なマイ・ハートが新しい“なにか”に目覚めてしまうわっ。

「傷も治つて、新境地も開拓できて、まさに一石二鳥ですねっ！」
恐ろしく前向きなご意見、どうもありがとうございます。

——でもね、そもそも論、これだけは述べさせていたきたい。
口内で唾液の漬物状態な舌に、わざわざ“イントウ／into”してまでツバをつける意味はないでしょ、と。

「増量してさらにヒタヒタにすれば治りも早く——」

——なりませんよっ。

いや、唾液には身体を守る成分が含まれているから、量が多いほうが口内の清潔が保たれるって話は聞いたことありますけどね。でも、それと治癒速度はあまり関係ないですし、なにより“自分の”で事足りてます。

壺さんのお気持ちだけはありがたく、そりゃあもう末代まで語り継いじゃうくらいありがたく受け取らせていただきますから、いまはとりあえずオレの頭部を解放してくださいませんか？ 周囲の視線が突き刺さってるうえに、壺さんの顔が近すぎて、なんかもうダメな感じに心臓がドキドキしちゃって、そろそろ身と心が限界です。

「……………わかりましたよう」

どうしてだか壺さんはぷくっとなほっぺを膨らませて、なにかおも

しろくなさそうに、我が頭部の拘束を解いてくださる。

オレは緊張して強張った首筋を軽く揉み解しつつ、自分の意志で自由に首が動かせる喜びをしばし味わう。

「ところで、刀さん」

ぶーたれ顔から一転、というか急転、壱さんはなにかおもしろいモノ見つけちゃったヒトのごとく微笑みながら話しかけてきた。

あまりにも急な変り身っぷりに、どこことなく不気味なモノを感じつつ、けれども不機嫌でいられるよりは百倍よろしいので、

「ふぁひ？」

そのまま話に乗っかることにする。

「人体には“失神するツボ”があるんですよ、ご存知でしたか？」

「ふえ？」

承ノ第二十八話：ムシムシ尽くし（其の十五）

「――はっ！」

なんかうつたた寝しちゃったときのような意識の空白が一瞬あった気がするが、

「おおっ！」

そんなことよりも、鼻先が触れるくらい間近に壱さんの顔面があることに驚いた。

「あの……壱さん、なにをしていらっしやるんですかね？」

至極当然な問いである。

「なにを、って」

壱さんは困ったふうな微笑みを浮かべて、顔を離し、

「素晴らしく豪快に転んでなかなか起き上がる気配のない刀さんを、甲斐甲斐しく助け起こそうとしているんですよ？」

なにぞ意味のわからないことを、幼子に言い聞かせる口調でおっしゃる。

「……はい？」

まったくもって、状況がのみこめない。

けれども、どうやら自分は道の真ん中で横たわっているらしいということは、バストアップ画な壱さんの背景に青空が広がっていることから察せられた。まあ、だからこそ余計にわけがわからないのだが。

しかし、いまは湧き起こる疑念と格闘するよりも先に、とっとと身を起こそう。

「ありがとうございます」

壱さんが差し伸べてくれたお手を拝借しつつ、起き上がる。そして改めて、

「んゝ、転んだ覚えなんてないんだけどなあ……」

湧き起こる疑念との格闘を開始する。自らの意志で自由に動かせる首を、惜しげもなくひねって。

「転んだときに頭でも打って、すっかり記憶を飛ばしてしまったんじゃないですか？」

「ずいぶんとまた軽う〜く言ってくれますねっ。」

「すっかりで記憶喪失なんかになりたくないですよ。てか、なりません」

「じゃあ、ちゃっかり？」

言い回しは似てますけどね。

「なんですか、ちゃっかり記憶喪失って。」

「壺さんが“失神するツボ” どのって言ってたところまでは、憶えてるんですけど……」

逆に言うと、そこから先がピンボケしているわけで。

正直あまりヒトを疑って物事を考えたくないのだが、言動と状況から推察するに、というかどう考えても――

「言ってますよ、そんなこと」

ひとつの答えを得ようかというその瞬間を、“疑わしきそのヒト” は狙ったようにぶった斬ってきた。

「え？」

「ですから、私はそんなこと言っていないと述べているのです」

壺さんは断言するように胸を張って言い、

「なんですか“失神するツボ” っ。初めて聞きましたよ」

心の底から不思議そうに眉根を寄せる。

「やめてくださいよ、それだとまるでオレが妄言を言ってるみたいじゃないですかっ！」

「妄言とは言いませんけど……、頭を打ったとき“一瞬の夢”を見たんじゃないですか？」

一歩どころか半歩すら退くことなく壺さんは、さらりとそんな返しをしてきおる。

「なんというか、いまの壺さんにこそ“ちゃっかり記憶喪失” とい

言葉がピッタリなんじゃなかるつか。

「……………」

あまりにも頑強な精神状態の壱さんを相手に、果たしてオレには言い返すべき言葉が思いつけない。

「さあ、さっ、刀さんっ」

我が沈黙をどのように受け取ったのか。…………まあ、どう考えても壱さんにとって好ましいほうにしろうけれども。壱さんは鼻息を「ふがふが」と荒げながら、

「些細な事柄に囚われてまごまごするのは、ひとまずここまでにして、いまは“夫婦大食い祝事（決勝）”の会場へ急ぎましょっつ！」
正直ちよつと引く感じの気迫を全身からみなぎらせて、我が手をむんずとつかみ、

「さきほどから美味しい匂いが食欲を刺激して、私っ、もう辛抱たまりませんっ！」

溢れ出る唾液をじゅるりとすすって、美味なる匂いのする方向へ力強い一步を踏み出す。

脳ミソが混乱している本人としては、まったく些細な事柄ではないのだが……。しかしだからと言って、“食”に突き動かされている壱さんをどうにかできるわけもなく――

承／第二十九話：ムシムシ尽くし（其の十六）

「私は、私の胃と腸に誓ってっ！　正々堂々、美味しくいただきますっ！」

どうにも釈然としない我が心情などおかまいなしに、“夫婦大食い祝事（決勝）”は開始された。なぜか完全にこの場の主役になっている壺さんの、無駄にカリスマ的な宣誓によって。

夫婦であるとウソを吐いて祝事に出場してるのだから、この場の主役になってしまっただめだと思っただが……。なんというか、これも人徳というやつだろうか。それとも自然体でウソが吐けるヒトほど人心掌握がお上手なのだろうか。

——まあ、それはそれとして。

お祭り効果によって妙にテンション高く盛り上がる“夫婦大食い祝事（決勝）”だけれども、実際やってることは蒸しまんじゅうをひたすら食すという行為のみで、これといって語るほどのドラマがないので、ここは端的に、結果だけ述べておこう。

本日、壺さんは“生ける伝説”となった。

承／第三十話：ムシムシ尽くし（其の十七）

「……どうして、手拭いなんだろう？」

会場からの帰り道。ふと疑問に思った。

ともすれば夫婦限定の大食い大会にしか思えない“夫婦大食い祝事”で、望まぬ名誉とともに得た“モノ”である。

両腕をいっぱいに広げたよりもだいぶ長い、白の手拭い。

やったことが“食べる”だけであつたとしても、収穫祭の意味ある行事のひとつだったので、オレはてつきり勝者には、なにか“食”に関連したモノが大量に贈られたり、あるいは儀式的な使命というか役目が与えられたりするものだと思っていたのだが、しかし実際に贈られたのは称賛の言葉と、なぜか白の手拭いだった。

参加賞かとも思つたのが、他に出場していた方々には贈られていなかったもので、どうやらこれは勝者限定の品らしい。

手拭いを贈ることに、なにか意味があるのだろうか？

あつたとしたら、その意味とは？

あえて気にしなければ気にならないような、これこそ些細な事柄だけれども、気にしちゃつたので、とても気になるのだ。

——断じて、断じてっ、雰囲気のにまれてちよつとお祭りが楽しくなつちゃつて、結果的に壱さんのご活躍に拍車をかけてしまった自分の、重大な落ち度から逃避しようとしているわけではない。

なんだろうねっ、手拭いを贈る意味って？

“厄除け／厄落とし”ですよ」

お隣を歩く“生ける伝説”さんが、つないだ手をちよいと引っぱり、

「手拭いは“厄除け／厄落とし”の道具でもありますからね」

とオレの知らぬ手拭いの一面を教えてくださいださる。

「へえー。でも、それなら出場した全員に贈ってもよさそうですね」

むしろお祭りのには、そのほうがよろしいと思うのだが。

「それはですねー」

新たに憶えた知識を披露する子どものごとく、壱さんは楽しげな得意顔で言う。

「夫婦大食い祝事」の勝者に贈られる手拭いは、この土地の神様から与えられる“神聖な証”でもあるので、勝者しか受け取れないんですよ」

「神聖な証」……なんですか？ 手拭いが？」

「そうなのですよ——」

脳内エンジンの回転数が上がってきたのか、とても冗舌上機嫌に説明してくださる壱さんなのだが、少々回転数が上がり過ぎているようで、まさか“収穫祭の起こり”から語りだす。

じつに興味深いお話なのだが、あまりにも長いうえに正直なところ八割くらいに言ってるのかわからないので、ここは断腸の思いで、ざっくりと理解できたことだけ述べておこう。

なんでも、“夫婦大食い祝事”の勝者は、土地の神様に“選ばれた者／認められた者”であると考えられているらしく。勝者に贈られる手拭いは、“厄除け／厄落とし”の道具であると同時に、神様が“選んだ／認めた”証しとして与える“神聖な証”でもあるらしい。

「——つまり」

壱さんは人差し指をビツと立て、

「夫婦の“幸せ”を願っておこなわれる祝事で勝つということとは、その“幸せ”に、神様の“おすみつき”がいただけるということなのです」

と学問を説く教師のような口調で言っ、長かったお話を締めくくる。

果たして夫婦であるとうそを吐いて祝事に出たオレと壱さんが、“おすみつき”をいただいちゃってよかったのかな……。

とは思うものの、いまさら神様の判断に異議を申し立てる度胸は

なく。

この土地の神様はとっても御心が広いサービス精神の権化なのだろう、と思うことにして気にしないことにする。

なにごとも、気にしなければ気にならない。

これぞ十円ハゲと無縁な頭皮で生ける極意であり秘訣であり基本である。

「――それはそうと壺さん」

語ったたと満足気な、ほくほく顔に、

「どうしてそんなに、この村の収穫祭に詳しいんですか？」

オレは素朴な疑問を投げかけた。

この村の出身というわけでもないのに、なぜ得意気に“収穫祭の起こり”をべらべら語れるのだろう？

「じつは私、これでも旅人なんですよ」

ちやかすように微笑んで、壺さんは芝居がかったヒソヒソ声でおっしゃる。

「ご存知でしたか？」

ええっ！ てつきり“流浪のフードファイター”だと思ってましたよっ！

――なんて、うつかり言うと話が長引きそうなので、

「ご存知ですけど……。それと詳しいことと、なにか関係あるんですか？」

「とつてもすぐく関係ございますともっ」

喰い気味に、勢い込んで壺さんは言う。

「旅人が旅する理由。旅の醍醐味。それがなんたるか、刀さんわかりですかっ？」

おわかりですかと問われても、修学旅行くらいしか旅っぽいことの経験がないオレに、本物の旅人の心がわかるわけない。

「んー、その土地の個性ある“美味しい味／郷土料理”に出会える――とかですか？」

世の旅人がなにを思って旅をするのかはわからないけれど、“壺

さん”という旅人的にはこれで正解な気がした。

「非常に惜しいっ！」

壱さんは自らの額をぺしやりと叩いて、

「けれどさすがは刀さんっ！」

語尾に“音符の記号”が付いてそうなノリで、

「ほぼ大正解ですっ！」

喜色満面の残念顔をする。

「……………えっと、……………つまり、どういことですか？」

「“家庭料理の味”は家庭ごとで異なり、食いしん坊な旅人は“その味”を知りたがる、——ってことです」

「おおっ。壱さんがいったいなにを伝えたいのか、さっぱりわからない」

「あら？」

壱さんはわざとらしくズッコケて、

「刀さんにならって、我ながら的を射た比喻を言っただつたのですか……………」

笑いにスベツたヒトのごとく、なんとも渋そうな微笑を浮かべる。これっぽっちも“意”を回収できない脳ミソで、……………なんか、申し訳ない。

「つまりですねっ！」

己の中のスベツた感を払拭するように声を張って、壱さんは言う。「“異なる文化／異なる価値観”を知ることが、旅人が旅をする理由であり、旅の醍醐味である、——ということなのですよっ！」

「ああ、なるほど」

言われてみれば納得な、至極当然とも言える“正解”だった。

「だから旅人である壱さんは、この村の“文化／価値観”である“収穫祭”を知っている——というか“知った／学習した”、と。…

…でも、いつの間に？」

出逢ってからほぼ常時、壱さんとは行動を一緒にさせていただいているが、しかし旅人として情報収集しているお姿を拝見した覚え

は、どうにも思い当たらない。なにか喰ってるお姿ならば、望まずとも瞬きと同時に思い出せるのだが。

「おやおや？ 自分の知らないところでの“妻の行動”が、とっても気になってしまふ感じですか？」

壱さんはニヤけた口調で言うや、つないだ我が手腕を胸の前で抱くようにして、

「ダ・ン・ナ・さ・まつ？」

と“猫なで甘々ボイス”を一音発することに、グイと、グイとこちらに身を寄せて——というか、身を押し付けて、“圧”をかけてきおる。

旦那さまという響きに、思わずドキリと心の深いところをわしづかみされてしまい、

「——あ」

壱さんの“圧”に対応するのが遅れ、

「ちよっ」

その結果、

「おぶぼべぶおー！」

足がもつれて、オレは地べたにダイブをかますことになってしまった。

……なんだろう。極めて最近、ものすごく頻繁に、これっぽっちも意味なく、地べたさんと「こんにちは」しまくってるような……。どうにも不要な経験値を稼いで、いろんな意味での“打たれ強さ”を体得してしまった気がしてならない……。

だ、だからって、べ、べつに“打たれる悦び/Masochism”に覚醒しちゃったとかじゃ、ないんだからねっ！ か、勘違いしないでよねっ！

「あらあら、大丈夫ですか？ 旦那さま？」

どうでしょう……。いま、ものすごくダメな方向に傾いてしまった気がします……。

——というのは、ちよいと脇に置いておいて。

壱さん……、“ちゃっかり”というか“しつかり”自分は手を離して、オレと一緒に転ぶのを回避していらつしやるあたり、もはや“さすが”としか言えません。

こちらを気づかう言葉とともに差し出された、壱さんのお手に、

「……ありがとう、……ございます」

どうにも釈然としない既視感を覚えつつ、

「……あの」

けれどもその手を借りて、オレは身を起こし、

「壱さん」

この際だからハッキリと、思うところを述べさせていただくことにした。

「その、“旦那さま”って呼ぶの、ご遠慮願いたいのですが」

「……イヤ、でしたか？」

ちよつと不安そうな物問ひ顔で、壱さんは確かめるように訊いてくる。

「イヤというか」

むしろ胸はドウキドウキ高鳴っちゃってるんですが、しかしだからこそ、ご遠慮願うわけです。己が心臓の、正常な鼓動のためにっ。「名前で呼ばれるほうがしっくりくると言いますか、好ましいなあーと」

いや、まあ、ウソ偽りなく言えば、ただ単純に、こっ恥ずかしいだけなのだけでもね。決して、イヤではない。それは断言してもいい。けれど、どうにもこっ恥ずしい。どうかご理解願いたい、この微妙な“野郎心／おとこ心”を。

「……そうですか」

なぜだか壱さんは少々残念そうに眉尻を下げて、しかし、

「わかりました」

しおらしくコクリと小さく首肯し、理解を示してください。

ちようどよいので、ここで閑話休——

「では、刀さん」

——題なんて間を与えてくれることなく、

「ご要望通りお名前で呼ぶ代わりに、私のお願いをひとつ叶えてくださいな」

壱さんはなんぞわけのわからないことをおっしゃる。

決して“タダ／無料／得なし”では転ばないその揺るぎない姿勢は、じつに壱さんらしい。まあ、実際に転んでいるのは、しかも毎度“タダ／無料／得なし”で転んでいるのは、オレなのだけでも……。それに、なんでギブアンドテイク的なことになっているのか、いまいちまったく理解が追いつかないけれども……。

「えっ……、と……、その……、ちなみに、そのお願いというのはなんでしょう？」

拒否したところで事態が好転するとは思えないので、そもそも拒否権がオレにあるとは思えないので、諦めというよりは無抵抗主義的に訊いてみる。

「私のことを“オレの嫁えええっ！”——って高らかに言ってほしいです」

おっ、おう。訊かなきゃよかったぜ！

下唇に人差し指を当てて、まるでお菓子をねだる子どものように「——ほしいです」と言う壱さん。その絵図らだけは、断じてその絵図らだけは、とてもキュートである。

絵図らだけはねっ！

口から出てきた言葉の、その“残虐性／残酷性”たるや、もはや潔癖的使命感のあるどこその集団やらどこその行政機関が“発言／表現／言論”に規制を掛けんと動き出すレベルである。健全な青少年であるオレの、健全な心身と健全な人格形成を護るためにねっ！

……けれど、残念無念なことに、オレの現在位置は日本国ではない。法律も条例も不可侵な、異世界である。法律や条例の守備範囲内の“日常／現実”とは違う、法律や条例の守備範囲外の“非日常／非現実”が、守備範囲外であるべきの“非日常／非現実”が、オレの現在位置なのである。

——と現実逃避的なことを考えてみても、結局はそこにある“事実／現実／困難”と向き合わなければならぬわけだ。

「なぜに壱さんは、オレに“そんなこと”言わせたいんですかね？」
拒否できないにしても、せめてそれをやる理由っぽいモノは存在してほしい。

「“そんなこと”ではありませんっ！」

むうと眉根を寄せて壱さんは、

「せっかく夫婦になったのに、刀さんたらぜんぜん“それらしいこと”を言ってくれないんですもの」

と、ぷりぷり不満げに言っ、ほっぺをぶくつと膨らませる。

だってそもそも夫婦じゃないですもの、と言いつ返しただけでも、少なくともこの村では、オレと壱さんは夫婦ということになっているので、しかもそのウソが引き返せないところまで行ってしまうので、公衆の面前ではなんとも言えなく……。だからといって要求されていることもまた、公衆の面前ではおこない難く……。けれど選択肢も拒否権もオレにはなく……。

「い、壱さんは、オレの、よ嫁……」

「……………え？　いまなにか言いました？」

わざとらしく耳に手をやり、おおげさな口調で訊き返してきおる壱さん。ニヤニヤと笑みの浮かぶ、なんとも楽しげなお顔である。

「い、壱さんはっ、おオレの嫁っ」

「……………え？　いまなんと？」

見ることが得意でない代わりに、空間把握能力やら聴力やらがずば抜けて優れている、心の声まであっさり聴き取る壱さんである。オレの言ったことが聞こえていないわけがない。というか、その笑みあるお顔からして確実に聞こえていると判断できるのだが――

生命の危機的状況において身体のリミッターを解除してその場を切り抜ける、いわゆる火事場のクソ力があるように。精神の危機的状況において精神のリミッターを解除してその場を切り抜けることがヒトにはできたりする。

オレも“オトコ／男／漢”じゃけえ！ばっちやつちやるばいっ！
という、いわゆる“自暴自棄”である。

なに言ってるんだろう自分は……。

なんかもはや自分を見失いつつあるなあ……。

なんてことを薄っすら残った冷静さで思ったりするが、もうね、
もう、どうにでもなれっていう心情なのさ……。

だからオレは、たらふく肺に空気を吸い込み、ストレス発散のため
に大声で叫ぶがごとく、その言葉を口から発した。

「壺さんはああっ！オレのおおっ！嫁ええええええっ！」

「それでなんでしたっけ？私がいつ“収穫祭”について“知った
／学習した”か、でしたっけ？」

「スルーはイヤアアアアアアアアアアアアアア——」

いままさに、健全な青少年の健全な精神と健全な人格形成が斬り
殺されました。バツサリと。スッパリと。容赦なく。

ちなみに、壺さんがいつ“収穫祭”について“知った／学習した”
のかという疑問の答えは、「刀さん気持ちよさそうに寝たまま起
きてくれなくて、とっってもおヒマな時間ができたので、その間に」
とのこと。

正直、失ったモノが大きすぎて、もはやどうでもいいお話でした
ありますがとうございました。

承ノ第三十一話：ムシムシ尽くし（其の十八）

——と、そんな具合に、好くも悪くもキャツキャウフフしていたら。

いつの間にやら、ロエさん宅であるところのメムス屋さんがもう目と鼻の先である。

そういえば、ロエさんとジンさんは“あの後”どうなったんだろう……。とくにジンさん——の容態が、こつちが引くくらいロエさんにボツコボコにされていたジンさんの容態が、とても気にかかる。“いのち／生命”的な意味で。

そんなことを考えていたからなのか、とても既視感を覚える光景を“そこ”に見た。

ひとりの人物が、メムス屋さんの店先に突っ立っていた。濃紺が主色の民族衣装っぽい服を着て、右手には身の丈より長い棒のようなモノを持ち、いい具合に大根がすりおろせそうな坊主頭をしている。

まんじゅうを販売しているお店なので、店先にヒトがいることそれ自体に不思議はない。しかしその人物は、どうにも雰囲気からしてまんじゅうを買いに来たというふうではなく。かと言って、ジンさんのように理由あって入店をためらっているというふうでもなく、あえて言うなら——そう、誰かと待ち合わせをしているふうであった。

柔らかな表情で、その人物はこちらに向かって軽く頭を下げる。道でたまたま会った知人にする“それ”と同じように。

オレは意もなく反射的に頭を軽く下げ——

壱さんは、オレとその人物との間に割ってはいるように一歩前へ出る。ついさっきまでふにやふにやに緩んでいたのがウソのように、

いまはどこか研ぎ澄まされた刀を想わせる凜として冷たく鋭い風格ある表情をしている。

「お久しぶりです、壱さん」

坊主頭の人物が、人好きのする温和な音声で言った。

「その声は……、シズですか」

壱さんは表情を和らげることなく、けれど口調だけは親しげに、
「久しぶりですね。できれば、このまま二度と再会したくありませんでしたが」

と答えた。ほんの一瞬だけ、どこか“痛む／傷む／悼む”ヒトのような表情が見えた気がしたが……たぶん、気のせいだろう。

「ウソ偽りなく言えば、私も“それ”を切に願っておりますが――

――」

坊主頭の人物――シズさんは、空のその先を見上げ、

「“現実／運命の女神”は、しばしば酷な演出を好むようです」と苦笑を浮かべる。

ふたりの、いまのちよつとしたやり取りの間に、オレはどこか遠くに置き去りにされたような“近くて遠い気分”になり、

「えつと……お知り合い、ですか？」

会話の中に“明確な答え”があつたことを、あえて確認するように、壱さんに訊いてしまった。

「ええ」

壱さんは、壱さんらしからぬ感情の薄い声で、

「かつて」

ただ淡々と“ひとつの事実”を告げるように、

「友でした」

そう、教えてくれる。

なぜに過去形？

んー、再会したくなかったと言う壱さんからして、壱さんがなにかやらかして、ケンカ別れをしてしまったから気まずい――とか、
そういう？

「ところで——」

シズさんはオレのほうを見やり、

「お名前を、お訊ねしてもよろしいですか？」

他者を安心させる柔らかい笑みで、訊いてくる。

「え、ああ、えつとオレは——」

果たして“磨磨佐刀ノとぎまさとう”と自らを貫いて名乗るか、“刀ノとう”と“こちらの世界”に合わせて名乗るか、自分としては重大な問題なので、少々逡巡していたら、

「彼の名前は、刀さん。旅の道中、出逢いましてね。意気投合して向かう先も同じだったので、ちよつとご一緒しているんですよ」

と壱さんがオレの名乗りをぶった斬って、

「ただそれだけの関わりの“ヒトノ他人”です」

きつぱりと、そう紹介してくださる。

……どうしてだろう。胸の奥が、ちよつと苦しい。

「そうですか……。それにしては、ずいぶんと仲がよろしいように思いましたが、いましがた、とても興味深い宣告が聞こえてきましたし」

と、シズさんは思うところある顔つきをする。

「適度な遊び心は、円滑な人間関係を築くために必要でしょう？」

さらりと、あっさりと、流すように壱さんは言った。

「そうですね——」

シズさんは感慨もなさそうに軽く首肯してから、

「では、壱さん。そろそろ、“現実ノ運命の女神”が好む演出の、

“つもる話”を済ませてしましましょう」

話題を、身にまとう雰囲気ごとく一変させる。急に、近寄り難いヒトの“それ”になったのだ。柔和を思わせる表情は、同じなのに。

「……ええ」

壱さんは諦めるヒトのような顔をしてから、

「そうですね」

と同意を示す。

なんのこつちやいまいち理解が追いつかないオレであつたが、

「ここでは村の方々に迷惑ですから、場所を変えましょう」

という壱さんの言葉を聞いて、ひとつ察することができた。

きつと“つもる話”は、拳で語り合うほうの“話し”なんだろうなあ、と。

「刀さんは、先に帰っていてくださいな」

ふと、いつもの柔らかな表情に戻って、けれど突き放すように言う壱さんに、

「いえ、ご一緒させていただきます」

さもそれが当然のことであるかのように、オレは告げた。

常識的に考えて、久しぶりに再会した方々の“つもる話”に部外者が立ち入るのは、相手の承諾があれば完全にダメなことではないだろうが、しかし確実に迷惑極まりない行為である。——だから、
「不粹ですね」

壱さんが責めるふうにおっしゃるのも至極当然のことであり、百も承知のことである。——と、承知しているくせに言ってるのだから、なおのことよろしくない感じだが、

「初めて気づいたんですけど……、どうやらオレはかなり嫉妬深い性格らしくてですね……。ほら、壱さん言つてたじゃないですか、『自分の知らないところでの“妻の行動”が、とつても気になつてしまう感じですか？』って。——もうオレ、この時点で気になりまくりで、どうにかなつてしまひそうなんですよっ！ なぜって？

壱さんはあぁっ！ オレのおおっ！ 嫁ええええええっ！ ですからあぁあぁあぁっ！」

果たしてオレに、“なにが”できるかはわからないし、“なにが”できるのかもわからない。いざ実際に行動できるかもわからない。——だが、よろしくないことが起こる可能性のある場所へ、「はい、わかりました」と壱さんを送り出せるほど、オレは壱さんに無関心ではない。……けれど、たぶんオレのこの行動は、正確には、厳密には、壱さんのためではない、と思う。……いや、確信を

持つて、壱さんのためではないと言える。そもそも自分より圧倒的に強い壱さんに対して“ため”なんて、おこがましいにもほどがある。結局、自分がイヤな思いをしたくないのだ。自分の知らないところで、もし万が一にも“無関心ではいられないヒト／壱さん”が“どうにか”なってしまったら、という限りなく“無／ゼロ”に近い“有／イチ”の可能性を、未来を考えられる生き物であるがゆえに、イヤでも想像できてしまうから。

なにも“好ましくないこと”が起こることなく、“迷惑極まりないヤツ”という称号をオレが獲得するだけで終了してくれたら、それでいい。いや、それがいい。

けれど、“現実／運命の女神”が好む演出は――

「“そちら側”にも“見届け人”があつたほうがより公平だと思いますので、私に反対の意はありませんよ」

シズさんは、壱さんから視線を外すことなく言った。いまいちよくわからない言い回しだが、オレが“つもる話”に一緒にしても問題ないということだろう。

そして壱さんは、肯定の言葉も否定の言葉もなく、

「……………」

ぷいとそっぽを向いて、ほっぺをぶくつと膨らませている。まったくもつてよろしいご機嫌ではないようだが、でもオレには、さきほどの刀じみた表情と違って、そこに微笑みがあるように見えた。

――そして。

壱さんとシズさんとオレは、場所を移す。

承／第三十二話：ムシムシ尽くし（其の十九）

その場所は――

壱さんが己の拳をオレの口に突っ込んできた場所であり、壱さんが握ってくれた“塩むすび”と一緒に食べた場所である、畦道であった。

「先だつては、勘付かれてしまったうえに、想定外の邪魔がありました――」

シズさんは背を向けて十歩ほど歩みを進め、壱さんとオレの前方へ出て立ち止まり、向き直ってこちらを――いや、壱さんを見据えて、

「――今回は、“与えられた使命”を果たせそうです」

そう言つて、身の丈より長い棒の先端に手をやり――刃を出現させる。刃の長さは、開いた手の手首から人差し指の先端ほどで、棒の全長と比べたら極短い印象がある。

どうやら、シズさんの“それ”は、“槍／殺すための道具”だったらしい。

恥ずかしくも迷惑なことを迷惑にも叫んで“つもる話”に一緒にしたオレであるが、いまここにある状況に、まったくもって完全に置いてけぼり状態だった。“つもる話”が、拳で語り合うほうの“話し”かもしれないとは思つたけれども、少なくとも確率でそっちのほうの“話し”だろうとは思つたけれども、――けれども、まさか“確実に殺すための道具”がこうもあっさり出てくるとは思つていなかった。というか、“その可能性”は考えていなかった。

壱さんに“殺すための道具”が向けられる場面を見るのは、これが初めてというわけではないけれど、“それら”の場合は、壱さんが自ら“その状況”に首を突っ込んだことに少なからず“それ”を“向けられる理由”があつた。しかし今回は、過去の“それら”とは決定的に違うところがある。

ひとつは、壱さんが“能動”ではなく“受動”であること。

そしてもうひとつは――

壱さんは、シズさんのことを“友”と述べていた。なぜか過去形ではあったが、それでも知り合いであることには違いない。いままでは他者の事情に首を突っ込んでいたので、相手は全て他者だったが、今回の相手は、壱さんが知っているヒトなのだ。

だからこそオレは、もっと平和的な、例えば飲食の料金を壱さんが強引にシズさん持ちにしたとか、そういう理由で、“つもる話”を拳で語り合うのだろうと想像していたのだが――

いまここにある現実には、そのような“温さ／平和”は感ぜられない。

いざとなったらジャパニーズピーポーの究極奥義な特技であるところの“ザ・土下座外交”を発揮して、あるいはこの場をどうにかしようと考えてみたりも一瞬したが、もはやそれが受け入れられるような寛容さのある雰囲気ではない。完全に。

「……壱さん、いったい“なに”やらかしたんですか？」

状況的にあれなので、お耳に口を近づけて小声で訊いてみた。

「さあ」

壱さんは肩をすくめ、

「思い当たる“なに”が多すぎて、さっぱりわかりません」

軽いふうな口調で言って、

「――ところで」

と転じて真面目な口調で、

「“ズンツ！”とされるのと、“ギユンツ！”とされるの、刀さんはどちらがよろしいですか？」

なにぞよくわからないことを問うてくる。ちなみに、“ズンツ！”では拳を作った右の手で神速のボディーブローを放つような動きを、“ギユンツ！”では開いた右の手で“なにか”をわしづかみ天へ突き上げるような動きを、それぞれ見せてくれた。

どうしてだろう。壱さんの“ギユンツ！”の動きに、“もうひと

りのオレ”がガクガクブルブルと怯え震え縮み上がり、
「ズンッ！」のほうがよろしいです」

問いの“意”を脳ミソが理解するまえにオレの口は、そう返答していた。

——次瞬。

オレは“ズンッ！”と“ギュンッ！”がどいう“意”の問いであつたのかを、脳ミソではなく腹部で理解した。瞬と叩き込まれていた。えぐり込むように。捻り込むように。息ができなくなるほど強烈な一撃が。壱さんの拳が。

そしてまだ腹部に喰い込んでいる拳に、全身で圧すようにして力が加えられ——

オレは、後方へぶっ飛ばされる。

「——がっはあっ、ぐぶ」

またも“地べた”さんと望まぬ「こんにちは」をしてしまった……。

「どう……して……」

四肢が笑ってしまつてうまく力が込められず、オレはうずくまりながら訊いた。というか、訊かずにはいらなかった。

「これは、私の“つもる話／問題”ですからね」

壱さんはシズさんのほうに向き直るや一歩半、前へ進み出て、

「刀さんは、そこでお静かにしていてくださいな」

背をこちらに向けて、そう述べ、

「——あ」

そして思い出したふうに、

「どうしてもとおっしゃるなら、私の“あんな姿”や“こんな姿”を妄想してハアハアしても、いいですよ？」

真面目ふうな口調で、そんなことを言うてくる。からかう笑みの浮かぶ表情が、肩越しにちらりと見えた。

「それなら、手を出すまえに、“口／言葉”で述べていただきたかった」

あえて言わずとも万人にご理解いただけることだとは思うが、ハアハアのことではなく、お静かにしていて、——のことである。

「口先／言葉」では、容易く偽れてしまいますからね。ですから、これは確実さを求めた結果です」

確実さを求めた結果が肉体言語って……。いや、そんなことはどうでもいい。どうでもよくはないけれど、どうでもいい。

いま問題なのは——

壱さんに“槍／殺すための道具”が向けられているという事実だ。そしてその壱さんが、いまに限ってほぼ常に持っている杖もなく、まったくの素手であるという現実だ。

それら“事実”と“現実”を指摘すると、

「槍ですか……」

けれど壱さんは、とくに驚いたふうもなく、

「それで私を“どうか”できる、と？」

どこから湧いてくるのかわからない余裕さで、言葉を投げる。

「いいえ」

シズさんは、なぜか首を横に振り、

「自らの力量は重々わきまえているつもりですよ、壱さん」

困難に直面しているヒトのような苦笑を浮かべて、言葉を返す。

圧倒的優勢であるがゆえの“謙虚さ”かと思ったが、しかしシズさんからそういった部類の“いやらしさ”は感ぜられず。むしろ、

山中で野生の熊と出くわしてしまった登山者のような、どこか余裕のないふうがあった。

「ですから今回は——」

シズさんは恥じ入るように、ふっと地べたへ視線を落とす。——

そして、なにかを決したヒトの眼で再び壱さんを見やり、

「——刃に、神経毒を仕込ませていただきました」

言って、半身になって腰を落とし槍を構える。

平和ボケしているヤツの希望的展開として——。武の道を歩む者がゆえの真剣勝負をして、そして決着という瞬間に最後の一撃をす

ん止めして、どちらともなくニヤリと笑みをこぼして再会を喜ぶ――。そんな熱い感じの展開になる可能性を、薄っすらと期待してみたりもしたが、槍の刃に神経毒を仕込んでいるというシズさんの言葉によって、それはさっぱりと消え去った。あるいは冗談を言っているという可能性も、まったくないとは言いきれないが、形容し難いこの場の雰囲気が確信さをとまなつてそれを否定する。

シズさんは、壱さんの“いのち／生命”を奪うつもりだ。

承／第三十三話：ムシムシ尽くし（其の二十）

「……そうですか」

表情は見えないが、壱さんのその背中からは悲哀のようなものが感ぜられた。それは自らの圧倒的劣勢を絶望して、というふうなものではないようにも感ぜられた。あるいはどちらも、オレの思い違いかもしれないが。

壱さんの返しに、対するシズさんの顔には自嘲的な微笑が浮かぶ。
——はっ、と唐突に“それ”は脳裏をよぎった。“いまこの瞬間”のタイミングを逃がしたら、すべてが終わるまで口をはさめなくなってしまう。——と、根拠もなく悟ってオレは、

「壱さんっ」

悪足掻きの、思うところを述べさせていただく。

「逃走しましょうっ！」

「……はい？」

「ですからっ！　ここは“戦闘”ではなく“逃走”を選択しましょうよっよっ！」

「……刀さん」

壱さんは妙に優しげな声色で諭すふうに、おっしゃる。

「……少しは、場の空気を読みましょう」

それだけは、それだけは壱さんに申されとうなかったわっ！

「というか、空気を読んだから言ってるんですよっ。壱さん、神経毒が仕込まれた槍を相手に、素手でなんぞやらかそうとしてるんですものっ」

この場面にあって“戦闘”か“逃走”かの選択肢があつたらオレは、“逃走”を推す。ラノベやマンガやアニメやゲームの主人公だつたなら、なにかカッコイイ感じのことを言ったりやつたりするのだろうけれど、“死の可能性”がすぐそこにあって余裕をかませる“主人公スキル”なんぞ、オレにはない。“死の可能性”を突きつ

けられたら、怖い。そして“無関心ではいられないヒト／壱さん”に“それ”が向くこともまた、怖い。——だからオレは、カッコ悪くても“逃げること／生きること”を選ぶ。

「……もう、しょーがないですね」

子どもの駄々に根負けした母親のように言って壱さんは、フト口に手をつ込み、

「これで、素手ではないですよ」

と“夫婦大食い祝事”で勝利して贈られた白の手拭いを取り出し、その両端をそれぞれ右と左の手に巻き付けて握り、バンザイするようにして頭上に掲げる。「これでよいでしょう？」と述べるように。「もっすんごくちよつとだけ素手じゃなくなっただのは事実ですが、そもそも戦わないっていう考えは、ないのでしょーうかね？」

「まったくありません」

逡巡する気配もなく、きっぱりと真剣な口調で否定してくる壱さん。

「なんでそんなに戦いたいんですかつ？」

まるでお菓子を買ってほしいと駄々をこねる子どものように、「死んじゃうかもしれないんですよ？」

地べたにうずくまりつつ、オレは強めの語気で問うた。

「……………戦いたいわけでは、……………ないですよ」

ささやくように壱さんは述べた。声は小さかったが、言葉には深ところから絞り出されたような“濃縮さ”が感ぜられた。

壱さんを見据え、槍を構えて対じしているシズさんの顔が一瞬、その言葉が発せられたと同時に“痛む／傷む／悼む”ように歪んだ。

——ように見えた。

「じゃあ、どうして」

思わず、責める口調をその背へ投げつけてしまった。

言ってることもやろうとしていることもチグハグじゃないですか、と。

「“忠”を尽くさんとする者への、最低限の“礼儀”です」

硬球を弾き返すコンクリートの壁のように、その背は揺らぐことなく。どうしてだろう、壱さんがとても遠いところに立っているような錯覚を覚えた。――“孤高”という言葉を、その背に想った。

「“忠”って……、どうして“それ”で――」

あるいは核心に触れたかもしれない問いの言葉は、しかしさえぎられて消える。

まさしく問答無用に。

開始されてしまった。

――“戦闘”が。

承／第三十四話：ムシムシ尽くし（其の二十一）

先に仕掛けたのはシズさんだった。構えの姿勢から踏み込み、槍で突きを放つ。第二、第三、瞬々と突きが繰り出される。鋭利な切っ先が、壱さんの“胴体／胸部と腹部の間の辺り”を襲う。

壱さんは、シズさんの足運びと連動するように後退してギリギリ槍の切っ先をかわす。

第四の突きが迫る。

同じく後退してかわそうと、壱さんは足を後ろへやる――

と見せかけて、迫る槍に白の手拭いを下からすくい上げるようにして素早くからめ巻き付け、切っ先の進む方向を御し、転じて一気に肉迫する。

「心遣い、感謝します」

なぜかお礼の言葉を述べてから、壱さんはシズさんの側頭部へヒジで一撃を放つ。

シズさんは上体を反らして、それを避ける。

――次瞬。

壱さんは足を刈るようにして踏み込み、身体で“圧す／押す”。踏ん張るための足を刈られて姿勢を保てず、シズさんは背から倒れる。――が、槍の尻を地につけて支えにし、まるで空中静止しているかのように堪え、背を打つことを回避する。そしてその体勢のまま、壱さんの腹部を狙って足蹴りを――

壱さんはシズさんの側面へ跳ぶように一歩で移動する。それに合わせて、白の手拭いで御している槍を引く。

支えにしていた槍が動き、シズさんは体勢を保てず背を地に落とす。足蹴りは空振りし、勢いが活きたまま地に落ちることになった足を強打する。

——静寂の間が生まれた。

そよ風が、「いまだ！」とばかりに手刀を切って通り流れる。

秘められた力よ、覚醒してくれ。御都合主義的な展開になってくれ。——と、心の底から祈り願ったオレの焦燥感は、けれど杞憂だったらしい。とてもとても喜ばしく幸いなことに。

壱さんは、見ることで得意でない。しかしそれを補って余りあるほど空間把握能力や聴力がずば抜けて優れている。だからこそ以前あった多々の戦闘においても、相手と互角以上の戦いを演じていた。——が、以前の戦闘にあつて今回の戦闘にないモノがある。“音の高い舌打ち／反響定位”だ。壱さんは戦うとき“音の高い舌打ち／反響定位”をおこない、その反響音で“空間／存在の位置関係”を把握しながら行動していた。こと“戦闘／激しく動くこと”において、“音の高い舌打ち／反響定位”が壱さんにとってとても重要なモノだとわかる。——にもかかわらず、まだ“それ”はおこなわれていない。だからこそオレは焦燥感に駆られたわけだが——

しかし、いま“それ”は疑問感に姿を変えて頭の中にある。

どうして壱さんは、“音の高い舌打ち／反響定位”をおこなうことなく、シズさんの動きを完璧なまでに把握できているのだろうか？

——静寂の間が終わる。

風の流れが、息をのむように止む。

承／第三十五話：ムシムシ尽くし（其の二十二）

「動きの“基本／基礎”が相変わらずですね、シズ」

郷愁と哀愁が混在する音声で、壱さんが言った。

「戦士としての知恵と技術を教授してくださった“師匠／せんせい”が、とても“優秀なヒト”でしたから——」

郷愁と哀愁が混在する音声で、シズさんが応えた。

——そして。

会話の間を、その隙を逃がすまいと、動く。

寝そべりの姿勢から、壱さんの足首に向け低空の蹴りを放つ。蹴り足にかかる遠心力を利用して、上体を起こす。

すっと跳び退り、壱さんは蹴りから逃れる。

シズさんは上体が起きたと同時に倒れても手放すことなく握っていた槍を繰り、壱さんのノドを狙って突く。

壱さんは白の手拭いで槍の軌道を御しつつ、身をかがめて刃をかわす。そして流れる動作でシズさんの頭部へ蹴りを入れる。

シズさんは回避しようとするも間に合わず、一撃を喰らう。鼻が変な方向に曲がり、ツーと血が垂れ、滴となって地に落ちる——

という猶予など与えることなく、壱さんは槍を放すまいとしているシズさんの手腕を容赦なくその足で痛めつける。——耐えかねて、槍を持つ手の握りがふっと甘くなった。その瞬間を逃すことなく、壱さんは槍を奪取し、そのまま素早く跳び退ってシズさんとの間に十分な距離を作る。

「……………こうなるとわかっていたなら」

奪った槍の切っ先を地面に突き刺し、突き立て、

「……教えたりしませんでしたよ」

悔いているヒトの表情で、壱さんが言った。

「あるいは私も、——ふっ！」

シズさんはかすり傷に消毒液を塗るような軽さで、曲がった鼻の

向きを手で強引に修正してから、

「こうなることがわかっていたら教えを乞わなかったでしょう……」
衣服に付いた砂埃を掃いっつ立ち上がり、

「でも、それは“たれば”の話です。壱さん」

言って、半身に構えて格闘するヒトの姿勢になる。

「退いては、いただけませんか」

諦めきれない、懇願の響きある音声で壱さんが訊いた。

「“勝ち”得なくば“生きる／活きる”に等しからず」

シズさんはくつがえし難い事実を告げる口調で言い、

「——それが」

覚悟を決めた眼で壱さんを見据え、

「私に“与えられた／課せられた”使命ですから」

諦めたヒトの微笑みを口元に浮かべる。

「……そうですか」

壱さんの口元にも、シズさんと同様の諦めたヒトの微笑みが浮かぶ。

「……………」

一步、二歩、三歩と、壱さんは言葉なく進み出て、

「……私にも、“果たすべきこと”が“ひとつ”できたんです」

やや腰を落とした半身に構え、

「ですから、それを“果たすまで”は」

——告げる。

「“勝ち”は得させません」

承／第三十六話：ムシムシ尽くし（其の二十三）

壱さんの“意志／言葉”を受け取ってから、シズさんが攻め込む。鋭く踏み込み、右の拳を壱さんの腹部に向かつて放つ。

壱さんはそれに対応した手でいなす。——いなそうとして、しかしその手は拳に触れることなく空を切った。体勢が崩れる。

シズさんは腹部を狙った殴りで反応を釣り、転じて隙の生じた壱さんの“急所／聴覚／耳”へ左の掌を打ち込む。

掌が迫るのを察知した壱さんは、体勢が崩れるのを利用して身を低くし回避する。そして体勢を戻す勢いを載せて、から空きになっているシズさんの横っ腹へ拳を突き刺す。重い衝撃が、シズさんの身体を打ち抜く。

「——んぐっ」

シズさんは苦悶の声を漏らし、身を折る。

流れる動作で、壱さんは容赦なく追い討ちを仕掛ける。一時的に動きが停止したシズさんの、先ほど“急所／聴覚／耳”を打とうとした手腕を左の手でつかみ取り、手前に引く。そうして伸びた腕へ、体重を載せた右のヒジを打ち落とす。

「がはあっ！」

シズさんの腕が、ダメな方向に折れ曲がった。

しかしシズさんは地に伏すことなく、奥歯を噛みしめて、動く。

折れた腕をつかんでいる壱さんの手に、生きているほうの手をやる。

——だが、シズさんがそこから反攻に転じることはなかった。

手に手が触れた瞬間、壱さんはつかんでいる折れた腕に“ひねる／ねじる”力を加えた。それによって生ずる“痛み”で、シズさんの行動を制す。

シズさんは尋常ならざる精神力を発揮し、額に脂汗を噴出させつつも、堪える。

——が、壱さんがその“堪え”の隙を逃すことはなく。シズさん

の足を払って体勢を崩し、後頭部へそえるようにして手をやり、押し倒す。

受身を取れず、シズさんは頭から地面に突っ込んだ。生めいた鈍い音がした。

——静けさが訪れる。

シズさんは地に伏して沈黙し、動かない。

「——っ」

壱さんは張り詰めた緊張の意と解きほぐすように、

「はぁ……」

深いところからひとつ息を吐いた。

——空に顔を向け、しばし黙す。

そよ風が、嘆息するように流れた。

承／第三十七話：ムシムシ尽くし（其の二十四）

壱さんは“ なにか ”を切り替えるように、自らのほっぺを両の手でペシペシと叩いた。それから探しモノをするように、“ 音の高い舌打ち／反響定位 ”をおこないながら顔を右に左に前に後ろに動かす。

——そして。

なにも行動できず傍観に徹していたオレのほうへ、“ それ ”は至る。

壱さんはこちらに身を向けると、風呂上りのおっさんみたいに白の手拭いを首に引っ掛けて、

「……さ、戻りましょう。刀さん」

ネガティブな色のない気軽な音声で言っ、やや急ぎ足で接近してくる。

「まごまごしていると、お夕食に間に合わなくなってしまいますからねっ！」

いまのさつきで、もう夕食のことを考えていらつしゃるとは……。正直に、ウソ偽りなく告白しよう。いまオレは、壱さんに対して“ 恐れ／畏れ ”にも似たモノを懷いていた。なんというか、とても形容し難い感覚的なことなのだが、“ 強すぎる ”と感じるのだ。腕っ節も。精神的にも。オレでは、まるで比較にならないくらいに。「身体を動かしたあとの食事は格別の美味しさがありますからね！。もう想像しただけでヨダレが——。うふふ」

壱さんはふにやけた表情でそんなことを言いながら、口元をふきふき、歩み寄ってくる。——はずなのに。……とても遠い、縮まり難い距離がそこにふてぶてしく横たわっているようにかんじてしまった。

——が、それを些細と思つて流す事態が起きた。

沈黙していたはずのシズさんが、地に突き立つ槍を折られていない手腕で引き抜き、それを腰の位置で構えて立っていた。折られた腕は“ひねられた／ねじられた”ときのクセをやや残して力なく肩にぶら下がり、対して折れる気配のない“心／芯／真／紳／仁”ある眼差しが壱さんの背を捉えている。鼻から垂れている血と、額から噴出している脂汗が、顎の先で混じり合って一滴となり、ポタリと地に落ちた。

「壱さん後ろっ！」

と言ったときには、もうすでにシズさんは壱さん目掛けて突進を始めていた。神経毒の仕込まれた切っ先が、与えられた役割をいざ果たさんと猛進する。

「どうして、“正義／意志”を貫くことには、しばしば“痛み／傷み／悼み”がともなってしまうのでしょうか……」

壱さんはそのお顔に疲れたふうな愁いの影を少なくなくにじませて、“誰か”に問いかける口調で言った。背後に迫る危機を気にするそぶりは、まったくくない。

オレは槍より先に壱さんへ体当たりをかまそうと思ひ至り、いまだ笑っている空気の読めない四肢を叱咤した。――が、こんなときに限って“コイツら／四肢”は反抗期をこじらせやがる。うまく力が込められない。立ち上がれない。駆け出せない。

――壱さんに、殺すための切っ先が迫る。

「はあ……」

壱さんは寝起きに背伸びをするがごとく、いかんともし難いことに対する気だるい心情を薄っすらお顔に浮かべて、動く。小粋に散歩を楽しむヒトのように後頭部の位置で両の手を組み、その体勢のまま左斜め後方へひよいと軽く跳ぶ。――足が地に着く一瞬前、腰をひねって狙いを定めるように上体の向きをやや変える。右ヒジの位置とシズさんの顔の位置との軌道が、狂いなく一致する。

――転瞬。

満身創痍がゆえに愚直な突進を選んだシズさんは、まさか自ら危

機に近づいてきた壱さんに対応しきれず、跳びの勢いと振り向きの勢いが足された右ヒジが待っているそこへ、吸い寄せられるように突っ込んだ。突進の勢いも足された右ヒジが、顔面を打ち抜く。頭部だけ強制的に後方へやられ、それに首から下で活着している突進の勢いとが連係し、身体が宙を舞った。――わずかな浮遊の後、シズさんは手招きするような重力に引っぱられて地べたに墜落する。後頭部と背中を同時に強打するカタチで。

その光景は、どうにも現実味が薄く、もはやギャグにしか見えなかった。生々と痛々し過ぎて、一切、笑えないが。

今度こそ確実に沈黙したと思われるシズさんの側らで、

「さて」

壱さんは仕切りなおすようにパチンとひとつ拍手を打ってから、

「戻りましょう」

ヒトひとり地べたに沈めた事実なぞなかったかのような“普通さ

”で、そう言った。

――結局のところ。

オレが槍より先に壱さんへ体当たりする必要はなかった。壱さんは、自らの力のみで、自らの脚のみで、そこに確と立っていた。立っている。

――どうしてだろう。またも壱さんに対して“恐れ／畏れ”にも似た、あるいは表裏の、“強すぎる”という感を懷いてしまった。

「ところで」

こちらに歩みを進めつつ、壱さんが思い出したふう言葉に言葉を投げた。けれどそれは、

「“これ”をあなたたちに命じたのは、ロンですか」

オレに対してのモノではなかった。

「……………はい」

感情を御して殺したような音声が応じた。その声の主の姿は、まるで影のように音も気配もなく、気づいたときにはもうすでに、沈黙しているシズさんの側らにあった。黒紅色が主色の民族衣装っぱ

い服を着て、肩口の辺りで切られた黒髪、左で結んだ髪の一束を斜め後ろへたらしめている。

「我々に命を下したのは宰相閣下です」

折られた腕に添え木を当てて固定する、という応急処置を淡々とシズさんに施しながら、そのおヒトは述べた。

「またずいぶんと出世しましたね」

壱さんは世間話をする気さくさで驚きを表してから、すつと真顔になって、

「……まあ、故郷を想うと、あまり素直に喜べるお話ではないですが」

ぽそりと、心配事があるヒトの曇りある音声でそうこぼした。

「あなたが去らなければ——」

シズさんへの応急処置を早々に終えた黒髪のおヒトは、停止しているシズさんを「ふっ」と気合ひとつ身体全体を使って肩で担ぎ、「きつと“状況／情勢”は違っていたでしょう」

と、“批難するような／切実に懇願するような”眼差しを壱さんの背中へ向ける。

壱さんは、言葉を返すことなく黙してそれを受け取った。自嘲しているような、泣いているような、なんとも形容し難い複雑な表情がお顔に滲んでいた。

——不意に。

そんな表情を吹き飛ばすかのように。

強烈な突風が吹き抜けた。

巻き上げられた砂埃が、無差別に容赦なく襲ってくる。

オレは反射的に顔をそむけた。

一瞬の後、速やかに視線を戻す。

そこに、シズさんと黒髪のおヒトの姿はなかった。

——ただ、

腹部を押さえて苦しげにうずくまる壱さんの姿があった。

承／第三十八話：ムシムシ尽くし（其の二十五）

結果こうなるという要因は、当たり前だが事前に示されていた。

どうして“それ”に気づかなかったのか。どうしてもっと配慮するよう働きかけなかったのか。いまさらながらに、つくづく自分の浅はかさを思い知る。

「だ、大丈夫ですか！ 壱さん！」

「んー、正直、あまりよろしくはないですね……」

そう言つて、壱さんは苦しげに微笑む。

明らかに大丈夫じゃない雰囲気の人に向かって、なに言ってるだオレは。

「……やはり、食後の過度な運動は避けるべきでした」

「……………は？」

「自分は“適度さ”を守る、という過信が、私の“おごり”が、この、時間差で横っ腹が痛くなるという無様な結果を招いてしまったわけですから、なんとも情けないお話です……。笑ってくれてかまいません。もういつそペロペロ——」

いまここにある事実だけを述べよう。

そりゃあ、“夫婦大食い祝事（決勝）”で伝説になるほど蒸しまんじゅうをたらふく喰ったあとに戦闘なんていう激しい運動をすれば当然、横っ腹も痛くなるでしょうよつ。

……そう。壱さんは、べつにシズさんの槍の一撃をじつは喰らっていたとか、黒髪のおヒトがなにか不意打ちをしていてそれを喰らっていたとか、そういうことではなく、ただ単に、食後に激しく動いたから横っ腹が痛くなってしまっただけだった。

強いんだか弱いんだか、もうオレの低スペック脳ミソでは判断できないわ。……まあ、どこぞを負傷してしまったわけじゃなかったのは、素直に幸いと喜べることだけだ。

「んー、もー、一步も動けませ〜ん。とお〜さ〜ん、おんぶ〜」

幼い駄々っ子のようにあり、計算高い大人の女性のようでもある音声と雰囲気で、そんな要求を告げてきおる壱さん。いまさっきのシリアスな空気感との激しすぎるギャップに、薄っすらと女性の恐ろしさを感じつつ、オレは壱さんの手を取り、“おんぶ”を全面的に受け入れる体勢になる。

だってオレは、“いやです／＼ NO”と言えない日本人ですからっ。

——とか、べつにそういうのは一切関係なく、そもそも“おんぶ”を拒む理由がない。むしろ“おこしやすっ！／＼ Welcome！”とおもてなしの心を持って最高の笑顔で両手を広げ、全身全霊でお迎えするべき事態だ。

背後に、壱さんの存在を感じた。我が背中に、壱さんの温い手が触れ――

「はあああああんっ」

「ど、どうしたんですか。いきなり変な声を上げたりして……。刀さん、とっても気色悪いですよ……。正直、ドン引きですよ……」

「いや、ほら、だって壱さん、不意に背中をいじくりまわすんですもの、……。こう、なんと申しましょうか。――出ちまったんです」

さわさわと不意打ち的に背中をいじくりまわされたら、それもこれから身を預けるモノの信用性を査定するがごとく念入りにいじくりまわされたら、きつと誰だって、絶対に、オレと変わりない反応をするに違いない。――と、切に願いたいところです。はい。

「そうですかー。出ちまったんですかー。じゃー、しょーがないですなー。しょーがないことですねー」

「完璧すぎる棒読みっ！……どうしてだろう、……。心が折れそうです」

「もうっ、じょーだんですよ。じょーだんっ」

そう言って、壱さんは笑けるようにバシバシと我が背中を叩く。

「出ちまうなら時と場所を考えて自分だけじゃなく相手を気持ちよくしてからにしてっ、という清い乙女からのお願いですよ」

………どゆこと？ 壱さん、あなたはいつたい“なに”について物申していらっしゃるんですか？

——いや、まあ、よくわからないけれども。ただ、揺るぎない確信を持つて思います。真に清い乙女はそんなお願いしない、と。…

…たぶん。

そんなこんなで。

受け入れ準備超万端な我が背中に、ついにやっと壱さんのお身体がおぶさつてきた。

「おおう……」

創作された物語の主人公のように、「おおう……、なんでこんな羽毛のように軽いんだ……」とか言える主人公スキルなんぞ一切、オレは備えていないので、壱さんをおんぶして感ずるのは「おおう……、ずっしり……」である。主人公スキルを備えているヒトのように、麗しい女性と節操なくベタベタイチャイチャした経験がなく、現在のヒトと過去のヒトを“比較する”ということができないから、「おおう……、ずっしり……」としか感じられないだけかもしれない。——けれども、けれどもしかし、こっちが引くくらい食べ物をたらふく喰らう健康優良淑女であらせられる壱さんという“生きているヒト／生命／いのち”なのだから、それなりに重量があつて当然だと、個人的には思う。生まれたばかりの赤ちゃんだって、けっこうずっしりくる確かな存在感があるわけだし。まあ、スーパーなどで市販されている一袋およそ五キログラムのお米を、けっこう重たいと感じる“貧弱・マイ・ボディー／オレという存在”だから、余計に“そう”なのかもしれない。——念のために、あらぬ誤解を生じさせないために、あえて付け加えておこう。オレは、べつに決して壱さんが重いと言っているわけではない。もし仮に、実際に羽毛のように軽いヒトがいたら、それに気づいた者は感嘆してないで、相手の健康のために一度お医者さんへ相談しに行ったほうがよろしいんじゃないだろうか、そんな現実を気づかせていただいたという“ありがとうございます”にも似た“意”が述べたいのだ。

——ともあれ、いま、現在進行形で、オレも創作された物語の主人公と同じ“思い／感想／感情／感動”を懷いていたりする。

背中にっ！ オレの背中にっ！ いまこの瞬間っ！ とつても優しい、とつても柔らかきモノがっ！ ふにょんってしちよる、よっ！ ほほおゝいっ！

………思わず“自分”を見失って舞い上がってしまったのだわ。
………冷静になろう。

自制心っ！

全開っ！

無理っ！

うん。だってほら、おんぶすると、こう、姿勢を安定させるためにお手々を、こう、ふとももからお尻らへんの辺りにそっとそえなければならぬじゃないですか。必然的に。——で、いま、現在進行形で、我がお手々は、おぶさる関係上どうしようもなくお召し物の裾から「こんにちは」しちゃうきさんの、汗で少々しっとりしている生な“むにむに／むちむち／もちもち”とした“ふ・と・も”の温もりと触感を恐悦至極「ひゃっほおゝいっ！」しているわけ。頭では冷静になりたいのに、オレの中の“誰か”が「熱くなれよっ！ もつと熱くなれよおっ！」とうるさく叫ぶわけですよ。冷静になれるわけ、ないじゃないですか。熱くなるよっ！

——と、そんな感じの、過剰な熱情ほど白々しかったりするわけ
で。

承／第三十九話：ムシムシ尽くし（其の二十六）

眠っていた変態力をほぼ総動員してテンションを上げ、記憶を強
制上書きしてみようと試みたけれども、しかしそうしようとすれば
するほど、考えないようにすればするほど、残念なことに“それ”
はより鮮明さを増して脳裏に浮上してくる。

なぜ壺さんは、シズさんに“いのち／生命”を狙われていたのだ
ろう？

過去形で“友”と述べていたけれど、実際のところはどのような
ご関係なのだろう？

—— などなど。詮索するとか、失礼極まりないことだと重々承知
しているけれども、ふたりの“やりとり”を“目で見て／耳で聴い
て／肌で感じて／体感して”しまったので、どうしようもなく気にな
ってしまふのだ。というか、いまさらながらに“そのこと”を自
覚したから、余計に知りたいのかもしれない。壺さんが“何者であ
るのか”をほとんど知らない、“そのこと”を。

…… なんていうか。いやらしいな、オレ。

—— と、思いつつも、“知れたがりのオレ”はとても強く。

「ふと気になったことを訊いてもいいですか？ 壺さん」

「はい？ なんですか？ …… あ、私の寢床での持ち技の数がふと
気になってしまって、刀さんはムラムラしてきてしまったのですねっ。
わかります。妻である私にはわかりますよおっ」

「いえ、違います」

「じゃあっ、なんだと言うのですかっ」

なぜにちよつと不機嫌になってしまわれたのっ？

というか、寢床での持ち技の数ってなんですか。…… あれですか、
経験から思うに、首をロックして意識を落とすとか、極上のマッサ
ージ術で意識を落とすとか、そういう部類の持ち技のことでしょう
かね？ —— というのは脇に置いておいて。

「いや、その、さっきの戦いでは、“音の高い舌打ち／反響定位”をおこなっていなかったですけど、それでどうして、“あんなに”機敏に戦えたんですか？」

じわりじわりと外堀を埋めて本丸を攻略するかのようにな、そんな問いの言葉を、我がお口は吐いていた。

「訊きたいって、“そんなこと”ですか……」

壱さんは安堵と落胆が混在するよくわからない音声で言ってから、
「もうっ」

面白くなさそうにほっぺをぶくつと膨らませる。

顔の真横、横目で見た超至近距離に壱さんのほっぺがあつて、ツンツンしたくなるほっぺがあつて、オレは危うく“そこに山があるからさ”症候群”を発症しそうになったが、“知りたがりのオレ”が速やかに“登山家的なオレ”をコンクリート詰めにして心の海に“チン／沈”してくれちゃったので、どうにか事無きを得た。

「——でも、まあ、やつぱり」

壱さんはしみじみと感じ入るふうにおっしゃる。

「刀さんも、お玉々ぶら下げている立派な男の子なんですネ」

「ん、んん？　んん……。決して間違いではないですけども。というか、お玉々ぶら下げていますけれど。——どゆことですか？」

「“戦い／戦闘”に興味があるって、いかにも男の子っぽいじゃないですか。ですから、刀さんも男の子なんだなあー、って改めて思ったわけですよー、ふあゝ」

脈絡もなく、語尾でふにやふにやとあくびをかます壱さん。

「なるほど」

本当に興味があるのは壱さんに関してですけどねっ。——なんて素直に言えるわけがなく。だから、

「——で？」

と、姑息に疑問符でお話の先を催促する。

「むにやむにや、へ？　ああ、はいはい」

我が知りたい意欲と反比例するように、壱さんはどこか遠くへ船

出しそうな空気感で応じてくれる。

「まあ、あえて言うなら、経験に由来する“感覚／予測／勘”とでも申しましょうか。そもそも“音の高い舌打ち／反響定位”は“空間認識／空間把握”の補助でしかないのです、絶対におこなわないとダメというわけではないのです。それに“空間認識／空間把握”で頼りになるのは反響音だけではありません。空間には常時あらゆる“情報／頼り”があります。空気の“触感／質感／温度／湿度／濃度／流れ／風味／におい”、地面の“触感／質感／硬度／粘度／震動／風味／におい”、水の“触感／質感／水温／水質／硬度／軟度／流れ／風味／におい”、光の発する熱の触感や質感、風や水の流れる自然の音、生き物が動く音、——などなど。“そこ”にも“ここ”にも“あそこ”にも常時、動作を決定するにたる“情報／頼り”があるわけです。なにより、反響音にはどうしても“反響して耳に届いてそれを解釈するまで”の時差が生じてしまいますから、状況に応じて臨機応変におこなうか否かを判断します。閉鎖的な場所や、対複数では、自分との位置関係を知るためにおこなう場合が多いですね。逆に、開放的な場所や、即応しなければならぬときは、おこなわない場合が多いです。まあつまり、ザックリ申しますと、私の動きは“音の高い舌打ち／反響定位”だけを頼りにしているわけではないわけです。それに、さきほどの場合は、私が相手、シズの“動き方／戦い方”をよく知っていましたから、時差の生じる“音の高い舌打ち／反響定位”をあえておこなう利点がなかったのです。——というわけで。刀さん、おやすみなさい」

「おやすみなさい、壱さん——って、ええっ！」

なんともヌルツとした急展開にビックリして真横を見やると、そこにはお口を「むにやむにや」させている壱さんの安らかな顔があった。

「ぐうーぐうーすやすやにやにやえへへへ」

もう寝息を発てていらっしやるっ！　しかもいい夢を見ているっばい！　どゆことっ？

ん、んん、んん……。なんというか、外堀を埋めている間に本丸が受付を終了しちゃったという……。どれだけ寝付きよろしいのさという、この事態……。

攻略は計画的にねっ。——と、どこかの誰かが言っていたような気がしないでもないことを、どうして失念しちゃったよっ！ オレっ！

しかし、だからって、寝ているおヒトを無理くり起こしてアレやコレや訊き出すなんて非人道的な行為、いくら“知りたがりのオレ”でもやるうなんて思わないわけで。

いや、まあ、いずれ正しいカタチで“お訊きできる機会／教えていただける日”が訪れるだろう。たぶん。きつと。……そうなるといいなあ。……なるかなあ。本丸攻略作戦、どうにも壱さんに先読みされていて、寝落ち強制終了という先手を打たれてしまったような気がしないでも……。いや、さすがにそれは考えすぎか。

——まあ、なにはともあれ。とりあえず。

壱さん……。よだれを垂らして我が首筋の極々一部をデロデロに保湿してくれちゃうのは、“ありがとう迷惑です”というか、自分そこまで上級者じゃないっすというか、切にご勘弁願いたい。まあ、すでに手遅れなんですけど。ああー、もぉー、存分に潤っちゃうわぁーい。ひゃっほぁーい……。ああ……。生温かぁーい……。……。「……なんだかなあ」

思わず口から出たそんな言葉は、けれど壱さんの望まれぬ保湿行為に対してではない。さして脈絡もなく、ちよいとした息抜きの、ふとした拍子に間違えて自分を“俯瞰視／客観視”してしまった結果、ボロツと出てきちゃった“感想／見解／批評／言葉”だ。

アレやコレや述べたり、アレやコレや知りたがったり、他者の領域にしたたかに踏み込まんとするのに、自分が安全圏の内側に立っている確証があるときしか“そう”しない。さっきだって、殺すための槍の切っ先が壱さんに迫っているのを認識していながら、四肢が反抗期だとか自分に対して都合のいい言い訳をのたまって、どう

にかしようとは行動しなかった。壱さんが“たまたま強かった”から、幸いにして今現在、オレは背中に壱さんの温もりを感じていられるけれど、“たまたま”が少しでも違うふうに作用していたら、まったく異なる今現在を実感することになっていたかもしれない……。想像するだけで、背筋に強烈な“悪寒／怖気”がはしる。——けれど“それ”は、申し訳なくもありがたいことに、いま背面にある圧倒的な“温もり／存在”によって速やかに中和される。

「……なんだかなあ」

まあ、だからって、オレが“創作された物語の主人公的な行動力”を身に付けたところで、“なにか”が変わるという保証はどこにもないけれども。

けれども。
しかし。

ひとつくらいは、主人公スキルを身に付けたいと心の底で切望するわけさ。オレだってやつぱり、お玉々ぶら下げている立派になりたい男の子ですもの。“関心ある異性”の前では、ええカッコしいになっちゃうのです。

——だから。せめて。そう、せめて、「おお……、なんでこんな羽毛のように軽いんだ……」とか、呼吸するようにサラッと口から吐けるようになりたいわけですよ。

でも実際、どうしたら“そう”なれるのかなあ……。いや、まあ、奥義書的な近道を模索するより、地道に足腰を鍛えるのが正解だろうってことは、もうすでに重々承知しているんですけどもね。うん。

んー、壱さんをおぶったまま走り込んだりスクワットしたら、いい感じの“加重／負荷／Weight”になって、効果的に足腰を鍛えられたりするかしら？

——繰り返しになりますが、べつに決して壱さんが重いかかそういう意味じゃあないですよ。決してっ。決してっ、ねっ！

……………うん。

むくりと思い立った日が吉日ですよ。

——と、どこかの偉そうなおヒトが言ったような言わなかったような気がしないこともないので。

とりあえず、メムス屋さんまでの帰路を、壱さんをおぶったまま走ってみることにした。

——そして。

走り始めてほどなくして。

心は折れなかったけれど、心臓が“パァーン！”って爆ぜそうになったので、我が生命戦略的にいたしかたなく“走り”の一時中止を断行した。

「ハアハア……っ、こりゃあアカン。ハアハア……っ、非常にアカン。ハアハアハア……」

と、素で口からお漏らししちゃうくらいに、それはそれはキツウございました。走ることをなめてました。申し訳ございませんでした。「そんなに深々とハアハアしたりして、私をおぶってたぎってしまったのですか？」

「はあああああんっ」

不意打ち的に音のある吐息でお耳をなでられて、それはそれはくすぐったくて、意思とは関係なしに、また出ちまったという……。

「てか、耳に吐息をふうふうしないでくださいよっ！——って！壱さん起きてたんですかっ？」

これはこれは、お早いお目覚めおはようございます。

「あんなに激しく何度も何度も突き上げるように揺さ振られたら……

……、ね？」

「なんですか、その妙な言い回し」

それにどうして最後の「ね？」は、やたらと恥ずかしそうなんですかっ。

「でも、事実ですよ？」

無垢な幼子を思わせる色の声でしれっと言ってきおる壱さん。

「それはまあ、そうなんですけれども……」

「——で、どうかしたのですか？」

改めて状況を確認するように壱さんは、言葉を投げってくる。

「え、いや、ちょっと走ってみちゃっただけですよ」

「……………なぜ？」

そんな素で問われると、どうしてだか“いたたまれない気分”がじんわり胸の内に広がってきおるんですが……。

「ほら、なんだかんだでオレも男の子ですから、ふと気まぐれ的に強くなりたいと思って走ってみちゃったりするわけですよっ」

なんと申しますか、繊細なところをお察しいただきたい。

「“強さ”の“ありがた”を、どうか“間違え／履き違い”ないでくださいね」

「え？ なにか言いましたか？」

極々微かに、ももごと言葉のようなモノが聞こえたような、気がするような、しないような。

「いいえ。——ところで、刀さんご存知ですか？」

「……なにをですか？」

「経験者というのは、やたらと教訓を語りたがるのですよ」

「ん？ どゆことですか？」

「“ごちそうさま”をした直後に激しい運動をおこなってしまうと横っ腹がとつても痛くなるのです」

エヘンと鼻を鳴らすお姿が意図せず脳裏に浮かぶ音声で、壱さんはご教授くださる。

これぞ経験者が語る“言葉の重み”というモノだろうか。尋常ならざる実感がずっしりと伝わってきた。

「これはこれはもっすんごくためになるご忠告、どうもありがとうございます
ございます」

そんなこんなで、

ありがたい教えを聞きながら、

ありがたい温もりを背中に感じながら、
心臓が“パァーン！”って爆ぜない程度に、
えっちらおっちらと“いま”を堪能するように、

ひとまずの帰路に着く――

承／第四十話：ムシムシ尽くし（其の二十七）

「申し訳ございませんでしたっ！」

戻ってきた壱さんとオレを、そのおヒトは床板に額をこすりつける全力土下座の体勢でお迎えしてくれた。体勢的にお顔は見えないけれど、ボロボロというかボコボコなんかじは場の空気から迫るように伝わってきた。

そのすぐお隣には、

「ジンが、夫が、無礼なおこないをし、迷惑をかけてしまい、申し訳ありませんでした」

同様に正した体勢で頭を下けている口エさんのお姿があった。

床板に額をこすりつけているそのおヒトこと口エさんの夫さんであるジンさんと、真摯に頭を下けているジンさんの奥さんである口エさん――

ご夫婦そろって仲良く謝罪体勢でお出迎え、……という。

それがよりにもよって衣食住をお世話になっている相手、……という。

「おっと……」

正直、激しくいたたまれないぜっ。

とりあえず、

場所を居間に移して――

あつれえ……。

いまここにある実体のない“それ”に直面してオレは、心の内側で首を三百六十度ほど傾げた。

居間というのは、基本的にはまったりくつろぎ空間である。“個々人／家々／家族”それぞれの“嗜好／思考”が反映されるので――

概に言い切ることはできないが、意図せずして無防備に“素の自分”をさらしてしまう空間であると、個人的には認識している。

——だというのに。

どうしてかしら、とつても息苦しいわっ。

けれどもアレやコレや逃るる術を考えたところで、現実はいくらっぽっちも“早送りノスキップ”できないので、ここは潔く、やや伏し目がちに、“それ”と向き合うことにする。

現在位置である口エさん家の居間は、古きよき日本家屋っぽい木造で、我が学び舎のひとクラスおよそ四十人の生徒がそれなりにゆとりを持って机を並べて教師の話しを聞き流せる教室ほどの広さがあった。板張りの床には絨毯的なモノが数枚重ねて敷かれてあり、その上に座布団的なモノを敷いて座す。——ただいま、壺さんと並んで座しております。

壺さんやオレやツミさんやバツが寝起きさせてもらっている客間とは異なり、居間には家主の生活の一部として共に時の流れを経験している証明として、独特の“にじみだるな雰囲気”があった。ヒトによつては“それ”が苦手だったりするけれども、個人的にはなんとなく落ち着くモノがある。……感じえるモノが“よく知っている”を胸の内によぎらせるから、郷愁チックにそう感じるのかもしれない。

——向き合うと述べておきながら。

居間の内装をじっくり“鑑賞／観照”するとか、“視線／意思”がだいぶ寄り道しちやっただけでも、さすがにもう“それ”へ辿り着いてしまう。

正面に並んで座していらっしゃる、
ある意味で仲がよろしい、

ご夫婦に。

謝罪の意が伝わる真摯なお顔の口エさんと、
ポッコボコ過ぎる痛々しいお顔のジンさんに。

……… なんとというか、ジンさんがもはやただの重傷者という。

「……あの」

あんまりにもあんまりなので、治療的なことをしたほうがよろしいんじゃないだろうかと言言してみた。

「“害した者”を気づかうとは……、なんと器量の大きい……」
ジンさんは感心したヒトの口調で言ってから、

「現役のとき味わったモノと比べたら、大したことない。だから、そのお気持ちだけ受け取らせてもらおう。——ところで、“ろれつ”が治ったようだな」

と、気づかいの言葉をこちらに投げしてくれる。やたら渋くてカツコよい音声で。

「おかげさまで、気がついたら治ってました」
「なによりだ」

器量が大きいのは間違いなくジンさん、あなたです。

——ともあれ。

この状況でオレは、いったいどうしたら“正解”なんだろうか？
そんな我が疑念に対して、“かくあるべき”と模範解答を教授してくれるヒトの姿は一切なく。

ただただ、なんとも述べ難い“沈黙の間”が生じた。

——けれど“それ”は、“それ”を“言葉なき閑話休題”と解釈したロエさんの発声によって、刹那で終わる。

「お話は、ツミさんとジンの口からうかがいました」

長い金髪で縁取られたお顔にある、初対面したときどちらかと言えば柔和な印象を受けた眼差しが、いまは真摯で真剣であるがゆえに刃物的な鋭さを放っていた。けれどそれは他者を害する暴力的なモノではなく、極々純粹にロエさんの“そのヒト”に対する“気持ち／想い／心”を語るモノと感ぜられた。

ロエさんは金色で装飾された白主色の法衣のような服のなりをピツと手で整えてから、

「まことに申し訳ありませんでした」

改めて、深々と頭を下げる。

そんな奥さんであるところの口エさんの姿を見たジンさんは、“痛む心”の底から申し訳なさそうな、ほとんど泣いているような表情をしてから、責任あるヒトの顔になって、口エさんをかばうように前に出て、「悪いのはすべて——」と謝罪の言葉を口にする。

「いえ、あの……」

どうしたらよろしいのか、どんな顔をしたらよろしいのか、オレにはもうこれっぽっちもわからないぜつ。………いたたまれないのだわ。

——そんな渦中、

「ふあゝ、むにやむにや……」

あまりにも場違いな“のほん空気”でカットインしてくる猛者が、驚くなかれ、我がお隣に座していらっしやった。

猛者こと壱さんはとてもとても眠たそうに顔を洗うネコみたいな動作をして、

「込み入ったお話をしているところ申し訳ありませんが……、ふあゝ、むにや……、私はちよつと……、むにやむにや……、食後の運動後の仮眠を——」

ぽんぽこタヌキの置物が横転するがごとく、ゴロンと寝転がる。

「ああゝ、あとのことはすべて夫である刀さんにお任せしますねー。あ、それから、お夕食の準備が整ったら必ず起こしてくださいよっ

！ 約束ですよっ！ 約束っ！ おやすみなさい」

「おやすみなさい——って、ええ！」

壱さん眠いんじゃないなくて面倒臭いだけでしょっ！ 絶対っ！

「ぐうーぐうーすやすやにやにやえへへへ」

くそう！ 夢の世界に逃げられてしもうたわっ！ この速さ、船は手漕ぎじゃなくて超高速モーターボートかつ！

「……ぐぬぬ」

この状況で手元に選択できるカードが一枚もないわたくしは、い

つたい“どうしたら”よろしいのでしょうか。――胸の中で、お隣の眠りタヌキネコにお訊ねしてみた。それにあわせて、抗議する眼差しを向けてみる。至極ついでに、極々ついでに、そこにある憎たらしいほどすやすや寝息のお顔を“鑑賞／観賞”させていただく。

――それはそれは、とっても愉快そうに、微笑んでいらっしやいました……とさつ。……これ、寝てるんだぜ？

――とか、意図せずして現実逃避している間にも、目の前の仲良しご夫婦はお詫びを申し上げてきなさる。……ちよいと過度じゃなかろうかと思うのですが。

いちおう関係者というか当事者というか関わりがなくもない立ち位置だけれども、もつとも距離が遠いところに立っているのがオレである。いろいろとお詫びするべきはオレではなく、ツミさんやバツが的確というか道理じゃなかろうか。――で、ふたりの次に、ちよいとばかり拳で語らった経緯のある壱さんが、今度は言葉で語らったら、なんとなく収まりがよいんじゃないかなろうか。……なして目の前の事実、まったくそうっていないのでしょねっ。摩訶不思議だわっ。

ここまで詫びられるに価しない立ち位置にありながら、ここまで詫びられるというのは、言葉を選ばずに述べると“苦行”である。まさに心苦しいというか、心が苦しい。悟りの境地に至ったお坊さんじゃないので、耐えられるわけもなく。――なので、

「……………あの〜」

と話題をやや右斜め前方へそらすことにする。……この状況で話題をガラリと一切変えられるような猛者と書いて壱さんの域に、オレは至っていないのです。

他者へ気づかいの言葉を投げることができ、きちんと自らの非を認めて謝ることができる、接してみるとじつに“まとも”なオッサンであると知れる、品行方正と称しても過言ではないジンさんが、少なくとも我が育ちしお国の“行政の運営に関わる先生ら”よりはよっぽど品行方正だと思えるジンさんが、“あんなこと”を積極的

にやらかすような人物に思えず。じつは背後に“やんごとなき理由”があるんじゃないだろうか。——と、逃避のためにフル回転した脳ミソが推察しちゃったので、そのあたりを問わせていただいた。

それに対して、ロエさんとジンさんは“あんなこと”に至る経緯を語ってくださる。

——の、だが。

先ほどとは性質の異なる“苦行”が始まろうとは、予想外でございました。

まさかね、ふたりの“馴れ初め／のろけ話／過去回想”から語られようとはね。いったい誰が予想できますか。口直しと思って口にしたモノが超甘すぎて、まったく口直せなかったときの、なんとも言えない気分ですよ……。

……配慮なく、言葉を選ばずに述べさせてもらいますっ。

この“苦行”おしどり夫婦めっ！ まったく、お幸せそうでありよりですよっ！ だから！ もう本当に勘弁してくださいお願いします……。

ロエさんとジンさんが語ってくれた“あんなこと”に至る経緯という名目の“馴れ初め／のろけ話／過去回想”は、なんかもう糖度過多で心身に毒なので、断腸の思いでざっくりバツサリ編集したモノを述べておく。

——数年前。

場所は、クレベル王国の王宮だったそう。王室に“おまんじゅう”を献上するため参上したロエさんと、王国近衛騎士団に属し王宮の警固に当たっていたジンさんは、“運命の女神”の小粋なイタズラとしか思えない出来事によって、偶然という名目の必然によって、“出逢った／出逢えた”のだという。

なんかもうこの時点で、ふたりがちゅっちゅしちゃう物語が成立しそうな、ロマンティックな雰囲気バシバシ感ぜられるわけだが

——。それはそれとして。

手を取り合っていていざ歩まんとするふたりの前に、高い壁が立ちただかる。身分の違いだ。

騎士というのは、てっきり職業軍人的な職種のことだと思っていたのだが、どうやら国王から与えられる貴族の“階級／称号”であるらしい。

王室が頼んで献上してもらっているという由緒ある“まんじゅう屋”の次期当主である口エさんでも、列記とした“騎士／貴族”であるジンさんとは、そもそも生まれが違う。ふたりの歩みは、周囲から一切の理解を得られなかったらしい。とくに口エさんは、女の身体を武器にして貴族に取り入る“悪女”云々と、暴力的な耳に届く陰口を投げつけられたそう。ジンさんがわりと騎士としての名の通った人物であり、なにより婚約者のある身であつたから、余計に“そう”なってしまうらしい。

ちなみにその婚約者というのは、国王に近い貴族なお偉いさんの令嬢さんで、将来有望なジンさんと“家”がつながりを持つために立場を利用して勝手に取り決められた存在のよう。なんでも、面識もなく名前を聞かされただけで、婚約が成立したことにされてしまったらしい。

そんなこともあつてジンさんは、ひとつの決断を、けれどわりとあつたり当たり前のようにくだしたそう。——“身分／名前”を捨てる。その決断を。

国王から与えられたモノを、与えられた側から放棄するというのは、なかなか大胆不敵な行動であるらしく。ともすれば、投獄されたり処刑されたりしてしまうほどの大事のよう。そのことからジンさんの、そして口エさんの、手を取り合つて歩むことへの覚悟がうかがい知れるわけだが——。

どうやら国王も、その“ふたりの覚悟”を正しく受け取れる器の人物であるようで。とくに罰することもなく、かといって盛大に“ふたりの覚悟”を称えるでもなく、こっそりとさりげなく美味しい

お酒を贈ってくれたとのこと。——なかなか粋な国王さまである。けれどだったら“身分／名前”を捨てなくてすむように取り計らってくれたら、と思わなくもないが、というか思うが、社会の構造とか個々の立場とか周囲の感情とか価値観とか利害が関わってくる事柄だらうから、これが“完璧ではないが最良な落としどころ”なのだろう。……たぶん。

——そんなこんなで。

紆余曲折を経て、ついに手を取り合って歩みだしたふたりは、幸せと同義である苦労を味わいながら“おまんじゅう屋／メムス屋”を営み——。

末永く幸せに暮らしましたとき。めでたし。めでたし。

——で終幕していたら、まあ当然こんな“苦行”な事態にはなっていないわけで。

今現在からさかのぼること一週間と数日前。

家出してくれちゃったのだ。

ジンさんが。

驚きと抗議の気持ちを半々に、「なんですかーっ！」とオレは思わず口にしていた。

「……………剣の道を、忘れ去ることができなかったんだ」

じつに洪くてよろしい音声でジンさんは、そう述べた。

戦争はある種の麻薬である。——と、どこぞの偉いヒトが述べていたような、気がするような気がする。やっと戦場から帰還した兵士が、家族と過ごす平穏無事な幸せだけでは刺激が足りず、家族を置いてまた戦場へ戻ってしまう——。そんなことが実際に、それも少なくながあるらしく。——まあ、平和ボケと称される日本で育ったオレなので、これは映画だったか小説だったかで得た知識だが、ジンさんもまた、そんな生命の危機的な刺激の中毒者なのかと一瞬だけ思ったが、どうやらそうではないらしいという気配が感ぜら

れてしまったので、どうにも当惑してしまう。発言した瞬間から、まるでウソを述べたヒトがごとく視線が泳ぎまわっているのだ。…どうということなのだろう？ 真の家出の理由は、この場では述べ辛い内容なのだろうか？

………はっ！ まままままさかつ！ う、浮気とか、そういう大人な理由なのかしらっ。——いや、下手な勘ぐりはやめておう。そもそもジンさん、そういうこととするタイプに思えないし。

——ともかく。

ジンさんは家を飛び出してくれちゃったのだ。そしてその勢いのまま、ツミさんとバツが食事処を営んでいた宿場町に流れ着く。ただ、剣と身ひとつで飛び出してしまったので、まったく所持金もなく、さっそく路頭に迷ってしまったようだ。どうしたものかと悩んでいたらチンピラにからまれてしまい、けれどあっさり撃退。その腕を買われて用心棒にならないかと勧誘され、生命的に困っていたジンさんは“その話”を受けてしまったという。

結末的に、壱さんと拳で語らうことになってボッコボコにされてしまったわけだが。

——ちなみに。

この村へ来る途中で、“巨大なイノシシ的動物／壱さんの朝食”と追いかけてっこしているロエさんと出会った経緯だが。

ジンさんが宿場町に居るらしいという話を風のウワサで聞いたロエさんが、時間差で宿場町を訪れ、ボッコボロボロになっていたジンさんを発見。いろいろと話し合って、とりあえず家には帰るということになったのだが、多々事後処理するべきことがあったジンさんは、いますぐは帰れないと言う。ロエさんは絶対一緒に帰るという確固たる意思を表明するが、ジンさんに“収穫祭”の“夫婦大食い祝事”の仕込みをおこなう使命があるだろうと指摘されてしまう。ロエさんは現当主である父親やその弟子が代わりにやってくれる云々と主張するも、使命をおろそかにするのはよろしくないとジンさんに説得され、不本意ながらも先んじて帰路に着く。

それからほどなくして楽しくない追いかけてが始まり——
壱さんの朝食が一丁あがりでごちそうさまでしたとなったわけです。

——と、まあ、ここまでふたりのお話をうかがい。

人生いろいろだなあ、と思いつつ、なんとなくふわっと事情というか事の流れを察し把握した。そして改めて、頭を下げられるのは自分じゃあないなと確信を得た。——まあ、それはそれとして。

お話をうかがってもなお、いまいちどうにも釈然としない“ジンさんの行動”があった。というか、お話をうかがって不可解さが増した。壱さんに“まんじゅう怖い”を話して聞かせた散歩のとき、畦道で襲撃してきたことである。

お話をうかがうまえにも思ったことだが、接して知ってみるほどに、ジンさんが“そういうこと”を積極的にこなうとは想像し難いのだ。あるいは顔面の皮がふてぶてしいほど分厚いのもかもしれないが、いま実際に目の前にあるボッコボコに腫れて厚みの増した顔面を見てしまうと、ヒトとして到底そうは考えられない……というか、あんまりにもあんまり過ぎて考えたくない。いや、まあ、隣にいらつしやる女性に、どうにも敵わないというところで、妙な親近感を懷いてしまったから、そう信じたいだけなのかもしれないけれど。——というのは、ちよいと脇に置いておいて。

いまは、なぜに“あんなこと”をしたのか、その真意をお訊ねさせていただく。

「あのときは——」

と、恥じ入るような微苦笑を浮かべる、ジンさんいわく。

誰かが誰かに襲われていたから、最初は助けるためにいたしかたなく剣を振るったとのこと。この“誰か”は、前者がオレで、後者が壱さんのことだろう間違いない絶対。問答無用で口に拳を突っ込まれたときのことだもの、忘れなくても忘れられないわっ。

——つまるところ。

オレにとって忘れられないその“構図／光景／思い出”が、ジンさんにはヒトがヒトを襲っている現場に見え、誰かであるところのオレを助けるために武力介入したというのが、事の“真相／真意”であるようだ。これを聞いて、どうしてジンさんを責められよう。少なくともオレには、責められません。

ただ、“最初は”、とあえて述べたのは、どうゆうことなのだろう？

そのことについて問うと、

「あのと時のキミたち」だとわかった時点で、剣は納めるつもりだったんだ」

ジンさんは居心地がよろしくなさそうに、じつに歯切れ悪く述べる。

そこから継ぐ言葉が出てくるまで数瞬、沈黙の間が生じた。

「しかし、その……、剣の道に“生きる者／活きる者”として、いや、“生きた者／活きた者”として、どうにも、真の強者を相手に血がたぎってしまったというか、心が躍ってしまったというか、ムキになってしまったというか、……………申し訳なかった」

自制できなかった自らを叱るような苦々しい表情を浮かべてジンさんは、またも頭を下げる。

いま思ったことを、あえて言葉を選ばずに述べさせていただく。

どうやらジンさんは、愚直な剣の道バカのようだ。

——ふと。

そういえば、という軽いノリで。

もうひとつお訊ねしておきたい事柄が、脳裏に浮上してきた。「おおおぼえてるよ！」とジンさんが捨てセリフを置いて去ったときのことである。

「あのと時、どうしてジンさんは、おまんぐむっ！」

おまんじゅうを怖がるような態度をしたんですか？　と言い終えるより先に、鬼気というか危機迫る勢いで肉薄してきたジンの

手に、口をふさがれてしまった。

ジンさんは追い詰められたヒトの表情をこちらに近づけ、我が耳元で、

「いまキミが言わんとしていることについては、場を改めて、必ず話す。だからいまこの場では、訊かないでくれ」

せつかくの渋さが台無しになる必死さ伝わる小声で、そう言ってくる。

よくわからないが、なんかダメっぽいというのはヒシヒシと伝わってきた。オレは一切の迷いなく、即返答する。

黙して、ひとつ小さく首肯。

それを受けてジンさんは、安堵するように小さく短く息を吐く。そして我が口から手を離して、“ありがとう”という意が伝わってくる眼差しをこちらにくれ——刹那、その眼差しは驚きの色を滲ませながら瞬と遠ざかる。

ロエさんが、ジンさんの襟首をむんずとつかんで引き戻したのだ。「もうっ！　どうしてあなたは失礼なことばかりやるんですっ！」

なんかもはや大きい子どもを叱る母親にしか見えないロエさんに、

「いや、その……すまん」

ジンさん、ただただ平謝り。

なんでだろう、平穩無事という言葉が思い浮かぶのは。

承／第四十一話：ムシムシ尽くし（其の二十八）

——ともあれ。

やっと“苦行”から解放される。

——と思えたのも一瞬のことで、いまここにある現実はまだそんなことはなく。目の前でいちゃいちゃやがってこの幸せ者どもめっ——おっと、ゲフンゲフン。さすがにもう、“心身／精神”が耐久限界なので、“ご勘弁願いたい意”を丁重かつ遠回しにお伝えする。「わかりましたから、もう許してくださいお願いします」と。

——そしてついでに。

短いようで長く、長いようで長かった“苦行”が終了した。

ロエさんは夕食の準備に、ジンさんはお風呂の準備をしてくると言って退室した。

「はあ……」

心身が、全身全霊が、解きほぐれるように弛緩する。

土下座外交の申し子たるオレが、まさか異世界で土下座外交に通ずる恐ろしさを実感することになるうとは……。こんな強力な武器を潜在的に保有しておきながら、どうして我が育ちしお国は“外交／交渉能力”が低弱なのだろう——いや、まあ、実際はそう単純じゃあないのだろうけれども。

——それはそれとして。

広い居間に、いまは壱さんとオレだけである。

しかも壱さんは夢の世界に旅立っていらっしやる。

——ときたら、これっ！ こう、なにがしか、こう、凹に凸する餅つき大会というか、凸が凹に鉄砲玉をぶっ放す的なイベントが発生しちゃう、ラノベやマンガやアニメやゲーム的な状況なんじゃない

かろうかつ！ 臼のお餅を杵で“つく”か“つかない”か、鉄砲玉をぶつ放すために鉄砲の引き金を“絞る”か“絞らない”か、その選択肢が表示されるちよるような状況なんじゃなかろうかつ！

はっ！ いかんいかん。“苦行”から解放された反動で煩惱全開になってしまったわ。

大きく深呼吸して自制心を呼び戻さなくてはっ！

「すうはあすうはあすうハアハアハアハア」

……よし。やや過呼吸になってしまつてけれど、問題ない。

改めて、すやすや寢息のきさんを見やる。こつちまで気が緩む、じつに気の抜けた寝顔がそこにあつた。

こつちが“苦行”に耐えている間も、“こう”であつたのかと思うと、怒りではないけれども、どうにもすんなり納得できないモノがある。

——ので。

気の抜けた寝顔にある、ふんにやり緩んだほつぺを、ちよいと突つついたつたわっ！

ちよいちよい、と続けざまに突つつく——

そうしたらもう、やめられない止まらない。手が、人差し指が、離れたそばから、きさんのほつぺの触感を求めおる。

なんなのかしら、この中毒性っ。

ちよいちよい、ちよいちよいちよいちよい——

ちよいちよい、ちよいちよいちよいちよいちよいちよいちよい——

「かつぷんちよ」

……………おやおやあ？

いままできさんのほつぺを突つついていていた我がお指が、どうしてかしら、きさんのお口に喰われているように見えるのは？ 我がお指が、絶妙な力加減で奥歯に噛まれているような触感を味わっているのは、どうしてかしら？

……いや、うん、わかつてるんだ。相手が寝ているのをいいこと

に、ちよいとばかり調子に乗って、“引き際”という重要な事柄を失念していた結果だつてことは。

いま、まごうことなく、壱さんに人差し指を喰われている。くわえられている。甘噛みと本気噛みの間くらいの、痛くはないけれど引っこ抜くこともできない噛み加減で。

間違つて指を喰い千切られたら困るので、無理に引っこ抜こうなんていう強行は最後の最後までおこないたくない。けれどもご就寝中の壱さんをこの状況で起こすというのも、なかなか気が引ける——というか、かなりの度胸が必要だ。……さて、どうしたものか。ここは真剣に、安全かつ隠密に指を引っこ抜く策を考えよう。

——と、したらば。

我がお指が、壱さんのお口にもてあそばれているような触感があった。ねつとりと舌がからみ付くような、コリコリと歯がいじめてくるような、くすぐったくすらある触感。けれどそれらは不思議とイヤな感じではなく。むしろ、なんとも形容し難い“快感/快楽”のような、イケナイ感じのモノがムクムクと湧き起こってきて、ちよいと気持ちよくすらあるのだわん。

「んー、んん、あひ、うふひ……れすねえ……むにやむにや……あひふあ」

壱さん、いま“味が薄い”とか、そんなようなことをおっしゃられたような……。

てか、コリコリやられたときに、タイミングを見計らつて指を引っこ抜けばよかったのにっ！ くそうっ！ なに気持ちよくなっちゃってるんだよ、オレっ！

冷静になろう。冷静に。“リビドー/強い衝動”をなだめすかすんだ。気持ちよくない気持ちよくないかもしれないような気がするようないこともないような気がしないこともないような気がするようないような——気持ちイイぜっ！

「……ふう」

心機一転。

改めて、いかにして安全かつ隠密に指を引っかくかを考えよう。
指がふやけて軟らかく食べやすくなってしまふまえにっ！

どうするべきか。

どうなるのがより好いのか。

やはりここは、壱さんに“自然なカタチ”でお口を開いていただくのが好ましいだろう。

では、どのようにして“そう”するか。

こちよこちよして笑わせてその隙に引っかくっ！ 名付けて“くすぐり作戦”っ！

……いや、笑った拍子にバチンとグチャツとやられてしまいそうだからダメか。

なんか、こう、ヌルツとお口を開かせるといっつか、お口の締まりが甘あゝく緩んじやうような——はっ！ そうだっ！ 甘い吐息だっ！ 「お口で甘あゝくといええば甘い吐息じゃありませんかっ！」と、我が煩惱が、抑えきれない“リビドー／強い衝動”が、前のめりに告げてくる。「壱さんがお口から息を吐けば、それにあわせて締まりも緩むんじゃないでしょうかっ！」、と。

——そんなわけで。

壱さんにお口から息を吐いていただくべく、お口から息を吐いちやう状況を生じさせる手段を、名付けて“はあはあ作戦”を、いざ実行させていただく。

失敗は許されないので、自由が利くもう片方の手指をワキワキと動かして準備運動。万全を期す。

ゴクリ、と生唾をひとつ。

慎重に、冷静に、その手を、壱さんの“その部位”へやる。

「——んっ」

手が触れた瞬間、ピクツと壱さんは身を震わせた。最悪の事態を思っで一瞬ドキリと焦ったが、どうやら大丈夫のようだ。

我が手が、与えられた任務を遂行する。

「ん、うん、ん、ん」

壱さんは眉根を寄せて、苦しげに切なげにのどを鳴らして身じろぎする。

「んうう」

徐々に、お顔が薄つすらと赤くなってゆく。

「うん、んんんん」

そしてそれは蓄積したモノが爆発するがごとく突然に、けれど静かに起こった。

「んんっ——はああはあ」

半開かれたお口から、湿り気と熱を帯びた艶かしい吐息が荒々と吐かれる。

刹那、オレは指を引っ抜いた。口と指をつなぐようにして唾液の糸が引く。

おかえりっ！ オレの人差し指っ！

壱さんのお口の中で保湿され過ぎてデロデロふやふやシワシワになってしまっていたが、お指のご無事な姿が確認できた。壱さんも起床してしまった気配はないし、とりあえずは一安心である。

安堵の息を吐きつつ、壱さんの“その部位”であるところの“お鼻”から手を離す。まあ、つまるところ、すやすや寝息の鼻呼吸を強制遮断して、艶かしい吐息の口呼吸へ強引に移行していただいたわけだ。

不覚にも陥った悩ましい事態は、そんな“はああ作戦”の成功によって静かに終了した。——ただ、どうしてだろう。この、胸の内じゃなくて人差し指に生温かくモヤツと名残惜しいような気持ちがあるのは。

ふと、指から続く唾液の糸をたどって壱さんを見やる。いまさっきまでそこにあった苦しげな艶かしさはもうなく、いい夢を味わっているとか快活に物語る無防備な寝顔があった。

「むにやむにや味が薄い、ときは、ふへへ塩を、それで、むにやむにや美味くなるのですよお、へへ、へへへ」

なんとも恐ろしい寝言を最高の微笑みを浮かべて「むにやむにや」

と漏らしつつ、のっそりと寝返りを打つ壺さん。寝返った拍子にお着物の裾が乱れて、あらあら、まあまあ、ふともさんこんにちはっ！

——と、まあ、いちおうご挨拶は済ませたので、ささっと裾の乱れを正す。ふともさんがあらわになっただけでいらつしやると、いろいろな意味で悩ましくて困るのだ。ふともさんさようならっ！また逢う日までっ！

そんな出逢いと別れを経てオレは、

「ふう……」

と、ひと息。家出しかけていた平常心を呼び戻す。

冷静になってみると、居間の広さがどうにも居心地好ましくなく、身の程に合わない広さ、とも言おうか。トイレという狭くて機能的な空間に妙な落ち着きを覚えてしまう貧乏性なオレには、どうにも広すぎるのだ。落ち着かなくてお尻が浮く——というか、なんかそろそろ“お尻／＼”がダンスを始めそうである。

放課後の学校の教室にぽつんとひとり取り残されてときにも、これと似たような感覚を味わったことがある。空間が広くて遠いのだ。普段、当たり前のようにある存在感、圧迫感が一切ないという、慣れない感覚、違和感。まあ、あのときは、期末テストで赤点を獲得しちやって、居残り補修を課せられちゃった気分の悪さと、早く帰りたいという心情もあったわけだけだ。

まあ、いまは、放課後の学校の教室と大きく異なり、お隣で壺さんが「すやすや」と寝息を発していらつしやるといふ救いがあるので、百倍マシではある。

——が、居心地が好ましくないことには変わらない。

どうしたものかなあ、と思いつつ壺さんを見やる。

うん。寝てる。

もういつそのこと一緒に寝ちゃおうかしら、なんて思ってみたが、壺さんほどの寝付きのよさを持ち合わせていないので、ちよつと無理なお話か。

客間に戻ろうかなあ、と考えつつ壱さんを見やる。

やっぱり寝てる。「でへへえ」^くとよだれを垂らして寝てる。

絨毯的なモノが敷いてあるとはいえ、壱さんをこのまま床でお寝んねさせて自分だけ客間に戻るというのは、なんだか心苦しい。

うーん。

うつうつん。

うつうつうつん。

と、低スペック脳ミソをフル回転させて、ちよろつと思案した結果――

壱さんと一緒に客間へ戻ったらいいじゃなあーい、という名案をひらめいた。

もちろんっ、壱さんにはベッドで安眠していただくためですつ。

そうとなれば話は早い。即行動である。

眠れる壱さんの肩と脚の下に手腕を滑り込ませ、いわゆる“お姫様抱っこ”をしようと足腰に力を――

……そつと壱さんから手腕を離す。

「……………」

ちよいとばかり調子に乗って、“お姫様抱っこ”で壱さんをベッドまで運ぼうとか思っちゃったが、いざ抱っこせんと力んだ瞬間、足腰さんが「修羅の道を行くのかい？　これ以上やると、壊れるぜっ？」と投げかけてきた。

修羅の道より、安全な道を時たま道草喰いながら歩むのが好きなオレである。

改めて冷静に足腰さんと意見交換した結果、ここはやはり、自分の身の程に合ったやりかたで、壱さんをお運びしようということになった。

承／第四十二話：ムシムシ尽くし（其の二十九）

——そして。

ほどなくして客間に到着。

室内には、折り紙をしているバツの姿があつた。ウサギの垂れ耳を思わせる黒のツインテイルが、楽しげにひよこひよこ動いている。

「あ、おおかえりなさい」

こつちに気づいたバツは手を止め、

「と、トウお兄ちゃん、イチお姉ちゃん」

柔らかな微笑みでお出迎えしてくれた。

「うんっ、ただいまっ、超ただいまっ！」

ぽわわ〜んと温い気持ちに満たされつつ、オレはとりあえず壺さんをベッドの上に運んだ。「むにやむにや」と口を動かしたりしているが、起きる気配はない。万が一にも寝冷えしてお腹を痛くされたら、どうしてだかこつちが困ったことになるような気がするので、毛布のようなモノをお腹にかけておく。

「い、イチお姉ちゃん、どうかしちやったの？」

眉をハの字に、瞳を潤ませ、バツが心配そうに訊いてきた。

本当によい子だなあと思いつつ、オレは首を横に振り、

「壺さん、夕食まで寝るんだって」

と教えてあげた。

バツは安心したのか、「ほっ」と表情をやわらげる。

「あ、そうだ」

ひとつ、とても重要で重大なことを思い出した。

「夕食の準備が整ったら絶対に起こすようにつて頼まれてるから、起こすとき、バツ、手伝ってくれる？」

もし万が一にも忘れてたり起こせなかったりしたら、酷薄な微笑み

を浮かべた壺さんに、「ちょっと齒を喰いしばって表に出まじょうか？」って優しい声色で外出のお誘いをされてしまいそうだからね。バツには、是非とも協力してほしい。“味方／心の支え”としてっ。

「うんっ」

守りたいこの笑顔、と心の底から思う素敵なお笑顔を浮かべてバツは承諾してくれた。

よっしゃあああ！ これで確定！ 備えあれば回避できるさ鉄拳制裁っ！

そして、いずれ起こされる件のおヒトは、

「でへっ、むにゃむにゃんにゃんっ」

守りたいこの寝顔、と心の底から思う平和な笑顔を浮かべて、いまはまだ夢の世界を味わっている。

しばしそのお顔を鑑賞――

「と、トウお兄ちゃん」

なにぞ呼ばれたので、「ん？」とバツのほうを見やると、

「おお茶、どうぞ」

この百億点満点のよい子は、いつの間にやらお茶を淹れていてくれた。

なんでかしら、心が温くなり過ぎて目頭が熱いわ。

「ありがとうっ」

湯のみを手に取り、厳かな気持ちで口元に運び、ズズッと一口、全身全霊で味わう。なんてこった！ でら美味いぜっ！

そんな美味しく淹れられたお茶を味わいつつ、「そういえば――」とバツに訊く。お姿の見えないツミさんの所在を、である。

「お、お姉ちゃんは、ゆゆ夕食のじゅ準備のお手伝いをしてるよう「そうか」」

訊いておいてアレだが、そうだろうなーとは予想していた。見事に的中したわけだが、そもそも予想それ自体に“意味／意図”がないので、なにがどうなることもない。なんとまあくである。

……お茶を一口、——からのがぶ飲み。

とくにこれといってやることもないので、バツと一緒に折り紙でもしようかと思ったところで、「いやいや、他にやるべきことがあるだろう」と思い出す。

いずれ“関心ある異性”をひいとお姫様抱っこ”して、「おおう……、なんでこんな羽毛のように軽いんだ……」とか言えちゃうようになるために、いまは足腰を鍛えよう。

軽く身体を伸ばしたり準備運動してから、スクワットを始める。

足腰を鍛える方法ですぐに思いつくのがスクワットという無知安直さだけれども、なにもしないよりはかは、やれることをやるほうが、極々微々たる距離でも“前進／漸進”できる——と信じたい。

ふんすふんすと生温かい息を吐きながらスクワットしていたら、くすぐったい熱視線を感じた。なんだろうか、と熱源のほうを見やる。

「じい」

バツが、興味津々と瞳を煌めかせていた。

「えーと、その……」

くすぐったいうえに、なんだかいたたまれなくてスクワットどころではないので、

「こつ、ね、衝動的に足腰を鍛えたくなってね」

と、ウソ偽りのない事実を伝える。

「ほえ」

なんかもうそつとお持ち帰りしたくなる愛らしさで、バツは相づちを打つ。

けれども、くすぐったい熱視線はなくなるらない。

純真無垢な子に煌めく瞳で見つめられながら、ふんすふんす生温かい息を吐いてスクワットするとか、なんか新境地を開拓しちゃいそうだぜっ。——なんて、このまま行くと、後戻りできずに、変態王座への階段を三段飛ばしで駆け上ってしまう気がギンギンする。

まだ、というか永久に、そんな階段、駆け上りたくない。

どうする、どうしよう、どうしたものか、と真面目に考える。時たま「いいんじゃない？」とか語りかけてきおる“もうひとりの自分”にビンタかまして正気を取り戻しつつ、極めて真剣に考える。

「——そうだ！」

とても素晴らしい、非の打ちどころが一切ない解決策をひらめいた。

ちよいちよい、と手招きしてバツを呼ぶ。

バツは疑問符を頭の上に浮かべつつ、「な、なあに？ とトウお兄ちゃん？」と好奇心溢るるほくほく顔で、我が目前まで来てくれる。

「ちよつとオレをいじり倒すように踏んで——じゃなくて、オレの上に乗ってほしいんだ」

「——え？」

小動物のごとく瞳を潤ませて当惑する“彼”に、いらぬ誤解をされぬよう、正しく趣旨を説明する。ほどよい感じの“加重/負荷/Weight”があると、効率よく足腰を鍛えられそうな気がするから、“おもし”になつてはくれまいかと。

バツは意を決するように胸の前で両の手をギュツと握り、
「と、トウお兄ちゃんのおお役に立てるなら、ぼボクの身体、使つて、どうぞっ」

と言つて、うるうる潤んだ瞳で真っ直ぐ見上げてくる。ぷにぷにと思われるほつぺたが、ほんのり赤い。

なんかみなぎってキタア——のを抑えつつ、極めて紳士的にバツの肩に手を回し、その身をちよいとこちらへ引き寄せ、

「ふえっ？ とトウお兄ちゃん？」

くりくりお目々をパチクリさせて驚き戸惑っている顔を横目で見やりつつ、もう片方の手を“彼”の脚の下にやり、

「よっこらそおいつ」

少しの気合を一発かまして、いわゆる“お姫様抱っこ”をした。鎖骨のあたりから首、顔、チラリとのぞくおへソのあたりから足

首、つま先、腕から手、指先、——と、バツは全身を“熱のある朱色”に染めて、もじもじと身じろぎをし、

「は、は恥ずかしいよう……」

羞恥に困り果てたふうに眉尻を下げ、目尻に涙一粒ある潤んだ眼差しで“抗議するように／懇願するように”こちらを見上げてくる。“彼”の身体に触れているところから、やや高い体温がほんわか伝わってきた。

ふえーいつ！ 魂を撃ち抜かれたぜえーいつ！

バツの愛らしさに胸の内で生温かいお祭り騒ぎを起こしつつ、けれど頭の一部は冷静に、“ひとつ”しみじみと思った。というか感じた。

「おおー……」

壱さんと比べて、

「なんでこんな羽毛のように軽いんだ……」

我が足腰さんが、「まだまだイケるぜっ！」と親指を立てて余裕の微笑を浮かべている——ような気がする。

「むにやつ！ ふえふえふえふえ」

不気味な笑い混じりの聞き覚えある声に、

「とおーさーん」

いきなり呼ばれ、

「はいいいいっ！」

背筋がゾクビクうーんとあわ立った。

べ、べつに、壱さんのことを重いつて言ったわけじゃないんですからねっ！ か、勘違いしないでくださいよねっ！

「んん、むにやにやー、あとでえ、煮物お、お話しましょーねえ」

「はい！ わかりま——」

まずいつ、どうしようっ。この状況での“煮物”にいったいどんな意味が含まれているのか、さっぱりわからん。

「——わかりたいのですが、オレの勉強不足でまことに申し訳ないのですが、“煮物”の意味がわからないので教えてくださーいお願い

します」

「じゅるり……むにや………んぐう」

安らかな寝息がよくよく耳に届く無言の間――

「……あら？」

ここは素直に訊くのがよろしいと思ったのに、どうしてだろう、
応答がない。

「……………」

なんか、変な汗が滲み出てきたわ。

そんなオレを見かねてか、

「に、煮物はね――」

心優しいバツが、食べるほうの煮物について丁寧に教えてくれた。
「すぐよくわかったよつ。ありがとうつ」

心が、“彼”の優しさに救われた。けれどもしかし、“彼”の優しさに対する感謝の気持ちは本物だけれども、さすがのオレでも食べるほうの煮物については知っている。オレが知りたいのは、この状況で言うところの“煮物”についてだ。

――が、それについて確実に答えを持っているであろうおヒトからは、いまだこれっぽっちも反応がない。

このままだと、ただバツを“お姫様抱っこ”しているだけになつてしまう。

――ので、

「あのお」

こちらから答えを頂戴しに向かうことにする。

そおくとベッドに近づき、そおくと様子をうかがう。

「……………あれ？」

そこには、どう見ても、よだれを存分に垂らしてすやすや寝ているようにしか見えない壱さんの姿しかなかった。……………

まさか、まさかまさか、さっきの、寝言？

なんだなあもお驚かせてくれちゃってつ、このこのお。

……………やましいことなんて一切ないのに、もっすんごく……………ほっ

としたのだわ。どうしてかしら？

ま、それは永久に、脇に置いておいて。

自分のために、足腰を鍛えることに戻るとしよう。

よだれじゅるりの眠り姫さまには、こっちの安心のためにも、夕食のときまで安眠しておいていただきたい。なので“バツとの共同作業／運動”は、なるだけ密やかにおこなうことにする。

とりあえず無知のひとつ覚え的に、スクワットを。

屈伸するときの衣擦れの音。

自分の、吐いて吸う呼吸の音。

壱さんの寝息と寝言とよだれをすすする音。

こちらの屈伸の動きと同調しているバツの呼吸と、時たま唾液をゴックンする音。

室内が静かなので、ヒトの発する生の音がよくよく耳に届く。

そして斜め下のほうからは、ほっぺをほんのり朱にしたバツの、潤んだお熱な眼差しが突き刺さってくる。

なんでだろう、この静かな状況でふんすふんすスクワットしていることが、急に気恥ずかしくなってきた。いま、とてつもなく、“音を発してくれる機械／ポータブル・オーディオ”が欲すういつ！ソウルフルな音楽を中くらいの音量でシャッフル再生して、お耳をふさぎたういつ！ 気をまぎらわせたういつ！

けれども、どんなに渴望したところで、我が育ちし文明の利器であるところの現実逃避援助マシンは“いま手元がない”ので、

「そお、ふう、いえつばあ、はあ、さあ、ふう——」

スクワットをしつつ、ラヴリーでマイ・エンジェルなバツとお話することで気をまぎらわせ、なおかつ羞恥熱でこげた心を癒そう。話題は、オレと壱さんが“夫婦大食い祝事（決勝）”に出場すべく戦略的撤退をしたあと、残されたツミさんとバツとロエさんとジンさんは、いったいどんなことになったのか。じつにタイムリーな話題である。まあ、個人的に気になっていることを訊きたいだけ、というか、訊いただけ、だが。

——結果的に。

保留、ということになったらしい。

確かに、ジンさんは赦し難い“向こう側”に身を置いていた。しかし、イヤガラセ行為をおこなったわけではない。ただ、“向こう側”の用心棒として、目の前で起こっていることを正しく理解していないながら、“見て見ぬフリをしていた”。

責めたくなるけれど、ジンさんが“見て見ぬフリをしていた”ことを責めてしまうと、同様に“見て見ぬフリをしていた”近所のよく知るヒトたちも責めることになってしまう。それは、できない。もし自分が“近所のよく知るヒトたちの側”だったとき、目をそらさずに行動できる自信がないから。

でも、責めないからといって、“向こう側”にいたジンさんを赦したわけではない。簡単に割り切れることじゃない。

けど、ロエさんは信じたい。自分の夫のために頭を下げる、自分の夫を心から慕う、真摯な彼女は信じたい。

だから、ロエさんを信じて、自分の気持ちとの折り合いもつけてとりあえず“このこと”は、保留。

それが、ツミさんとバツの意なのだという。

「それに、あ、あんなに、か顔を痛そうにしているヒトを、お怒るなんて、で、できないよう」

そう言ってジンさんの顔面事情を思い出したのか、バツは心配そうな顔をする。

……なんというか。

スクワットしながら軽い気持ちで聞くことじゃなかったなと、聞き終わってから気づきました。失礼いたしました。ごめんなさい。

承／第四十三話：ムシムシ尽くし（其の三十）

「……なにを、しているんだ？」

ウワサをすればなんとやら。

声のしたほうを見やると、そこにはジンさんの姿があった。バツを“お姫様抱っこ”してスクワットするオレを見て、頭の上に疑問符を浮かべている。

「突発的に、足腰を鍛えたくなりまして」

だから、バツに“加重／負荷／Weight”になつてもらつて、“運動／スクワット”していたんです。——と、オレは、爽やかな“スポーツ汗”を額に滲ませ、爽やかな“スポーツ吐息”を「はあはあ」吐きつつ、説明した。決して、断じて、バツを抱っこしていることに「はあはあ」しているわけではないのです。絵図的にはそう見えてしまったかもしれませんが、それは錯覚です誤解です勘違いですっ。

「……その」

ジンさんは言い難そうにしつつ、重たげな口を開いて、
「あえて言わせてもらうが——」

と言葉を投げてくる。

違うんですって、

「“それ”だと」

だからそれは錯覚で、

「鍛えるどころか」

誤解で勘違いなんですって、

「むしろ足腰を痛めてしまうから」

わかつてくださ——

「やめたほうがいいぞ」

「——え？」

「キミの“それ／運動／スクワット”は、絶対にケガをするからやめたほうがいい、と」

ジンさんは氣遣うヒトの表情をして、そう告げてくる。

「あ、はい。わかりました」

ジンさんは王国近衛騎士団に属していた“騎士／戦うヒト”である。少なくとも確実にオレよりは、人体や運動に関する知識を有しているだろう。ここは素直に従っておいたほうが、文字通り“身のため”だ。

「忠告、ありがとうございます」

ジンさんに述べてから、腕の中のバツを見やり、

「バツも、ありがとう」

我が思いつきに「イヤツ」と言わずお付き合いしてくれたことに、いろんな意味を込めて、感謝の意を伝えておく。もしこれで「イヤツ」と言われていたら、オレは“この歳／高校生”にして、思春期の愛娘にウザがられる世の父親の悲哀を味わうことになっていただろうからねっ。本当に、本当に、バツがよい子でよかったのだわっ。娘じゃないけどっ。

「ど、どう、いいたしまして」

ほっぺを微かに赤らめ、バツは口をもによもによさせる。しばし眼福な“それ”を継続してくれてから、はっ、と不意に“彼”は、なにか重大なことを思い出したふうにジンさんを見やり、

「か、か顔は、だだいじょーぶですか？」

ともすれば容赦なく心をえぐりにいつているような言葉を、心配そうな表情で投げた。もちろんバツは、その天使のような愛らしさで心をえぐりにいつているわけではなく。純粹に、純心に、ジンさんを氣遣っているのだろう。

「大丈夫だ、問題ない。ありがとう」

ジンさんは温かな微笑みある眼差しで、そう応じた。

正直なところ、まったく大丈夫そうに見えない凸が凹な顔面事情

だが、本人が大丈夫と言うのだから、まあ、たぶん、ご本人的には大丈夫なのだろう。……目尻に若干、水分がたまって粒になりかかっているように見えなくてもいいが、気のせいだ。きつと“あれ”は、男の子が時たまお目々に滲ませる、漢の汗という名の、熱い汁だ。間違いない。

ジンさんは熱い汁が微かに滲む視線をバツからオレに移して、
「風呂の準備が整ったから、よければ汗を流してくれ」
と、ご報告してくださる。

「夕食の準備が整うまでは、もうしばし時を要するだろうから、その間にでも」

「はいっ、いただきますっ」

ジンさんの熱い汁を見たら、自分も熱い汁を流したくなってきたのだわっ。だって、男の子なものっ。……いや、まあ、とくに性別は関係ないけど。

ともあれ。

適切でなかったとはいえ、スクワットという運動を軽くおこなったあとのオレである。お夕食のまえに、多少なりとも噴出したベツタリ汗を、キレイにサッパリしておきたいと思うわけです。

「湯浴み着は、ここに置いておくぞ」

ジンさんはそう言って、人数分の湯浴み着を部屋の隅に置き、

「では、これで」

と、軽く頭を下げてから去り行く。

その背を追うようにして、オレはスツキリ爽快するための一歩を踏み出す。

行くぜっ！ お風呂場っ！ チョー行くぜっ！

「あ、ああのあのっ、とトウお兄ちゃんっ」

無駄に喜び勇んでお風呂場へ行こうとしたら、バツにお呼ばれた。

「ん？ なあに？」

「あ、あのね」

バツは、眉尻を下げた、どこか申し訳なさそうな表情で述べる。

「とトウお兄ちゃんと、一緒に風呂場に行っちゃうと、いいイチお姉ちゃんがひとりになっちゃうから、ね寝ている間にひとりになっちゃうのは、ボ、ボクはとってもイヤだから、ボクはあとで風呂に入ることにしよう」

「……………あ、…………いや、この短い間に、ついっかり壺さんが安眠中だったことを、ついっかり失念していたなんてことは、まったくもって一切ないですけども……………壺さんっ、なんかごめんっ。だって、だって、バツの温もりと肌触りと重みがっ——

「だからね、トウお兄ちゃん。ぼボクをね、お下ろしてほしいんだな」

うるうる潤んだ瞳でこちらを見上げてくれる、我が腕の中のバツと、目が合う。

なにかしらん、この胸の内でたぎる形容し難いモノは…………。

「とトウお兄ちゃん？」

「……………おっとうっ！ 思わず超見つめちゃったぜっ！

「で、なんだっけ？」

「ぼボクを、お、下ろしてほしいの」

バツは困り果てたふうに眉をハの字にする。

「はは、ごめんごめん」

べつに“彼”の困り顔が見たかったわけじゃあ、ない。念のためいやあー、こいつあー、うっかりだあーなあー。

万が一にもケガを負わせてしまったら、もう舌を噛み切ってお詫びするしかないので、慎重に慎重を重ねたゆっくりさでバツを下ろし、解放する。

手腕に“存在／触感”を名残り惜しむ切なさを感じつつ、そういえば、と気づく。無駄な喜びの勇み足で、湯浴み着に着替えるのをすっかり忘れていた。

速やかに全裸となり、ステテコのような湯浴み着に衣装チェンジする。バツが居るその前で全裸だったわけだが、べつに“彼”の前で

全裸になることに、なんら問題はない。壱さんが“その場の思いつき根競べ”をやらかしたときの着替えも、そうだったわけだし。うん。問題ないのだ。

違うんです、ただ着替えただけなんです。他意はないんです。――と、事実であり真実である言葉をくっ付けると、あら不思議、とたんに他意があるようにかんぜられるのは、どうしてかしらん？……本当に、本当に、ただ着替えただけなんだからねっ！ か、かか勘違いしないでよねっ！ わたくしは壱さんのしっとり“ふ・と・も・も”に心がお祭り騒ぎしちゃうピュアで健全な青少年なんだからねっ！

……まま、それはそれとして。

とりあえず、お風呂場へ向かおう。

承／第四十四話：ムシムシ尽くし（其の三十一）

個人的には“サウナ”と言い表すほうがしっくりくる“この”お風呂の、ムワツと暑い室内に、ほぼ裸な身を置くことしばし。

額のあたりにじんわりと滲み出た汗が、静かに粒となり、頬をつたって、あごの先から、ポトリと落ちた。木製の床に落ちたそれは、滲み出てきたときの反対に、じんわりと床に染みて消える。

そろそろ出ようかなあー。

井戸水で汗を流してサツパリ爽快になろうかなあー。

なんて思案をしながら風呂場の出入口を見やったら、不意に扉が開いた。室内の熱気が外へ逃げ、代わりに入室してくる新たな空気に、いままで熱気を吸い吐きしていた鼻や口や気管や肺と、汗ばんだ身体が、爽やかな涼を堪能する。

なんとも心地好い――が、油断すると体調を崩してしまいそうなので、堪能してばかりもいられない。

それにしても、どうして扉が開いたのだろうか？

体調のためにもその原因を探ろうと――するまでもなく、原因はそこにヒトの姿をして立っていた。オレと同じくステコのような湯浴み着という、ほぼ裸な身なりで。どうしてだか、手に枝葉の束を持って。

承／第四十五話：ムシムシ尽くし（其の三十二）

「アッー！ いだだだっ！」

容赦なくベチンベチンと打たれてオレは、

「無理です痛いですう！ ジンさんっ！」

早々にギブアップした。

「そんなに強くやったつもりはないのだが……」

ジンさんはベチンベチンする動作を止めて、

「ふんむ、どうやらキミは繊細らしい。すまなかった」

と、申し訳なさそうな顔をする。

「いえいえ、そんな」

実際にやってみると、想像していたより“痛かった”から、反射的に驚いて声を上げてしまったけれども。

「謝るようなことじゃあないですよ」

べつに、ジンさんが悪いわけではない。ただ、オレが慣れていないから、より強く“そう”感じてしまったただけのこと。

「あの、代わりと言ってはあれですけど」

オレにやらせてもらえますか、とお訊ねしてみた。

「そうか？」

ジンさんは、いまだ凹凸の激しい顔をほころばせて、

「では、お願いしよう」

こちらに背を向ける。

必要な部分に必要な筋肉がある、まったく無駄のない、極めて実用的な、本物の“騎士／戦う者”としての“肉体／背中”が、そこにあった。汗ばんだその“肉体／背中”には、漢の艶がある。

なんというか、雫さんとは極めて似て極めて非なる“本物”らしさだ。——と、直感的に、感覚的に、なんら根拠もなく感じた。

「……む？ どうかしたのか？」

「えっ？ いえ、どうもしてないですよ」

ええ、決して、断じて、ジんさんの汗ばんだデカデカ“肉体／背中”を注視していたなんてことは、ないのです。

「そうか？」

「ええ、そうですっ」

渾身の力でベチンと打ってオレは、ジんさんに応じた。

そこから間を置くことなく連続して、ベチンベチンと打つ。打ち込む。

輪郭がトゲトゲした葉っぱの、枝葉の束で。

大太鼓にバチを打ち込んで響き轟かせるがごとく。

打ったたびに熱い汁が飛沫となって宙を舞う、“本物”の“肉体／背中”を。

ベチンベチンと――。

枝葉の束で肌を刺激し、発汗をうながして、より汗をダラダラかくのが、主に男同士で“この”お風呂に入った場合の、ひとつの風習なのだそう。やるか、やらないかは、そのヒトの好みによるらしいが、男同士で“この”お風呂に入ったら大概、いわゆる“お約束”的なノリで、どちらがより汗をかくかという“おバカな漢の勝負”が開催される――らしい。我が貧弱ボディーの耐久力では、漢の“それ”が始まる以前に、「無理です痛いですう！」でございましたが……。

まあ、それはさておき。

ここで、ひとつ想像してみよう。

普段はウサ耳ツインテイルにしている髪をお団子に結い上げた“これでいいのだ”的に女性用の湯浴み着をまとう“彼”であるところのバツと、ふたりつきりで“この”お風呂に入って、“おバカな漢の勝負”をやった場合のことを。

汗をしぶかせながら、ベチンベチンとやりやられるわけですよ。みなぎってくるじゃあ、ありませんかつ。たかぶってくるじゃあ、ありませんかつ。

――ねっ！

「……さつきは、黙っていてくれてありがとう」

ファンタスティコな想像に、胸の内でグッと拳を握っていたら、
「助かったよ」

なぜかジンさんに感謝された。

「え？ ……えつと、……あの、なにか助けるようなことしましたっけ？」

心当たりがないのですけれども。

「口エの前で、訊かずにいてくれただろう」

……はて？ なにか訊いたかしらん？

「あのとき、場を改めて必ず話すと約束したからな」
場を改めて話す？ うーんむ？

……あ、ん？ あ、ああ、なんかヌルツと思い出したっ。

鬼気として危機迫る勢いで肉薄してきたジンさんに、口をふさがれたときのことかつ。

……確か、そう。畦道で襲ってきて、けれど壺さんの手にした“あるモノ”を怖がるふうに、「おおおぼえてろよ！」と捨てセリフを置いて去ったときのジンさんについて、お訊ねしようとしたんだ。そういえば。「どうして、おまんじゅうを怖がるような態度をしたのか——」と。

改めて“お訊ね”を声にすると、それを聞いたジンさんは、困ったふうでもあり、恥じ入るふうでもある微苦笑を口元に浮かべた。
くたびれたタバコが似合いそうな口元である。

「誤解しないでほしいのだが——」

真摯な眼差しある顔に瞬と転じてジンさんは、

「決して、まんじゅうが嫌いというわけではないんだ」

最重要事項をあえて主調強調する口調で、そう告げてきた。

「は、はあ……」

言葉と行動が一致してないと思うのですが……。

とりあえず、相づちを打つ代わりに、枝葉の束でベチンツと一発、強めに背中を打っておく。

「それで、まあ、その、な、キミの問いに対する答えだが——」
まんじゅうが嫌いというわけではない、と前置きを述べたときの勢いはどこえやら。ジンさんはやや聞き取りにくい音声で、ごによごによと話し始める。——その背中が、いままで“本物”の“それ”に見えていたその背中が、一日に飲んでいい約束本数以上の酒をたしなんだうえに「ついつい飲んじやったつ。ごめえくんねつ。てへぺろつ。——なあんつつてなつ。だははは」とか酔った勢いでふざけたことぬかしてお袋の逆鱗に触れてこつ酷く叱られてシユンとしてる我が親父の背中と、似て見えてしまうのは、どうしてだろう。……まあ、ともあれ、「てへぺろつ」はないぜつ、親父つ。

——閑話休題。

ジンさんの“お話／お答え”がちよいと道草喰い多めな言い回しだったので、ここは我がざっくり解釈による要約を述べておく。

愛情に、肉体が耐え切れなかった。

つまりは、そういうことらしい。

次期当主として時代に負けない“まんじゅう”の研究開発に熱心なロエさんを、ジンさんは“己にできること／材料運びなどの力仕事／家の掃除といった雑用”を全力でおこなうことでサポートしていたよう。

「“唯一の正しい選択”をしたと、ロエは“それ”が当たり前であるかのように言ってくれるんだ。一緒になったことが原因の“よくないウワサ／風評”を、時に容赦なく投げつけられても、な。だから、せめて、ロエが“注力できる環境”を——」

そんなジンさんに全力で応えるがごとく、ロエさんは一日に数百という、とてつもない数の新まんじゅうを考案して試作品を作り出す。

そして、最強サポーターたるジンさんは、それらを試食して意見を述べる。時たま斬新が過ぎて、常人では食べられないモノもあったとか。

ともすれば、なんら問題ない、支えあうよき夫婦の図である。

——が、しかし。

一日に数百もの新まんじゅうを試食し、それが連日——というのが数年、ついこの間までおこなわれていたわけで。

「ある日を堺に、まんじゅうを見ると腹の調子が崩れるようになってしまっただけ……」

胃と腸が「もう……勘弁してください」と書置きを残して家出してしまったのも、ままだ理解できるお話だ。どんなに“精神／愛情”が“強靱／一途”な限界知らずであろうとも、“肉体／胃腸”のほうには最後の「一線」、 “生きる” 的な意味で超えちゃダメな“限界／一線”がある。

しかしだからといって、胃と腸が書置き残して家出したからもう試食はできないと告白することも、まんじゅうを見たたん調子を崩す姿をさらすことも、ジンさんは自らに許さない。ゆえに、胃と腸の後を追うように、「……………剣の道を、忘れ去ることができなかったんだ」とウソを言い残して、家を飛び出した——。

——という諸々の事情から、“意図せずして／意に反して”まんじゅうを怖がるような態度をしてしまっただけ、してしまった、らしい。

複雑なような、単純なような、「もう結婚しちゃえよ」と言いたくなる諸事情である。まあ、もうすでにご夫婦でございますが。

けれどもしかし、相手のことを想うのなら、素直にゲロってしまっただけがよろしいんじゃないかなと、個人的に思う。信頼している親しい相手に氣遣われて“真”を偽られるのは、まったく嬉しくない“優しさ”だ。偽られたら、それに比例して知ったときのショックは増量増大する。なにより、“偽り”はいずれバレるというのが世の既定事項だ。——が、我が親父のごとき「てへぺろっ」的な素直さは、相手の神経を逆なでするだけだろうから、あまりオススメはしない。いい歳こいた大人の男がガチで平謝りする姿を目撃した者としての、これは至極個人的な意見だが。

「ん、ん……。わかってはいる……。のだが、な」

ジンさんはポソポソと口を開閉させて言葉をこぼし、そこに答え

が落ちているのを期待するがごとく床に眼差しを逃がす。それからまたポソリと口を開いて、一言。

「どう切り出したらよいものかと……」

そんな爽やかに困り苦笑を向けられましても……。

騎士なんだから相手の隙を見極めてズバツと斬り込んだらいいんじゃないですか——なんてふざけたこと言えるわけもなく。素直にゲロったほうが、とか述べておきながら、いざどうしたものかと訊かれると、“的確な返答”を持ち合わせていないオレである。

反射的に正論ぶりっ子しちゃうの改めたほうがよろし、と脳ミソに戒めを焼印しつつ、ぶりっ子を發揮しちゃった手前、いちおう、頭をひねってみる。

承／第四十六話：ムシムシ尽くし（其の三十三）

空っぽのガチャポンをいくらガチャガチャしたところで、ポンツと“なにか”が出てくるわけもなく。

汗がダラダラな身体は、冷っこい井戸水を浴びてサツパリ爽快になった。けれども頭の中には残尿感のようなモヤモヤがくすぶって、どうにもスツキリしない。

——なので。

かくかくしかじかと、突っついたら“なにか”が出てきそうなかんにほっぺをぶくつと膨らませている壱さんにお訊ねしてみた。お風呂場から戻ったならば、“ロダンの『考えるヒト』”がごときポージングでベッドの縁に腰掛けていらっしやっただ。その足下に一瞬、“地獄の門”を幻視してしまう空気感で。

「んん、ぷふふふ」

壱さんは厳しいふうを装いつつ、微苦笑を漏らした。

「男の真面目なおバカに気づいていても、そつと気づいていないふりをしてあげるものなのですよ。いい女は」

「……はい？」

「ですから、ね」

壱さんは口元にやっていた右手の指先で、やや着崩れたお召し物の襟ぐりからのぞく、艶な鎖骨をつつうとなぞりながら、おっしやる。

「寝ている私の鎖骨を、刀さんが思わず舐め回しちゃったことに気づいていても、私は気づいていないふりをしてあげわけですよ」

「………は？」

「ですから、刀さんが思わず、寝ている私の鎖骨にしゃぶりついちゃったことは——」

「悪化してるすういつ！ 思わずでそんなことするとか、それじゃあまるでオレ、とんだド変態野郎じゃないですかっ」

「違いましたか？」

「……………え？」

「……………え？」

「……………ふえ？」

最後、オレと壱さん以外の音声が聞こえた。ややうわずった“それ”が誰のモノであるかは、考えるまでもなく知れている。――が、しかしだからこそ、“そちら”に意識を向けたくないわけで……。

「……………と、とトウお兄ちゃん」

けれども名前をお呼ばれしちゃったら当然、お返事をするわけで。
「ん、んん……………なにかな？ バツ？」

「……………そのう」

困り果てたふうに眉を八の字にして、潤んだ瞳でチラリチラリとこちらをうかがいながら、“彼”はもにもよと口を動かす。

「ねね寝ているイチお姉ちゃんのさ鎖骨に、し、しい、しゃぶり――」

――

いやあああああああああ、唯一の真実の証言者たるバツに疑われたうえにちよつと引かれてるううううううううううう――。

―― 閑話休題。

壱さんはちよいちよいと手招きしてバツを呼び寄せると、口元に薄っすら笑みを浮かべながら、なにか耳打ちをした。

転瞬、バツは顔を真赤にしてうつむき、そのまま酔っ払いのような足どりで元居た場所へ戻ると、ペタンと尻を着いて座る。あわあわするように揺れているツインテイルの間から、なんか湯気が出ているような……。

「壱さんっ、バツになに余計なこと言っただんですかっ？」

疑いを懷いてしまった真実の証言者に、事の真相を説明して理解を求めるという難題に、これから挑まねばならぬというのにつ。

「——っ」

壱さんはビクツと小さく肩を震わせ、

「どうしたのですか、刀さん？ そんなに語気を強めて」

眉尻を下げ、やや当惑した面持ちで、もにもよと控えめに口を開く。

「私はただ、“さっきのは冗談ですよ”って教えただけですよう。

あまり刀さんを“からかう”のもよろしくないと思って」

バツのあのリアクションは、どう見ても冗談と明かされたあとの“それ”じゃあないと思うのですがっ。

「まあ、それはそれとして」

あっさりいなされたあー。

「少しお話を戻して真面目なことを述べますと——」

いまさっきの表情と態度はどこえやら、いろいろ知ってる大人のお姉さんふうを装って壱さんはおっしゃる。

「時が経てば自然と治るキズもあれば、時が経つと治せない致命的なキズもあるわけです。致命的なキズは、それこそ致命的であるがゆえに最悪、死に至ってしまう。自然と治るキズは、しかし自然治癒であるがゆえに消えない傷痕が残ってしまう——以後ずっと、キズがあつた事実の証しと向き合い続けなければならないわけです」

「……なんか、どっちも嬉しくない結果ですね」

「そうですね。しかしこれは、“結果／キズの治り”に対して一方的な受け身である場合のお話です。まあ、つまるところ、どちらにしても“望ましい結果”にならないのなら、“望ましい結果”になる可能性が微々でもあることをするべき——ウジウジ悩んで時間を浪費するくらいなら、お尻をキュツと引き締めて一步を踏み出したほうがお得だということです。少なくとも、なにもせず“うしなつて”から気づいて後悔するよりはよっぽど」

言って、壱さんは“なにか”をのみ込むようにちよいとうつむく。

それから数拍の間を置いて見せてくれたお顔には、やや眉尻の下が
った表情があつた。微苦笑を浮かべるように些々と口が動かされ、
言葉が発せられる。

「結局のところは、“どうしたいか／なにを望むか”という当人の
意志によりけりですね」

承／第四十七話：ムシムシ尽くし（其の三十四）

—— 転瞬。

夕食の準備が整った、とツミさんが呼びに来てくれた。

その報を耳にした約一名は、スツと淑やか立つと、

「さ、行きますよ。刀さん」

言うておいてこちらの応えを待つ素振りなぞ一切なく、もうすでに“行く”ための一步を踏み出している。

そんな約一名の揺るぎない頑強な意志によって速やかに、お夕食の時間とあいなった。

美味しいお夕食を美味しく味わいつつ、折り紙のことやらなにやらについて話しかけてきてくれるバツに言葉を返したり、それを見たツミさんやロエさんやジンさんがかけてくる言葉に返答したりしていたら——そちらに意識を向けていたら、不意にプロボクサーがパンチを打ち放ったときのような風切音が聞こえ、手腕の肌が微風を感じた。

なんぞ？ と疑念を懷きつつも、とりあえず次の“食”を口に運ぶため、自分の皿に意識を向ける。……おやおや？ いまさっきまで確実にそこにあった“最後に食べようと思って確保しておいたヤツ”が、どうしてかしらん、消息不明になつとるわつ。

なんとなく。

とくに他意はなく。

自分の皿から、お隣の壱さんに意識を向けてみる。

餌袋をいっぱいにしてもきゅもきゅしてるハムスターのごとく、ほっぺをいっぱい膨らませてお食事をしている、それはそれは幸せそうな顔があった。

「美味しいですか？ 壱さん」

「ふあい——」

と首肯してからしばし。壺さんはじつくりと丁寧に咀嚼をおこない、名残惜しそうに最後、嚥下をしてから、改めて口を開く。それはそれは素敵な笑顔で。

「とっても美味しくて幸せです」

それは、なによりです。

楽しく美味しいお食事が終わ——ろうとしたところで。

壺さんが、お茶を飲み干して口内をスッキリさせてから、「よろしいですか」とやや控えめに発言した。

「お茶のおかわりですか？」

食卓の中央に置いてある縦長の瓶に手を伸ばし、まだお茶が残っているかをいちおう確かめる。持った感じ、あと一杯分くらいはありそうだ。

「え、あ、いただきます」

とのことなので、壺さんから湯のみを受け取り、お茶を注ぐ。六分ほど注いでお茶はなくなった——が、まあ、ほぼ一杯分ということ。湯のみを返す。

「ありがとうございます。……て、いえ、注いでいただいてから言うのもアレですが、私はお茶を所望したわけではなくてですね」

壺さんは仕切り直すようにひとつ咳払いをしてから、「よろしいですか」と口を開く。

「明日、日の出と共にここからたとうと思います」

それを聞いた口エさんは残念そうに、「もっとゆっくりして下さっても——」とおっしゃってくれた。

しかし壺さんは、その好意は受け取りつつも、

「私たちは、まだ旅の途中なのです」

と口を動かす。眉は名残惜しむようにしゅんとしていたが。

承／第四十八話：ムシムシ尽くし（其の三十五）

部屋に戻るなり壱さんは、こちらにズイと身を寄せてきて、

「さあつ、刀さんつ、お風呂へ行きましょつ」

我が顔面に音声と合わせて息を吹きつけながら、そんなことを言うてきた。

「食べてすぐに入ったらゲロつちやいますよ、壱さん。ちゃんと食休み取らないと。それにオレ——」

夕食のまえにお風呂いただきましたし、と続くはずだったのを、

「じゃあ」

と壱さんは一方的に切り捨てて、言う。

「ちゅっちゅしちやいますかっ？」

意味がわからないでござる。

そして顔が近いでござる。

遊んではしゃぐ犬のしっぽのごとく内部を物語る眉が、よくよく見える。

「……私とじゃあイヤですか？　ちゅっちゅ？」

今度はボールを投げてもらえずにしょげる犬のしっぽのごとく表情を変える、壱さんの眉。なんとも見てて退屈しない眉だわ。

「ふふっ」

「むう」

壱さんは眉根を寄せて、

「刀さん、どうして笑うのですかっ」

ほっぺをぷくつと膨らませる。

「いやー」

なんだか眉が人懐っこい犬みたいで、

「可愛いなあーと思ひまして」

と、べつに隠すことでもないの、正直に懐いた感想を述べてみた。

そうしたらば、どうしてだか壱さんは困ったふうに眉を八の字に
してうつむいてしまった。ぶくつとほっぺが桃のごとき淡い色と熱
っぽさをおびている。――力み過ぎて、頭に血が上っちゃったのか
な？

まあ、それはそれとして。

ぶくつとほっぺを両の手で左右からプッシュさせていただく。そ
こに山が云々の、そこにほっぺが云々であるからして云々――

我が両の掌が壱さんのお熱なほっぺ温を感じたのを始まりに、気
持よく出たときのオナラみたいな音を発して、ほっぺはしぼんでゆ
く。

「とうふあん、たほえふあおげふいんれす」

ほっぺを左右から押された状態のまま、壱さんはもごもごとおち
よぼ口を動かして抗議してきた。むう、と憤るふうに眉根を寄せて
いらつしやる。

ちよつと……なにをおっしゃっているのか聞き取れませんでした
わ。

壱さんのほっぺがピクリと動いた――のを右の掌が感知した、時
すでに遅し。さっきから近かった壱さんの顔面が急接近してきて――
「あだつ」

いまのがいい頭突きだということは、よくわかりました。

承／第四十九話：ムシムシ尽くし（其の三十六）

バツが淹れてくれたお茶を味わいながらお喋りをする、という食休みを充分に取ってから、壺さんとツミさんとバツはお風呂をいただきますに行きなされた。「刀さんも一緒に——」とお誘いを主に壺さんから頂戴したが、丁重にお断りした。

べつに、“根競べ”をやらかしたあげくに鼻血を垂らしてダウンした壺さんと一緒にするのがイヤなわけではない。

御三名様がお風呂している間にやらねばならぬことがある、と気がついたのだ。ちなみに、当たり前のことだが、のぞきではない。わざわざそんなことやらかすくらいなら、一緒にして間近で凝視すると思わせてチラ見する——で、そうではなくて。

閑話休題。

さつきお茶を味わっていたら、ふといまさらかに“気がついた／認識した”のだ。

お言葉に甘えて、なにもしてないじゃん自分、と。

一宿一飯の恩義があるのに、と。

まま、これは壺さんに対してもそうなのだが、いまは口エさんらに対してのお話である。

——なので。

極めて手前勝手な発想ですが、なにか掃除とかお手伝いをさせていたきたいわけです。もちろん、邪魔にならないようコソコソと働く所存です。——と、口エさんをお願いしたらば、とても困った顔をされてしまった。

けれども、家中を掃除して自分らの寢床を整えるという役目をもらえた。

もっと早くに気がつけていれば、こんな駆け込み的“謝意の押し売り”なんぞせずに、自然な流れでお手伝いとかできたんだろうなあ……。己の気の利かなさというか、流れに乗じてそのまま行こう

とする波乗り気質をどうにかしないとなあ……。諸々を反省しつつ、よく絞ったぞうきんで縁側の床を拭く。

こうして改めてやってみると、なんだか掃除が楽しく思えてきた。家に帰れたら——帰ったら、手始めに自室のホコリと汚れを一掃しよう。絶対に。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4092c/>

《ザ・刀と壺の旅》 ~ The Tou and Ichi's travels ~

2011年12月2日15時55分発行